

博士論文 平成 26(2014)年度

観光をめぐる近代日本の表象に関する

歴史社会学的研究

—探検紀行から旅行ガイドブックへ—

慶應義塾大学大学院 社会学研究科
社会学専攻

長坂 契那

目次

序章 観光をめぐる表象に関する歴史社会的アプローチ	1
1 本研究の目的と背景	1
2 「観光のまなざし」を経由した観光をめぐる表象研究の動向	3
2-1 「観光のまなざし」以前 海外の研究者を中心に	3
2-2 「観光のまなざし」	5
2-3 「観光のまなざし」以後	8
3 研究の視点 明治期以降の博覧会研究の推移	13
4 課題と方法 観光をめぐる歴史社会的アプローチ	16
5 分析対象 探検紀行から旅行ガイドブックへ	19
5-1 分析対象としての「旅行ガイドブック」	19
5-2 探検紀行から旅行ガイドブックへ	23
5-3 本研究で使用する資料	25
6 本研究の構成	27
第一章 最初期の外国人向け旅行ガイドブック	29
1 はじめに	29
2 旅行ガイドブックとは	30
3 「優れたガイド」	34
4 対象読者の質の変化 居住者から旅行者へ	37
5 旅行ガイドブック再考	43
第二章 探検紀行から旅行ガイドブックへ	46
1 はじめに	46
1-1 HTJ の出版の歓迎	46
1-2 先行研究	47
2 初版 旅行ガイドブックの成立	48
3 第二版 「安全な探検」	51
3-1 探検の内容	51
3-2 外国人内地旅行権	61

4	第三版、第四版、第五版 サトウからチェンバレンへの交代劇	65
5	第七版、第八版、第九版 「オールド・ジャパン」	70
6	オリエンタリストとしてのチェンバレンと HTJ	77
7	類書の横行と「オールド・ジャパン」の読み換え	85
8	おわりに 旅行ガイドブックと「オールド・ジャパン」	90
第三章 公式案内の誕生		93
1	はじめに	93
2	鉄道院の OGEA 製作の意図	94
3	OGEA 製作の政治的背景	98
4	ジャパン・ツーリスト・ビューローの設立	101
5	おわりに 政治と観光、そして国民国家	105
第四章 公式案内の展開		107
1	はじめに	107
2	興味の対象としての「ゲイシャ」	108
3	資料としての旅行ガイドブックの書誌学的情報	111
3-1	先行研究	111
3-2	TGJE と著者のテリーについて	113
3-3	TGJE が「見たいもの」	115
3-4	OGEA が「見せたいもの」	117
3-4	OGJ が「見せたいもの」	118
4	「見たいもの」と「見せたいもの」から垣間見られる日本の表象	120
4-2	古き良き日本の担い手としてのゲイシャ	121
4-3	吉原の描写	124
4-4	日本旅行で無視できないゲイシャの存在	129
5	おわりに 「見たいもの」と「見せたいもの」の狭間で揺れるゲイシャ	130
第五章 公式案内の自己表象		133
1	はじめに	133

2	本章で扱う資料	137
2-1	1941 年版	137
2-2	1952 年版、1958 年版	138
2-3	1966 年版	139
2-4	1975 年版	139
2-5	1991 年版	141
3	天皇の存在とそれをめぐる歴史記述	141
3-1	天皇の存在	141
3-2	歴史記述	148
4	皇居の記述の変遷	156
5	おわりに 「公式案内」による平和のイデオロギー	160
終章		163
1	本研究の要約	163
2	考察	166
2-1	まなざしと表象の力学	166
2-2	「古き良き日本」の呪縛	169
3	結語	173
参照資料		176
主要参考文献		179
新聞記事		192
インターネットホームページ		192
企画展示		193

序章 観光をめぐる表象に関する歴史社会的アプローチ

1 本研究の目的と背景

本研究は、観光をめぐる日本の表象を歴史社会的に探ることを目的とする。具体的には、現在の外客誘致でも使われている「古き良き日本」のイメージがいつから、どのように形成され利用されていったのかを問いたいと考えている。その際、資料として外国人向け旅行ガイドブックを使用し、「古き良き日本」のイメージがいつ出現し、どのように反復され現在に至ったのかを探る。

2003(平成 15)年、小泉純一郎政権下で「ビジット・ジャパン・キャンペーン」が始まり、2008(平成 20)年には国土交通省の外局として観光庁が設置された。政府は「観光立国」の推進体制の強化を目指し、2014(平成 26)年 12 月には訪日外国人が 1300 万人を突破している¹。2020(平成 32)年には二度目の東京オリンピック開催を控え、訪日外国人 2000 万人を目指して現在訪日旅行促進事業(ビジット・ジャパン事業)が盛んに行われている[観光庁 2014a]。ビジット・ジャパン事業は、重点市場として韓国・台湾・中国・米国・香港・英・仏・独・加・シンガポール・タイ・マレーシア・インドネシアをターゲットに展開している。現在、「観光立国実現に向けたアクション・プログラム及び日本再興戦略に掲げられた訪日外国人旅行者数 2000 万人の高みを目指したビジット・ジャパン事業の新たなスタートとして、日本ブランド発信の強力な取組」を目指している。また、特に現地消費者向け情報発信対象市場の拡大や、多様な主体との連携による日本ブランド発信力の強化を行っており、特に韓国、台湾、中国、米国、香港の五大市場にシンガポール・タイ・マレーシアを追加した 8 市場を対象に、現地消費者向け事業として海外広告宣伝、海外メディア招請、旅行博出展といった活動を行っている。更に、「民間企業、関係省庁、地方公共団体など、多様な主体との連携強化により、訪日プロモーションを強化・拡大。また、リピーターの定着や訪日旅行の品質向上に向けた取り組みを強化」している[観光庁 2014a]。

そのうち、「官民連携事業」として、「海外の『日本ブランド』製品／サービスなどを“第二の日本大使館”と捉え、連携して訪日プロモーションを展開」している。また、「当該製品／サービス等のファン層に対して、当該『日本ブランド』製品／サービス等と一体で、当該製品／サービスから想起される日本の観光地(『総本山』、『聖地』)へ誘致」することを目的としている。その際に日本を海外にアピールするイメージとして使われているのが、

¹ 2014(平成 26)年 12 月 22 日に、訪日外国人が 1300 万人を突破し、成田国際空港で記念セレモニーが行われた。

「クールジャパン」と日本食、日本企業の海外展開、日本文化である。まず、「クールジャパン」は、日本政府主導のもと経済産業省で発信している「コンテンツ・ファッション・デザイン・観光サービスなどを中心に海外で人気の高い商材」のことである²。また、日本食は、寿司、日本酒、果物、日本レストランが挙げられている。近年の世界的な日本食ブームに加え、2013(平成 25)年 10 月にユネスコ世界無形文化遺産に選出されたことも訴求力として挙げられるだろう³。日本企業の海外展開では、自動車、電気製品、カメラなどの日本企業の製品を海外で販売することによる『日本ブランド』のファンの開拓を目的としている。

そして最後に、「浮世絵、能、歌舞伎、書、俳句、相撲」に代表されるのが、「日本文化」である[観光庁 2014a]。例えば、観光庁の公式ホームページを開くと、ロゴのモチーフに桜と日の丸が使われている。訪日観光に関する海外市場向けキャッチフレーズ・ロゴには、赤い日の丸に桜の花のモチーフのロゴと「Japan. Endless Discovery.」という単語が使われている[観光庁 2014b]。他にも、観光庁のホームページの中の項目のタグの写真が、「観光庁について」が桜、「政策について」が神社で手を合わせる若い芸者、「委員会・審議会等」が溪谷の紅葉、「統計情報・白書」が富士山、「予算・調達情報」が温泉、「報道・会見」が東京の夜景となっている。また、ホームページの中のデザインもピンク地に赤いロゴを用いており、日の丸と桜を連想させるものになっている[観光庁 2015a]。こうした日本固有の伝統を重視したようなモチーフは、「クールジャパン」とは正反対の印象を与えるものである。しかし、それは「日本文化」を海外に紹介する場合に、真っ先に思いつくものであるとも言える。自国の文化の紹介を行う際に自らの歴史や固有の伝統を強調する文脈は、「古き良き日本」というイメージとして、「クールジャパン」以前から根強く外客誘致の際の典型的な日本の表象に利用されてきたのだと言い換えることができるだろう。

² クールジャパン事業の裏には、内需減少等の厳しい経済環境が背景にある。そこで、「自動車、家電・電子機器等の従来型産業に加えて、「衣」「食」「住」やコンテンツ(アニメ、ドラマ、音楽等)をはじめ、日本の文化やライフスタイルの魅力を付加価値に変える(「日本の魅力」の事業展開)」ことによって、「新興国等の旺盛な海外需要を獲得し、日本の経済成長(企業の活躍・雇用創出)につなげる」[経済産業省商務情報政策局 生活文化創造産業課 2015] ことを目的としている。

³ 日本食の世界無形文化遺産指定については農林水産省が主導で行い、四つの特徴を上げてその魅力を紹介している。まず、多様で新鮮な食材と素材の味わいを活用している点、次に、バランスがよく、健康的な食生活が送れるという点、そして、四季の移ろいなどの自然の美しさを表現している点、最後に、年中行事との関わりを持っていることで家族や地域の絆が強くなる点が挙げられている[農林水産省 2013]。

以上のような現象を、われわれはどのように理解すればよいだろうか。20 世紀後半以降の人文・社会科学における表象研究は、表象をめぐる政治性を問題にしてきた。これらの研究が明らかにしたのは、ある物事を表象することは決して中立的ではなく、必ず何らかの権力関係のもとで構築され、そうした権力関係の再生産を伴う営みだということである[毛利 2012]。こうした議論を踏まえれば、観光をめぐる表象に関してもそれは例外ではなく、政治性の問題についても議論をする必要があると考えられる。しかし、詳細は次節以降で後述するが、従来の観光研究ではこうした点について十分に議論されてきたとはいえない現状がある。以上の問題を踏まえて、本研究では観光をめぐる表象の問題について考察する。

2 「観光のまなざし」を経由した観光研究の動向

2-1 「観光のまなざし」以前 海外の研究者を中心に

観光をめぐる表象の問題を考察するためには、まず研究の系譜をたどる必要がある。その際に重要な議論として、ジョン・アーリの「観光のまなざし」が挙げられる。詳細は後述するが、観光地に対するイメージの形成や再生産を、視覚の要素を中心に担うのが観光のまなざしである。これにより、観光をめぐる表象の研究は抽象的な議論から具体的な事例を扱うことが可能となり、観光のまなざしに依拠した研究が数多く行われるようになった。しかし、観光のまなざしの議論では扱いきれない不足点が存在する。本節では、観光のまなざしに部分的に依拠すると同時に、その不足点を明らかにする。

観光における表象に関する考察についての歴史は、観光研究のそれとほぼ軌を一にしていると言って良いだろう。観光に関する文化人類学的・社会学的考察は 1960 年中頃まで遡る。その発端となったのが、ダニエル・ブーアスティンの『幻影の時代』である。ブーアスティンは、テレビや映画、広告等のメディアで描かれたイメージの方が実際の出来事よりも現実感(リアリティ)をもつ現代社会の現象を「疑似イベント」と称し、観光をその典型例として挙げている。18 世紀以前の産業化されていない時代の観光では、困難を克服した上で経験する事物や人間との出会いが直接的に人々に影響を与えていた。しかし、現代の観光は困難を排除し快適な人工物などのサービス商品によって構成された、全てがあらかじめ作り上げられたものが人々を迎え入れるものとなってしまった。その中で、本来のその土地の特別な文化が、観光客用に恒常的に用意されるようになってしまうというという「戯画化」が起こるとした。ブーアスティンは、現代の観光客は本物ではなくそうし

た「戯画化」された文化を受動的に受け入れるだけの存在になってしまったとし、18世紀以前の産業化される前の旅行を「本物」の旅行だとしてその喪失を嘆いた[ブーアスティン 1964(1962)]。ブーアスティンの主張した観光化による文化の「戯画化」は、観光をめぐる表象の議論を行う際に出発点となるものである。観光化によって、かつての上流階級や知識人階級に共有されてきた文化が変容する。そして、その変容した「文化」を、観光客(ツーリスト)たちが消費する。こうした文化の変容と消費の問題は、そのまま文化の表象の問題へとつながっていく。ブーアスティンの主張するノスタルジックな論調はさておき、こうした側面に着目した点は特筆に値すると言える。

しかし、そのブーアスティンの議論に異議を唱えたのが、ディーン・マキアーネルである。彼は著書『ザ・ツーリスト』において、観光客はブーアスティンの言うような戯画化された文化を受動的に享受する存在ではないとした。そして、観光客は能動的に「真正性(authenticity)」を求めて表舞台ではなく舞台裏を見たがると説明した。マキアーネルは、「観光客(ツーリスト)」は「徴表(マーカー)」による情報の伝達によってある事象や地域、建造物等といった「視角対象(サイト)」を「観光化する価値のあるもの」、つまり「観光対象(アトラクション)」として認識できるとしたのである[マキアーネル 2012(1999):47-48]。

また、バレーン・スミスは編書『観光・リゾート開発の人類学』で、観光を次のように定式化した。それは、「観光活動＝余暇時間＋可処分所得＋地域に根づいた道德観」である[スミス 1989(1977):1]。そして、文化人類学的なアプローチから、ある特定の地域や文化(ホスト)が観光客(ゲスト)の影響によって地域社会が受動的、そして時には能動的に変容していく様を描き出した。そして、観光を「民族観光」「文化観光」「歴史観光」「環境観光」「レクリエーション観光」に分類した[スミス 1989(1977):4-6]。ここでは、産業社会の人間が観光の主体になることが前提になっている[スミス 1989(1977)]。

最近のものでは、エリック・コーエンはこれまでの観光社会学の整理と理論の体系づけに尽力し、観光客の類型を提示した。コーエンの提示した分類軸は目新しさ(strangeness)、馴染み深さ(familiarity)の二点であり、現代観光においてはこの二点を両極に、前者から順に放浪者→探検者→個人型マス・ツーリスト→団体参加型マス・ツーリストと分類した[Cohen 2004:37-40]。また、コーエンはマキアーネルの「真正性」議論を更に進化させ、文化の「商品化」について二つの説を提示した。前者は、観光地によって地域文化が「商品化」されて「真正性」が喪失し「演出された真正性」によって文化が崩壊するというものである。後者は、「商品化」によって地域に新たな要素が付加され、それが観光客にとつ

てのアトラクションとなる。こうして地域文化は観光で補強されただけでなく、その観光化された文化が地域に浸透しようとう「真正な」文化となる。こうした現象をコーエンは「創発的真正性(emergent authenticity)」と名付けた[Cohen 2004:109-110]。

エドワード・ブルナーは著書『観光と文化』において、観光における文化をグローバル化とハイブリッド化の産物であるとした。そして、もはやかつての民族誌家による分析対象であった「共有化された文化」など存在しないとした上で[ブルナー 2007(2005):3]、「観光のさまざまなアクター間の相互作用という枠組みで見ただけでは狭すぎる」と指摘したのは重要な視点である[ブルナー 2007(2005):23]。ブルナーによると、「場所というものは、行為者の視点から描ききることはできない」[ブルナー 2007(2005):23]。そして、「より大きな政治的・経済的文脈の中でグローバルなものとローカルなものを媒介するところ、として見なければならない」[ブルナー 2007(2005):23]のである。

以上、アリーの観光のまなざしの出現以前の観光をめぐる表象の議論について、文化の変容と真正性を中心に概観した。中には観光のまなざしの出現以降のものも含まれているが、観光のまなざしの影響を受けていない議論の系譜に位置づけられるため、本項に提示した。この後、観光をめぐる表象の議論は、アリーの観光のまなざしの議論の登場により考察がより容易に、具体的な事例研究を中心に行われるようになった。次項ではその点に注目して検討する。

2-2 「観光のまなざし」

1990年にアリーが『観光のまなざし *The Tourist Gaze*』(以下、『観光のまなざし』)において「観光のまなざし」という理論を提唱してから、観光という営みが、資本主義社会の枠組みの変動の中に位置づけられることによって、より社会学的な考察が深められるようになった。それは観光をめぐる表象の問題についても同様である。

アリーは、旅行者が観光地に対して抱くイメージや期待、そしてそれらに対する関心を「観光のまなざし」という形で概念化した。まず、観光は労働と対をなす余暇活動の中に位置づけられ、観光のまなざしは、住まいや労働のある日常体験と切断されるような場所や非日常に対して向けられる。まなざしは、テレビや雑誌などを「見る」という行動を経ることによって、視覚的に対象化され把握されていく。そしてそのあと、写真や絵はがきといった視覚的要素によってさらに補強され、果てしなく再生産し再把握を繰り返していくのである。この観光のまなざしは、この200年間にヨーロッパのほとんどの地域と北ア

アメリカや世界の多くで広範にひろまった大衆観光(マス・ツーリズム)と密接に関わっている。アーリによると、「観光者である、ということは『近代』を身にまとう、という特質の一貫である」[アーリ, ラースン 2014(2011): 8]。

アーリは、近代以降の資本主義社会の発展に伴って、余暇活動である観光は場所を消費する営みとして人々の生活の中に浸透していったと説明した。観光には、主にマスメディアを通してある場所へのまなざしが生成され、補強されていくという循環性が存在する。まなざしを向ける場所は労働を基盤とする日常に対する非日常に位置づけられ、主に視覚的に対象化され把握されていく。観光は大衆社会における消費活動の一環として機能し、観光の専門業者が更に観光のまなざしの対象の再生産を後押ししているのである[アーリ 1995(1990):4-6]。

また、「ロマン主義」に焦点をあて、『邪魔の入らない自然美』が典型的な観光のまなざしを作る「ロマン主義」のまなざしと、それに対する「大多数の他者の存在を必要とし」、「自分と同じような他の“ツーリスト”がいること」に価値があるとする、「集合的な観光のまなざし」を提唱した。また、＜歴史的まなざし＞に対して＜現代的まなざし＞、＜本物＞であるか＜まがい物＞であるかというまなざしも存在し、『観光のまなざし』ではこの三つの対立するまなざし概念を組み合わせて説明している。

アーリは、1990年の『観光のまなざし』以降、同書の改訂版を三冊出版している。一点目は1992年の *The Tourist Gaze "Revisited"*、二点目は2002年の *The Tourist Gaze, Second Edition*、三点目はヨナス・ラースンとの共著である2011年の *The Tourist Gaze 3.0*(以下、『3.0』)である。三点目は翻訳され、2014年に『観光のまなざし 増補改訂版』として出版された。アーリは、これらの改訂版において、インターネットの発展に伴うグローバル化に対応して、観光のまなざしの類型や概念を発展させている⁴。

また、『3.0』では、従来の観光のまなざしに対する反論や意義が申し立てられたことによって、議論がより複雑に深化していることが伺える。一点目は、観光のまなざしが視覚に特化したことにより観光行為に随伴する他の五感や身体的体験を無視しているのではないかという疑問が提示された。それに対して、アーリとラースンは、アーヴィング・ゴフ

⁴ 新たに加えられたまなざしは、傍観的まなざし(spectatorial gaze)、畏怖的まなざし(reverential gaze)、人類学的まなざし(anthropological gaze)、環境的まなざし(environmental gaze)、メディア化されたまなざし(mediatized gaze)である[Urry 2002: 150-151][アーリ 2003(1995):318]。これらのまなざしについては、『3.0』においても継続して採用されている[アーリ, ラースン 2014(2011):29-32]。

マンのドラマツルギーの社会学やナイジェル・スリフトの非・表象論から援用して説明した[アーリ, ラースン 2014(2011):8]。また、アーリとラースンは、観光のまなざしをパフォーマンス、つまり身体的行為として行動やモノの関係にも同様に依拠していることを再考した。これによって、観光活動は、視覚と共に、身体による体験世界の相互作用であると捉えなおすことが可能になったのである。

二点目は、メディアの爆発的な発展やグローバル化に伴う世界情勢の変化を、「移動社会」という観点で再考を行った点である。これは『3.0』以前の二冊の改訂版にも見られる。「観光」を、人、情報、文化の移動として世界の流動化の側面からとらえ直すことによって、従来のモダン対ポストモダン、マス・ツーリズム対ポスト・マス・ツーリズムといった二項対立から、よりポストモダン、ポスト・ツーリズムに重きを置いた議論が行われている。このことで、かつてのモダンの現象で一元的にとらえられていた観光を中心とする文化の変容が、様々な形や要素に変化していく過程が読み取れた。

三点目は、それによって生じた様々な反動現象について考察を行っている点である。ここでは、局地化、個人化、自然愛好、懐古趣味、遺産化などに着目して、インターネットの普及による情報の爆発により、観光という営みがより複雑化、重層化している点に留意している。

上記におけるアーリの観光のまなざしをめぐる議論に共通しているのは、研究の際の構図として、観光者(ツーリスト)(の集団)対地域や、国家または資本対地域といった、観光資源をめぐる諸アクター間の相互作用の位相で捉えられているという点である。この場合、多くがマス・ツーリズムを前提とする「観光」が想定されているためであるが、アーリの議論によれば、これは「場所」消費の問題と密接に関わってくるため至極当然の流れであると言える。

アーリは、19世紀のイギリスの海浜リゾートを事例に、余暇(レジャー)としてのマス・ツーリズムがいかに労働条件から形成され消費の対象となっていたのかを説明した[アーリ 1995(1990):28-70][アーリ, ラースン 2014(2011):46-73]。イギリスの海浜リゾートは、労働に規定される日常から休暇である非日常に位置するそこに赴くという行動によって、「集合的まなざしの極端なまでに定着する場となってい」ったのである[アーリ 1995(1990):72]。また、こうした流れとは異なる、20世紀後半以降のポスト・マス・ツーリズムにおける場所消費についても留意している[アーリ 2003(1995):211-268][アーリ, ラースン 2014(2011):151-239]。アーリは、ブルデューのポストモダンの視点を借用しな

がら、イギリスの田園風景の消費現象をロマン主義的まなざしの発生と絡めて説明している。また、観光のまなざしの発生と循環がメディアによって過剰になり、「かつての海浜リゾートで見られた『単純な』楽しみを享受するのがますます難しくなってくる」[アーリ, ラースン 2014(2011):180]。かつては対極にあった日常と観光的なまなざし行為との間の脱分化は、「メディア化されたまなざし」によってますます強められていくのである[アーリ, ラースン 2014(2011):185]。

この場合、アーリの言う観光とは 19 世紀半ばに産業化した旅行業で行われるマス・ツーリズムが出発点である。観光という営みは、アーリに倣えばポスト・マス・ツーリズムにおいてでさえ、観光者(ツーリスト)個人の行動に落とし込まれてしまうのである。ここで確認すべきは、『3.0』において、観光のまなざしが新たな形で定義されていることである。ここで言う観光のまなざしとは、「身体化された社会的実践で、視覚を超えた感覚」のことである[アーリ, ラースン 2014(2011):32]。そもそも旅においては「“身体の”旅という自明なことが忘れられている」。実際、様々な身体を持ち主が旅をするわけであり、「観光のまなざしは、少なくとも、断続的にであれ動いている身体同士の関係と言うことが前提にある」[アーリ, ラースン 2014(2011):32]。ここでの重要な点は、観光のまなざしは観光者(ツーリスト)という個の身体に規定されるということである。

アーリは観光を、資本主義社会の変動の中に位置づけることによって社会学的な検討の余地がある分野として整備した。アーリの観光のまなざしの登場は、観光を社会学の中の一分野ととして措定し、この後の観光研究に理論的な基礎を与えたと言える。日本における観光研究も、多くがこの流れを追っている。とりわけ、本研究において重要な点は、アーリが観光をめぐる表象の問題に踏み込んで、様々な現象を可視化したという点にある。「まなざし」という観光者(ツーリスト)個人の身体による観光地(場所)への欲望を具現化することによって、そこを舞台にした文化の変容や観光者(ツーリスト)たちの行動の変化が、より立体的に把握することが可能になった。最近では観光のまなざしを踏まえた、観光をめぐる表象の問題についての議論が盛んになっている。

2-3 「観光のまなざし」以後

アーリの観光のまなざしの登場以降、文化の表象をめぐる観光研究は大きな理論的よりどころを得て多くの研究成果が出た。特に、観光のまなざしへの直接の考察として、遠藤英樹、堀野正人らの『観光のまなざしの転回』(2004)がある。これは、アーリの「観光の

まなざし」を手掛かりに、観光研究の各分野の研究者がそれぞれの専門領域において考察を行った意欲作である⁵。観光と表象をめぐる問題では、主に、ある地域に対するイメージをインタビューや資料を用いて検討し、その変遷や観光化の影響を考察したものが主流である。その中でも、観光のまなざしを手掛かりに検討しているものが数多く存在する。しかし、最大の問題点は、多くの研究がその観光のまなざしを経由したものになることによって、観光者(ツーリスト)個人の意識に集約されてしまうという現状である。特に、多くがまなざしの主体である観光者(ツーリスト)とその客体である特定の地域や文化という二項対立の構図に陥りやすいのも事実である。以下では、こうした研究の要点とその問題点を整理しておきたい。

観光のまなざしを経由した成果として特に重要な視点は、大きく分けて三点ある。一点目は、ある観光資源がどのように表象され、消費されているか分析したものである。こうした視点は、マス・ツーリズムを中心とした観光の文脈で読み直されることによって、かつての文化が消費の対象として大きく変貌していく過程を追ったものである。かつてはブーアスティンのような「正当な文化が破壊される」文脈が中心であったが、アーリの観光のまなざしの登場以降、観光のまなざしによる分類や分析を通して観光をメディアとしての現象に捉えなおす試みも増えている[遠藤 2009][堀野 2010, 2014][中塚 2014][須藤 2008, 2010, 2012, 2014]。具体例としては、ある地域のイメージがメディアの影響によって形成され、消費され、補強されていく過程がある[川島 2004][神田 2004, 2014][森本 2009][中谷 2010][中塚 2014][西田 2004][芹澤 2004][千住 2004]。

二点目は、ある観光現象をマス・ツーリズムの文脈から分析し、それとは異なる新たな現象をポスト・マス・ツーリズムとして紹介するものである。これは、観光客側のニーズや観光現象の多様化の流れを受けて、マス・ツーリズムの弊害を超えたポスト・マス・ツーリズムのあり方を模索したものである。この場合、念頭に置かれているのはかつての消費形態であるマス・ツーリズムに対するアンチテーゼである⁶。ここで頻繁に取り上げられるのは、アニメなどのある特定のメディアの影響によって従来観光地でない地域に観光客

⁵ その中の論考である安村克己の「観光の理論的探究をめぐる観光まなざし論の意義と限界」は、アーリの「観光のまなざし」を、理論的に依拠しているフーコーの「まなざし」議論から再考したものである[安村 2004]。また、須藤廣の論考「越境する＜観光＞ グローバル化とポスト・モダン化における観光」は、グローバル化・ポストモダン化している現代の観光現象を、アーリの「観光のまなざし」を出発点に考察したものである[須藤 2004]。

⁶ また、特定のメディアの影響下によるアンチ・マス・ツーリズムの文脈においては、バックパッカーの存在も忘れてはならないだろう[須藤 2008][山口 2010][横山 2014]。

が集まるようになる現象や[岡本 2014]、ある地域の住民がまちづくりによって観光客を誘致・獲得しようとする動きがある [堀野 2009][山口 2014][安村 2010]。

例えば、「観光のまなざし」を手掛かりに表象をめぐる立体的な議論を行っている例の一つとして、須藤廣は、「田園観光と『ロマン主義的まなざし』」という論考において、由布院の「観光地づくり＝まちづくり」に関して、観光のまなざしを利用した分析を行っている[須藤 2005c:171-203]、その際、「由布院のまちづくり大手の業者による『開発』に対する『対抗的』な理念に端を発している」ことに注目し、「邪魔の入らない自然美＝ロマン主義的まなざし」的なイメージづくりを行ってきたことを指摘した[須藤 2005c:174-179]。これは、かつての資本や国家といった大きな権力によって形成された観光地に観光客が集まるという構図からは大きく異なる現象であり、マス・ツーリズムの理論では説明しきれない新たな観光現象であると言える。しかし、そうしたまちづくりの結果集まってきた観光客にとっては、「ロマン主義的なまなざし」と相反する大人数の他者の存在を前提とする「集合的まなざし」の存在も垣間見られ、「集合的まなざし」の許容度が今後の由布院のあり方を占うことになるという⁷[須藤 2005c:196-201]。

三点目は、ある文化がマス・ツーリズムを通じた観光を通して「伝統的な」「正当な」ものへと変化していく過程を追ったものである。これは、多くが 19 世紀後半から 20 世紀半ばごろまでの近代化や国民国家形成と密接に関わっている。特に、欧米中心の近代国家の中央政府が、周縁や旧植民地に対して行使してきた権力関係が多分に影響しており、サイードの「オリエンタリズム」の議論から分析が可能である[橋本 1999][濱野 2014][高 2002][須藤 2012][多田 2004]。オリエンタリズムとは、東洋(オリент)が西洋(オクシデント)に劣る副次的な存在であるがゆえに西洋(オクシデント)の圧倒的に優位な考え方が内在している権力構造のことである。東洋(オリент)は、西洋(オクシデント)に対し他者性を持ち愚鈍で放埒であるために、西洋(オクシデント)による支配を必要とするのである [サイード 1993(1978)]。この論理は特に、19 世紀後半の西欧諸国による植民地形成の際に大いに利用された。そして、旧植民地であった非西欧諸国の地域には、「エキゾチズム」の名の下にオリエンタリズムが適用されたのである。それは観光の側面において特に顕著であ

⁷ また、この研究を更に深化させたものとして、由布院における地域住民へのインタビュー調査を踏まえた考察が、「癒しの里のフレームワーク」[須藤 2008:75-95]である。観光客の求める「非日常性」と地域住民の「日常性」との乖離を「フレーム」という分析枠組みで観光化や外部資本をめぐる言説を分析し、観光客の動員がある程度飽和した状態における地域住民たちの葛藤が浮き彫りになっている。

った。こうした現象については、観光人類学を中心に多くの研究成果がある。

例えば、橋本和也は著書『観光人類学の戦略』において、ハワイのリゾート開発を事例に、19世紀末のハワイ王国のアメリカ合衆国の併合から始まりワイキキの造成、大企業によるサトウキビプランテーション化やリゾート開発化、20世紀後半の日本人観光客のメッカ化を、「植民地主義／新植民地主義」の構図で説明した。その実情は、「支配者は自らの利益のためにハワイを売り渡してきた。(中略)その結果ハワイ人は、観光者を受け入れる当該社会の構成員でありながら、観光者の制限や観光政策に対する意見表明の機会を持っていないまま、今日の事態を迎えることになった」[橋本 1999:193]ものであった。

しかし、観光をめぐる表象の研究において、単なる地域表象やメディアによる観光資源化、まちづくりといった個別の事例を超えた、政治的・経済的力学に配慮した研究は、まだ萌芽的であると言わざるを得ない。本研究で問いたいのは、その点である。ここで参考になるのが、多田治の『沖縄イメージの誕生』がある。多田は、カルチュラル・スタディーズの立場⁸から、1972年の返還以降、沖縄の「青い海」「南の亜熱帯」「独特な文化」イメージがいかに確立され消費されていったかを、1975年の沖縄海洋博覧会に焦点をあてて検討した。多田によると、「海洋博の空間そのものが、＜海＞の観光リゾートとしての沖縄イメージを映し出す、巨大なビジュアル・メディアとして機能していた」[多田 2004:102]。そして、海洋博のパビリオンのうち、「政府出展は＜海＞＜亜熱帯＞を、民間出展は＜海＞を、沖縄館は＜文化＞を前面に押し出した。＜海＞＜亜熱帯＞は沖縄の現実に準拠しなくても立ち上がったのに対して、＜文化＞は、沖縄の歴史的事実に準拠する形で立ち上げられた。このような複数の並行的なプロセスから、海洋博を契機にして、以後の体系的な沖縄イメージは誕生した」[多田 2004:112]のである。

こうしたアプローチは本研究に資するものが大きい、多田の研究を含め、これまでの

⁸ 多田は、カルチュラル・スタディーズのアプローチ方法として、「個々の文化を批判的に検討することを通して、社会のある断面に光を当て、権力や政治性、アイデンティティなどの問題を浮かび上がらせることから、『文化の政治学』などと呼ばれることがある」[多田 2004:2]と説明した。その上で、「現実→イメージ」の図式をストップして、逆の「イメージ→現実」の図式で考えることによって、「それまで当たり前」「ある」と思われてきた既存の沖縄イメージが人為的・社会的に作られた、歴史的な産物であることが見えてくる」[多田 2004:12]という。その上で、フーコーの「エπισテメー」概念を、「社会を一定の方向に動かし、変容させ、新たに形作っていく力をもつ、＜知＞の枠組み」[多田 2004:13](傍点は本文による)と定義し、開発のエπισテメー、速度と移動のエπισテメー、観光のエπισテメーの連動によって復帰後の沖縄を一定の方向に変容させていったと捉えている。

先行研究に通底しているのは「観光＝余暇活動、娯楽」であり、近代化の副産物であるという考え方である。ここで想定されているのは、かつて多様な形であった旅が、近代国民国家形成と資本主義の発達の下で産業化し、観光という一つの消費行動へと変化していったという図式である。そして、それは多少の時系列の差はあっても、「観光＝マス・ツーリズム」という構図に集約されていると言える。同時に、観光という営み自体が近代化された個人の行動に規定されるという暗黙の了解も存在する。これは、近代的自我を持つ人間が観光を行う際の主体となっていることを意味している。他方で、その背景にあるはずの国家の対外的な外交戦略という位相は注目されない。あるとしても、国家対地域、資本対地域というベクトルでしか議論が想定されていないのである。

つまり、アーリの観光のまなざしの出現以降、観光の表象研究は多くが地域表象の問題が主流となり、まなざしの主体として観光者(ツーリスト)という個人またはその集合に、客体としては特定の地域や観光資源が規定されるようになってしまったのである。ここで問題としたいのは、諸外国が日本に対してどのように自己を表象していくかというものである。この場合、まなざしの主体は(欧米を中心とした)諸外国であり、客体は日本である。こうした国家レベルでの観光のまなざしの議論は、まなざし自体が観光者(ツーリスト)の身体に規定されている限り、見えてこないものである。そこで、観光のまなざしを拡張して考察する必要があると考える。

観光のまなざしは、近代以降の観光現象をツーリストによる資本主義社会における消費活動として位置づけた。ここで重要なのは、従来の観光をめぐる表象の議論で想定されている位相が、資本と個人の身体の集合である大衆という二点に限られており、近代社会における観光の成立において、重要なもう一つの側面である国家の位相が抜け落ちているという点である。仮に観光をめぐる表象の議論で国家が登場したとしても、それは対個人といった諸アクター間におけるミクロレベルのものであり、国家間や対国際社会というマクロレベルのものを想定していないのである。本研究で議論の俎上に挙げたいのはまさにこの点である。

この点を補完するものとして有用であるのが、次節で取り上げる博覧会研究の視点である。ある国家が対外的に表象を操作しようとする際にどのような仕組みで働きかけていくのかという問いは、国家の位相で観光をめぐる表象の議論を扱う際に資するものが大きいと言えるだろう。

3 研究の視点 明治期以降の万国博覧会研究の推移

万国博覧会研究において、本研究との関連が見られるものとして、明治期以降の明治政府による博覧会出展や開催を扱ったものが挙げられる。例えば、吉田光邦の日本の産業技術史としての博覧会研究と、吉見俊哉による帝国主義的な国民国家の政治的な視点から分析したものがある。そして、松田京子が端的に示した、戦前日本の植民地の原住民と植民地博覧会との密接な関係という、文化人類学的な視点のみならず日本の文化人類学史をも含む研究も挙げられる。最後に、伊藤真実子が示した、近代日本の対外的アピールとしての場としての万国博覧会が、ナショナル・アイデンティティ構築にどのように影響を及ぼしたかという問いに対する研究は重要な視点である。そして、これらの検討に入る前に、まず博覧会とは何かを端的に理解する必要がある。

万国博覧会とは何か。そして、19 世紀後半に出現した万国博覧会は、その出現の後、人々にどのような影響をもたらしたのだろうか。こうした漠然とした問いは、歴史学、政治学、経済学、美術史学、文化人類学等、数多くの分野から検討・分析されてきた。吉田光邦は、科学技術史を中心に纏めた編著『万国博覧会の研究』の序論で、それを端的に説明している。

万国博は、一九世紀にはじまった、新しい情報メディアの場であり、世界であった。しかもその情報はものをもって主とし、文字・文章・図表によるものは従とする構造を持っていた。さらにそれらの情報は一九世紀にそれぞれ体制を整備しつつあった国家、または近代的な企業を発信者とするものであった。そしてこの情報のメディアの場は、ある一定の期間のみに開かれるという非日常的な世界という性格をもっていた。(中略)しかもこの祝祭は伝統的な神を持たぬ祝祭であった。万国博に神としての位置を占めたのは、一九世紀に急速にその開発のテンポを早めた機械技術を中心とした文明である。[吉田編 1986:1](傍点は本文による)

1851 年に「万国の産業の成果の大博覧会(The Great Exhibition of the Works of Industries of All Nations)」という正式名称で始まった万国博覧会は、当時飛躍的に工業・産業を発展させていたイギリスが、従来各国内で細々とおこなわれていた博覧会を、国際的に大規模な形で行ったのが最初である。博覧会自体の形式は第一回ロンドン万国博覧会の構想が出る以前に既にある程度整っていたが、それを「国家」が大規模な形式でその開

催にかかわり、産業のみならず美術・芸術を加えたものとして国内外の出品者を募り一堂に展示するという形式になったのはこの時からである。最終的に万国博覧会という初の試みは、国内外から 600 万人余という見物客を動員した。観光業の始祖と言われるトーマス・クックの旅行斡旋業者としての大成功を収めたのがこの万国博覧会の見物客の斡旋であったのは有名な話である。

日本が最初に万国博覧会に登場するのは、1862 年のロンドン大会からである。イギリス大使オールコックが自身のコレクションを出品したのが最初で、現地で好評を博した。しかし、日本が出品・出展を開始したのは 1867 年のパリ大会からであった。日本からは、フランスの勧めがあり幕府が正式に参加を表明した。幕府は公使を立て、開場式に列席したのち当時結んだばかりの条約締結国を訪問させた。その一員でパリ万博の様子を詳細に記録した渋沢栄一が、のちに外客誘致政策の発端となった喜賓会の解散宣言を行い、ジャパン・ツーリスト・ビューロー発足の際にも設立メンバーに入っている点は重要である。

博覧会研究の中で、明治以降の戦前日本の近代化と絡めて分析・考察したものうち、主流を占めるものは以下のものである。

吉田光邦は、万国博覧会を新たな情報の交流形式の一つとして捉えた。19 世紀以降の飛躍的な産業の発達と工業化によって交通手段が一気に改善され、世界は一気に人々にとって把握可能なものになった。いち早く産業化に成功したイギリスはその豊富な経済力に裏打ちされた政治力で世界各地に植民地を築き、そのネットワークをふんだんに利用して世界中の情報をイギリスに集約し、また世界各地へと拡散することが可能になった。これを土台とした上に成立した万国博覧会は、産業化という当時最先端の技術を展示することで未来の姿を提示しつつも、次第に「一国の文化や世界の文明を実現しようとする、新しい文明のメディア」【吉田編 1986:4】へと変貌していった。そして、それが奇しくも近代化を始めたばかりの明治初期の産業技術の導入の際に格好の門戸となったと吉田は指摘する。万国博覧会への参加を通して、日本は欧米諸国の産業化・文明化のノウハウを学び、それを今度は日本国内の博覧会で反復・増幅させていったのである。

吉見俊哉による『博覧会の政治学 まなざしの近代』は、博覧会の歴史を社会史的に捉えたものとして非常に示唆に富んでいると言える。「博覧会に集まってきた人々の社会的経験の歴史として捉え返す」【吉見 1992:21】吉見の試みは、博覧会を「その本質においてきわめて政治的でもあれば、イデオロギー的でもある文化の戦略的な場」と捉え、「同時代のどのような大衆意識を、いかなる言説と空間のシステムに置いて動員し、帝国の幻想のな

かに、またその帝国が可能にする商品世界の幻想のなかに、構造的に組み込んで行ったのか」[吉見 1992:262-266]を問うものであった。

また、松田京子は、著書『帝国の視線 博覧会と異文化表象』で、博覧会を「『展示』という形で表された『他者』の意味と、それに対する解釈という実践の関連性を問題とする観点」と、「『展示』という形で行われた『他者』表象のあり方と、それを支えた『知』の往復のあり方、つまり相互関連性を問題とする観点」から、植民地博覧会における台湾の原住民という「他者」の「展示」によって、植民地の原住民を如何に「知」の体系の中に組み込んでいったのかを考察している[松田 2003:11]。これは、坂野徹をはじめとした文化人類学の研究者が行った、戦前日本における文化人類学史の中に植民地の原住民とのかかわりを含めた研究と密接に関わっている。

伊藤真美子の著書『明治日本と万国博覧会』は万国博覧会を諸外国へ向けての日本の紹介の場と捉え、日本のナショナル・アイデンティティ構築の様相を検証した。明治政府はことに、万国博覧会の参加に積極的であった。万国博覧会への政府としての参加の意味は、先述のような欧米の進んだ技術の導入もあるが、それだけでなく、日本という国をアピールするという自己像の模索が見られたというものである。伊藤は、明治期に日本政府が参加した万国博覧会や国内での内国勸業博覧会などから、国内外にどのような日本像を打ち出したのかを当時の時代背景も含め論考した[伊藤 1998a]。

以上の研究を踏まえると、博覧会は、近代国民国家形成を「見る」 - 「見られる」という視覚構造の中で体現する装置の一つになっていたとすることもできるだろう。万国博覧会への参加・出展は、異国情緒あふれる「日本」イメージを殊更強調するという戦略により注目を集め、好評を博した。また、国内では、各地で博覧会の開催ブームが起き、国内外から多くの観覧客を集めている。博覧会の存在は、近代化のアピールと共に、手っ取り早く出展国のイメージを把握してもらうための格好の手段であったとすることが出来る。

本研究では、こうした視点を参照しながら、国家レベルの表象をめぐる議論を展開していきたい。観光研究における国家レベルでの表象の問題を検討することによって、近代社会によって成立した「観光=マス・ツーリズム」図式で見えなくなってしまう領域を可視化する試みを行っていくのである。本研究では、観光のまなざしを観光者(ツーリスト)個人の身体に規定せず、国家対国際社会という図式に拡大する。

ここで留意すべきは、万国博覧会研究で看過されてきたまなざしの双方向性の存在である。近代国民国家対国際社会というマクロレベルの位相で、博覧会を「見る」 - 「見られ

る」という主客の関係から分析していく試みは本研究では重要な視点である。しかし、その一方で、一方向的な「見る」 - 「見られる」だけでは扱いきれない、表象の応酬の存在を忘れてはならない。観光をめぐるマクロレベルでの表象は、当初外国人からの一方向的なまなざしによって形成されたうえで、日本側からの積極的な発信があったのである。そこには、まなざしが双方向的に働くという重層性が存在する。この点は本研究において非常に重要な側面である。

特に、日本の場合、多くの先行研究が想定する欧米の場合と大きく異なる点が二点ある。一点目は、近代化の下で観光が誕生したという図式が当てはまらず、近代国民国家形成と資本主義の発達、そして観光の誕生が全てほぼ同時期に行われたという点である。日本は19世紀後半に鎖国を解いて外国文化を受け入れ始めたのとほぼ時を同じくして、明治政府主導の下近代国民国家形成を開始した。そして、開国とほぼ同時期に外国人たちが日本へ入ってきたのである。この時に外国人による日本旅行が始まったと言っても過言ではない。

二点目は、外国人による日本旅行が始まった直後から、日本は観光を対外宣伝に利用してきたという事実である。これは、観光をイメージ戦略の中で重要な要素であると位置づけた日本の鋭い嗅覚によるものである。明治期に外客誘致の組織を発足させた日本は、大正期には「公式案内」を編み始め、対外的な日本の「公式情報」を発信し続けた。これは日本のイメージ操作の歴史と言い換えることができる。

こうした視点を踏まえて、本研究は、観光をめぐる表象について、国家レベルのマクロな視点をいながらまなざしの双方向性を重層的に描き出す。そして、日本が国際社会からどのように旅行イメージを付与され、それを逆用していったか、そしてその逆用から更にどのようにイメージを再照射され、それを受け止めていったかというまなざしの双方向性による重層性を明らかにしたいと考えている。その際、イメージ形成の歴史を探る方法として、歴史社会学的手法を用いる。

4 課題と方法 観光をめぐる歴史社会学的アプローチ

観光をめぐる表象についての歴史社会学的アプローチについては、既に二節で扱った。二節で明らかにしたように、従来の研究ではある現象や表象をめぐる諸アクター間での位相を中心に検討されており、マクロレベル、国家間の位相の視点が欠落していた。その一方で、国家といったマクロレベルでの位相を扱ったものとして、以下のものが挙げられる。

まず、現代史までカバーした観光史としての先行研究で功績の大きいものとして、旅

の文化研究所編纂の『旅と観光の年表』がある。これは、江戸時代初期の 1600 年から昭和末期の 1988 年までの日本の旅と観光にかかわる歴史的事象を年表形式にまとめたものである。本研究で扱う資料や歴史的事象についての記載はないが、「観光」をキーワードに通時的な歴史が編まれたことは、観光における歴史研究では特筆すべき事柄である。

また、他にも、第二次世界大戦以前の時代を扱った研究として、旧植民地をめぐる観光資源化や日本人の旅行、外客誘致政策についての研究も注目に値する。まず、曾山毅の著書『植民地台湾と近代ツーリズム』は、旧植民地であった台湾の開発が整備されていくさまをトーマス・クック以降の「近代ツーリズム」の発生と定着の過程を追いながら詳細に分析したものである。ここでの「近代ツーリズム」について、曾山は「近代化によって、人々の生活における空間と時間の変容し、それによって引き起こされる人々の移動性の増大が、近代ツーリズムが形成され普及していく社会的な事件なのである」[曾山 2003:19]と説明した。つまり、「人びとが楽しみのためであれ仕事のためであれ、旅行をする機会が増大するような状況が必要であり、その状況をもたらすのが近代化であった」[曾山 2003:19]のである。旧植民地などへの日本人の旅行については、千住一の南洋諸島への内地観光団とメディア・イベントとしての新聞のかかわりを分析したものや[千住 2004]、有山輝雄の日本人の旧植民地や世界一周旅行団結成、来日した海外の旅行団の歓迎などの背後にある「見る」-「見られる」関係の間にある「屈折する意識」を明らかにしたものがある[有山 2002:223]。

また、主に戦前を中心に外客誘致政策を扱った研究は前者二種類の研究よりも数が多く残されている。その中でも、開国から 1970 年の大阪万博までの通時的な外客誘致政策を端的にまとめたものとして、十代田朗、品川茂生、稲葉克己の論文「日本の国際観光政策に関する史的研究」は特筆すべき存在である[十代田, 品川, 稲葉 1997]。他にも、1930 年代における旧満洲への外客誘致政策において、西洋からまなざされることによって生じるオリエンタリズムを更に「支那」へと照射させ、日本が「東洋」における「代理ホスト」の役を果たしていたと指摘する高の研究がある。[高 2002]。最近では、国際観光の分野から個別的な表象ではなく、日本や日本文化の表象に関する研究が出始めてきている。濱野健は、「観光とセルフ・オリエンタリズム」という論考の中で、現代日本の外客誘致政策を事例に日本文化を海外にどのように自己表象しているかを検討した[濱野 2004]。その際、海外からの明治時代以前の前近代的日本イメージをオリエンタリズムに当てはめて分析し、日本がそうしたイメージを自らが受け入れ積極的にそれを表象しているというセルフ・オ

リエンタリズムの構図を明らかにした。ただし、ここでの分析対象は現代のインバウンド政策や政府観光局のインターネットホームページに限定されている。つまり、セルフ・オリエンタリズムがどのような背景で成立し継続されてきたのかという歴史的文脈を明らかにしていない。

また、本研究と直接の関わりがあるものとして、主に戦前期に来日した外国人旅行者たちの日本観について分析したものがある。当時の旅行者やお雇い外国人たちなどの具体的な記録は措くとして、1930年代のアメリカの日本視察団の日本旅行の感想と日本の対米観光政策とのずれを指摘した山本桂の研究や[山本 2014]、幕末から大正初期までの外国人による日本旅行の実態を当時の歴史資料から明らかにした横浜開港資料館の展示図録がある[横浜開港資料館 1996]。

これらの研究の多くは、歴史的な事象を明らかにしつつ、その背後にある政治性やまなざしの複雑性、権力性を暴いているという意味で、単なる観光史の枠にとどまらないものになっている。しかし、それらの多くはある出来事の原因や時代状況を「明らかにする」ことが研究の目的となっており、ある現象が「どのように作られていったのか」という問いの答えになっていないのが現状である⁹。

その問いに答える数少ない研究として、現状を把握し実践的かつ具体的な解決策を提示する上で非常に有効なものに、山口誠の『ニッポンの海外旅行』がある。これは、戦後の若者と海外メディアのかかわりを「マス・ツーリズム」と異なる「個人旅行」という形で描き出したものである。山口は、「若者が海外旅行に行かなくなった」という世間一般のイメージを、本当にそうなのか、だとしたら原因は何なのかを約50年間の通時的なメディア分析で明らかにした[山口 2010]。このように、ある現象についてどのように作られていったのかという問いに対する研究はここ数年で始まった萌芽的なものであり、今後一層の研究の深化が必要である。

本研究では、観光をめぐる表象の問題を、上記のような問いに対してまなざしを手掛かりに行っていきたいと考えている。先ほど検討したように、観光のまなざしは観光者(ツーリスト)個人の身体に規定されるため、よりスケールの大きな国家対国際社会という枠組みでとらえるために、博覧会研究のアプローチを参考に、まなざしの双方向性による重層性

⁹ 歴史社会学的アプローチには諸説あるが、浜日出夫は、「歴史社会学は、出来事のクロノロジカルな連鎖としての歴史を前提として、そのなかからある社会現象を選び出し、その連鎖を遡ってその現象の原因となった出来事を見つけ出そうとするのである」と説明している[浜 2007:179]。

を明らかにしたいと考えている。こうしたアプローチ方法における歴史社会的な姿勢を端的に示したのが、藤田弘夫である。藤田は、歴史学と歴史社会学の違いを次のように述べている。

歴史の研究は、歴史家自身の自覚の有無を別にして、何らかの、歴史哲学、歴史理論を前提として成立している。歴史社会学はこの歴史学にとっての歴史哲学・歴史理論のところに、社会学の概念図式や理論が置かれているものなのだろう。つまり歴史社会学は歴史に対する社会学の概念図式や社会学理論を強く意識した研究なのである。

[藤田 2006:125]

こうした藤田の議論を踏まえて、本研究の課題と方法を説明すると、以下のようになる。本研究では、現代の外客誘致の際に依然として使われている「伝統的な日本」の姿の起源が何であるかを明らかにする。その際に、アーリの「観光のまなざし」を手掛かりに、海外からの日本へのまなざし、それを受けた日本の自己表象といったまなざしの双方向性による重層性を描き出す。そしてそれがどのように形成されたのか、どのように外客誘致の際に利用されていったのかを文書資料を用いて検討する。その際の資料として用いるのが、英文旅行ガイドブックである。それでは、なぜ英文旅行ガイドブックを検討するのかを、次節で説明する。

5 分析対象 探検紀行から旅行ガイドブックへ

5-1 分析対象としての「旅行ガイドブック」

本研究で扱う「旅行ガイドブック」は、海外で作成された旅行ガイドブックと共に、日本が『公式案内』として作成したものも検討する資料の中に含めるものとする。外国人だけでなく、彼らを受け入れる日本人たちが自ら作成した旅行ガイドブックを含めることによって、作り手の多様性が生まれる。それによって、分析の際に「ゲスト」だけでなく「ホスト」も含むことが可能になり、よりまなざしの双方向性や重層性が明らかになることが期待できるのである。そして、外国人向け旅行ガイドブックを資料として使用することによって、観光という文脈で利用される日本の表象の歴史的な形成過程を追うことが可能に

なる¹⁰。

旅行ガイドブックについての詳細な検討は第一章で行うが、資料としての旅行ガイドブックは旅行者の抱くイメージ形成に大きく影響していることや旅行ガイドブック研究の重要性については、既に多くの研究者から指摘されている通りである[ブーアスティン 1964(1962)][ボワイエ 2006 (1999)][サイード 1993(1978)][アーリ 1995(1990)]。

旅行ガイドブックを議論の中心にしている数少ない研究として、里居、羽生、十代田、津々見(2003)、庄田(1990)、田中(2002, 2004)、砂本(2003, 2008)、中川(1973, 1975, 1979, 1985, 1995)、ミルン(2013a, 2013b, 2013c)、山下(1995)、Vaughan(1974)のものがある。また、旅行ガイドブックが消費される情報媒体であるにもかかわらず、新聞・雑誌や書籍と異なり保存状態がよくないため、歴史的に収集するのは非常に困難を伴う。しかし、旅行ガイドブックは「決して尽きることのない、どこにでも存在する、旅行というものに対する態度についての資料」であり、「これらはすべておもしろく、ためになる研究テーマである」[ブーアスティン 1962(1964):300]。

それでは、本研究における分析対象としての旅行ガイドブックを、どこから検討すればよいのだろうか。その手がかりとして、イギリスのジョン・マレー社 John Murray による *A Handbook for Travellers in Japan* シリーズ(以下、HTJ)の存在がある。詳細は第二章で後述するが、1881(明治 14)年、『旅行者のための中日本・北日本旅行案内』*A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan* がアーネスト・サトウとアルバート・シドニー・ホーズによって横浜のケリー社から出版された。その後、ジョン・マレー社は、『旅行者のための日本旅行案内』*A Handbook for Travellers in Japan* と題した旅行ガイドブックを 1884 年から 1913 年までの約 30 年間、9 版に渡り出版した。正確には、ジョン・マレー社から出版されているのは 1884 年からで初版は横浜のケリー社から出版されたのであるが、1884 年にジョン・マレー社から 1881 年に出版されたものを初版とした上で第二版として出版されることになったという経緯がある。ジョン・マレー社の旅行ガイドブック

¹⁰ 山口誠は、以下のように指摘している。つまり、「例えば数年ごとに不定期で改訂されたマレーの日本編を通時分析すると、外国人旅行者が見ようとした『日本』の変遷を垣間見ることができる。良質なガイドブックは貴重な歴史資料になるのだ。(中略)つまり改訂されるガイドブックには、『旅先の社会の現在形』とともに、それを編集して出版する『製作者の意図』の二つの情報が映し出されているのであり、その両方を複数の資料によって比較分析することが求められる。そうして複数のガイドブックや同時代の新聞などの資料を比較分析することで、ガイドブックによる歴史社会学も可能になるだろう」[山口 2011:145]。

クシリーズの書誌では 1881 年版は初版として扱われることになっているため、本研究でも同様に扱うものとする[*Lister 1993*]。HTJ はその後、1891、1893、1894、1899、1901、1907、1913 年と版を重ねた。最終版である第九版の出版の際には、ジョン・マレー社は既に旅行ガイドブックシリーズの出版権を他社に譲っており、同社からの出版としては最後の旅行ガイドブックのうちの一つとなった[*Lister 1993*]。

そして、このジョン・マレー社は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、同様の旅行ガイドブックシリーズを多数出版している。同社は、1836 年の『旅行者のための大陸旅行ハンドブック』*A Handbook for Travellers on the Continent : being a guide through Holland, Belgium, Prussia and Northern Germany and along the Rhine from Holland and Switzerland* の出版を皮切りに、『旅行者のためのハンドブック』と題した各地の旅行ガイドブックシリーズを出版した。元々、ジョン・マレー社は 18 世紀から続く大手出版社であり、バイロン卿やジェイン・オースティン、チャールズ・ダーウィンなど多くの著名な作家の著作を出版してきた。『旅行者のための〇〇案内 *A Handbook for Travellers in 〇〇*』のシリーズは 19 世紀半ばから出版されているが、同社は、同時に旅行家や探検家の旅行記や体験記も手掛けている。ジョン・マレー社の旅行ガイドブックは、そのシリーズの特徴である赤い皮装丁で小型の辞書ほどのサイズと分量を持った小さな百科事典のようであり、広範囲の分野を扱い、精密な地図までもが添付されていた。

ジョン・マレー社の旅行ガイドブックの形態(写真 1、写真 2)については、HTJ 第二版の全訳を行った庄田元男が的確な描写を行っている。

ハンドブックという書名が付けられてはいるが、また B6 判という便利な大きさであるものの、459 頁(第三版)、705 頁(第二版)など平均で 560 頁に及ぶ厚手の本となっている。各頁には 8 ポイント相当の小さな活字が二段組でぎっしり詰め込まれている。注釈の部分は、さらに小さな 7 ポイント相当の活字が使用されていてなかなか読みにくい。薄手の中質紙が使われているので、厚さの肥大化は避けられてはいると認められるが、それでも現在の辞典、辞書のようなインディアン・ペーパーは採用されておらず、手に持つとずっしりと重い感じだ。[庄田 1996:430]

装丁は赤い表紙に金字で表題が書かれたもので、通称 Red Guide、Red Handbook として多くのイギリスを中心とした人々に親しまれていた[*Buzard 1993*][*Gretton*

1992][Lister 1974]。

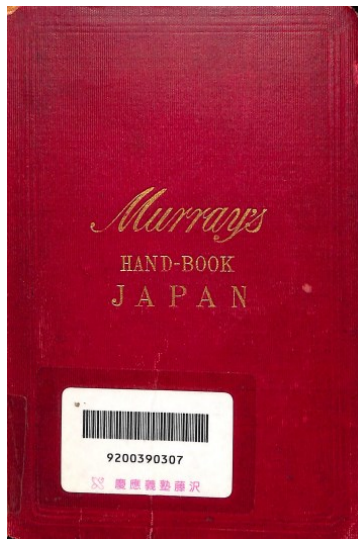


写真 1 [Chamberlain, Mason 1907]

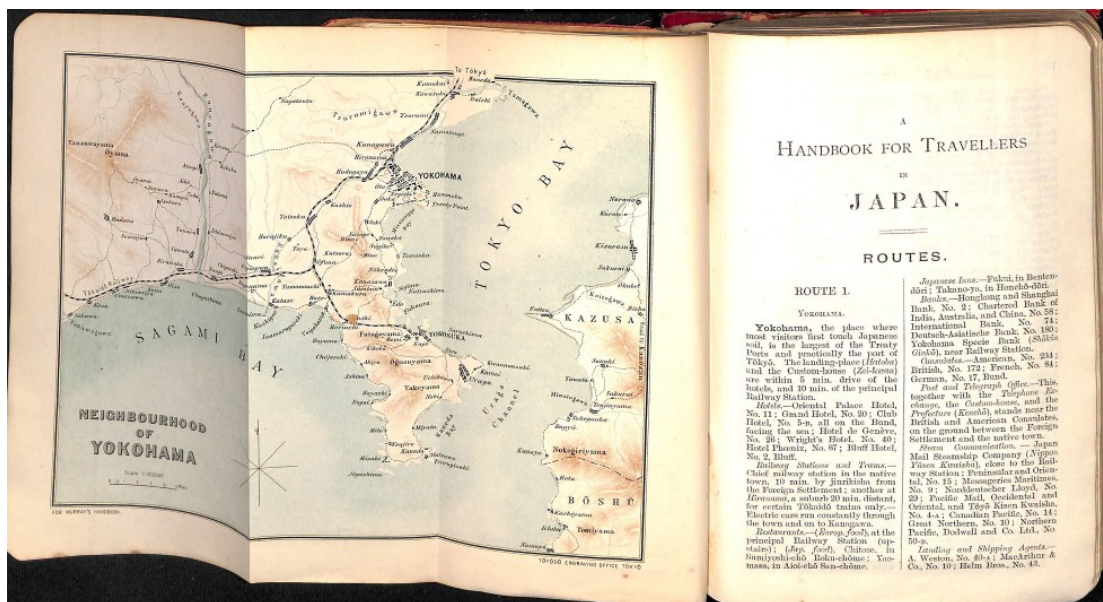


写真 2 [Chamberlain, Mason 1907:1]

(写真 1, 写真 2 共に慶應義塾大学湘南藤沢メディアセンター所蔵)

ただし、こうした旅行ガイドブックの系譜は、HTJを起点にすればよいというものではない。それ以前にもまた、留意しなければならない存在がある。それは、HTJの情報源となった著作や論文、旅行記である。特に、19世紀半ばに日本や朝鮮半島、中国大陆を旅した女性旅行家イザベラ・バードの著書がHTJに先立つ1880年に『日本奥地紀行 *Unbeaten*

Tracks in Japan』を始め、ジョン・マレー社から多数の旅行記を出版している点は非常に重要である。イザベラ・バードとジョン・マレー社との関係は、後の HTJ にも多大な影響を及ぼしている。

イザベラ・ルーシー・バード(ビショップ)Isabella Lucy Bird(Bishop)(1839～1904)は、イギリス人旅行家である。若いうちからカナダ、アメリカを旅した彼女は、ジョン・マレー社の社長のジョン・マレー三世と友誼を結び、1856年に同社から旅行記を出版している¹¹。その後もオーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、ロッキー山脈と旅行を行い、1878年に日本を訪れている。その際の旅行記が『日本奥地紀行』であった。その後も精力的に旅行を行い、マレー半島、シナイ半島、小チベット、ペルシャ、クルディスタン、朝鮮半島、ロシア領満洲、中国大陸、モロッコを訪れ、多くの旅行記を遺している。イザベラ・バードの『日本奥地紀行』の出版経緯を研究している高畑美代子は、出版事情や記載内容の変化を丁寧に追うことで、原題である「Unbeaten Tracks」という単語の持つ「日本の民俗的、エキゾチックなイメージ」の裏に隠れたバードの敬虔なキリスト教徒的視線を明らかにしている[高畑 2006, 2010]。

5-2 探検紀行から旅行ガイドブックへ

バードは、1880年に『日本奥地紀行』全二巻初版をジョン・マレー社から出版し、それが非常にベストセラーとなり版を重ねることとなった。しかし、社長のジョン・マレー三世から全一巻の形に削除した形の廉価縮小版を製作するように言われ、1885年に同名の廉価縮小版を作成している。その背景には、既にバードのハワイとロッキー山脈の旅行記二冊も廉価縮小版を作成しており、そのシリーズの中に日本の旅行記も組み込みたかったことが指摘されている。そして、新しい読者を開拓するために「旅と冒険の本(travel and adventure)」として大幅な削除をバードに依頼していた点は注目に値するだろう¹²[Stoddart 1906=2011:168][金坂 2014:18]。それは当時の旅行のイメージとして欧米の

¹¹ 金坂清則によると、アメリカ旅行の際に旅行作家のジョン・ミルフォードがバードとジョン・マレー三世を引き合わせたという。バードとジョン・マレー三世との関係はマレー三世が死亡する1892年まで約四十年近く続き、四世にも引き継がれた。出版した本すべてがベストセラーになったバードが、ジョン・マレー社にとって重要な人物であったことは否定できない[金坂 2014:40-41]。

¹² 金坂は、表題を初版と廉価縮小版でほぼ同じものを採用した点、24シリングした初版本が縮小版では7シリング6ペンスで売られたことによって、縮小版もまたベストセラーとなった点、その後縮小版の重版の際に「新版、縮約本」の記述が削除された点によって後に縮小版が完全版であるという誤解が生じてしまったため、日本の多くの翻訳が縮約本

人々に共有されていたと考えられる。

この「旅と冒険」というイメージは、本研究にとって非常に重要なものである。「冒険」という単語は危険を顧みずにある事柄を果敢に行うと言う行為に対する言葉であるため、本研究では類似した意味を持ち、当時盛んに行われていた「探検」という単語を使用する。

「探検」とは、未知の地域や文化圏に赴き、そこで調査を行い、情報や産物を得て帰還するという知的営みを含んだものであった。そして、未知の地域や文化圏が多く存在した当時の、異文化への期待やロマン¹³が垣間見られる格好の例であると言える。また、当時の旅行者たちは彼ら、彼女らの「探検」をさまざまな媒体で記録・発表していった。そうした旅行を元に記述したものを本研究では「紀行」という言葉で表現する。「紀行」とは、旅行中の体験や見聞、感想などを書きつづった文章という意味がある。それは主に旅行記や体験記といった形での出版を意味し、不特定多数の人々に読まれ楽しめることを目的としていた。先述した旅行ガイドブックの出版事情を鑑みると、日本の英文旅行ガイドブックの誕生は、こうした「探検」を行った外国人たちによる「紀行」が原型ではないだろうか。本研究ではこうしたイメージに基づいた、旅行記に代表される記録を旅行ガイドブックの現段階として「探検紀行」と呼ぶ。イザベラ・バードの『日本奥地紀行』に代表される旅行記は、まさに「探検紀行」と呼ぶにふさわしいと言える。本研究では特に、この点に着目して考えてみたい。

そして何より重要な点が、こうした「探検紀行」が後の HTJ の制作に大きな貢献をしているというものである。HTJ の初版である 1881 年の *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* の序文の謝辞には、イザベラ・バードの名前が他の日本学の専門家たちの後の最後に掲載されているのである [Satow, Haws 1881: PREFACE]。最後に掲載された事情は不明であるが、他の掲載されている人物は皆日本学の専門家であると同時に第二章で後述する日本アジア協会の会員であるにもかかわらず、非会員であり女性

を底本としていることを指摘している [金坂 2014: 18-19]。

¹³ 「ロマン」という単語には、19 世紀末当時に依然として残るロマン主義の残り香がついていると言い換えることもできるだろう。ジョン・アーリが『観光のまなざし』で提示した、「ロマン主義的まなざし」の説明の際にも、近代ツーリズムの誕生と同じく 18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、「ロマン主義運動」の影響が指摘されている。自然に対する「感動とか感覚とかの激しさに、また知的な明晰さより詩的な神秘性に、さらに個性的な享乐的表現に移り変わってきたのである [アーリ 1995(1990): 36]。このことによって、「人はだれでも自然界にたいして感動できるのだという暗示を与え、風景は喜びをもってまなざしをむけることができる<何ものか>であるという暗示を与えたことである」 [アーリ 1995(1990): 36]。

であるバードの名が掲載されているという事実は興味深いものである。また、バードの日本旅行の際に助力を行い、『日本奥地紀行』執筆の際にも情報提供を行ったのが、後の HTJ の主著者となるアーネスト・サトウとバジル・ホール・チェンバレンもその中にいた点も重要である[金坂 2014:199-220]。その後、彼らが HTJ の初版を執筆する際にバードに相談を行っていたという事実もまた、「探検紀行」が HTJ の成立になんらかの貢献を行っていたと言えるだろう。

本研究では、外国人向け旅行ガイドブックの歴史社会的系譜を、「探検紀行」から「旅行ガイドブック」へと仮定する。そして、観光という文脈における日本の表象がどのように形成され、まなざしの交錯によって変化していったのかを明らかにする。しかし、その系譜の移行は単線的に行われたわけではない。形式や系譜が異なっているとしても、それ以前にも外国人向け旅行ガイドブックは存在していたのである。「探検紀行」から「旅行ガイドブック」へという構図から零れ落ちてしまう HTJ の登場以前に存在した外国人向け旅行ガイドブックの存在を、本研究では「旅行ガイドブック前史」として第一章で扱うものとする。

5-3 本研究で使用する資料

本研究では、HTJ の他に以下の資料を用いて分析を行う。

第一章では、HTJ の登場以前に出版されていた外国人向け旅行ガイドブックを最古の幕末期のものから検討する。使用する資料は以下の通りである。

Dennys, N. B., et al., *The Treaty Ports of China and Japan: a Complete Guide to the Open Ports of Those Countries, together with Peking, Yedo, Hongkong and Macao*, Truebner. 1867(慶應 3)年刊行

Yamamoto, Kakuma, *The Guide to the Celebrated Places in Kioto & the Surrounding Places*, Niwa. 1873(明治 6)年刊行

Griffis, William Eliot, *The Yokohama Guide, by a Resident*, F. R. Wetmore. 1874(明治 7)年刊行

The Tokio Guide, F. R. Wetmore. 1874(明治 7)年刊行

Satow, Sir Ernest Mason, *A Guide Book to Nikko*, Japan Mail Office. 1875(明治 8)年刊行

Keeling, W. E. L., *Tourists' guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura*,

Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc. : together with useful hints, glossary, money, distances, roads, festivals, etc., etc., 1st ed., Farsari. 1880(明治 13)年刊行

第二章では、先述の HTJ 全九版を検討する。

第三章では、国有化間もない鉄道院が編集した『東アジア公式案内』(以下、OGEA)を検討する。OGEA の原題は *An Official Guide to Eastern Asia: Trans-Continental Connections between Europe and Asia* といい、構成は以下の通りである。

Vol.1 Manchuria & Chosen 1913(大正 2)年 10 月刊行

Vol.2 South-Western Japan 1914 (大正 3)年 7 月刊行

Vol.3 North-Eastern Japan 1914(大正 3)年 7 月刊行

Vol.4 China 1915(大正 4)年 4 月刊行

Vol.5 East Indies including Philippine Islands, French Indo-China, Siam, Malay

Peninsula and Dutch East Indies 1917(大正 6)年 4 月刊行

編者は Imperial Japanese Government Railways(鉄道院)となっている。

第四章では、アメリカのヒュートン・ミフリン社から出版された Philip T. Terry の *Terry's Guide to Japanese Empire*(以下 TGJE)1914, 1920, 1926, 1928, 1933 年版、鉄道省国際観光局の *An Official Guide to Japan*(以下 OGJ)1933 年の三点を中心に、ジャパン・ツーリスト・ビューローや国際観光局が制作した *JAPAN, POCKET GUIDE JAPAN* のシリーズ、ジャパン・ツーリスト・ビューローの制作した『外人たちの見た日本の横顔』を検討する。

第五章では、以下の資料を検討する。鉄道省国際観光局による『公式日本案内』*An Official Guide to Japan* が 1933 年、同じく鉄道省国際観光局による『日本 公式案内』*Japan : The Official Guide* が 1941 年、同じ表題で運輸省観光局による出版が 1952 年、1953 年、1954 年、1955 年、1957 年、1958 年、1959 年、1961 年、1962 年、1963 年、国際観光振興会による『新公式案内 日本』*The New Official Guide : Japan* が 1964 年、1966 年、1967 年、1975 年、1991 年と断続的に出版が行われていた¹⁴。これらを総称して『公式案内』

¹⁴ 『公式案内』の出版者が順次変更になった点について、『日本交通公社七十年史』では次のように説明している。

運輸省観光部の要請による英文の「オフィシャル・ガイド・ジャパン」(昭和二十七年)など観光文化資料的性格の図書を発行し公的な役割をも果たしている。／「オフィシ

と位置付けて検討する。

6 本研究の構成

本研究は、以下の構成によって研究を進めていく。

第一章では、「最初期の外国人向け日本旅行ガイドブック」と題し、最初期の日本旅行ガイドブックを検討し、旅行ガイドブックの再定義を行う。具体的には、幕末期から明治中期までの英文旅行ガイドブックを中心に、それらが対象としている読者層を検討し、その内容からどのような日本旅行を行っていたのかを明らかにする。

第二章では、「探検紀行から旅行ガイドブックへ」と題し、先述したように明治中期から大正初期まで出版された **HTJ** を検討し、「探検紀行」から「旅行ガイドブック」への変化を明らかにする。具体的には、外国人による「探検紀行」と日本学の成立とともに誕生した外国人向け日本旅行ガイドブックの誕生の経緯を明らかにすることによって、外国人からのまなざしに対応して海外向けの日本像が確立していく様を明らかにする。また、**HTJ** の内容と共に出版社、執筆者、情報収集者の情報を検討し、「探検紀行」から「旅行ガイドブック」への移行と共に誕生した観光をめぐる日本の表象のメカニズムを明らかにする。

第三章以降は、日本側が製作した「公式案内」を中心に検討する。

第三章では、「公式案内の誕生」と題して、大正初期に製作された **OGEA** を検討し、「公式案内」の成立を明らかにする。つまり、第二章で成立した海外からの日本へのまなざしを逆用する形で、今度は日本が大陸進出への足掛かりを得ることによってまなざしの主体へと変貌していく過程を明らかにする。**OGEA** の成立背景を明らかにすることによって、「公式案内」の成立の際にどのような政治的思惑が働いたかを明示する。

「**オフィシャル・ガイド**」は、戦前鉄道院時代、外人のために大正二年、英文の日本案内書として刊行されたもので、以後、大正十二年の関東大震災に奇跡的に焼け残った原本が昭和五年以後、国際観光局に引き継がれて戦後にいたった。／この「**オフィシャル・ガイド**」は、戦前から外国で出されていた「**フォーダー**」や「**ブルー・ブック**」の日本編よりすぐれた内容を持つことが外国の出版社によっても評価され、昭和二十九年にはスイスのナゼール社から出版権を得たいという希望まで寄せられた。／戦後は編集実務を社の海外宣伝部外語編集課が担務して内容を抜本的に一新させた。【日本交通公社 1982:173-174】

この事実は、鉄道院と国際観光局との非常に強い関係があったことを示している。こうした事情を日本交通公社が把握していたという事実は、過去にジャパン・ツーリスト・ビューロー設立の際に鉄道院の職員が中心になっていたことの裏付けとなると言ってもいいだろう。詳細は第三章参照。

第四章では、「公式案内の展開」と題し、大正初期から昭和初期までに出版された TGJE と鉄道院の OGEA、鉄道省国際観光局の OGJ、ジャパン・ツーリスト・ビューローの『外人の見た日本の横顔』を検討する。第四章では、かつて海外からまなざされた日本がそれを意識した上でまなざしの主体へと変貌した過程の中で、今度はその上で海外がどのように日本をまなざしていくか、それを日本が受け止めて再発信していくかを明らかにする。具体的には、TGJE で登場した芸者と吉原の描写を中心に、OGEA と OGJ、日本旅行宣伝小冊子における芸者表象、『外人の見た日本の横顔』での外国人による率直な感想を検討することによって、まなざしの重層化を明らかにする。

第五章では、「公式案内の自己表象」と題し、昭和中期から平成初期までに出版された鉄道省国際観光局、運輸省観光局、国際観光振興会の出版した「公式案内」を検討する。「公式案内」が、戦前から戦後まで一貫して観光の持つ平和的イメージを利用してきた事実を明らかにすることで、まなざしの重層化の最終形態を提示する。具体的には、戦前から 1990 年代初頭までの「公式案内」における天皇と皇居の記述を中心に、旅行ガイドブックらしからぬ内容を記述し続けた「公式案内」の思惑を明らかにするとともに、一貫して観光を利用した「平和」のイデオロギーを発信し続けた歴史を示していく。

第一章 最初期の外国人向け旅行ガイドブック

第一章では、幕末期から明治初期に出版された外国人向け日本旅行ガイドブックを検討する。そして、それらの対象読者が具体的にどのような人物でどのような日本旅行を行っていたかを明らかにすると同時に、「旅行ガイドブック」の再定義を行うことを目的とする。

1 はじめに

19世紀後半の欧米人にとって、日本の開国・明治維新は、日本への政治的・経済的接触の機会の拡大と共に、日本国内旅行の機会を整えるものであったと言い直すことができる。蒸気機関の発達でイギリスをはじめとする西欧諸国では、情報や物資の運搬だけでなく人間の移動範囲も拡大し、その移動時間も著しく短縮したのである。そして、19世紀半ばにイギリスのトーマス・クック社が団体旅行ツアーの斡旋を始め、従来は上流階級のみの特権であった旅行を中産階級も行うことができるようになっていた。そして、イギリスを中心とした西欧諸国は経済的に圧倒的な有利な立場を利用して、世界中の地域の国々や民族と交渉を持つようになった。日本の開国・明治維新は、日本へ旅行目当てでやってくる旅行者の存在を認めざるを得なくなる契機でもあったのである。そして、日本への外国人旅行者がやってくるとともに、少しずつ外国人向けの旅行ガイドブックも出版され始めるようになってきた。そして、1881(明治14)年には、当時世界最大手の旅行ガイドブック出版社の一つであるイギリスのジョン・マレー社の旅行ガイドブックに沿った形式の *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*(以下、HTJ)初版が出版されたのである。

本章では、HTJの出版以前に出版されていた外国人旅行者向けの旅行ガイドブックを最古のものから遡り、日本の国内旅行のために作られた書物の持つ意味やメッセージ、機能や目的について実際にその文章を検討し、歴史の変化と社会的背景を考察する。

その際、考察対象を英語版に絞り、出版された国や地域、執筆者の国籍は問わないものとした。その理由として、第一に外国語で書かれた旅行ガイドブックのほとんどが英語であった。第二に、これは旅行ガイドブックという出版物の特徴として、執筆者と出版者との国籍や所在が必ずしも一致しておらず、一冊の旅行ガイドブックを出版するにしても、著作権所有者と出版元の国や地域が異なっている場合が多かったという点が挙げられる。

2 旅行ガイドブックとは

本章で扱う資料については、以下の文章が参考になるだろう。これは、1874(明治 7)年に横浜で出版された『横浜案内』(*The Yokohama Guide*)の序文の一部である。文章中にある「編者(The Compiler)」とは、『横浜案内』の著者・編者である W. E. グリフィス自身を指している。

編者は長らく、横浜周辺の詳細なガイドブックが出版される希望を持って待っていた。(中略)編者は学識を持たないしベデカーやマレーが持っているような完璧な知識や技術も持たないが、この仕事(『横浜案内』の執筆)を引き受けた。[Griffis 1874a:PREFACE]

『横浜案内』の著者・編者であるウィリアム・エリオット・グリフィス William Eliot Griffis(1843~1928)は、明治初期にお雇い外国人として来日し、アメリカに帰国後は日本文化に関する講演・執筆活動を積極的に行った、明治初期の外国人日本研究者である。特に、帰国後に彼が執筆した『ミカドの帝国』*The Mikado's Empire* (1875)は、当時のみならず現在に至るまで、日本学(Japanology)の古典とも言うべき重要な研究成果と位置づけられている。そして彼の言う「ベデカーやマレー」とは、旅行ガイドブックの出版社の名前である。グリフィスは、旅行ガイドブックがその二社から出版されることを暗に望んでいた。彼は『横浜案内』の出版年と同じ 1874 年に帰国している。グリフィスが『横浜案内』をしたのは、大手二社がいつまでも日本の旅行ガイドブックを出さなかったからであった。それだけ、当時はベデカーやマレーが旅行ガイドブックとして権威があったことが分かる。

数少ない旅行ガイドブック研究者の一人である中川浩一は、著書『旅の文化誌』で今まで全くと言っていいほど行われていなかった旅行ガイドブックと鉄道時刻表の歴史を、初めて包括的に行った。特に、それぞれの言語ごとに整理されてきた旅行ガイドブックの歴史を、イギリスのジョン・マレー社とドイツのカール・ベデカー社の二社から出版された経緯を対比させながら論じたことによって、「旅行ガイドブックの歴史」の全体像を浮き上がらせた功績は非常に大きいと言える。中川は、近代以降の旅行ガイドブックの歴史をジョン・マレー社の『旅行者のための〇〇旅行案内』シリーズが最初であるとし、カール・ベデカー社の『旅行者のための〇〇案内』シリーズでジョン・マレー社とほぼ同様の形式・

外見にのっとして出版したとするイギリス側、それに対する反論など、近代以降の旅行ガイドブックの始まりに関する諸説を掲載した。そして 19 世紀後半から第二次世界大戦終戦後に至るヨーロッパ各地の旅行ガイドブックの歴史を、マレーとベデカーに始まりベデカーがドイツ語版の他に英語版(写真 3, 写真 4)、フランス語版を出版し事業拡大していくのに伴い、ヨーロッパ各地でさまざまな旅行ガイドブックが相互に影響し合い現代に至るという壮大なスケールで描いた[中川 1979:77-166]。現在でも、ジョン・マレー社とカール・ベデカー社のあまりにも類似した形式や外見から、相互での情報交換や事業に関する何らかの了解などがあったとする説もあるが、現在でも明確な決着はついていない¹⁵[中川 1979][Gretton 1992][Lister 1993][Baedeker 2013]。しかし、そういった議論が生じているという事実を明らかにしたということだけでも、旅行ガイドブックの歴史を白日の下にした中川の功績は大きい。事実、これ以降の日本における旅行ガイドブックの歴史記述は、カール・ベデカー社とジョン・マレー社を起点とするものが中心を占めるようになった。

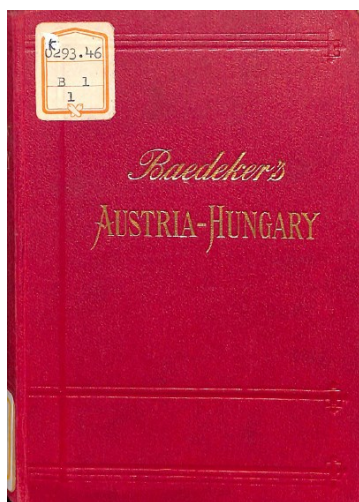


写真 3

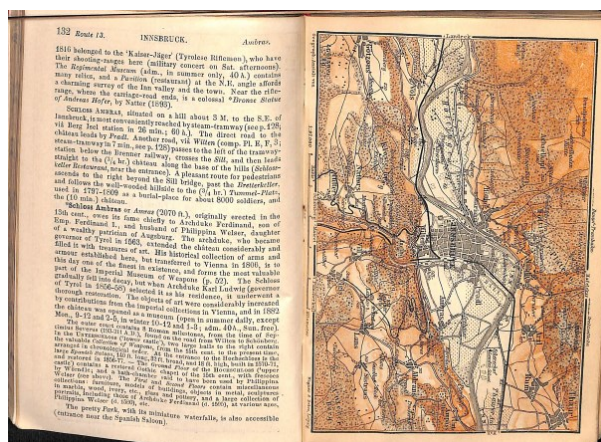


写真 4

写真 3、写真 4 共に Karl Baedeker 1905 *Austria-Hungary including Dalmatia and*

¹⁵ 写真 1, 写真 2(共に序章 22 頁), 写真 3, 写真 4 参照。近代旅行ガイドブックの歴史において、カール・ベデカー社とジョン・マレー社のどちらが先に旅行ガイドブックを出版したかという論争は、現在においても明確な決着がついていないのが現状である。ジョン・マレー社の旅行ガイドブックの書誌を執筆したグレットンとリスターによると、1992 年の書誌執筆年現在最古のものは 1836 年である[Gretton 1992][Lister 1993]。逆に双方に交流があったが故とする説も存在する[Bazard 1993]。ベデカー社の公式ホームページによると、ベデカー社の前身が製作した初の旅行ガイドブックが登場したのが 1828 年であるが、カール・ベデカー社としての形式が完成した形での刊行が始まったのは 1835 年であるとしている[Baedeker 2015]。

Bosnia Handbook for Travellers, Karl Baedeker, Publisher.(慶應義塾大学日吉メディアセンター所蔵)

その最たる例として、平凡社の『世界大百科事典』の「旅行案内書」の項目説明には、次のように書かれている。

現在われわれが利用するものと同じような体裁と内容で、地域(国)別に、シリーズ形式で出版されるようになったのは、ヨーロッパにおいて 19 世紀になってからであった。とくに、ドイツ人のベデカーKarl Baedeker(1801~59)とイギリス人のマレーJohn Murray(1808~92)がこの分野の始祖とされ、前者は 1828 年、後者は 36 年にシリーズの刊行を始めた。両者は書名に自分たちの名前を冠したので、その後《ベデカー》と《マレー》は旅行案内書の代名詞となった。とくに、《ベデカー》のそれは、記述と地図の正確さ、知的水準の高さ、赤表紙の小型ポケット判といった装丁、英独仏といった多国語による刊行、星印による評価などで、後続旅行案内書の規範となった。[岡本 2007]

『百科事典』の「旅行案内書」の項目を執筆した岡本伸之は、日本における観光学の確立に大きな貢献をした人物で、立教大学で日本初の観光学部を設置する際にも尽力した、日本の観光学の大家である。彼が旅行ガイドブックの歴史についてこのように記述しているという点は、現在、日本における旅行ガイドブックの歴史は主にベデカーやマレーから始まっていると認識されていると言い換えることもできるだろう。

また、中川は、過去にも存在していたいわゆる「How to もの」に特化した旅行案内書を単に「ガイドブック」と呼び、ベデカーやマレーといった 19 世紀以降の旅行ガイドブックを「ハンドブック」と称して、従来のものと一線を画す形でイギリスの「旅行文芸」の系譜の中に位置づける試みを行っている[中川 1979]。そして、「ハンドブック」の読解にかなりの教養を必要とする理由は、その誕生が、高い知性と深い教養に支えられながら、新興の社会階層として、19 世紀の西ヨーロッパ社会を特色づけたブルジョワジーの要求によったためであるとした[中川 1979:3]。そして、マレー社の旅行ガイドブックは、「産業革命の子でもある」とし、それは労働者階級とは無縁の存在であり、支配階級の中で急速に台頭した「ブルジョワジーの慾求」が、海外旅行者の友となった「マレー」を生んでい

ると指摘する[中川 1979:10]。マレーのガイドブックは、その情報の詳細さや新しさが一番の人気の元であったことはもちろんであるが、それ以上に学術的・専門的な記述が大部分を占めているために、読みこなすには前提知識として相当の教養が要求される。いち早くイギリスにおける 18 世紀～19 世紀後半までの旅行ガイドブックの歴史を概観したジョン・ヴォーガンも、19 世紀イギリスの旅行ガイドブックは、描写内容や価格から「貴族やジェントリー、そして教育を受けた人間」が主たる読者層であり執筆者であったと指摘している[Vaughan 1974:82-97]。

中川のように「ハンドブック」を「ガイドブック」より高次のものとして「旅行文芸」の系譜の中に位置づけてしまうことは、「ハンドブック」の持つ知識や技術の価値を評価するものであったとしても、旅行者が実際に用いるという側面から外れてしまう恐れがあると考えられる。書かれている記述内容が実用本位であって学術的・専門的ではなかったにしても、「ハンドブック」が書かれ始めて流通した 19 世紀後半でも確かに「ガイドブック」も存在しており、確実に需要は存在していたのである。

ジョン・ヴォーガンは、著書 *The English Guide Book c1780-1870* で、ガイドブックの前提条件について、①その土地に不案内な人間が行きたがっている(＝強く興味を持っている)場所がある、②その場所を説明できる著者がいる、そして③先の二つの条件を合わせて本にして売れると判断する業者がいる、の三つの条件があるという三点を挙げている。続けて、「ガイド(ブック)の購入は、読者が(その土地に関する)知識が不足していることと同時に、(その土地に関する)情報に対して非常に敏感であるということ、そしてその興味を満たすための経済力や娯楽を持っている人間がいるということを示している」[Vaughan 1974:13]と指摘する。これによれば、中川が分類したマレーやベデカーといった知識人階級・上流階級が読んだ「ハンドブック」も、それ以前の簡素な「How to ものに特化したガイドブック」も、現在あらゆる階級や国籍を超えた人々が読む旅行ガイドブックも、すべて一つの流れの中で議論することが可能になる。現にヴォーガンは、その視点をを用いて 18 世紀から 19 世紀後半までの英語の旅行ガイドブックの歴史を描いている。ヴォーガンによると、17 世紀頃からのグランド・ツアーや英国内各地の保養地や行楽地などを扱った、すでに類似した形式のガイドブックが存在していたという。そして、19 世紀初頭になると鉄道網が拡大し、鉄道によって従来の馬車以上の距離を移動するようになった人々からの要求も伴い、次第により詳細で正確な旅行ガイドブックへの要求が強くなっていったという[Vaughan 1974]。

ただ、ヴォーガンの挙げた旅行ガイドブックの条件は、西欧の一方向的な言説と表象に満ちていると言うこともできる。例えば、①出発地(である西欧に)必ず戻ってくる、②見る - 見られるという一方向性、③訪れる「自」と訪れられる「他」の顕在化、④執筆者と読者が重なっているという四点が挙げられるだろう。特に、一点目の「出発地に必ず戻ってくる」視点は、*tour* の語源と重なるものである[ボワイエ 2006(1999)]。近代以降の観光活動は、必ず帰って来られる安全の確証の有無が重要になると言える。本章で扱う時代の旅行ガイドブックには、記載内容の正確さよりも、この点に終始したものが多い。

本章は、ヴォーガンの定義に倣い、マレー社型の形式が定着する以前の 1867 年から 1880 年までに出版された外国人の旅行案内・都市案内書を旅行ガイドブックとして位置づけた上で検討・考察を行う。

3 「優れたガイド」

HTJ 初版出版の 1881 年以前に出版されていた「旅行」もしくは「案内」という単語が表題に掲載されていたものは、以下の 5 作者 6 冊である。以下、出版年の古い順に列举する。本章ではこれらの資料を読んだ上で、検討を行った。定価は資料に記載されておらず、他の資料にも掲載されていなかったため、すべて不明である。

資料① デニス『中国・日本開港地案内』: 1867(慶應 3)年

Dennys, N. B., et al., 1867, *The Treaty Ports of China and Japan: a Complete Guide to the Open Ports of Those Countries, together with Peking, Yedo, Hongkong and Macao*, Truebner.

資料② 山本覚馬『京都・周辺地名所案内』: 1873(明治 6)年

Yamamoto, K, 1873, *The Guide to the Celebrated Places in Kyoto & the Surrounding Places*, Niwa.

資料③ グリフィス『横浜案内』, 『東京案内』: 1874(明治 7)年

Griffis, William Eliot., 1874a, *The Yokohama Guide, by a Resident*, F. R. Wetmore.

Griffis, William Eliot., 1874b, *The Tokio Guide*, F. R. Wetmore.

資料④ アーネスト・サトウ『日光案内』: 1875(明治 8)年

Satow, Sir Ernest Mason, 1875, *A Guide Book to Nikko*, “Japan Mail” Office.

資料⑤ キーリング『旅行者のための横浜・東京...案内』初版：1880(明治13)年

Keeling, W. E. L., 1880, *Tourists' guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kioto, Osaka, etc., etc. : together with useful hints, glossary, money, distances, roads, festivals, etc., etc., 1st ed.*, Farsari.

以上の中で最も新しい資料⑤の序文には、「既に、『横浜案内』や『東京案内』、『京都案内』などの優れたガイドが出版されている」[Keeling 1880: PREFACE]という一文がある。これらは、資料②と資料③を指している。つまり、1880年当時、既に資料②、資料③は一定の購買数を確保でき知名度が高かったことが伺える。この事実は、本章においても重要な視点である。

まず、出版元を見てみよう。資料①はロンドンと香港の異なる会社の名前が明記されている。ロンドンにはテュルプナー商会、香港には A.ショートレイド商会と書かれている。資料②は京都の丹羽社から出版されている。そして資料③は、横浜のウェトモア社から出版された。資料④はジャパン・メイルという英字新聞社から出版されている。そして資料⑤は、東京のサージェント・ファルサーリ商会¹⁶から出版されている。つまり、資料①以外は日本で出版されているのである。そして、資料①の執筆者であるデニスの所属と資料から読み取れる日本に関する知識について、このことと対応する事実が判明した。

外国語による日本最古の旅行ガイドブックは、資料①のデニスによる 1867(慶應3)年『中国・日本開港地案内』であった¹⁷。これは、中国と日本と両方の開港地・大都市を扱ったものである。この本の副題には『旅行者・商人・居住者のためのハンディーガイド』¹⁸と書かれており、読者は旅行者だけではなく商人や居住者を想定している事実が分かる。

著者・編者のデニスについては「大英帝国領事館元職員(H. M.'s Late Consular Service)」とあり、他の著者名も書かれているが、彼らの勤務地は日本ではなかった¹⁹。内容は題名

¹⁶ 尚、1884年の第二版からは同社は横浜に移動しているが、詳細は確認が取れていない。

¹⁷ 尚、後年1977年の復刻版(1977, in *CMC Reprint Series No.67*, reprinted by Chinese Materials Center, Inc.)と1860年付けの序文が掲載されていた。しかし、1867年に出版された現物と2010年の復刻版(2010, in *The Emergence of The World Tour*; vol.2, edited by Hisako Ito)には掲載されておらずその事情についても確認が取れていない。

¹⁸ 直訳で言うならば「ガイドブックと携帯参考書」になるが、日本語で書く「ハンディーガイド」には両方の意味が含まれると判断し、一語にまとめて訳した。

¹⁹ 編集・編纂者はデニスであるが、著者としてデニスの他に Wm. Fred MAYERS, F. R. G. S., H. M. Consular Service, and Chas. KING, Lieut. R. M. A. という名前も入っている。

にある通り、中国と日本のどちらの都市も欧米諸国中心の外国人が貿易等の理由により寄港・滞在が許可された港町やその国における主要都市のことを記載したものが中心であった。1867 年付けの序文には日本が開港したとわずかに言及されているものの、大部分が中国を中心に書かれている。22 都市が中国の都市について書いており、日本に関しては開港した長崎、横浜、箱館(函館)、兵庫、そして当時の政府に当たる幕府があった江戸の 5 都市に限られていた。そして「日本編」の記述は伝聞によるために情報の出所が曖昧で概要しか書かれていないので、編集したデニスには日本に滞在したことがないと判断できる。

ただ、この本には汽船の時刻表や航路表・簡単な運賃表、貨幣換算表、英語 - 中国語・日本語のごく簡単な辞書、英語で書かれた中国・日本の書籍リストが添付されていた。1867 年付けの序文においても、付録・補遺として主要な船舶路線情報を詳細に掲載していることを強調している。1860 年代、情報が乏しかった東アジアの航海・滞在に備えて、十分な情報と知識を求める人々が多かったことが伺える。記載されていた情報量と種類から、まずは中国や日本に到達するという第一目標を持った商人や居住者を強く意識していることが分かるのである。事実と大いに異なる情報でもそのまま掲載しているという事実は、その事実関係を確認できなかった様々な理由の存在があったとはいえ、当時の欧米圏の外国人の日本に対するある程度の意識を読み取ることができると思われる。そのように考えると、この資料は、欧米的な一方向的言説と表象に満ちた一冊であると捉えることも可能である。情報の正確さよりも、安全にアクセス・滞在できるか否かを重要視した、①「出発地に必ず戻ってくる」ことを意識したものであると言えるし、徹底的なまでの②「見る - 見られる一方向性の視点」、③訪れる「自」と訪れられる「他」の顕在化を感じる資料である。

次に、資料④の『日光案内』は、本章で扱う旅行ガイドブックとして使用するの難しいことが判明した。この資料は、1881 年と 1884 年に出版された HTJ 初版・第二版の主編者であったアーネスト・サトウが 1875 年に執筆している。サトウは外交官という職業を生かして、幕末・明治初期に外国人の立ち入りが禁止されていた地域にも積極的に足を運んで多くの地域に関する情報を外国人社会に提供した。サトウは、日本各地の地理・文化・風習や歴史などを数多く論文や記事、書籍として残し、1872 年の日本アジア協会の設

また、序文の末尾に HONGKONG とあるため、彼らは香港のイギリス領事館に勤めていた可能性もある。デニスを含め三人共他の資料に名前が登場しておらず推測の域を出ない。

立にも携わっている²⁰。

この『日光案内』には目次がなく、序文や各地域の章立てもない。しかも、ある程度日本の生活習慣や地理を理解していることを前提に文章が展開されているために丁寧な説明文も少なく、旅行記に近い印象を与える。サトウは、日本アジア協会だけではなく在日外国人のための英字新聞や雑誌にも、匿名で名所や土地案内、旅行記を寄稿していた。旅行記録によると、サトウは日本着任当時から日光周辺に何度も足を運んでいる[サトウ 1989-1991(1900=2003):407-413]。日光は彼のお気に入りの場所であったことが推察され、この『日光案内』もその反映だったようだ。この本は、すでに日本滞在が長く、日本に関する気候・地形・文化・生活にある程度親しんでいる外国人向けに執筆したものであると分かる。この資料もまた、欧米的な一方向的言説と表象に満ちた一冊である。この場合は、④「執筆者と読者が重なっている」点が合致するだろう。『日光案内』の読者は、それほど識者でなくとも日本滞在生活が長くサトウと類似した環境にある人物を想定している。

以上によって、先述のキーリングが『京都案内』、『横浜案内』、『東京案内』を積極的に評価している視点は、本研究においても有効であると言える。

4 対象読者の質の変化 居住者から旅行者へ

資料②の『京都・周辺地名所案内』(写真 5, 写真 6)は、1873(明治 6)年に出版された。執筆者の山本覚馬は、同志社大学創立者の新島襄の義兄・同志であり、幕末から明治にかけて京都の近代化に貢献した人物であった。

この小冊子は京都博覧会に訪れる外国人の便宜を計るために執筆された。彼ら(外国人)は、長年(京都の)名所を訪れることを熱望していた上、その土産話を本国に持ち帰りたいとてうずうずしていたに違いない。しかしその場所すべてが分かる訳ではないであらうから、ガイドブックを入手せざるを得ない。そこでこの本が役立つであらう。

[Yamamoto 1873: PREFACE]

出版される前年の 1872(明治 5)年、京都博覧会が開催される 80 日間に限り外国人の入

²⁰ 日本アジア協会は日本初の学会組織で、現在も活動が続いている。日本およびその他の国に関する情報の収集と問題の調査を行っている。会員の大部分は外交官・宣教師・教師といった知識人階級であった。サトウは HTJ の執筆に、学会員の発表した論文や調査結果を多く用いている。詳細は第二章参照。

京が許可された。それ以前は外交特権を有する外交官かお雇い外国人しか入れなかった京都に、初めて一般の外国人が入ることができたのである。この京都博覧会の際には外国人たちは特別に「入京免状」を無条件で発行してもらえたため、京都を訪れることができた。この措置は非常に歓迎されたらしく、その後も入京を希望する外国人が後を絶たず、翌1873(明治 6)年、第二回京都博覧会が開催された際にも同様の措置が取られた[丸山 1985:96-103]。山本によるガイドブックは、その好評を受けて、第二回京都博覧会で初めて京都を訪ねる外国人のために執筆されたものであることが分かる。そして京都は、日本に居住する外国人にとって憧れの土地だったことが伝わってくる²¹。「土産話を本国に持ち帰り」たがっていた「彼ら」は、「長年(京都の)名所を訪ねたくてうずうずしていた」[Yamamoto 1873: PREFACE]とあるように、外国人の入京が制限されていたことを知っていたと推測できる。つまり、日本の近況を把握していた人々であると考えていいだろう。このガイドブックはすでに日本に居住していた外国人のほかに、日本近隣の東アジアの外国人居留地に居住する外国人や商用で頻繁に日本を訪れている外国人たちのために書かれていたと言える。



写真 5 [Yamamoto 1873]

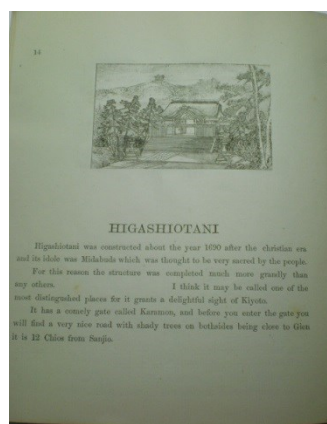


写真 6 [Yamamoto 1873:14]

(写真 5, 写真 6 共に慶應義塾図書館所蔵)

²¹ 丸山宏によると、幕末～明治初期における外国人向け英字新聞や雑誌の記事や彼らの手記から、入京免状が発行される以前の入京制限の厳しさと外国人たちの京都への熱烈な憧れが読み取れるという[丸山 1985:98-99]。京都という場所自体の魅力ももちろんあるだろうが、入京制限や入京免状の存在が外国人たちにとっての魅力をもっともかき立てる要因になっていたように思われるのである。これは、本章で多く登場する東京や横浜などを訪れる人々と、「京都」という土地自体に対する憧れを抱く人々が必ずしも一致しない可能性を多分に含んでいると言うこともできる。

「旅行者」という単語が初めて登場するのは、1874(明治 7)年に出版された資料③グリフィスの『横浜案内』が最初である。

横浜は魅力にあふれた土地であるが、旅行者(tourist)にアクセスしやすいガイドの形態はまだ存在していない。日本文学には、古物・伝説・伝承研究において貴重な資料が数多く存在する。それらは日本人の知識人や侍であれば誰でも見たり読んだりできるにもかかわらず、日本の神聖な儀式に興味を持っている外国人たちには、それを見ることが知ることも許されていない。[Griffis 1874a: PREFACE]

ここで、初めて「tourist」という単語が、明確に本文に登場した。これは、対象とする読者が居住者ではなく旅行者を明確に設定していることが確認できる点で非常に大きな変化であると言える。日本を訪れる旅行者は 1874(明治 7)年当時既に存在していたと分かる。そして、外国人というだけで自由に見せてもらうこともできなかった背景には、欧米諸国との条約の中に、外国人の行動範囲を著しく制限する文言が含まれていた事実も含まれている。当時の外国人たちの居住区域は通商条約によって定められており、彼らに許された自由な行動範囲の権利を内地旅行権と言う²²。そして、『横浜案内』の読者は、以下のよう

この本は筆者の微力な助けなど必要としない日本の研究者に向けて作られたのではなく、日本文化に専門的な情報を求めない短期旅行者(the hasty tourist)や外国人居住者(the old resident)の方々に役立つだろう。(中略)この本を使ったださる方々が、小旅行をより楽しんでいただけることを望みつつ、「サヨナラ」という言葉で締めくくらせていただきたい。[Griffis 1874a: PREFACE]

ここから、想定されている読者が短期旅行者と古くからの外国人居住者の二種類であることが分かる。『横浜案内』では、横浜の概要が外国人居住区の描写を中心に書かれている。特に『横浜案内』は、外国人居住地内の詳細な説明にページが割かれている。当時通じて

²² 当時の内地旅行権の推移については、第二章参照。尚、丸山(1985:89-112)の研究では、外国人たちの日本における生活の保障は、内地旅行権の推移と並行して向上していったことが伺える。

いた汽船会社のリスト、各国の領事館、教会、英語の通じるホテルや旅館、商店、クラブ、新聞社の住所や説明が詳細に書かれている[Griffis 1874a:10-11]。安全かつ清潔に生活が営める、当時日本を訪れた外国人たちの生活条件の最低限を揃えていることを強調している印象を与える。外国人たちにとって、日本はまだ安全確保の確認が必要であったほど情報が乏しかった事実が伺える。安全であるということ、外国人たちの生活条件が整っていること。この二点が、当時の外国人短期旅行者・居住者にとって、日本を訪れる際に第一に確認すべき重要な要素であったことが伺える。この資料も、欧米の一方向的言説と表象に満ちている。『横浜案内』に関して言えば、①の「必ず帰ってくる」意識が非常に濃厚である。滞在の安全のみならず、彼らの生活の保障はすなわち、欧米的生活の保障とも捉えることが可能になる。居住者たちはすぐに本国へ帰ることはなくとも、日本の現地の生活ではなく、あくまで欧米的生活を維持することを選択している。いわゆる旅行者と必ずしも一致しないが、生活意識の面では、あくまでも欧米的世界に回帰する意識が強いと考えることも可能である。また、『横浜案内』からは、他の②「見る - 見られる」視点、③訪れる「自」と訪れられる「他」の顕在化、④執筆者と読者の一致、すべて当てはまるとも言える。詳細な横浜外国人居住区の描写は、その外の各地名所案内の描写と対比しており、②、③が明確に見られる。特に、③においては、横浜外国人居住区が訪れる「自」の側に寄り添っている印象を受け、「ホーム」＝欧米的生活圏という暗黙のルールが存在を読み取ることもできるのである。

また、同年出版された資料⑤の『東京案内』序文には、「東京には、ぜひ一日以上の日数をかけて訪ねて欲しい。東京にはそれだけの見るべき価値のある場所がある」[Griffis 1874b: PREFACE]という一文がある。当時横浜に降り立った外国人たちは、宿泊・滞在は安全で言葉が通じ西洋の流儀が通じる横浜で済ませ、東京へは日帰りで立ち寄るという形態をとっていたことが分かる。『東京案内』は『横浜案内』と共に読まれることを意識していたのか、序文も短く、項目も『横浜案内』より簡潔にまとめられており、『横浜案内』で書かれているような英語が通じる場所や安全確保・衛生面への心配や配慮しなければならない場所はあまり詳細に書かれていない。東京は横浜から比較的近距離であり、東京滞在は日帰りもしくは2、3日という少ない日数で探索するという形態を想定していると言える。以上のことから、グリフィスの『横浜案内』・『東京案内』での短期旅行者は、商用で来日した外国人が仕事の合間に行う小旅行であったという推測もできる。

確かに、グリフィスの『横浜案内』・『東京案内』は、後の旅行ガイドブックに比べると

ヴォリュームや記述内容の詳しさや専門性などは比較にならないほど簡単なものである。しかし、街の概要から名所案内、スケルトン・ツアーというモデルコースを幾通りも紹介し、さらにはごく簡単な日本語の単語集も巻末につけている。特に、スケルトン・ツアーの登場は、効率よく名所巡りを行うことで時間や手間の短縮を図る短期旅行者の増加を読み取ることができる。一日から一週間で合理的に横浜ないし東京とその周辺地を満喫して次の予定や日程をこなそうとするその姿は、まるで各地を数日間の滞在で巡っていく世界周遊旅行者と重なるのである。しかし、「短期旅行者」が具体的にどのような旅行者であったのか、具体的な状況を読み取ることが難しい。それがより明らかになるのは、その後の1880(明治13)年出版のキーリングによる旅行ガイドブックであった。

1880(明治13)年、資料⑤『旅行者のための横浜・東京...案内』は、1881年のHTJ初版の出版から一年早く東京のサージェント・ファルサーリ商会から出版された。初版の序文の冒頭は、次のような疑問から始まっている。

この国で面白い場所はどこでしょうか？どうやってそれを見ることができるでしょう？そこへ行くのに一番いい行き方は？滞在中、一番お得な過ごし方は？これらの他にもたくさんの質問が、日本へ来た外国人から寄せられる。(中略)このような質問に答え旅行者に便利なヒントを提供するのが、この小冊子を編集する目的である。

[Keeling 1880: PREFACE]

この文章から、日本を訪れる外国人旅行者たちの多くは、日本の地理や事情に詳しいキーリングに旅行のノウハウを尋ねていることが読み取れる。従来の旅行ガイドブックでは、その多くが日本に居住している外国人を主に扱っていた。キーリングにおいては、初めて旅行者だけを中心に読者層に想定していることが分かる。グリフィスの『横浜案内』『東京案内』で一部「短期旅行者」という単語は登場していたものの、それは副次的なものに過ぎなかった。外国から日本を訪れる旅行者は1880(明治13)年当時既に存在していた事実が、「この国」、「日本へ来た外国人」と明記されていることから分かるのである。

そして、キーリングが、グリフィスが望んだ「マレーやベデカー」とは一線を画す形で製作したことが分かる一文がある。

私は日本全体を詳細に記述したものを作ろうとしたわけではない。(中略)数日間とい

う限られた時間の中で名所めぐりを出来るように、簡潔かつガイドなしでも回れるような便利な形態にまとめた。[Keeling 1880: PREFACE]

キーリングの旅行ガイドブックで想定されていたのは、外国からの日本旅行者である。つまり、1880年の時点で、外国から数日間の滞在として日本を訪れる外国人旅行者がすでに一定数存在していたのである。ここから、世界一周旅行者が、この時期には日本に立ち寄り始めていたという推測が立つ。1880年に出版されたキーリング初版は、東海道を中心に東京から大阪・京都までの広範囲を扱っている。デニスのもとは異なり、開港地だけではなく宿場町や大都市も含まれている点は重要である。キーリングの旅行ガイドにおいて、初めて単独の都市ではなく複数・広域の地域を扱ったものが登場したのである。日本旅行者の動線が、点から線に変化したとも言うことができる。そして、その章立てからして、横浜で日本に上陸してから鉄道などで関東周辺・関西方面へ移動し、最終的に神戸で上海・香港方面へ船出するというスケジュールを想定していると考えられるのである。

それを裏付けるように、1872年、世界初の世界一周旅行がトーマス・クック社によって行われたという事実がある。翌1873年、一行は横浜に寄港し、数日間日本に滞在している。この後数十年間に渡り、世界一周旅行が欧米の上流階級の中で流行する。実は、日本は初期の段階から世界一周旅行のコースに組み込まれていたのである。当時トーマス・クック一行は、横浜着～江戸(東京)、大阪から瀬戸内海沿岸を経由して長崎発で中国大陆へ向かっている。横浜では英語表示も至る所にあり、鉄道でも英語が十分通じたという。そして、クックは瀬戸内海沿岸の美しさに絶賛し、日本発祥の人力車を母国へ持ち帰ったという逸話も残っている[ブレンドン 1995(1991):248-250]。

キーリングのシリーズは現在確認できるだけでも第四版まで出版されていたので、1890(明治23)年まで十年間支持されていた。そして、この後のマレーシリーズの出版時期と重なっているにも関わらず、形式、書式、文体、内容もその後出版されたマレーシリーズの影響がほとんど見られない。この点からも、キーリングのシリーズが目指した安価で持ち運びもよい上に簡潔かつ必要な情報を押さえた旅行ガイドブックが支持され続けたことが分かるのである。また、欧米の一方向的言説と表象は、キーリングの旅行ガイドブックで総合的な到達を見たとき捉えることはできないだろうか。それまでは単独の都市の中でしか扱われてこなかった視点が、東海道というルートによって東京～京都・大阪という複数の都市にまたがって適用されている。まず、①の「必ず帰ってくる」視点は、日本

旅行の出発地と到達地が異なるという今までにないルートが取られることによって、日本
は本国に帰るための通過点に過ぎないという意識が読み取れる。次に、②「見る - 見られ
る」、③「自」「他」の存在においても、もはや複数の都市でも同一の視点が適用される
という、「日本」イメージを単一に固定化しようとする意識の変化が読み取れる。④の執筆者
と読者の同一という点においては、キーリングの人物像が確認できていないために断言は
難しいものの、序文で旅行者たちのリクエストや質問に答える形で製作した旨明記されて
いることから、意識の上では④に合致していると考えることができる。

5 おわりに 旅行ガイドブック再考

以上、マレー社の全国の詳細な情報が網羅された形の旅行ガイドブックから、開国・明
治維新の間もない当時の日本が旅行先として認知されるまでに、いくつかの段階の存在が
読み取れた。最初は商用や宣教・教育のために短期滞在ないし居住する目的の外国人のた
めに、日本に到達するための船舶情報を充実させ、開港地や外国人の立ち入りを許された
都市を単独に扱った非常に範囲の狭いものが作成された。次に、その都市内の外国人にと
って安全かつ最低限の生活レベルを保障できるか否かの情報が明示されるものが作成され
た。インフラ整備の他にも、教会や社交場などの情報も充実しており、外国人旅行者向け
だけでなく、明らかにそこに居住する外国人向けに作られていた。最後には、日本に世界
一周旅行で外国人たちが訪れ始めると同時に、日本国内旅行ルートが確立し始めた姿が読
み取れた。

明治初期は外国人の日本国内旅行が基本的に認められていなかったために、大部分が居
住外国人の国内旅行や商用での来日の合間の小旅行を想定していた。このため、掲載され
た土地も開港地とその周辺、大都市に限られている場合が多かった。日本に関する情報が
物理的・法的に制限されていたために、日本はまだ「未知の国」の印象が強く、出版側だ
けでなく読者側も手探りの状態で日本を訪れていた。単独の都市を扱った旅行ガイドブッ
クがほとんどであったのも特徴である。広範囲の地域を扱い、詳細で専門的な「マレーや
ベデカーの持つ完璧な知識や技術」が求められており、その願いは数年後には果されるこ
とになる。しかし、1872年に世界一周旅行が始まった時点から日本がその寄港地として認
識されていたため、1880年には短期間の旅行者向けのガイドブックも登場した。旅行者の
動線が、次第に点から線へと変化していく過程が読み取れる。小さく薄いサイズと簡潔な
内容、横浜から上陸して陸路を西に、大阪・京都で完結する構成は、世界一周旅行の中の

日本旅行日程であると言ってよい。

確かに、本章冒頭の引用文で、グリフィスは「ベデカーやマレーが持っているような技術を持たない」という表現で技量不足を断っていた[Griffis 1874a: PREFACE]。1874年当時、グリフィスの『横浜案内』の読者が既にベデカーやマレーの読者であった可能性は十分に高い。これは、当時日本に居住していた外国人たちが知識人階級や上流階級が多かったという状況と、中川やヴォーガンが既に指摘しているように、マレーやベデカー社の旅行ガイドブックの読者は上流階級・知識人階級であった点と非常に親和性の高いものであると言える。そして、確かに、マレーやベデカーの遺した功績は、現在に至るまでの旅行ガイドブックの系譜の中で、信頼するに足る情報を掲載したという点で非常に大きなものであることは言うまでもない。そう言った意味でマレーやベデカーを現在につながる旅行ガイドブックの始祖と位置づけることは決して間違っていない。しかし、始祖としてしまうことによって、それ以前に出版されてきた旅行ガイドブックも資料価値が低いということには決してならない。「ベデカーやマレー」は、彼らにとって旅行先としてある程度の安心や訪れる価値を保障する情報源として認識されていたのである。

ここで改めて注意しなければならないのは、トーマス・クックの旅行業開始による、いわゆる「旅行の大衆化」は同じ流れの中にはないという点である。トーマス・クックが始めた、中流階級以下の人々でも安価に旅行が楽しめる団体旅行ツアーは、わずかに後のことである。トーマス・クックが最初に団体旅行ツアーを実施したのは1841年の禁酒運動大会の幹旋であったが、ツアーとして大成功を収めたのは1851年の世界初のロンドン万国博覧会の幹旋においてであった[ブレンドン 1995(1991)]。マレーやベデカーがそのガイドブックを出版し始めたのは、現在明確な年号が分かっているだけでも前者が1836年、後者が1835年からである。わずか数年の違いとも言えなくもないが、クックのツアーが始まる前には既に旅行ガイドブックが出版されていた事実を照らし合わせてみても、二者の流れは異なるものであったことは明白である。

上流階級などの富裕層の間で流行した世界周遊旅行や避暑・避寒旅行を、大衆化によって豊かな生活を送れるようになった中流階級以下の人々に対する顕示的消費の一つとしたボワイエや白幡洋三郎の指摘は、以上の旅行ガイドブックの系譜と非常に類似点が多いと言える[ボワイエ 2006(1999)][白幡 1996]。特に、白幡洋三郎はトーマス・クック社による旅行の大衆化と貴族・上流階級の旅行との違いについて、次のように指摘する。クック社によって多くの庶民も楽しめる団体旅行が盛んになったことで貴族・上流階級だけが特

権的に享受できる旅のフィールドは狭められていった結果、上流階級が手つかずのオリジナルな「旅」を求めて新たに開拓した一つが世界周遊であった。従って、この時期に世界周遊で日本を訪れる外国人は商人を除けば旅客の多くが貴族や上流階級だったという[白幡 1996:31]。

つまり、明治初期の旅行ガイドブックの読者層は、ほぼ同時期に旅行界に画期的な革命を起こしたクックのマス・ツーリズムの始まりと必ずしも一致しない。むしろ、そのような流れにある意味で逆らうような形で波が生まれ、初期の読者層が形成されていったと考えられる。主な読者層は教養や知識もあり、そして金銭的にも余裕のある富裕層であり、旅行ガイドブックになるということは彼らの世界、つまり欧米的文化圏に初めて知られ・認識され、評価されるということを意味していたのではないだろうか。

第二章 探検紀行から旅行ガイドブックへ

第二章では、明治中期の 1881 年から大正初期の 1913 年まで出版されたイギリスのジョン・マレー John Murray 社の *A Handbook for Travellers in Japan* (以下、HTJ) 全九版を検討し、そこで表象される日本像を明らかにする。外国人たちによる最初期の旅行記に代表される「探検紀行」が、日本学の充実と共に HTJ という「旅行ガイドブック」に集約される過程を HTJ の内容と成立背景を追うことによって、外国人からのまなざしを受けて最初に表象された初期の日本像のありようを検討する。

1 はじめに

1-1 HTJ の出版の歓迎

1881(明治14)年、サトウは A.G.S. ホーズという人物と共に HTJ 初版である *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan* を横浜のケリー社から出版した。このことは、当時在日外国人の間で浸透していたイラスト付き雑誌である *Japan Punch* 1881 年 3 月号にイラスト付きで報じられている。*Japan Punch* の 1881 年 3 月号には、次のように書かれている。

この非の打ちどころのない偉業は、才能に恵まれた著者たちによる正当な結果と言える。これは、膨大かつ過酷な踏破と絶え間ない調査、造詣の深いインタビューの記録である。(中略)*Punch* は彼らの偉業を祝福する。[*Japan Punch* 1881:32]

また、横浜を中心に外国人向けに発行されていた英字新聞である、*Japan Weekly Mail* 紙の 1881 年 4 月 2 日付けの記事には、次のように書かれている。

ヘボン博士の辞書で、緩やかであるが西洋人の日本研究のふもとに立った。そして、この『旅行案内』で、その頂に登ることが出来た。(中略)(いくつか誤った情報が掲載されている事実もあるが)この本は依然として日本の歴史、伝統、迷信や芸術の百科事典である。12 年後に今後我々がこの国に滞在しようとするときには、この本なしで訪れるのは富士山に裸足で登るよりも無謀だと考えるだろう。[*Japan Weekly Mail* 1881=2005-2006:361]

このような賛辞²³が当時から既にあったことは、従来の日本旅行ガイドブックの貧弱な内容、ヴォリュームであったことから考えても、当然の結果であると言える。第一章で言及した、日本研究者であったグリフィスが自らの旅行ガイドブックの中で「ベデカーやマレーのような出版物が出ることを望む」と記したように、HTJ の出版は、外国人社会にとって非常に大きな意味を持っていた。

1-2 先行研究

先行研究としては、以下のものが挙げられる。庄田元男は著書『異人たちの日本アルプス』において、HTJ 全九版を日本アルプスの描写を中心に歴史的に検討した。その業績は三十数年間・9 版という膨大な量の時間とヴォリュームの資料を通時的に扱ったというだけでなく、旅行ガイドブックの執筆者のみならず協力者の情報も掲載している[庄田 1990]。

田中まりは、HTJ 第九版(1914)を用いて、当時の京都案内がどのように描写されているのかを詳細に検討した。19 世紀以降の娯楽としての観光への嗜好を視覚的要素の影響によると分析し、「見るべきもの」の意識の変化を資料から読み取った。明治～大正初期の外国人旅行者の求める「見るべきもの」は、幕末期の外国人のそれとも、明治～大正期の日本人旅行者の求めるそれとも大いに異なるとし、その背景には政治的・文化的であり、江戸時代の徳川幕府を否定する明治独特の意識が隠れていると指摘した[田中 2002, 2004]。

そして、長期的な時間軸での考察を行っている興味深い研究として、ダニエル・ミルンの論文「英語による日本のガイドブックに見る言説の変遷」がある[ミルン 2013c]。ミルンは、論文「19 世紀末の観光ガイドブック『マレー』における日本の言説」において 19 世紀末に欧米でベストセラーになった英文旅行ガイドブック出版社ジョン・マレー社の日本版である HTJ の分析を行った[ミルン 2013a]。また、「英語の観光ガイドブックにおける日本の言説」においては、1970 年代以降欧米圏で圧倒的支持を得た旅行ガイドブックのロンリー・プラネット社の日本版の 1980 年代のものの分析を行った[ミルン 2013b]。「英

²³ 他にも、1910 年代末期の既に HTJ の出版が終了している時代に、次のような賛辞も見られる。ジャパン・ツーリスト・ビューローの発行していた外国人旅行客の情報を掲載した『ツーリスト』には、横浜駐在ベルギー総領事のシー、バスチン氏なる人物の次のようなコメントが掲載されている。

日本漫遊客にとりマレー氏案内記及貴ビューロー発行の案内書類程便利にして且完全なるものなしと存じ候[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1916『ツーリスト』「雑纂：外人の眼に映じたる印象の二三」：24]

語による日本のガイドブックに見る言説の変遷」では、それらの分析を用いながら、19 世紀末の旅行ガイドブックのベストセラーである HTJ と、20 世紀後半から現代のベストセラーであるロンリー・プラネットの記述内容を比較検討するという非常に興味深いものである。これは、マレー社のシリーズに見られた西洋と日本という対立構造で日本文化を把握していた状況が、現代に至っては多様化し、新たな形での「新しい - 古い」「東 - 西」という対立構造のオリエンタリズム的な構図が生まれてきたことを示している。また、分析の際に、「言説の多様性や流動性、そして日本国内および日本と英語圏諸国の間の歴史的、経済的、社会的変化とその影響を検討する必要性を明らかにした」[ミルン 2013c:75]。こうした、旅行ガイドブックを用いた観光の外側に生ずる政治的構図を明らかにする研究は非常に意義深いものである。本章では、こうした研究アプローチを用いて、HTJ を読み解いていくものとする。

2 初版の出版 探検紀行から旅行ガイドブックへ

さて、HTJ の成立を追うには、序章で述べたようなバードの「探検紀行」だけではなく、日本学の成立を歴史的に追う必要がある。なぜなら、バードは日本旅行の際の情報源に、日本学の功績を多く読んでいたことと同時に、HTJ の著者であるサトウとチェンバレンもまた、バードの旅行記を研究の際の情報源としているためである。日本学とは、外国人による日本に関する研究を学的に整理したものである。日本研究自体は江戸時代から行われてきたが、19 世紀後半の日本の開国を機に、外国人による日本研究は増加の一途をたどった²⁴。近代日本学の始まりは、多くが来日したお雇い外国人や宣教師、外交官によって開かれたのである。その象徴的な出来事として記憶されるべきは、1872 年の日本初の学会である日本アジア協会(An Asiatic Society of Japan)の発足である。日本アジア協会は、イギリス人による日本研究の流れを汲んでおり発足当初はイギリス人が多くを占めていたが、次第に日本在住の外国人全般へと会員は拡大していった。設立メンバーには、当時イギリス公使であったパークス、日本語のローマ字表記に貢献したアメリカの宣教医ヘボン、『ミカドの帝国』を著した宣教師ブラウンの他に、後に HTJ の執筆者となるアーネスト・サトウもその名を連ねている。

²⁴ 17 世紀には、長崎の出島のオランダ商館を中心に、鎖国中に交流のあったオランダ人を中心に細々と日本研究が行われていた。17 世紀半ばにはオランダ商館長のカロンの『日本王国誌』を、17 世紀末には医師のケンペルが『日本誌』を、19 世紀末には同じく医師のシーボルトが『日本』を著した[横浜開港資料館 2014・2015]。

アーネスト・メイスン・サトウ *Sir Earnest Mason Satow*(1843～1929)は、1862年にイギリス公使館付通訳生として来日したのち、イギリス外交官として活躍した。その傍らで、流暢な日本語と外交官という地位を駆使して日本研究にいそしみ、近代日本学の礎を築いた一人として現在も賞賛されている。その後、バンコク、モンテビデオ、モロッコに赴任し、1895年には駐日公使、1900年には駐清公使に就任した。1906年に引退し、イギリスへ帰国している。サトウは日本アジア協会発足当初から同会に所属し、1895年から1900年まで会長職を務めている。後世マレーのビブリオグラフィーを書いたグレトンは、「サトウの知的アプローチは、マレーの学術書からさえも傑出したものである」[Gretton 1992:xii]と評している。サトウの日本学における業績は多岐に渡る。『会話篇(*Kuaiwa Hen*)』、日本古活字本の研究、日本イエズス会刊行書誌(キリシタン版)、祝詞の翻訳、日本＝シャム関係史などを発表し、地理、言語、歴史、神道、植物など日本文化全般に関して多くの研究や論文を残した[楠家 1987:224]。

日本アジア協会は、日本に関する学的研究成果を発表する場として、在日外国人たちの間で支持を受けた。特に、外国人による日本研究の組織として、海外の同様の研究組織と積極的に交流を行い、欧米を中心とした外国人によるアジア研究のネットワークを形成していた²⁵。この、日本アジア協会と HTJ は、どのような接点が存在したのだろうか。

HTJ の出版された 1881 年は、ちょうど日本アジア協会設立十年目にあたる。HTJ の出版は、過去十年間の同協会の研究上の蓄積が結実したものであった。その根拠は、同書の序文に書かれている謝辞の人物にある。序文を以下に引用してみよう。

本書は広く知られている『マレーのハンドブック』シリーズにできるだけ準拠して作成された。／編集に際しては多くの友人たちから重要な助力が得られた。厚く感謝するものである。特に B. H. チェンバレン氏、W. G. アストン氏〔英国公使館勤務〕、T. R. H. マクラッティ氏〔同前〕、W. A. ウーレイ氏にはさまざまな分野で協力を仰いだ。W. ガウランド氏〔大阪造幣局御雇〕からは吉野と飛騨信濃地方の山岳の地質について価値ある見解が提供された。その上、後者の地域の主要な高山の詳細な情報が得られた。岩手山、岩木山、磐梯山とその他の北部日本の山岳については J. ミルン氏〔工部大学校〕から教示を受けた。『日本アジア協会』の紀要も参考になった。特に R. W. アトキンソン氏〔東京大学〕の論文『八ヶ岳、白山、立山』は本書の各

²⁵ この点に関しては 6 節で後述する。

所で役に立っている。そして、J. J. ライン博士の著書とバード嬢の『日本奥地紀行』からの引用文は本書の主要部の記述に貢献している。編集者が最近数年間に『ジャパン・メール』と『ジャパン・ヘラルド』に寄稿した諸論文を全面的に書き直すとともに、その他の草稿を加え本書に活用した。／本書の末尾には豊富な索引を添えた。主要都市である東京、京都、大坂、奈良、日光などに関係のある諸項目についてはそれぞれの都市名の見出しの下にまとめて掲げてある。／中部・北部日本の地図は、最近参謀本部から刊行された日本全図から調整した。またルート五とルート七に付けられている宮ノ下・富士概念図は地理局発行の新しい区分に準拠している。東京、京都、大阪の案内地図は、特に本書用として作成したものである。／(中略)／1881年2月1日 東京[庄田 1990:37-38, 1996:序文]

情報提供者は以下の通りである。チェンバレンとアストンが筆頭にあるが、両者はサトウとならぶイギリス人日本学の権威である。特にチェンバレンは、この後 HTJ の第三版以降の執筆を行うようになるのである。マクラティの専門分野は江戸の風俗であり、クインは日本の漆器の研究家である。ウーレイには長崎の歴史に関する論文があり、この地域の叙述には彼の助力があった。ミルンは地震学の権威として知られているが、1877年から翌年にかけて岩手山・月山・岩木山を踏破しており、この地方の情報は彼から得たものである。アトキンソンはサトウの日記に旅行の同伴者としてよく出てくる人物で、魔鏡の研究の他に日本酒や白粉の分析を行ったが、1879年に八ヶ岳・白山・立山に登り、これを『日本アジア協会紀要』に発表した。この記事が HTJ にも引かれたのである。ラインは『日本』や『日本の産業』を著したドイツ人の地理学者で、サトウとも親交があった。ガウランドは「日本アルプス」の命名者として広く知られているが、「吉野と、飛騨・信濃の山やまの地質について貴重な意見、さらに後者の山系中の主要な峰みねに関する詳細な情報」を同書に提供している[楠家 1986:174-175, 1987:224-225, 1997:326-327]。1882年から10年間の日本アジア協会紀要の地誌関係論文が前の十年間に比べて激減したのは、1881年の HTJ の出版が反映していると思われる[楠家 1987:225]。

最後のイザベラ・バードは序章で言及した通り、既に名高い女性旅行作家であった。彼女は日本アジア協会の会員ではなかったが、チェンバレン、サトウ、ディキンズらイギリス人日本研究家とも親交があった。HTJ は彼女の著作が刊行された翌 1881 年の上梓であ

り、序文からも記述形式について彼女の本をかなり参考にしたことが分かる²⁶[楠家 1987:224-225]。イザベラ・バードは日本滞在中、サトウと第三版の主著者であるチェンバレンの世話になっていた記録も残っているので、日本旅行を機に交流が深まったと考えていいだろう[Stoddart 1906=2011][金坂 2014:181-220, 242-248]。バードの『日本奥地紀行』が先にジョン・マレー社から出版されていた事実も、単なる偶然ではないように思われる。

また、著者の一人であるアルバート・ジョージ・シドニー・ホーズ Albert George Sidney Hawes(1843~1897)は、HTJ 初版出版当時イギリス人の海兵隊退役中尉²⁷であった。イギリス海軍学校を卒業し、イギリス軍艦セヴァーン号に乗務して東インド方面へ、次いでイギリス艦隊旗艦プリンセス・ロイアル号に移り、英仏米蘭の四国連合艦隊の兵庫遠征に参加した。1869年に海兵隊を退役し、以後佐賀藩、肥後藩、工部省、海軍省に砲術の御雇として1884年まで勤務した。1885年以降はアフリカのナイアサ湖、フランス領ソシエテ諸島、サンドウィッチ諸島でイギリス領事となり、1894年にはハワイ国ホノルル府駐在総領事に就き1897年にヒロ島訪問中に死去した。サトウとは来日前から知己があり、彼もまた日本アジア協会に発足当時から所属している[楠家 1987][庄田 1990, 1996]。

3 第二版 「安全な探検」

3-1 探検の内容

ここで、HTJ の大きな特徴の一つとして挙げられるのが、「安全な探検」である。先述のように、探検は、アクセスが容易でない土地に赴いて実地に調査する意味を含む。そして、西洋的な一方向的なまなざしを持った旅行者が、自らの文化圏や生活習慣を維持しつつ異文化の地へ赴き、そこで得た知識や経験を西洋的な知の枠組みに分類し、そこに落と

²⁶ 金坂によると、第二版のうち会津から新潟に出るルート 58 がバードの旅行記に負っている旨明記されている他、序論の温泉の項目はバードが執筆している。庄田訳の『明治日本旅行案内』(上)では同項の執筆をベルツと補っているが、バードの間違いである(これは執筆者のイニシャルが I.B.となっていた点を、庄田がベルツのイニシャル E.B.と勘違いしたためと考えられる)。同様に、第三版のルート 66 の噴火湾沿いの旧道についてもバードによるものである[金坂 2014:224]。

²⁷ ホーズの退役前の所属については、様々な訳が混合している。原文では Lieutenant A. G. S. Hawes, Royal Marines (Retired) と書かれているが、庄田は本文の中では「海軍退役大尉」[庄田 1990:369]、引用の中では「英国海兵隊中尉」[庄田 1990: 377]と使い分けられており、矛盾が見られる。19 世紀の海軍の Lieutenant は海兵隊の Captain に相当し、海兵隊の Lieutenant はその下に位置する。これを日本語に訳すと海軍であれば大尉、海兵隊では中尉に相当するため、本研究では「イギリス海兵隊退役中尉」の訳を採用する。

し込むことで西洋人に理解可能なものにするという知的営みのことを指していた。そこで、日本旅行を探検旅行の一つと仮定することで、HTJを読み解いていくとどのようなことが分かるだろうか。

第二版は、1884(明治18)年、とうとう念願のジョン・マレー社から出版された²⁸。第二版で注目すべき点は、序論の充実である。初版では「地理」「気候」「日本語」「遊歩規定」「内国旅券」「狩猟免許」「通貨」「度量衡」「参考書と地図」「手荷物」「服装」「食糧」「旅宿」「道路・乗物」「その他」の15項目がわずか13ページに記載されているのみであった[庄田 1996:439]。そこに、「日本の入浴と温泉」「旅行心得」「主要ルート一覧」「電信局全覧」「地理」「天候と気象」「宗教—神道と仏教」「動物学」「植物学」「絵画」「彫刻」が加わった²⁹。第二版の製作は引き続きサトウとホーズであったが、編集協力者に若干の変動が見られる。以下は第二版の序論の抜粋である。

本書の利用価値をより一層たかめるには序論の項目の中に地理と寄稿、絵画・彫刻・鉱泉、博物学、日本の宗教の各項を加える〔地理と気候については初版でも若干触れている〕のが望ましいと判断された。はじめの四項目についてはそれぞれボン大学の J. J. ライン教授、ウィリアム・アンダーソン氏、東京医学校のエルヴィン・ベルツ博士、ロンドン大学の F. V. ディキンズ氏の助力を得た。仏教については南条文雄(ぶんゆう)氏の貴重な支援が得られた。[サトウ, ホーズ 1996(1884):序文]

新しく加わった人物は以下の通りである。海軍の御雇医師であったアンダーソンは美術史

²⁸ 第二版は1000部コピーが製作された[Gretton 1992:xii]。

²⁹ 各版の総ページ数や各項目のページ数は以下の通りである。

版次	刊行年	総頁数	「序論」 頁数	「序論」 項目数	「案内」 頁数
初版	1881	510	21	15	489
第二版	1884	705	119	24	586
第三版	1891	459	50	27	409
第四版	1894	528	72	29	456
第五版	1899	577	92	28	485
第六版	1901	579	92	28	487
第七版	1903	586	92	28	494
第八版	1907	570	91	28	479
第九版	1913	555	95	28	460

[庄田 1990:80]を加筆

に関する論文を HTJ に寄せている。ベルツはドイツ人の日本研究の第一人者である。南条文雄は序論においてサトウの執筆した「仏教」の項目の補助を行った。フランク스는大英博物館に勤め、日本美術に関する資料を提供した。ブリンクリーは歴史に造詣があり、ボナーは『日本アジア協会紀要』に日本陶器の論文を投稿している[楠家 1987:225-226]。庄田元男によると、サトウは、第二版において序論を次のような観点で改善を図った。

1. 地理と気候の項目についての充実をはかる
2. 絵画・彫刻を中心とした日本美術史の概要と現状を記述し、これによって日本の美術・工芸の特色を浮き彫りにする
3. 欧米人にとって動物・植物の未知のフィールドであって欧米にはない新種の発見が期待できる日本の博物学の分野について説明を加える
4. 温泉国日本を十分に紹介するために鉱泉の項を設ける
5. 仏教徒神道が混在する日本の宗教について確認する[庄田 1996:440]

これらの点を、サトウ自らの研究を含め、日本アジア協会を中心とした在日外国人の日本研究から HTJ に集結させたのである。

ここで、HTJ における情報提供者が、日本アジア協会を中心とした日本研究を行っている外国人を中心に構成されている点について、次のように考察できる。HTJ の謝辞の中で登場する唯一の日本人の名前は、参謀本部、地理局のほかは、第二版の序文のなかの南条文雄という欧米に日本の仏教を紹介した仏教学者しか見当たらない。この点について、序文のうち以下の文章は示唆に富んでいると言える。

日本の美術の記述の中で漆器と陶磁器に関する事柄は紹介するまでもないと判断した。前者についてはクイン氏〔日本美術の研究家〕がブルー・ブック〔British Parliamentary Papers. 英国議会資料〕様式で刊行された報告書の中でも既に扱っているし、後者についてはフランクス氏〔大英博物館キーパー〕が大英博物館所蔵の同氏の収集品と南ケンジントン美術館収蔵品に関わるそれぞれの目録で触れているからである。同様に砲術士官ブリンクリー大尉も *Chrysanthemum*〔1881年にヘンリー・フォールズが創刊した日本紹介の月刊誌〕誌上で取り上げている。[サトウ、ホーズ 1996(1884):序文]

ここで見られるのは、既に公の形式で公表されたものについては **HTJ** に掲載しないという姿勢である。ここから、**HTJ** は、何らかの公の形式扱いにできるある程度の知的権威イメージが外国人社会の中で共有されていたのではないかと考えられるのである。つまり、**HTJ** は「旅行ガイドブック」でありながら、単なる旅行のための情報源という手段を逸脱した何らかの公的かつ知的な権威を帯びていた情報媒体であったのではないだろうか。

さて、日本を「安全に探検」するためには、どのような準備を提案していたのだろうか。そこには、今日の日本旅行とは想像もつかないほどの重装備が提案されていた。

9 服装

歩行者の服装にはフランネル製品が推奨できる。夏用には次のものがあれば十分である。

軽いフランネルのコート一着。ホックで留め、ボタン付きポケットのあるもの。コートを脱いで人に運んでもらっても中身が脱落する心配がない。／軽いフランネルのズボン一本。／軽いフランネルのニッカーボッカー一本。／(中略)／以上に加えて、次のものが旅行者にとっての必需品である。／ノートと筆記用具、鉛筆、葉巻、携帯用酒瓶(フラスコ)、小さな救急箱または常備薬、ナイフ、靴べら、予備の靴紐(カバの皮が一番良い)、良質なブーツ用グリス、コンパス、アネロイド計、旅行用温度計、日本語の辞書などの本と地図、針、糸とかがり布、ペルシャ製の昆虫メガネ、石炭酸。【サトウ、ホーズ 1996(1984):26-28]

非常に細かい服装、装備の指定がされている事実に驚かされる。この後、**J・J・ライン** が日本の気候について詳細な記述を行っている。それだけ日本の起稿や風土に関する情報が少なかった事実と同時に、入念な準備を怠らないよう指示してくるさまはまるで未知の土地へ探検に行くかのようなものである。

富士登山については、次のような記述がある。

富士山への登山は他の遥かに低い山に登るよりもずっと簡単だ。というのも登攀を要する岩塊や若木の下生え、匍匐して進まなければならない籐の茂みなどの障害物がなからである。しかも最初の三分の一まで、すなわち 4000 フィート以上までは馬の

背を頼ることが出来るしそれから先の登山は絶え間ない忍耐が出来るかどうかの問題であるに過ぎない。[サトウ, ホーズ 1996(1884):195-196]

富士登山が「他の遥かに低い山に登るよりもずっと簡単だ」と断言するくだりは、筆者が富士山以上の険しい山を数多く登ってきているという事実の裏返しであり、同時に読者でもある旅行者も同様の経験があるということである。日本旅行の中で富士登山を含むのは、現在の外国人旅行の中で決して珍しくはないが、それが明治中期の時点で既にそうであったと言うのは特筆に値するべき事柄だろう。

一方、旅行の際に基本的に自らの生活スタイルを崩さない姿勢も特徴的だ。

10 食糧など

左記(下記)の食糧は最も有用で推薦されるべきものである。経過する各地点へ荷物を別送するときも重くて不便なものは避けるべきだ。

リービツヒの牛肉エキス	チーズ
ドイツのピー・スープ・ソーセージ	塩とマスタード
シカゴ・コーンビーフ	ウスターソース
缶ミルク	ベーコン
ビスケット	紅茶と砂糖
ジャム	

日本食に不自由を感じない人もその地方の食糧のみに頼らず、右記のものを少量持参するのが望ましい。食物の種類も少なく往々にして供給量が乏しくなる山間地などで役に立つだろう。もっとも、主要な街道の旅宿ではとてもおいしい産地の食物が手に入る。／ロウソクやロウソク立て、ナイフ、フォーク、スプーン、コップは便利な必需品であり、コルク栓抜きと缶切りは忘れてはならない。[サトウ, ホーズ 1996(1884):28-31]]

これは第三版以降の記述であるが、大部分の外国人に好評だった日本の食べ物は以下の通りである。

カステラ スポンジケーキ。

味噌汁 大豆のスープ。

魚の塩焼き 焼いた魚。

魚の天ぷら 魚のフリッター。

酒 米から作った酒。たいていは温めて飲む。

煎餅 色々な種類の薄いビスケット。

卵焼き オムレツの一種。

鶏鍋 鶏肉を細切れにして煮込んだもの。

牛鍋 牛肉を(鶏鍋と)同じようにしたもの。

鰻飯(うなぎめし) 鰻を醤油漬けたものと米飯を段重ねにしたもの。

羊羹 甘い大豆のペースト。[Chamberlain, Mason 1891:10, 1899:9, 1913:9]

道中の食事に対する用心ぶりがうかがえる内容である。日本食を楽しむという余裕は一切感じられない。いかに自らの文化圏に近い状態で食事ができるかに重点を置いているかが分かる。「日本旅行＝探検」という仮定が適用されるならば、探検旅行での食事は娯楽ではなく重要な体力温存と補給の機会である。上記の引用は、その過程を裏付けるものとして十分に説得力のあるものであると言っていいだろう。

このような、「探検」としての日本旅行は、現地の生活や社会と一線を画す「外国人」としての立場に立脚したものであった。それを詳細に指南した **HTJ** は、日本という外国人にとって未知の国を「安全に探検できる」ことを証明した、画期的な本であったと言うことが出来る。

その中でも、具体的な描写を行っている格好の例として、東京の増上寺について次のような説明がある。

芝

増上寺。少し先に進むと右に広い道路をまたぐのは大門で、それをくぐると現在の芝公園に至るが、当所は一八七七年まではこの年の浄土宗の本拠である増上寺の敷地であった。ここには今でも御霊屋(御霊屋)という、徳川将軍のうち幾人かの霊廟が残されている。徳川幕府を創設した家康が増上寺を特別の庇護のもとに置き彼自身の先祖と子孫のための菩提寺としたのである。寺の創建は一三九三年であるが、一五九六年に現在の場所に移った。本堂は一八七四年の元旦に火事で焼落ち現在再建中であるが、

前より規模が小さい。三門に建てられた状態のまま残されている。次に増上寺・徳川家霊廟の図と徳川将軍のリストを掲げる。※印の付いている将軍は東京に、！印の付いているそれは東京より百マイル北の日光に、その他の将軍はここ芝に祀られている。

代	将軍名	謚	没年
一	！家康	東照宮	1616
二	秀忠	台徳院	1631
三	！家光	大猷院	1651
四	※家綱	厳有院	1670
五	※綱吉	常憲院	1709
六	家宣	文昭院	1713(ママ)
七	家継	有章院	1751(ママ)
八	※吉宗	有徳院	1751
九	家重	惇信院	1761
十	※家治	沈明院	1785(ママ)
十一	※家斉	文恭院	1841
十二	家慶	慎徳院	1853
十三	家定(ママ)	温恭院	1858
十四	家茂	昭徳院	1866
十五	慶喜(通称けいき) 駿河静岡で隠居中		

[サトウ, ホーズ 1996(1984):32-33]

この文章だけでも、相当の日本の知識が必要とされることは間違いないだろう。本書は特に江戸時代の事物に造詣が深く、その時代に関連した事項についてはページを多く割いている傾向がある。先述の増上寺も東京の中でも扱いが大きい。見出しの部分では明治以降の近代建築や施設が多く挙げられているが、実際の説明ではそれらに関する記述は非常に少ないのが現状である³⁰。東京の概要についての説明を行っている次の文章は、地理や歴史にも造詣が深いことがよく分かる。

³⁰ 東京は行政上の15の区に分けられ説明されているが、浅草区に「吉原が有名である」との一文があるのは非常に興味深い事実である。吉原については、この後の版では一切の説明はない。

東京のもっとも著名な特徴は前述したように宮城すなわち都市要塞の存在である。城を囲む濠は螺旋状につらなっている。雉子橋門内から出発し、終始濠を右にして一周しこの門まで来たならば、ここを通らずに進むと最終的にはその北側の外濠に到達することとなる。濠の水はここから両国橋直上流の隅田川に注ぐ。主要な城郭は本丸、そのすぐ東側の下にある二の丸、そして大手門の中にある三の丸に分けられる。城のやや上手には西丸がある。半蔵御門と竹橋間の内部にある道路の一角に現在近衛兵營があるところは以前は北の丸と呼ばれていた。「曲輪内(くるわうち)」または「内曲輪(うちくるわ)」というのは通常、城郭と常盤橋、半蔵御門、神田橋との内部にある付属建物を表す名称で、またここと外濠に挟まれた区域は外曲輪(そとぐるわ)と呼ばれている。[サトウ, ホーズ 1996(1984):24]

こうした、非常に丁寧に一から説明しようとする姿勢が、HTJ の中では頻繁に見られる。これは、西洋的文化と全く異なる日本文化を西洋的知の枠組みになんとか落とし込もうとする自文化中心主義とも言える姿勢と言い換えても良いだろう。こうした自文化中心主義は探検の潜在的な要素であり、探検を行う主体が危険を伴うために隠されているものだが、HTJ ではそれを「安全に」行える保障づけがされているため、かえって顕在化しているのである。

「安全な探検」を可能にした HTJ であるが、その具体的な記載内容はどのようなものだったのか。そこには、先述のように網羅的かつ、非常に具体的で詳細な内容が書かれていた。先述で富士登山について言及したが、富士山についての概要については次のような記述も行われている。

富士山の高度については様々な意見がある。クニッピン氏は 1873 年に吉田口と須走口との合流部を経て登山し日本人が「頂上」と称している場所に到着し、二週間以上にも及ぶ日時を書けて 73 回にわたる観測をした平均値で 3689 メートル(12103 フィート)という高度を出した。これに火口の西側に迫り出している全体で最も高い剣が峰の高さを加えるために 40 メートル(131 フィート)という数字を算出し、合計して 3729 メートル(12234 フィート)とした。R・スチュワート氏は日本の調査で 12365 フィートとし、ライン博士は 3745 メートル(12287 フィート)としている。しかし後者

は駒ヶ岳という火口南東の縁にある峰に関する計算で、剣が峰より少なくとも 150 フィートは低く、もしこの数値が正しければ後者の高度は 12437 フィートになるはずである。[サトウ, ホーズ 1996(1984):192]

富士山の高度について、各外国人の測定結果をもとに、独自の考察と推察を行っているのである。ここからも、先述の「公の形式」での発表を意識していることが伺えるが、正確な情報を把握しようとする執念のようなものも感じられる。

また、この引用の前に、富士山についての概要には、次のような説明もある。

富士は時に神として語られることがある。次に掲げるのはチェンバレン氏が英訳した「万葉集」の中の歌である。

なまよみの甲斐の国／うち寄する駿河の国と／こちごちの国のみ中ゆ出で立つる
不尽の高嶺は／(中略)／日の本の大和の国の鎮め(しずめ)とも座す(います)神かも／宝
とも生れる(なれる)山かも／駿河なる不尽の高嶺は／みれど飽かぬかも (Classic
Poetry of the Japanese 百頁による)[サトウ, ホーズ 1996(1984):191]

日本の古典詩に範を取ってその由来を説明している。しかもその詩もチェンバレンによって英訳済みのものである。副題の通り、伝承や由来についても精通している事実が伺える。そして実際の名所を説明している箇所は、同様に詳細かつ網羅的であるが、それと同時にもっとも大きな特徴がある。それは、文章が非常に指示的かつ体験的ということである。以下は、先程の増上寺の説明についての一部である。

日本工芸の粋ともいえる霊廟 Tombs は次のような順に拝観するのが良いと思われる。まずは増上寺の境内から三門を出て左へ向かい並木に沿ってしばらく歩いてから左へ折れ、小さな橋を渡ると第七代将軍、第九代将軍の霊廟に至る。ここの正門は使われておらず、したがって入場許可は個人的に得なければならない。担当の僧侶に心づけとして二十五銭を与えると案内してくれる。仏教関連の教典の納められた書架がはめ込んである廊下を通して朱と黒の漆塗りの回廊を過ぎると、墓所に隣接した霊廟拝殿に入る。燃えるような金の配色と凝った唐草模様のきらびやかな美しさに(特に晴れた日に訪れると)目も眩むばかりだ。[サトウ, ホーズ 1996(1984):34-35]

見学ルートを具体的に指示しているだけとは思えない、非常に体験的な記述になっている。読んでいるこちらも一緒に歩いて見学しているような臨場感あふれる描写は、まるで詳細な旅行記を読んでいるようである。

富士登山についても同様に、次のように書かれている。

須走口からの登山

一般的で楽な日帰り旅行である。(中略)須走(中略)で登山用の案内人を調達できる。この街はシーズン中は概して登山客で賑わうので、ここで一泊しようとするなら宿を確保するためはやめに到着した方がよい。本通りの上端部に大きな神社があり富士浅間という女神を祀っている。一里半の馬返にある休憩小屋まで馬が利用できる。この部分は森林の中を通る広い道となっており、平均四、五度の傾斜がある。この先から山道は狭くなり、ところどころ木の根に邪魔されて馬も通れなくなる。次におよそ一里の段階ではまだ傾斜は緩やかで、古御岳という名で知られる小さな神社へ至る。神社の少し手前に進むまで六軒の休憩小屋があり、ほぼ全箇所でも食をとることができる。古御岳で登山道は神社の右手の拝壇を通過する。左は下山道へ入る。この地点と二合目の中間あたりで山道は森林から抜けて山麓の噴石がころがる裸地に出る。一合目の小屋はもはや存在せず、森林の上限付近に野苺がふんだんに見られる。[サトウ、ホーズ 1996(1884):199]

動くルートについて、非常に具体的な指示が出ているのが特徴的だ。同時に、その情景も具体的である。文章はこの調子で他に須山口、村山口、吉田口、人穴口からのルートを紹介し、途中合流して御中道、山頂へと続く。山頂での日の出と眺望の様子は、筆者の感動が直接伝わってくるかのような臨場感にあふれている。

登拝者は夜明け前に火口の西側の峰であり事実上の山頂である剣が峰に向かい日の出を待つ。太陽が地平線下にまであがってくるとあたりの雲全体が輝く紅い炎のように非常に鮮やかな色相を帯び、ご来光を待ち焦がれる気持ちが彼らを高揚させるようだ。しかし輝く太陽が出現するやいなや彼らは取りつかれたように数珠を擦り合わせこの偉大なる神に祈りの言葉を何やら唱えているのである。[サトウ、ホーズ

1996(1884):207-208]

ここからは周囲の地方の非常に広大な風景が眺められる。南には駿河湾の深い切れ込みがのび更にそびえる伊豆半島の崖に突き当たる。そして西側では安倍川溪谷と富士川溪谷とを分ける長い尾根が尽きるところに三保橋があり湾を閉じている。[サトウ, ホーズ 1996(1884):208]

富士山頂から四方くまなく明瞭な風景が得られるといった幸運に恵まれる登山者は稀であるが、眺望に最も適している時間帯は日の出の直前か日の出時であることは間違いない。[サトウ, ホーズ 1996(1884):208]

この文章のあとは、引用元の判明しない富士山頂の眺望を讃える文章が続いている。この文章を読んで富士登山をしたくなる読者が数多くいたのではないかと思えるほどの力説振りである。

こうした、外国人による富士登山を可能にするには、外国人内地旅行権の問題をクリアしなければならなかった。明治中期まで、外国人は日本国内を自由に移動することができなかったのである。富士山まで到達するには、特別な申請をしなければ通常の旅行者はたどり着くことができなかった。そうした事情を鑑みると、富士登山が当時非常に貴重な経験であったために、あのような感動的な文章になったことが分かる。それでは、外国人内地旅行権とは一体どのようなものだったのだろうか。

3-2 外国人内地旅行権

外国人が日本国内を旅行などで移動する場合は内地旅行と呼ばれ、外国人が遊歩区域外で内地旅行をできる権利を内地旅行権と呼ぶ。それまで鎖国政策をとり外国人の入国を著しく制限していた江戸幕府は、1853(嘉永 6)年にペリー提督率いるアメリカ合衆国艦隊の来航と折衝によって、5年後の1858(安政 5)年には諸外国と通商条約を結び、神奈川(横浜)・長崎・箱館を開港することになった³¹。通商条約は、外国人の領事裁判権等の特権(治外法権)を認めた不平等条約として有名であるが、その代償として外国人の行動範囲を制限

³¹ 1854(安政元)年日米和親条約締結、1859(安政 6)年日米修好通商条約締結(日蘭・日露・日英・日仏条約も締結)。

したものであった。外国人は遊歩区域と呼ばれる範囲内においてのみ自由な移動が許され、その外に出ることは基本的に許されなかった。

先述のイザベラ・バードの『日本奥地紀行』における「内地」の存在は、ここからも重要である。金坂によると、バードが『日本奥地紀行』で記述した *interior* という単語は、単独では邦題のように「奥地」と読むことができるが、これが内地旅行権を加味して考えたとき、外国人遊歩区域外の「内地」という形に理解できる。バードの日本旅行を公私ともに支えた日本公使パークスは、内地旅行権の側面からもバードが自由に日本国内を旅行できるように格別の配慮をはかった事実が分かっている[金坂 2014:73, 182-198]。

丸山宏は、外国人の内地旅行権の推移を、「近代ツーリズムの黎明」という論文において説明している[丸山 1985:89-112]。また、横浜開港資料館も、外国人の日本国内の旅行という側面から説明している[横浜開港資料館 1996:21-26]。丸山によると、居留外国人の内地旅行に関する規則が初めて明記されたのは 1858 年 7 月 29 日(安政 5 年 6 月 19 日)の日米修好条約第七条の遊歩規定³²においてであった。開港した 5 都市において、おおむね各方面へ十里程度の距離が遊歩区域³³として定められたが、「公使、領事にかぎり遊歩規程外の内地旅行権が与えられた」[丸山 1990:90]。この役人のみへの優待が、当時イギリス公使の書記官として日本に赴任していたアーネスト・サトウが後の時代に HTJ 初版を執筆する際に多くの情報を得ることができた要因でもある[丸山 1985:90-91]。遊歩区域として大阪と東京も立ち入りを許されたが、それは貿易活動の場合に限るものであった³⁴[横浜開港資料館 1996: 21]。

ただ、外国人の遊歩区域外の外出・旅行の要望は開港当初からあり、その時々温泉保養などを許可していた。1869(明治 2)年、外国官(後の外務省)は病氣療養に限り遊歩区域外の通行をとくに許可する旨の指令を出した。これは遊歩区域外への旅行を公認した最初の

³² 1858(安政五)年日米修好条約第七条の遊歩規程において、「神奈川、六郷川を限として其他は各方へ凡十里、箱館、各方へ凡十里、兵庫、京都を距ること十里の他へは亜米利加人立入ざる筈に付其方角を除き各方へ十里且兵庫に来る船々の乗組員は猪名川より海湾迄の川筋を越ゆるべからず、都て里数は各港の奉行所又は御用所より陸路の程度なり、長崎、其周囲にある御料所を限りとす、新潟は地定の上境界を定むべし」とある[『条約改正関係大日本外交文書』第一卷(昭和 16 年)所収、附録旧条約集三、以上丸山(1985: 90)より重引]。

³³ 開港場から十里四方の範囲内に定められていた遊歩区域は、横浜の場合、東は六郷川(現多摩川)まで、西は酒匂川、南は三浦半島の半ば、北は八王子、日野あたりまでであった。鎌倉・逗子は区域内だが小田原・箱根・熱海は区域外であった[横浜開港資料館 1996: 21]。

³⁴ また、大阪、東京は開市場と呼ばれ、遊歩地(居留地)は大阪の川口に明治元年、東京の築地は「旧幕時代から土地造成がなされて」いたが、「明治三年に最初の土地の競売が行われてい」たという[丸山 1985: 90-91]。

例であるとされているが、それ以前、既に横浜から箱根・熱海の温泉へ行くことが認められていたという³⁵。1872年には、政府の御雇外国人に許可されていた内地旅行権を一般の雇入外国人にも許可し、「雇入及通行免状」を発給することになった。

その後、駐日外交団との折衝もあり、1874～75(明治7～8)年に病氣療養・学術研究に限り内地旅行を許可する制度を整備して、「旅行免状(passport)」を発給することになった。大まかな経緯は以下の通りである。

1874(明治7)年5月には、「外国人内地旅行允準条例」が定められた。これは、遊歩区域外への内地旅行を許可する基準を定めたものであり、次の条件に当てはまる者³⁶に許可された。

- (1) 遭難者やその救助者
- (2) 日本の物産・資源などの学術的実地調査、測量・観測など
- (3) 居留外国人の病氣療養
- (4) 政府または民間の雇入外国人が所要の場所へ赴くとき
- (5) 外国の貴顕で公使の紹介状のある者 [横浜開港資料館 1996:22]

また、(4)の病氣療養に関しては、30日または50日を限度とし、横浜の場合には箱根・熱海・富士・日光・伊香保など、神戸の場合は有馬・琵琶湖・比叡山南部の諸方などが挙げられている。この後、雇入外国人については、雇入免状と切り離して学術・療養のための「通行免状」を発給するという通達が出た[横浜開港資料館 1996:22]。

1875年6月、「外国人旅行免状」を外務省から発行することが決定し、同時にこれまで開港場所在の各県が交付していた「温泉旅行免状」を改めて、神奈川・兵庫県では領事から公使を経て外務省へ出願することとした。一般外国人の旅行許可書を「外国人旅行免状」に一本化されたのである。これによって、一般の外国人の内地旅行においては旅行免状が必携になったのである[丸山 1985] [横浜開港資料館 1996: 23]。後のHTJにも、外国人内地旅行権が反映されている箇所がある。

2 遊歩規定

³⁵ 『法規分類大全 外交門4』 [横浜開港資料館 1996:22 より重引]

³⁶ 詳細は丸山(1985)参照。

外国人は、開港場・開市域から次のような制限内で自由に旅行することができる。

横浜 多摩川まで。県庁から陸路を経て十里すなわち 24.29 マイルまで(中略)。しかし、この制限は実際はゆるやかで、制限をわずかに超える小田原の町までは旅行できる。

東京 新利根川(江戸川)の河口から金町の検問所まで。金町から水戸街道沿いの千住まで。千住から隅田川(中略)に沿って古谷(ふるや)の上郷(かみごう)まで。以下御室(おむろ)、高倉、小矢田、荻原、宮寺、石畑(いしばたけ)、三ツ木、田中を経て玉川右岸の日野まで。しかしながら多摩川の横浜側右岸までとされている十里の制限域は、最近政府地理局から発行された武蔵・相模の地図上で測定すると、この川岸よりさらに二里近く拡張されている。

神戸 京都方面を除く十里四方。京都の十里四方へは立ち入ることが出来ない。

大阪 南方は大和川の河口から船橋村まで。それより教興寺村を通して佐太(さだ)まで。堺の町は制限外であるが、自由に訪れることができる。

新潟 南西方面へは、弥彦川から猿ヶ馬場まで。南方面へは、熊森(くまのもり)から五十嵐川の付近で信濃川を渡って下田まで。北東方面へは、七谷(しちや)、村松、五泉(いついずみ)を経て、阿賀野川まで。但し佐渡島へは自由に行くことが出来る。

長崎 ルート 63 を参照。

函館 陸路で十里四方。[サトウ, ホーズ 1996(1984):18-19]

3 内国旅券(パスポート)

前述の遊歩規定を超えて日本内地へ旅行するためには、日本の政府機関が発行する内国旅券を取得しなければならない。外国からの旅行者は旅行の出発予定地で内国旅券をズ了することが可能となるよう十分な時間をみこんで東京の公使館に直接申請書を提出するのがよからう。そして内国旅券は当該地の英国領事館気付で送付されるよう申し出て置くのが良い。(中略)旅行の目的としては「健康保全」とか、「科学的調査」と記入しなければならない。[サトウ, ホーズ 1996(1984):20-21]

この項目は、1898(明治 31)年の条約改正による外国人居留地の撤廃後、1901 年の第六版から削除されているが、それ以前のこうした物理的な移動制限は、旅行に際しての障害と

なりうる。こうした障害は、旅行者にとって大きな壁に感じられるだろう。しかし、この障害は、日本旅行を多少困難なものに見せる探検的印象を強める要素となる。また、電信局や郵便の情報、各大都市の冒頭には外国人向きの施設が記載されている事実からも、外国人たちにとって安心できる要素についての記載を怠らない姿勢が垣間見られる。こうした様子は「安全な探検」と言い換えることができるだろう。

4 第三版、第四版、第五版 サトウからチェンバレンへの交代劇

ところで、第二版の出版の時点でサトウはバンコク駐在になっており既に日本を離れていた。ホーズも 1885(明治 18)年には日本を離れている。そのため、1891(明治 24)年の第三版から主要編集者がバジル・ホール・チェンバレンへと交替した。この著者の交代劇により第二版と第三版の出版の間に七年間の空白ができてしまったのである。七年間の空白の時代には、後述する類書の横行や 1889(明治 22)年の東海道本線全線開通を始めとする鉄道網の整備があった。特に後者は、第三版の地誌の部分の記述に大きな変化をもたらした。従来の初版は街道を基準に「東京・横浜」「東海道周辺」「中山道周辺」「奥州街道周辺」の四大項目の下に 54 のルートが書かれ、第二版もそれに「北海道南部」と「長崎」が追加されるのみであった。それに対し、第三版の分類は大きく①東日本②北日本③中部日本④東京・京都間⑤西日本と瀬戸内⑥四国⑦九州⑧北海道の八つの項目に分類され、街道を基準にしているのは④のみに留まっている。この八つの項目はその下に 68 のルートに分けられ、付録として 5 ルートが追加されている[楠家 1986:328]。これによって、これまで北日本・中部日本に限られていた範囲が本州全域に拡大し、記述が線から面へと大きく変化したことが伺えるのである。

また、庄田によると、第三版は「第二版の要約版としての性格を示すようになる」[庄田 1996:442]。それは、ページ数が 705 ページから 459 ページに激減しているためと、序論の項目のうち「動物」(ディキンズ寄稿)「植物」(ディキンズ寄稿)「絵画」(アンダーソン寄稿)「彫刻」(アンダーソン寄稿)「地理」(ライン寄稿)の 5 項目 55 ページが削除されたためである。削除の根拠として、庄田は削除された項目はすべて第三版の出版前年に出版されたチェンバレンによる『日本事物誌 *Things Japanese*』に姿を変えて移行していることを挙げている[庄田 1996:442]。同じく、楠家も『『日本事物誌』の初版は『旅行案内(HTJ のこと)』の序論が拡大発展したものである』と指摘している[楠家 1997:354]。日本に関するあらゆる項目をアルファベット順に掲載した『日本事物誌』には、補足参考資料とし

て HTJ が紹介されている。また、HTJ 自体も参考資料として『日本事物誌』を紹介している。第二版までに掲載されていた事物も削除された両者は内容が重ならないよう、互いを補完する形で製作されたという[庄田 1990:81-87, 1996:442-444][楠家 1986:291-292, 1987:227]。この、HTJ という「旅行ガイドブック」が『日本事物誌』という日本の百科事典に内容が移行し相互に補完し合っているという推測は、非常に示唆に富んでいると言える。単なる旅行ガイドブックが、日本のあらゆる事物について書かれている百科事典的書籍と掲載情報が相互関係にあるのである。

ここで、著者のチェンバレンとメイソンの略歴について触れておく必要がある。バジル・ホール・チェンバレン Basil Hall Chamberlain(1850～1935)はイギリス人研究者である。1873 年に御雇外国人として来日し、海軍兵学寮で英語を教授した。その傍らで流暢な日本語を駆使して日本研究にいそしみ、その成果を主に日本アジア協会に発表していた。1883 年には『古事記』を英訳、出版した点は日本学に大きな貢献をしたと言える。1886 年には帝国大学文科大学(のちの東京大学)で日本語学と比較言語学を教授した。並行して、アイヌ研究や琉球研究を行っている。退職後は後述の『日本事物誌(*Things Japanese*)』の出版や(1890 年)、サトウから引き継いだ HTJ の出版(1891～1913 年)など多数の日本研究や書籍を著した。晩年は日本研究から離れ、スイスのジュネーヴに居を移し隠遁生活を送った。

ウィリアム・ベンジャミン・メイソン William Benjamin Mason(1853～1923)はイギリス人電信技師で、1874 年に来日して工部省電信寮の御雇外国人となった。1885 年にモース電信符号の改良に成功し、1887 年には東京電信学校教授と工務局外国書記官を兼任した。のちに第一高等学校の英語教師となるが、引退して横浜に居住した。1923 年の関東大震災で圧死している。チェンバレンとは親しい友人でもあった。

1891 年は、HTJ の出版と共にチェンバレンが日本アジア協会の会長に就任した年でもあった。そして、HTJ の出版後『日本事物誌』の第二版を出版している。この頃と前後して、1890 年にラフカディオ・ハーンが来日しチェンバレンと知己を得ている。後に二人の関係は断絶するが、当初は大変親しい関係が続き、ハーンはチェンバレンから松江や熊本での教師職を推薦してもらっている。第三版の出版以降、チェンバレンはハーンと頻繁に書簡を交わし、HTJ における西南日本についての地誌についてハーンから情報提供を受けている[庄田 1990:90-128][楠家 1986:321-331, 383-479]。

ラフカディオ・ハーン Patrick Lafcadio Hearn(1850～1904)は、イギリス領(当時)ギリシア出身の文筆家、日本民俗学者である。1890 年、アメリカの新聞の通信員として来日後、

チェンバレンと友誼を結び松江や熊本で英語教師となった。1896 年、東京帝国大学で教鞭を執る一方、日本女性と結婚し、日本に帰化し小泉八雲と名乗った。『知られぬ日本の面影 (*Glimpses of Unfamiliar Japan*)』、『心 (*Kokoro*)』、『怪談 (*Kwaidan*)』、『神国日本 (*Japan : an Attempt at Interpretation*)』で日本文化を海外に紹介し、日本の説話文学や伝承、伝説を基に『怪談』といった多くの再話文学を執筆した。現代でも、その文学的評価と日本文化を英語で紹介した功績は高いと言える。

第四版の出版は 1894(年であるが、序文にはラフカディオ・ハーンと共にウォルター・ウェストンの二名へ謝辞が書かれている。ウォルター・ウェストン Walter Weston(1861～1940)はイギリス人宣教師で、1888 年、1902 年、1911 年に来日し、日本の多くの山岳に登頂した。1896 年、日本での登頂経験を『日本アルプス 登山と探検 (*Mountaineering and exploration in the Japanese Alps*)』に著し、日本の山々を世界に紹介した人物として日本でも後世多くの記念碑が建てられている。ウェストンの名は第三版の序文から掲載されているが、この後、第四版、第八版(1907(明治 40)年)、第九版(1913(大正 2)年)にも掲載されているため、ウェストンが HTJ の情報提供を積極的に行っていた事実が伺える。

1898 年に出版された第五版以降、第六版、第七版は、それぞれほぼ二年おきに出版されている。第五版では、以下のような序文が掲載された。

本書は最新の材料を盛り込んだ新版である。すなわち、急速に拡大された日本の鉄道網に対応した情報を取り入れ所要のルートを改訂するとともに、多くの新事情を追加した。序説の一部も増項した。すなわち、旅行者に役立つ『日常会話文』の英語訳を増やし、『日本の著名人』を大幅に追加し、そして神社仏閣や美術館の観光に便利になるように『歴史年表』を加え、人名や件名などの年代の照合を容易にするようにした。特に京都の説明では出来る限り念を入れて正確かつ詳細に記述した。一般的な観光地だけでなく、瀬戸内海や九州、さらに北部地方など遠方に足を踏み入れたいとする旅行者のために、編集者はこれらの地区を再訪して情報を提供した。登山案内も見直しあるいは新しく追加してある。日本の新しい植民地である台湾の案内を新設した。(中略)／1898 年 11 月 東京[庄田 1990: 159-160]

新たに増えた項目は、鉄道の他には「日常会話文」と「日本の著名人」、そして「歴史年表」である。ここから、旅行者が実際に(現地の住人である)日本人と直接言葉を交わす機会が

増えてきたということ、日本人にとってなじみのある有名人を知りたいと思う機会が増えたということ、そして建築物や美術品などを鑑賞する際に具体的な情報として年代を知りたいとする人々が増えたということがわかる。庄田はこうした変更について、当時世界的ブームになりつつあった世界漫遊旅行者が増加し、日本にも彼らが多く訪れるようになったことの反映と推測している[庄田 1990:154-162]。

そして、1898(明治 31)年出版の五版から、簡易的に中表紙に「Japanese Empire」という単語が付いた点は注目すべき事柄である。日清戦争に勝利した日本は、1895(明治 28)年に下関条約で台湾と樺太を獲得した。その後に出された 1898 年の五版から台湾が含まれているのである。しかし、1905(明治 38)年以降獲得した満洲、朝鮮は第九版では割愛されている点も注目すべき事柄である。そこには、台湾と樺太を含みながらも、中国大陆という在日の外国人研究者たちの情報網を超えた広大な土地が「日本帝国」の領土として扱われてしまうことへの戸惑いと、中国大陆と日本列島を切り離して考える割り切った考えとが読み取れる。つまり、「Old Japan」は、植民地を拡大していく「Japanese Empire」とは必ずしも一致していないという矛盾が露呈していると考えられるのである。

第六版は、1901(明治 34)年に出版された。序文は以下の通りである。

本版では観光地、奥地を問わず全面的かつ綿密に改訂を施した。北部日本へのルート一部は近年鉄道網が拡張されたので、その旅程を再編成した。四国のルートの一部についても同じ趣旨で見直した。／1900 年 11 月東京[庄田 1990:176]

序論は、1901(明治 34)年出版の第六版でようやく形式が完成したと言っていいだろう。基本的な項目はすでに第四版で揃っている。変化があったのは、第五版で追加された、歴代年号、歴代天皇、歴代将軍(徳川、北条)の一覧が掲載された「日本の歴史年表(Chronological Tables)」と第六版における 1898(明治 31)年の条約改正で撤廃された外国人の国内旅行規定による注意書き(Treaty Limits, Passport)の項目の削除に留まる。細かい点は多少の改訂はあるものの、大筋の文章は第三版から基本的に変更はない。第六版における序論の目次は以下の通りである。

1. 一般、日本についての書籍、地図
2. 船舶情報

3. 税関
4. 公式の休日
5. ガイド
6. 郵便、電信、銀行
7. 通貨
8. 度量衡
9. 宿泊、旅行代金
10. 気候、服装、訪ねる時期
11. 食糧
12. 移動手段、荷物
13. 何処へ行き何を見るか
14. 買い物、芸術品
15. 船便
16. 狩猟
17. 釣り
18. 種々のヒント
19. 言語
20. 神道
21. 日本の仏教
22. 神々のリスト
23. キリスト教
24. 日本の歴史の概略
25. 年表
26. 日本の有名人
27. 主要都市の人口
28. モデルコース

日本語会話集[Chamberlain, Mason 1901:CONTENTS.]

ページ数が最も多く割かれているのは、「日本の有名人(Celebrated Personages)」で約 17 ページに渡る。基本的に歴史上の人物だが、神武天皇から弘法大師、家康から果ては西郷

隆盛まで、端から有名人を列挙している印象が否めない。

次に多くページが割かれているのが、日本の宗教に関する項目である。日本の神道(The Shinto Religion)、仏教(Japanese Buddhism)の説明はそれぞれ約 4 ページ、日本での崇拜対象になっているものに関する説明(List of Gods and Goddesses)は約 13 ページに渡り、図と共に掲載されている。わずか 1 ページであっても、キリスト教の伝来について割いてあるところはさすがに英語圏だろう。日本の歴史(Outline of Japanese History)、先述した歴史年表(Chronological Tables)はそれぞれ約 5 ページ、7 ページに渡る。

5 第七版、第八版、第九版 「オールド・ジャパン」

HTJ には、注目すべき特徴がある。それは、「Old Japan」、「picturesque Old Japan」という単語の登場である。これらの単語は、第七版から序文に掲載されている。庄田元男は、著書『偉人たちの日本アルプス』において、それらを「＜古き良き日本＞」と翻訳している[庄田 1990]。この翻訳法についての但し書きはなく他の研究でも初出は見つからず同様の訳もほとんど存在しないため、庄田独自の翻訳と思われる。そこで、この庄田訳の「古き良き日本」という表現に妥当性があるのかを本節と次節で検討する。

まず、概論での日本の風景について書かれている箇所を見てみよう。第八版(1907(明治 40)年)の序論の冒頭である。

明治維新以降、日本は急速に西欧化、近代化を進めており、その変化の速さには目を見張るものである。しかし、日本は、その姿を変えながらも、依然としていにしえの地盤を残している。[Chamberlain, Mason 1907:2]

明治以降の急速な西洋化について言及しながらも、依然としてそれ以前の日本独自の風景が残されているという。HTJ は、そうした風景を惜しみながらも、西洋化されている風景に関してはあまり積極的な評価を下していない。

地方都市の大部分には、これといった特徴はほとんどない。いわゆる「日本の生活を見る」一番のプランは、開港地の外国人居留地を避けることである。大都市には、劇場、レスリング、踊り子たち、そしてヨーロッパ式の制服、クラブ、大学、病院、キリスト教式の教会があり、それを見ることになるだろう。古い農村生活は依然として

ほとんど変わらず続いているが、それは鉄道の通っていない地域でのことである。

[Satow, Hawes 1907:11-12]

同様に、第二版(1884(明治 17)年)の東京の風景についての描写を見てみよう。

1868 年 9 月 13 日に江戸は東京、またはとうけいと改められた。この意味は「東の都」である。同じ年の 11 月に天皇が初めて東京を訪れ、1869 年 3 月 26 日に政府の首都と認められるようになった。1868 年以来この年は大きな変貌を示しはじめ、各国の藩邸などがあった場所の多くが新しい官公庁の建設のために取り壊され、その外縁部の下級武士の家は商店街に変わっていった。それと同時に二刀差しの姿が消え、駕籠が人力車に変わり、上流階級の人々は洋服を纏うようになり、そして今では洋風の髪型も普及してきている。これらの変化はかつて当地を訪れる外国人にとって大きな魅力であった日本風の光景を街並みから一掃する結果となった。[サトウ, ホーズ 1996(1984):21-22]

以前の古い日本の風景への懐かしさの文脈は、既に初版、第二版で見られる。しかし、それがはっきりと明言されるようになるのは、もう少し後の版のことであるが、既にこの時点でその萌芽が表れていた点は特筆に値する。

第 3 版(1891(明治 24)年)では、先ほど引用した、失われつつある風景に対する懐かしさが文体を多少変えつつも健在である。

1869 年 3 月 26 日、東京は政府の所在地として認められた〔ふつう東京奠都は 3 月 28 日とされている〕。それ以来、この町の概観に大きな変化がおこったのである。屋敷（領主の豪邸）の大部分はとりのぞかれ、現代の要請に応じて、新しい建物に取って代わられた。同時に、二本差しの間人〔武士〕はなくなり、駕籠は人力車に代わり、すべての階級が外国の服装とヨーロッパ＝スタイルの髪形を採用し、頭髪もちょんまげではなくごく普通のものとなり、以前外国人訪問者の注意を引いた絵のように美しかった街路地も跡形もなくなってしまった。ヨーロッパ＝スタイルの建築物の工事が 1872 年ころから始まった。東京は 1869 年に外国人旅行者に開かれたが、外国人は住むことはできなかった。築地の外国人居留地は今尚外国人が足を踏み入れることので

きる唯一の地区なのである。[チェンバレン、メイソン 1978(1884):159]

この箇所は細かい語句の変更はあるものの、同様の主旨は最終版まで続いている。西洋化する以前の風景に対して価値を置く記述は、形を変えつつも健在であると言っている。

そして、とうとう **Old Japan** が文中に登場する。第七版(1903(明治 36)年)の序文である。

本版では全面的かつ綿密に改訂を施したが、特に蝦夷と北部日本のルートに重点を置いて見直した。当地方の鉄道網が逐次整備されているからである。この他、中部日本についてもある程度内容を吟味した。本州南方の八丈島と小笠原諸島の説明を新たに追加した。当地へは今や蒸気船で到達できるようになっている。そして、関係する地図も入念に改訂あるいは再調整した。このように各地方ごとに詳細な新情報を盛り込んだことにより、本書は寺社仏閣、美術宝物、伝説、花祭など、いわゆるく古き良き日本>(Old Japan)の魅力的な知識を掲げつつ、同時に今日的で具体的な旅行案内として役立つだろうと確信している。本文用紙は薄手ではあるが丈夫な材質のものを採用したので、携帯には便利となっている。／帝国鉄道院からは関係資料が提供された。感謝に耐えない。そして、親切な有識者たちからもさまざまな地域情報が寄せられているが、本版では特にアメリカ合衆国の台湾領事で R. G. S 会員のジェイムス・W. ダビッドソン氏から最新の情報を頂いた。／また、東京のウィリアム・D. コックス氏には原稿の校正で貴重な助力を得た。／1903 年 横浜[庄田 1990: 176-177]

次は、**picturesque Old Japan** が登場する第八版の序文である。

ハンドブック第八版では全般にわたって入念に改訂を施し一部は書き直したが、特に重点的に改めたのは、本州西部・北西部の海岸地域、各地の登山情報、蝦夷内陸部の三点である。さらに、夏のリゾートとして有名な軽井沢と日光湯元、古都京都の案内についてもほとんど書き改めた。鉄道と市街電車の発達に伴う多くの変化も大小を問わず織り込んである。特に地図と推薦旅館の記述には細心の注意を払い、旅行コースにふさわしい宿泊場所の確認を心掛けた。これと同時に、今日でも残されているく古き良き日本>(picturesque Old Japan)に憧れて来日する観光客が多いことに十分留意した。以上により本書は神社仏閣、美術、伝統、祭事などのこの国の魅力的な観光

資源の手引きとして役に立つとともに、今日的な旅行案内としていっそう貢献できると期待している。／本書の作成にあたっては、特にウォルター・ウェストン師、E. パピリアー博士、J. ストルッケ氏、J. オレンジ氏、A. E. ワイルマン氏から情報が寄せられた。また、エドワード・ベアト氏には校正でお世話になった。／1907年 横浜[庄田 1990:185]

どちらも庄田は「＜古き良き日本＞」として訳している。ここで書かれている＜古き良き日本＞として併記されているのは、神社仏閣、美術宝物、伝説、伝統、祭事などである。それらはいずれも欧米の文化圏とは全く異なるものであり、一から説明と解説が必要なのであった。そして、こうした風景を求める旅行者には、以下のような場所が提案されていたのも注目すべき点である。

さまざまなタイプの旅行者がいるだろう。ユニークな文明を学びに来たい人、療養したい人、火山に登りたい人もいるだろうし、産業の特殊な技術を調べに来た人もいるだろう。仏教寺院を見てみたい人は、京都、奈良、東京、日光に行けば必ず満足できるだろう。神道の神社であれば伊勢、それから出雲の杵築(きづき)だろう。「日本三景」は日本人が一番美しい名所を三つ選んだもので、北部の松島、瀬戸内海の宮島、そして日本海の日守岬が入っている。療養目的やハードでない夏の避暑を目的にしているのなら、東京近辺ならば宮ノ下、日光、伊香保、軽井沢、神戸近辺ならば有馬、長崎近辺ならば雲仙が最適だろう。以上の場所は、杵築以外ならば安全なので女性にもお勧めできる。[Chamberlain, Mason 1907:11-12]

また、第八版で Old Japan の単語と並列して picturesque という単語が登場するが、ミルンも指摘しているように注目すべき要素であることは間違いない[ミルン 2013a:148]。

日本は、ピクチャレスク好きには特に、天国のような場所だろう。左右対称な火山の姿や、自生しているのに芸術的な効果を狙って植えられたかのような印象を与える荘厳な木々、小さな神社や趣のある宿が規則的に配置された見晴らしの良い目を楽しませる風景など、この美しい地は現代の人々にとって最も魅力的な滞在地だろう。優美で美しいものから陰しく壮大なものまで、多様性に富んでいる。以上のような特徴が

あるところは、横浜近隣(鎌倉、江の島、金沢)、箱根一帯、富士とその周辺の湖のある地域(富士五湖周辺か)、日光、榛名、瀬戸内海、木曾山脈、北東九州、北部の松島等、本州にたくさんある。険しく荘厳な特徴のあるところは、飛騨・越中地方、甲州の駒ヶ岳、富士川と天竜川の間の巨大な山々のある一帯である。しかし、これらの山は大変陰しいため、旅行に来て突然登るのは非常に危険である。健康で十分に厳しい訓練を積んだ人以外には難しいだろう。[Chamberlain, Mason 1907:11-12]

「ピクチャレスク」とは、「絵のように美しい」という意味であるが、19世紀後半から、絵のように美しい風景を積極的に評価しその地を訪れるといったことがイギリスを中心とした欧米の上流階級の間で流行した[Vaughan 1974][Buzard 1993]。日本の風景に関する「ピクチャレスク」もまた、その流れを汲んでいると思われる。

しかし、そうした「Old Japan」の評価と共に、それと矛盾する現象の萌芽も垣間見られたことにも注意するべきである。第四版から、HTJは日本列島全体を網羅するようになった。そして、1898(明治 31)年の第五版では、日清戦争での勝利による台湾割譲を受け、初めて台湾の項目が追加された。それに伴い、これ以降の版に「A Handbook to Japanese Empire」と書かれるようになる。これは、HTJに登場している「Old Japan」のイメージと真っ向から対立するものである。第六版では、副題に including the whole Empire from Yezo to Formosa と副題にはっきりと書かれるようになった。第八版(1907(明治 40)年)では、副題に including the whole Empire from Saghalien to Formosa と、樺太までもその範囲に入ったことを示している。

こうした大日本帝国の海外進出に関して、チェンバレンは非常に危惧を抱いていたようである。特に、1910(明治 43)年の日韓併合についてのニュースを耳にしたとき、チェンバレンは「両国にとって誠に残念なこと」とであると書簡で嘆いている。そして、「現政体の前半期に行われた知性的かつ社会的目標の追及にかわって、国民的精神なるものが俗悪な政治的野望と軍事的侵略へと水路を変えて」おり、「この精神的修正をともなった事柄はすべて下劣な結果となってい」と続けている[楠家 1986:540 より重引]。それは、かつてチェンバレンが訪れたときの欧米の文化を積極的に受け入れようとする若い日本政府のみずみずしい姿ではなく、対外侵略を始め世界へ覇権を求めて進んでいく野心的な姿に対する

苦言と憂慮であった³⁷。そして、その姿は後述の第九版の序文において「アジア大陸における日本の新しい領土については、言語・習慣などが日本と大きく異なっているので、本書では扱っていない」という一文とも関連していると考えられる[庄田 1990:190]。台湾や樺太に関してチェンバレンたちがどのように把握していたのかは不明であるが、中国大陆の文化に関しては「日本と大きく異な」るため記述しないという選択は、大陸の文化を「日本」の一部として記述することへの抵抗感を感じさせ、注目に値する。

第9版(1913(大正2)年)は、HTJの事実上の最終版である(写真7)。すでにジョン・マレー社は旅行ガイドブックの製作・出版事業を他社に売却しており、本書は最後の旅行ガイドブックの一冊となった。第8版よりも、わずかに文章や項目が削除されている。副題は including Formosa であったが、実際は樺太も含んでいる。



写真7 [Chamberlain, Mason 1913](慶應義塾大学白楽サテライトライブラリー所蔵)

序文は、以下の通りである。

ハンドブック第九版では全般にわたって改訂を施した。すなわち、いくつかのルートについては書き改めるとともに、鉄道網や市街電車の発達などによる交通事情の改善

³⁷ 同様に、1910(明治43)年に起きた大逆事件についてもチェンバレンは「日本の風潮は、軍隊と盲目的愛国主義の圧迫のために、五十年前の旧悪な専制的規律に戻ろうとしています」と憂慮を書簡にしたためている[楠家 1986:541]。大陸進出や天皇崇拝への明治政府の動向がチェンバレンを悩ませ、ひいては帰国する決断を下させた一因となったのではないか。

に伴う全国各地の数多くの情勢の変化を取り入れた。これと共に今日でも残されている<古き良き日本>に憧れて来日する観光客が多いことに十分留意した。以上により本書は神社仏閣、美術、伝説、祭事などの、この国の魅力的な観光資源の手引きとして役立つとともに、今日的な旅行案内としても一層貢献できると期待している。／アジア大陸における日本の新しい領土については、言語・習慣などが日本と大きく異なっているので、本書では扱っていない。／本書の作成に当たっては、ウォルター・ウェストン師、H. E. ドーント氏、E. L. ゴードン氏、ホレース・ヌッター氏、J. オレンジ氏、H. B. シュワルツ師、その他多くの方々から貴重な情報が得られた。また、ウェルナー・フィート氏からはさまざまな助力が得られた。エドワード・ベアト氏には引き続き原稿の校正で助力を得た。／1913 年 横浜[庄田 1990:190]

また、この第九版には、非常に興味深い点がある。冒頭に、献辞が書かれているのである。

我々の善き友 J. O.へ

この版を、ここに記した旅路と共に／多くの愉快的時を共に過ごした思い出を捧ぐ／
そして／この事業に惜しみない助力を注いでくれた月日に謝意を表して

1913 年 B. H. C W.B.M [Chamberlain, Mason 1913=2000]

こういった形の献辞は第九版にしか見られない。同様の指摘を庄田も行っている。庄田はこのイニシャルに相当する人物を予想しつつも、それとは異なる見解を主張する。「オールド・ジャパン」ではないかというのである。庄田が予想したのは、第八版と九版の序文に登場した J. オレンジであった。しかし、「献辞の内容は非常に重々しい」ため、第八版から助力を得ただけの彼に対してとは考えにくい[庄田 1990:192-193]。庄田は続けて、こう説明する。

時はすでに大正に入っている(大正 2 年のこと)。妖精のように麗しき古き日本は、もはや遠くの彼方に去って行ってしまった。築地に囲まれた日本風の家と庭園には小さな滝が自然の山水に模して巧みにしつらえられ、桜の花が散る赤い毛氈の端に、長い柔らかな黒髪の乙女がかしづいている。紅毛の異人にあくまでも従順で礼儀正しい日本人、常に笑顔を絶やさず、金銭にも淡泊で無償の奉仕を申し出る日本人、神社仏閣

は小規模に整い精緻な工芸が内部に温存されている濃やかな日本的な美、壮大な土木や高層の建築遺構などがなく小さくまとまっている日本の技術—これら、いわゆる古き良き日本はすでにない。日清・日露の戦役ではドイツ式の陸軍、イギリス式の海軍に育っていった日本の近代軍隊が、清と露国の陸海軍に圧勝している。そして、高給をもって雇われた外国人のすべては用済みとなり解雇されてしまった。日本は近代化されたのだ。西欧人にとっての古き良き日本の時代は終焉を迎えた。そして、正統派としての『日本旅行案内』の果たすべき役割も漸く終わった。1881年から1913年まで、明治から大正にかけて約三十年間、旅行者に硬派の日本紹介を続けた本書の使命も終了したのである。[庄田 1990:193]

庄田は、失われつつある<古き良き日本>への挽歌として第九版を上梓したと推測している。それはかつて西洋化する前の美しく細やかな日本の姿を肯定的に見るものであり、近代化しお雇い外国人の力をもはや必要としない大日本帝国の姿ではなかった。庄田はここにチェンバレンのノスタルジックな視点を見出しているが、本章では、若干異なる論を提示したい。確かに、J.O.とは、庄田と同じく「オールド・ジャパン」である可能性が高い。しかしそれは、明治以前の旧時代の日本ではない。極めてオリエンタリズム的な視点に由来した、チェンバレンが来日した頃の欧米の文化を積極的に受け入れようとしていた旧時代の名残の強く残る明治初期の日本の姿ではないだろうか。よって、庄田の「<古き良き日本>」という訳は、正確な翻訳とは言えない。その理由を、次節で説明する。

6 オリエンタリストとしてのチェンバレンと HTJ

チェンバレンは人生の大半を日本で過ごし、膨大な日本研究を遺した。しかし1911年には帰国し、スイスのジュネーヴでは日本研究から離れてフランス詩の研究を行っていた点は注目すべき点である。チェンバレンは、いつから日本に対する学的興味を失ってしまったのだろうか。まず、現代に残るチェンバレンの書簡からは、日本の近代化に伴うお雇い外国人の解雇の問題に心を痛めていたことが分かっている。お雇い外国人解雇の件で、メイソンが解雇の憂き目に遭っていることも大きかっただろう。1890年の来日から1896年頃までの間チェンバレンとの交際を続けたラフカディオ・ハーンとの書簡には、次のようなものが残されている。

メーソンとはどんな人かとお尋ねですね。まず、かれは気持のいい男で、ずるいところや俗物根性、金に眼の色を変えるような根性など微塵もない男です。(中略)彼はほぼ十六年前、スコットランドの電信・郵便事業での大いなる将来を捨ててこの日本に来了。日本で彼は勤勉に働きましたが、今から二年ほど前に、逓信省縮小のために、解雇されたのでした一年金も将来の保証もなくです。これが日本へ来た御雇外国人の共通の運命なのです。かれは現在、鹿鳴館の東京クラブで書記を務めています、何ら確たる職ではないのです。[楠家 1986:324 より重引]

HTJ の執筆の際、メイソンは失職中の御雇外国人であったが、1889 年、チェンバレンに見いだされてその仕事を手伝うようになったことが分かる。チェンバレンは、お役御免になってしまった元お雇い外国人の境遇に胸を痛み、冷酷な待遇を取る明治政府に対して苦々しく思っていたと考えられる。

次に、1891 年 8 月のハーンとの書簡には、次のような文章が残されている。

最終的な結論としては、日本人はヨーロッパ人種に比べてはるかに劣等なのではないかとわたくしには思われる。(中略)初めのうちは独創性をもってこちらに迫ってくる事物のほとんどが(中略)時間を経過しますと、当の事物は(中略)中国からの借用物である(中略)ということがわかってしまうのです。[庄田 1990:121]

チェンバレンは、この文章の後に「日本の風景の美しさ、通行の安全さ、人情のこまやかさなどの面でヨーロッパにない優れた側面があるので、これらを総合して日本を評価しなければならない」と付け加えている。しかし、庄田は「しかしながら、ここにチェンバレンが挙げた側面は、いずれも外国人としてのチェンバレンが感じたものであって、日本人がたまたま当時の外国人に対して振舞った行動などがその原点になっているに過ぎないのだ」と続けている[庄田 1990:131-132]。また、日本での生活のことを「植民地生活」と呼んでいた事実も挙げ[庄田 1990:120]、「チェンバレンの正体見たり、ということだろう」と手厳しく評価している[庄田 1990:132]。

チェンバレンはその後ハーンとの友誼が断絶しているが、裏には日本観の違いがあった

という指摘もある³⁸[楠家 1986:468-474]。それは、極めて叙情的に日本を捉えたハーンと、理性的にかつ体系的に日本を捉えたチェンバレンとの違いでもあった[平川 1987, 1996]。いきおい、後世において日本国内ではハーンが好意的に、チェンバレンが批判的に捉えられ、海外ではその逆の風潮へとつながっていったのである。しかしそれは、歴史的背景の解明まで丁寧に行われてこず、チェンバレンの背景にあった日本アジア協会などの在日欧米人の日本研究の重みが理解できていなかったためであった[楠家 1986:474-479]。太田雄三は著書『B・H・チェンバレン』において、従来のチェンバレン観で支配的であった「チェンバレン＝西洋至上主義」という構図を打破するべく、チェンバレンの生涯を歴史的背景と共に多くの書簡、特に家族との書簡から考察している。そこでは、日本への愛着を示す文言が多く見られると同時に、書簡の誤訳を指摘して、「日本を見下している」というチェンバレンの誤った認識を正し、ヨーロッパと日本相互の文化を愛した国際人であったとの結論を下している[太田 1990]。

これらの先行研究に対する本章の結論としては、チェンバレンは極めてオリエンタリズム的な視点を持っていたというものである。従来の研究での視点も含め、庄田の非難や楠家の指摘、太田の是正もまた、どれも的を射ていると同時に、肝心な点に見落としがあるように考えられる。日本を低く見るような文言があると同時に情熱的に日本研究を行い、日本への愛着を示す言葉を遺しているチェンバレンは、日本研究を行う一オリエンタリストだったのではないだろうか。日本を、欧米を中心とする外国人たちが体系的に研究するに足る対象として一定の評価は下していたと考えられるが、それ以上にチェンバレンは外国人である、同時に欧米人である自己を尊重していたと仮定してみよう。すると、後述する 19 世紀後半以降にオリエントの研究を行っていたオリエンタリストの姿と重なるのである。チェンバレンは日本を愛したのかもしれないが、それはあくまでも外国人という立場から外国語で日本を体系的にかつ理論的に把握するための研究対象という意味であり、ハーンのように日本人になるという選択肢は存在しなかったのだろう。その点がハーンとの断絶を生む部分であると同時に、日本でのチェンバレン評が低くなる原因でもあると考えられる。

HTJ の最終版である第九版の冒頭にある献辞に関しても同様に考え直してみると、やは

³⁸ 厳密には、ハーンとチェンバレンとの個人的な友誼が断絶したのちもチェンバレンは小泉家との友誼は継続している。チェンバレンがハーン評を厳しいものに転化したのは晩年のことであるが、その経緯については平川(1987)参照。

り庄田の推測したように J. O.なる人物は存在せず「オールド・ジャパン」であった可能性が高い。しかし、それは庄田が叙情的で美しい<古き良き日本>へのノスタルジーではなく、研究の興味や魅力の対象である「オールド・ジャパン」であった。そこに「絵のように美しい」という形容詞が付いたとしても、それが日本への賛美や肯定につながる積極的な賞賛の意味は込められておらず、単なる修飾語としての意味しか存在しなかったのではないだろうか。第九版の出版の時点でチェンバレンは既に日本を離れており、ヨーロッパに滞在していた。その時点で日本への興味がどの程度残っていたかは定かではないが、少なくともあのような献辞を書く程度には、日本への愛着は薄れていたと考えられる。以上の点から、庄田の「<古き良き日本>」という翻訳はある意味での的を射たものではあるものの、誤解を生じる恐れがあるため、「オールド・ジャパン」ないし「古き日本」が適切であると考えられる。

チェンバレンのオリエンタリストであるという仮説について、以下のような考察が展開できる。まず、『ネズミはまだ生きている』でチェンバレン研究を行った楠家重敏のチェンバレン評を見てみよう。

チェンバレンが目指したのは、ヨーロッパで日本を考え、日本ではヨーロッパのことを思う、いわば複眼的価値観を維持することであった。[楠家 1986:521]

このチェンバレンの姿は、19世紀当時のオリエンタリストの視点と非常に重なるものである。確かに、先行研究で指摘されてきた「西洋至上主義」の考え方は、太田の指摘するようにチェンバレンの日本に対する知的好奇心や日本への愛着を重視していない表現である。上記のチェンバレンの「複眼的価値観」とはまさに、オリエンタリストの価値観だったのではないだろうか。ここで、サイードの『オリエンタリズム』の引用を参考に再考してみよう。

オリエンタリズムは、依拠すべき戦略として、融通無碍に優越的位置を制することを常道としていた。そのため、西洋人は^{ウェスタナー}東洋^{オリエント}とのありとあらゆる可能な関係系列のなかで、常に相手に対する優位を保持することができた。(中略)さらに、想像力がオリエント的事物を吟味する場合には、多少なりとも排他的に統治者たるべき西洋の至上性の意識を土台としていた。そこでの西洋の揺るぎなき中心性の内側から、オリエンタ

ルな世界が出現したのである。この場合、まずオリエンタルな人または物についての包括的観念が、次いで経験的現実のみならず一連の欲望、抑圧、性格賦与、感情投射などが支配する精密な論理が、これを導いたのであった。[サイード 1993a(1978):30-31](振り仮名は本文による)

HTJ の情報収集が日本アジア協会を中心に、外国人による外国語の情報から構成されている点についての疑問も、この記述を読むと納得ができる。オリエンタリズムとは、研究対象であるオリエントに対する学術的興味や愛着と同時に、調査、研究する「西洋人」の拠^{ウエスタン}って立つ「西洋の至上性の意識が土台になっていた」のである。その点では、チェンバレン研究の先行研究における「西洋至上主義」はある意味で正しいし、楠家の指摘する「複眼的価値観」もまた正しい。ただ、双方を包括するより的確な表現として、「オリエンタリスト」が最適であると言えよう。同時に、チェンバレンが帝国大学文科大学で教授していた比較言語学についても、サイードは、「のちの十九世紀ダーウィニズムの人類学者や骨相学者を別とすれば、比較言語学または比較文献学におけるほどに、人種差別主義を学問的主題の基礎とした分野は他になかったのである」[サイード 1993a(1978):234]と指摘する。

同様に、チェンバレンの知的拠り処でもあり、同時に HTJ や『日本事物誌』の情報源である日本アジア協会について、チェンバレンは『日本事物誌』において次のように説明している。1890 年のことである。

日本アジア協会 この協会は 1872 年、「日本および他のアジア諸国に関する題目について知識の収集と調査」を目的として設立された。本書『『日本事物誌』』の中でしばしば言及される『日本アジア協会紀要』とは、かくの如きものである。日本に関する題目で『日本アジア協会紀要』の中で学問的に論議されていないものはほとんどない。

[楠家 1997:53 より重引]

楠家は、このチェンバレンの記述を、当時約二十年間に及ぶ西欧人の日本研究の成果を誇らしく語っていると説明し、その記述があながち誇大ではない点を指摘している[楠家 1997:53-54]。事実、日本アジア協会の研究の蓄積は非常に広範囲かつ専門的であり、HTJ や『日本事物誌』といった広範な内容をもった書籍の貴重な情報源になっていたからである。当初、イギリス人を中心とする日本学研究者たちはロンドンの王立アジア協会の支部

として日本アジア協会を設立しようと奮闘したが、アメリカ人を中心とする派閥に反対を受け、独立した団体として最終的に発足したという歴史的事実が分かっている[楠家 1997:29-35]。その上で、機関誌の交換を行っていた交流団体は以下の通りであった。

イギリス・ロイヤル・アジア協会、ロイヤル協会、ロイヤル地理学会、哲学学会、英国人類学協会、フランス地理学会、フランス環境適合学会、オリエンタル学会議、フランス日本研究学会、ウィーン東方研究学会、ドイツ東アジア自然民俗学協会(東京)、ロイヤル・アジア協会ボンベイ支部、ロイヤル・アジア協会セイロン支部、ベンガル・アジア協会、ロイヤル・アジア協会北中国支部、アメリカン・オリエンタル学会、ボストン自然史学会、アメリカ哲学学会。[楠家 1997:51]

それに対し、サイドはオリエンタリズムの学術的系譜について、次のように指摘している。

十九世紀以後の高名なオリエンタリストの幾人か(中略)は、間違いなくオリエンタリズムの公式の知的系譜の中に含まれるであろう。この系譜は更に学術団体の持つ普及機能も含まれる。すなわち、1822 年創立の^{ソシエテ・アジアテイク}アジア協会 [フランス]、1823 年創立の^{ロイヤル・アジアテイク・ソサエティ}王立アジア協会 [イギリス]、1842 年創立の^{アメリカン・オリエンタル・ソサエティ}アメリカ東洋学協会等がそれである。[サイド 1993a(1978):235](振り仮名は本文による)

上記のサイドが指摘する「19 世紀以後のオリエンタリズムの公式の知的系譜の中の学術団体」と、日本アジア協会の交流団体とが重複している事実は実に興味深いものである。そして、日本アジア協会の発足時のイギリス人研究者たちの目論見を鑑みると、日本アジア協会は極めてオリエンタリズムの系譜を汲む背景を持っていると結論付けられるのである。そうした背景を持ちながら 1874 年に制定された日本アジア協会の会則は、以下の通りであった。

第一章 名称と目的

- 一、本会の名称は日本アジア協会(The Asiatic Society of Japan)という。
- 二、本会の目的はつぎのとおり。

- (a)日本及びアジア諸国に関する事項の調査と情報の収集。
- (b)上記の目的を遂行するための図書館及び博物館の整備。
- (c)本会で読み上げられ、かつ収集されたオリジナルの論文や情報を掲載するための機関誌の発行。[楠家 1997:76 より重引]

この会則は、サイードが指摘するオリエンタリズムの整備についての過程と重なっている。

オリエント関係の資料を入手し、これを専門化された知識の形で規則的に普及させるための組織として、オリエンタリズムは体系的に整備されていった。文法書が複写され、印刷された。原点が入手され、増刷され、広範囲に配布された。知識を定期刊行物の形で分配することさえ行われた。[サイード 1993a(1978):477-378]

つまり、個々人が収集した情報を日本アジア協会に研究成果として発表し、それが紀要の形で纏められ配布されるという一連の流れは、オリエンタリズムを体系的に整備していく過程と一致しているということである。「探検紀行」は、個々人の驚異に基づく探検的日本体験記から、「日本学」として体系的に纏められた知的集合体へと変化した。そして、それを「旅行ガイドブック」という一冊の書籍に集約することによって、「探検紀行」の時点で既に濃厚であったオリエンタリズム的要素を凝縮させてしまったと考えられる。

オリエンタリズムは、一方ではオリエントを、できるかぎり逐語的に、また幅広く獲得したが、他方では、規則的な記号や分類、標本ケース、定期刊行物、辞書、文典、注釈、編纂、翻訳などのフィルターを通過させることによって、この知識を西洋に馴化させたのだった。(中略)要するにオリエントは、命知らずの旅行家や居住者の個人的な、しばしば歪曲された証言であることをやめ、学問に従事するすべての者の協力によって得られた非個性的定義へと変換を遂げることになるのである。オリエントは個々人の調査体験の連鎖であることをやめ、壁のない一種の想像上の博物館へと変貌することであろう。(中略)オリエントは、探検者や調査隊、派遣団、軍隊、商人などが一片一片もちかえった断片の束から再転換され、再構成されて、語彙記述的で文献標的で百貨店的でテキスト化されたオリエンタリズムの意味内容のものへと変化することになった。十九世紀中頃までに、オリエントは、ディズレイリが言ったように、

人生を賭けるべき仕事となった。すなわち、人々がオリエントだけではなく、自分自身をもつくり直し、魅らせることができる仕事となったのである。[サイド 1993a(1978):378-379](傍点は本文による)

ここで言う「一種の想像上の博物館」は、そのまま「旅行ガイドブック」に転化できる。オリエンタリズムは、個々人の個人的な経験が学術的に纏められることによって非個人的なものへと変換され、それが欧米の文化圏に体系づけられた形で把握される。その作業は膨大な体験と研究の蓄積とその翻訳、注釈を要したため、特殊な語学や知識を必要とした。その過程はまさに、サトウやチェンバレンが日本に滞在し日本語や日本文化を習得しながら外国語で日本研究を行った過程と重なるものであった。そして、その成果として纏められたのが HTJ であった。つまり、HTJ はオリエンタリストたちによって、オリエンタリズムの系譜に則って日本の知識や情報を一箇所に纏められたまさにオリエンタリズム的な博物館的書籍であったと言える。そして、第三版から第九版までを纏めた中心人物であるチェンバレンは、オリエンタリストと言える人物であった。そして、彼の「人生を賭け」た仕事と言える日本研究は、まさにオリエンタリストの仕事だったのである。

ここで、5 節で登場した HTJ 第九版の献辞について、参考になる事象がある。HTJ の最終版である第九版の出版の前年、日本からジュネーヴに移住したチェンバレンは『新宗教の発明(The Invention of a New Religion)』という論文を発表した(1912 年)。これは、近代国民国家となった日本政府が天皇崇拜、忠君愛国、国家神道という新宗教を発明したというショッキングな内容であった。チェンバレンは「ミカド崇拜および日本崇拜は、その日本の新しき宗教であり」、「この宗教においては、古来の思想はふるいにかけて選り分けられ、変更され、新たに調合されて、新しき効用に向けられ、重力の中心を新たにしたからである。(中略)これは官僚階級が自己の利益のために役立てようとするものであり、付随的には国民一般の利益をはかるためのものである」[楠家 1986:553-554 より重引]と主張した。天皇崇拜や教育勅語、武士道についても批評は及び、国家神道に対しても厳しい批判を寄せている。特に武士道については、「日本にも騎士道の事物は存在していた。しかし武士道は制度として、即ち法典としてかつて存在したことはない。それに関する解説は、主として外人用のために作りあげられたものである」として批判している³⁹[楠家

³⁹ この文章は 1900 年出版の新渡戸稲造による『武士道(*Bushido: The Soul of Japan*)』を暗に批判しているが、チェンバレンの日本観と新渡戸稲造の日本観との比較については

1986:571]。この論文は賛否両論を巻き起こし、日本では大変不評であったようだが、チェンバレンの比較文化研究の蓄積と舌鋒が最も花開いた論文と言えよう。

筆者は、こうしたチェンバレンの批判をいわゆる西洋至上主義とは一線を画すものだと考える。もちろん、オリエンタリズム的視点の発露とも考えられなくもない。しかし、それよりも外国人による日本研究への蓄積を尊重し自身もまた日本学の大家に上り詰めたチェンバレンの、軍国主義に突き進んでいく大日本帝国の行く末を案じた故の、当たって欲しくない予言だったのではないだろうか。この後、日本が、チェンバレンが推察した通りの道を進んでしまっている歴史的事実を鑑みても、日本に長年居住していた一外国人として、そして日本研究者として、日本の今後への憂慮が強く反映されている論文だと言える。もちろん、同時に、チェンバレンが離日していたからこそ発表できたものであるとも言えるだろう。HTJ の最終版である第九版が出版されたのは、『新宗教の発明』の発表の翌年である 1913 年であった。この論文の発表があったからこそ、先述の第九版冒頭の献辞へとつながるのではないだろうか。先述の献辞の宛名である「オールド・ジャパン」は、欧米化する前の江戸時代の日本ではなく、チェンバレンが来日した頃の、旧時代の名残が残りつつも欧米の文化を積極的に吸収しようとする明治初期の若い日本の姿だった。それは、もしかして、チェンバレンたちオリエンタリストにとって、まさに理想郷と言えた環境だったのかもしれない。

7 類書の横行と「オールド・ジャパン」の読み換え

さて、HTJ の第二版から第三版が出版されるまで、およそ七年の間が空いている。初版・第二版で主な執筆者・編者となったサトウとホーズが、共に日本を離れたために実質的な改訂作業が不可能になったためである⁴⁰。その間、巷には HTJ に範をとったものが数多く出版されるようになった。

1890(明治 23)年チェンバレンによる *Things Japanese* が出版された。これは主に『日本事物誌』と訳され(以下、『日本事物誌』)、日本に関する様々な事柄をアルファベット順に並べて説明した、いわば日本に関する百科事典である。『日本事物誌』には、初版にのみ旅行ガイドブックに関する記事が掲載されている。

平川(1987)を参照。

⁴⁰ 他にも、版権の譲渡が手間取ったなど、多くの障壁があった。その経緯の詳細は、庄田(1990)、Gretton(1992)参照。

ガイドブック サトウとホーズの編集になるマレー社の『中部・北部日本のハンドブック』が最も充実している。第二版が 1884 年に、ロンドンと横浜で発行された。日本に関する地誌、歴史、伝説、芸術などの知識が豊富に扱われている。だが、残念ながらこの本は目下絶版となっていてなかなか入手できないし古書価も高い。／現在、W. E. キーリング(Keeling)の『観光案内』(*Tourists' Guide*)や、W. H. セトン・カール(Seton Karr)の『日本ハンディーガイド』(*Handy Guide Book to the Japan Islands*)や、『鉄道・航路案内』(*Official Railway and Steamboat Traveller's Guide*)などの小型の案内書が出版され、新版も数ヵ月ごとに出版されているが、これらは大なり小なり前記のサトウ、ホーズの本に準じて編集されているに過ぎない⁴¹。

[Chamberlain 1890:140]

第二版の 1891(明治 24)年には、この項目は削除されている。これは、同年に HTJ 第三版がようやく出版されたためであると考えられる。

そして、特に HTJ 第三版が出版されるまでの七年の間に、何冊も英文ガイドブックが出版された。チェンバレンは類書が続々と出版されている事実に、胸を痛めていたようである。そのことが分かる書簡が残されている。

私の一日の一部は、しばしば私の財産をどろぼうから守るために費やされます。私はこれまでの経験から、うなぎのように皮をはがれることに慣れていなければならないでしょうし、事実心では卑劣な海賊たちを許しています。それでも、私は海賊たちに負けないようにしているのです。ある時は、私の本全体がいくつかの小冊子に分割されて、何千部と印刷されていました。それは『日本案内記』の海賊版でした。いまの問題は私の文法書の海賊版です。それは、私が苦心惨憺して作成した例文をそっくりそのまま使っているのです。[太田 1990:204 より重引]

実際、HTJ の出版後はその引用や推薦、模倣と思われる類書が出版された。詳細は第三章

⁴¹ キーリングの『観光案内』(*Tourists' Guide*)に関しては、第一章で検討したように、既に HTJ の刊行前から HTJ とは異なる書式の簡潔な旅行案内を目指している旨が序文で明らかになっているため、これはチェンバレンの事実誤認と思われる。

で後述するが、特に、外客誘致を積極的に行うことを目的に 1893 年に設立された喜賓会やその後外客誘致事業を引きついだジャパン・ツーリスト・ビューロー、そして日本の船会社の配布した日本旅行案内パンフレットには、「詳細はチェンバレン、メイソン氏著の *A Handbook for Travellers in Japan* 参照」という文章が散見される⁴²。

しかし、喜賓会の外国人向け旅行ガイドブックの出版が遅れた理由として、以下の理由があったという事実は驚くべきことである。

明治三十四年第一版日本案内作成のこととなり上梓されたが、チェムバーレン及メイソン氏の抗議に由り未刊行に終わった。[山中忠雄編 1937:244]

明治三十四年は、1901 年のことである。これは明らかに、喜賓会の作成した旅行ガイドブックは HTJ の模倣と作者の二人が認識していたという事実である。有志団体とはいえ、外客誘致を行う半官半民のような体を取っていた喜賓会がそのような有様であったという事実は、それ以外にも多くの模倣が横行していたと考えていいだろう。

それでは、喜賓会による英文旅行ガイドブックをこの場で検討してみよう。まず、第七版と同年に出版された、調べた中で最古のものである 1903(明治 36)年の *The Fifth National Industrial Exhibition of 1903 and a Short Guide-Book of Japan* である。これは表題にあるとおり、同年に大阪の天王寺で行われた第五回内国勸業博覧会のための旅行ガイドブックである。博覧会の内容ではなく、会場への地図と案内が付いている。特に、会場が大阪のために大阪への行き方と大阪案内が中心に書かれており、その後に東日本(東京～富士山)、西日本(富士山～長崎)ルートの日本案内が書かれている。その序文の引用である。

編者はチェンバレン教授と W. B.メイソン氏の個人的な協力という恩恵を受けている。同様に彼らの『マレーのハンドブック』という価値ある本もまた、この本への重要な情報の提供と共に素早い出版を可能にした。[The Welcome Society 1903:2]

ここには、チェンバレンとメイソンの協力を得たという事実が書かれている。実際の両者

⁴² 筆者は不明であるが、*Handy Guide Book to the Japanese Islands with maps and plans*(1888)の本文には、名所案内の中で複数回、何項にも渡り引用がされている。

の協力を得た記録は残っていないため詳細は不明であるが、喜賓会が旅行ガイドブックの製作の際になんらかの情報提供を受けていたと考えられるのである。恐らく、二年前の「チェンバーレン及メーソン氏の抗議」を受けて、両者の名前を掲載することになったのではないだろうか。他に、本文中の東京の案内においても、HTJ を参照するように書いてある。

これらの全てはマレーの『日本ハンドブック』に芸術的、歴史的に詳細に記述されている。[The Welcome Society 1903:16]

二年後の 1905(明治 38)年における、*A Short Guide-Book for Tourists in Japan* の序文を引用する。

しかし、編者は、非常に熱心な旅行者には素晴らしい出来である『マレーの日本ハンドブック』を推薦する。これは B・H・チェンバレン教授と W・B・メyson 氏の編集によるもので、最も正確で詳細な記述が掲載されている。[The Welcome Society 1905: PREFACE]

この文章は、翌 1906(明治 39)年にも第二版を出版しているが、まったく同じ内容である。同年出版された *A Guide Book for Tourists in Japan 1st ed.*、翌年出版された同 *2nd ed.* 同様である。そして、1905(明治 38)年に初版を出版していた *Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan* も、第七版(出版年不明)、第八版(1910(明治 43)年)のものも、序文の内容は上記の例とまったく同じものであった。

そして、この後設立されたジャパン・ツーリスト・ビューローでも HTJ を意識した旅行ガイドブック製作が行われていたことが分かる文章が残されている。

案内記の作成に就ては生野氏は優れた意見を持っていた。自分もビューロー入所早々京都案内の作成を命ぜられたが、実地調査の前に生野氏から京都に関する文献にひと通り目を通すこと、就中、モーレーとテリーの案内記に注意すること、距離、見物所要時間、料金等を明確にする事、出先では市役所やホテルに於て最新の各種統計や外人に特に興味ある資料を得ること、出発前大体の骨組みを作り、それを携行して実地調査せよと親切に教えられた。[山中忠雄編 1937: 82]

この「モーレー」は HTJ の「マレー」のことであり、「テリー」は第四章で扱うテリーの日本帝国案内のことを指している。先述の喜賓会の製作した旅行ガイドブックでチェンバレンとメイソンが抗議した件を踏まえている訳では必ずしもないだろうが、常に外国人の制作した旅行ガイドブックを意識して製作していたことが伺える一文である。

こうした事実が存在したということは、先述のオリエンタリズムの議論と重ねあわせるなどどのように考えることができるだろうか。模倣が出ることはある程度予測ができたと考えられるが、HTJ の模倣に近い旅行ガイドブックを半官半民とはいえ日本の外客誘致団体が製作するとは、チェンバレンやメイソンも予測がつかなかったのではないだろうか。外国人旅行者を歓迎する喜賓会の製作した旅行ガイドブックの登場は、オリエンタリストが蓄積してきた学術的研究を、オリエンタリズムの対象であった側の日本が「公式」の情報として利用を始めたということを意味する。そしてそれは、当初は HTJ という学術蓄積の集大成であるものと酷似しており、剽窃だけでなく外国人による日本研究の功績を軽視してその功績を横取りした行為としてチェンバレンたちに映ったのではないだろうか。

つまり、喜賓会の当初の旅行ガイドブックは二重の意味でチェンバレンたちの怒りを買った、抗議という行動につながったと考えられるのである。そうした意味では、チェンバレンとメイソンの喜賓会への抗議という行為は至極尤もであると同時に、極めてオリエンタリズム的な反応でもあったと考えられる。その後の喜賓会の旅行ガイドブックは、両者の協力と HTJ の推薦を書くようになる。チェンバレンらがどのような考えで承諾したのかは不明であるが、実際に快く情報提供や協力をしたとは考えにくい。「明治三十四年」の「チェンバレン及メイソン氏の抗議」には、当初の旅行ガイドブックの出版差し止めだけではなく、今後 HTJ の情報や形式を踏襲した形での出版の際には、自分たちの名前と HTJ の書名を明示するという内容も含まれていたと考えられるのである。

同時に、喜賓会の剽窃と引用によって、HTJ における「オールド・ジャパン」への懐かしさが日本への賞賛へと転化したことにも注目しなければならない。オリエンタリズムのまなざしに満ちた HTJ という「旅行ガイドブック」を、外客誘致を行う側の日本が剽窃、引用、推薦していたという事実は、日本の対外的なイメージ戦略としてポジティブな文脈で利用していたことを意味する。それは、喜賓会の作成した旅行ガイドブックが、和綴じ風の装丁で振袖の柄のような日本風の鮮やかな表紙や色版画で製作されていたことから言えることである。喜賓会が、先述の庄田のように、HTJ におけるオリエンタリストたち

の理想郷である「オールド・ジャパン」を日本の原風景への賞賛として読み取ったと考えるのは十分妥当だと考えられる。先述の庄田の描写した「＜古き良き日本＞」を、もう一度読み直してみよう。

妖精のように麗しき古き日本は、もはや遠くの彼方に去って行ってしまった。築地に囲まれた日本風の家と庭園には小さな滝が自然の山水に模して巧みにしつらえられ、桜の花が散る赤い毛氈の端に、長い柔らかな黒髪の乙女がかしづいている。紅毛の異人にあくまでも従順で礼儀正しい日本人、常に笑顔を絶やさず、金銭にも淡白で無償の奉仕を申し出る日本人、神社仏閣は小規模に整い精緻な工芸が内部に温存されている濃やかな日本的な美、壮大な土木や高層の建築遺構などがなく小さくまとまっている日本の技術—これら、いわゆる古き良き日本はすでにない。[庄田 1990:193]

この庄田の「いわゆる古き良き日本」へのノスタルジーの文脈を、当時の喜賓会でも同様に読み取った可能性は十分に高い。重要なのは、この「オールド・ジャパン」への懐かしさの文脈が、今後の日本側にとって、欧米による承認と賞賛として利用していく原点となったという点である。そういった意味で HTJ を剽窃、引用した喜賓会側からすれば、「オールド・ジャパン」は庄田の訳のように「古き良き日本」として捉えたと考えられる。そして、先程の「チェムバーレン及メーソン氏の抗議」は、喜賓会側は日本の伝統文化を外国人が賞賛、評価していると捉えていたからこそその逆用に過ぎず、彼らの抗議の意図するところは読み取れなかったと推測される。だからこそ、その後の喜賓会の旅行ガイドブックの冒頭に引用や推薦文を掲載するという行為がまかり通ったのではないだろうか。

8 おわりに 旅行ガイドブックと「オールド・ジャパン」

以上、HTJ の成立と背景を、初版以前から最終版である第九版まで検討した。これによって明らかになったのは、外国人の外国人による外国人のための日本探検や研究の蓄積である探検紀行の集大成が旅行ガイドブックである HTJ となったという過程であった。そして、三版以降の著者のチェンバレンもまた、典型的なオリエンタリストであったという事実も明らかになった。そして、HTJ が極めてオリエンタリズムの濃厚な探検紀行の要素を多分に汲んだ情報媒体であったことを意味している。

ミルンによると、日本の人々を含む日本の風景を「絵のように美しい'picturesque'」と

する表現は、「オリエンタリズム的」かつエキゾチックな「古い日本(オールド・ジャパン)old Japan」と緊密な関係にある[ミルン 2013a:149]。そして、HTJはそうした日本の伝統を賞賛し「弱い」文化が欧米の「強い」文化に脅かされているかのような表現が反映されている。つまり、「真の'genuine'」日本は、細やかで古風で産業化以前の生活様式といった、弱さや儂さ、遅れを象徴する表象における「古い日本(オールド・ジャパン)」にある。しかし、そうした表象は日本が軍事的な成功を収めたことによって変化し、結果として永続的な日本の伝統を再び強調する意味に変化していった[ミルン 2013a:149]。

HTJを執筆したのは、初版、第二版は外交官のアーネスト・サトウとホーズ、第三版から第九版の最終版は、チェンバレンとメイソンの二人であった。特にサトウとチェンバレンは日本学の始祖であり巨人とも称される重要人物である。二人はHTJの出版以前に結成された日本初の学会である日本アジア協会の会員であった。日本アジア協会は、当時の旅行家、文筆家等も含む外国人による日本研究ネットワークによって構成されていた。つまり、HTJは当時の外国人たちによる日本研究や日本探検、日本旅行の粋を集めた結晶であった。その情報源である、イザベラ・バードに代表される旅行家たちによる体験的、主観的、叙情的な風景描写は、まさに「探検紀行」と言えるものであった。

そして、探検紀行を日本学の発展と共にHTJという旅行ガイドブックに一冊にまとめることによって、大きな情報の変化があった。まず、当時の在日外国人たちによって日本が発見され、調査、記述された点である。次に、調査、記述された外国人たちの情報を収集し、一冊の旅行ガイドブックに集約することが可能になるほど外国人たちによる日本研究が成熟していたという点もある。そして、その学術的興味の対象である、旧時代の名残が濃厚に残る明治初期の日本の姿を懐かしみ、日本独自の宗教や歴史を積極的に評価した点がある。これが現代に通じる、いわゆる伝統的な日本イメージの始まりとすることができる。ここで留意すべきは、伝統的な日本とは、明治以前の前近代的な日本ではなく、開国、維新の間もない若き日本の姿である「オールド・ジャパン」であった点である。それは、外国人たちのもたらす欧米の文化や技術を歓迎し積極的に吸収しようとする外国人にとっての理想郷であった。そして、欧米のまなざしによって誕生した探検紀行は、旅行者向けの旅行ガイドブックとして一冊にまとめられたことによって、欧米の知識人や富裕層に日本の存在を知らしめ、日本を欧米の知的枠組みの中に組み込んでいったのである。

ここで重要なのは、まなざされる日本側も、そうしたまなざしを意識し、逆発信に利用するようになった点である。オリエンタリストたちの理想郷である「オールド・ジャパン」

へ懐かしさを、欧米による承認と賞賛という形で把握したのである。それはまなざしていた欧米側にとってまさに意図せざる結果であった。HTJ という旅行ガイドブックは、単なる旅行のための情報源だけではなく、その背後にある外国人からの最初期のまなざしの反映である「探検紀行」のエッセンスを一冊に凝縮したオリエンタリズムの集大成となった。そしてその後の旅行ガイドブックもまた、欧米による承認と賞賛の文脈に利用することによって、オリエンタリズムの名残を濃厚に残したものとなっていくのである。

第三章 公式案内の誕生

第三章は、大正初期に出版された鉄道院制作の『東アジア公式案内』の成立過程を国民国家形成と関連付けて明らかにする。特に、国有化間もない鉄道院を中心に、「公式」案内制作に踏み切った対外的な観光政策を検討することによって、外国から受けていたまなざしを日本がどのように受容し、今度は主体へと変わっていくかを明らかにする。

1 はじめに

日露戦争後の日本の対外的な観光政策は、どのような意図を持ったものであったのか。本章は、1913(大正2)年に、国有化まもない鉄道院から英文で刊行された『東アジア公式案内』(以下、OGEA)(写真8, 写真9)を事例として、国民国家の形成と関連付けて論じることとする。本書は、後藤新平が初代鉄道院総裁であった時代に巨大な予算を投じて行った大規模な出版事業であるにも関わらず、これまでほとんど注目されることがなかった⁴³。

先行研究としては、旅行史を専門とする中川浩一が、本書の製作の経緯を詳細に記述し、「我が国有鉄道がその100年をこえる歴史の中で実施した文化事業では、一等地を抜く存在」と評価した[中川 1979:234]。また、経済史家の老川慶喜は後藤新平の大陸政策におけるOGEA製作の位置づけとその経緯を詳細に報告している[老川 2008a]⁴⁴。本書の位置付けにあたっては日本の鉄道政策についての詳細な展開について考察する必要があるだろう[老川 2008b]。一方、後藤新平の評伝を書いた鶴見祐輔は「ドイツの『ベデカー案内記』に範を取ったけれども、その構想はベデカーより遥かに雄大であった」[鶴見 2005:237]とし、旅行案内書として評価している。ベデカーとは、ドイツのKarl Baedeker社による旅行ガイドブックで、19世紀中頃から現在に至るまで、信頼できる旅行ガイドブックの代名詞として欧米圏で熱烈な支持を集め、1980年代からは日本編も刊行されていた。しかし、

⁴³ 本書への言及は、『日本鉄道史』には「大正二年十月鉄道院ハ英文ヲ以テ東亜旅行案内満州朝鮮部ヲ発行シ三年七月日本部、四年四月支那部、六年四月東印度部ヲ発行シタリ[鉄道省 1921:216]とある。また、『帝國鉄道大観』には、「国有後鉄道当局は(中略)、明治四十二年東亜交通案内の編纂に志し、官吏を支那、印度其の他の地方に派遣して、汎く史料の蒐集に当たらしめ、第一巻朝鮮満洲之部を大正二年に、第二巻第三巻日本の部を大正三年に、第四巻支那の部を大正四年に、第五巻東印度の部(比律賓、仏領印度支那、暹羅、馬來群島、及蘭領東印度等を含む)を大正五年に、夫々逐次出版し茲に全部の完了を告げたのであつた」[帝國鉄道大観編纂局 1927:10]8とある。『日本国有鉄道百年史』は、「内外人旅行のため最も必要な旅行案内については鉄道院は大正2年10月英文案内の『東亜旅行案内』満洲朝鮮部を発行、3年7月、日本部、4年4月、支那部、6年4月、東インド部を発行した」[日本国有鉄道 1972:489]と記している。

⁴⁴ 2008年にエディション・シナプス社から復刻された際に添付されていた解説である。

OGEA は膨大な情報量を有しているにも関わらず、言及する資料は多くはなく研究も十分ではない⁴⁵。

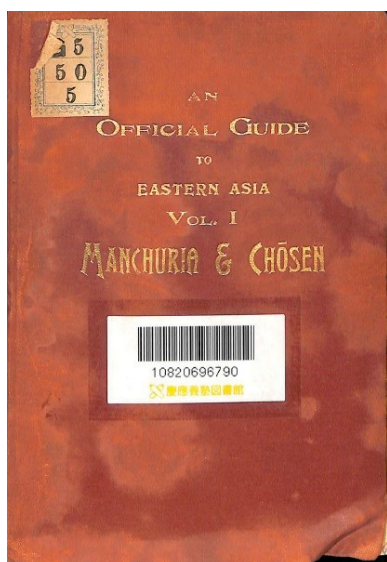


写真 8

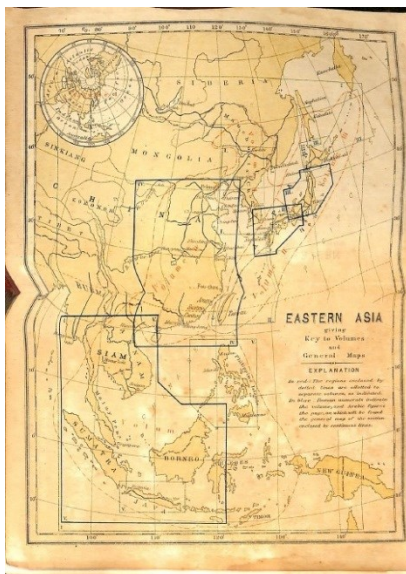


写真 9

写真 8, 写真 9 共に [Imperial Japanese Government Railways 1913] (慶應義塾図書館所蔵)

OGEA の出版には、日露戦争(1904～1905)後の中国大陆へ徐々に足掛かりを固めつつある植民地主義的な姿勢と、それを可能にした鉄道網の整備、そして国策としての外客誘致を組織的に行うジャパン・ツーリスト・ビューローの設立(1912 年)の三点が大きな影響を与えている。これらは、日露戦争にかろうじて勝利した日本が、欧米に対して観光という文脈を巧みに使用し、近代的な国民国家であることを表明するための大きな証左であると言える。

本章は、中川や老川をはじめとする先行研究をもとに、当時の時代背景を検討し、OGEA を日本の国民国家形成と関連付けて論じるものである。

2 鉄道院の OGEA 製作の意図

国有化間もない鉄道院が OGEA を刊行した意図は、以下の三点であると考えられる。

⁴⁵ 日本交通公社(当時)は、社史で、「鉄道院が過去八年の歳月と非常な努力を払って編集に努めた当時極東旅行に関する最高の権威ある案内記」[日本交通公社 1962:60]と記している。1996 年に横浜開港資料館で行われた企画展示のカタログでは「オフィシャル・ガイド」として簡単に紹介されている[横浜開港資料館 1996:32]。いずれも紹介程度に止まる。

第一は大陸横断鉄道の開通に伴う経済的効果への注目である。鉄道院初代総裁の後藤新平は、日露戦争後まもなくロシアを訪問して満鉄と東清鉄道の連絡運輸開始に関する交渉を行い、ヨーロッパと東アジアを結ぶ大陸横断鉄道を完成させた実績があり、日露戦争によって得た鉄道の権益を最大限に活用して日本が欧米と直接に交流を図ることで、経済発展に結び付けようとした。そのためには、当時の先進国であった欧州の国々に対して、国際的に流通する言語、特に英語によって、東アジアに関する正確な情報発信をする必要があった。そして、経済的に豊かな国々から観光客を呼び込めば、日本を豊かに出来るとする観光産業の萌芽もあった。OGEAの第一巻が日本ではなく、満州と朝鮮であったことは東アジア全体を視野に入れた発展を目論んでいたことを意味する。このことは、当時の鉄道院旅客課長の木下淑夫が、ジャパン・ツーリスト・ビューロー設立に際し提示した呼び掛けに明確に表れている。その内容は以下の通りである。

日露戦争の結果として、急激に増加した外債の金利支払、並びに近年輸入の超過等より生ずる正貨の流出多きに対し、之を補完するがために漫遊外人の内地における消費額を多からしめることは、国家の経済上の見地よりして最も重要な事である。外人の内地漫遊は、単に彼らが内地における消費に止まらずして、内地旅行の際、その地の産物が彼らの耳目に触れ、その結果、之を海外に紹介するに至るが故に、間接には輸出貿易を発展せしむるの利益もあるのである。(中略)漫遊外人の増加を図るは、斯る遠大なる目的と共に、直接我らの従事する鉄道の収入を増加する所以であって、我々は業務上よりするも之を優遇し、常に満足をせしむるに注意するべきである。[日本交通公社, 1982, pp.13-14 より重引。原文は木下淑夫(1912)「ジャパン・ツーリスト・ビューロー設立に就て鉄道従業員に望む」『鉄道』鉄道共攻会]

第二は当時の旅行ブームとの関わりである。19世紀後半、イギリスのトーマス・クック社が始めたツアーコースの設定による旅行斡旋業は、瞬く間に欧米の人々に旅行ブームを巻き起こし、20世紀初頭には、欧米の富裕層が世界中を旅行することが流行した。1908(明治41)年に、鉄道院はロシアのユーラシア大陸横断鉄道と連携契約を結び、同年には朝日新聞社主催で、イギリスのトーマス・クック社の協力による日本初の民間人による世界一周旅行が行

われた⁴⁶。それは、北太平洋航路でアメリカからヨーロッパへ、そして連携が始まったばかりのシベリア鉄道経由で帰国するという旅であった。これを契機に欧米からの観光客をアジアに向けるとなれば海外向けの旅行ガイドブックは必須である。

第三はナショナリズムとの関連である。日露戦争の勝利はアジアや中東など「非白人」の国々に勇気と希望を与え、日本をモデルにして白色人種の支配に対抗しようとする機運が世界的に高まった。その前触れになったのが、岡倉天心による英文の著作の刊行である。『東洋の理想』(*The ideals of the East : with special reference to the art of Japan*, 1903)を刊行して、その冒頭で「アジアは一つ」という有名な言葉を記し、引き続き『日本の目覚め』(*The Awakening of Japan*, 1904)をいずれも英語による記述で刊行したが、日露戦争によって「アジアのめざめ」が現実のものになった。岡倉の二冊の英文諸作はイギリスの旅行ガイドの大手で、当時の日本について HTJ を出版していたジョン・マレー社であったことは注目される⁴⁷。日露戦争後に、欧米人の旅行ガイドでなく自分たちの見方で日本を海外に紹介すること、つまり日本人の手で、真の日本文化と日本精神を全世界に宣伝することで日本の国際的地位を高めたいという願いが起こったことは、当然の流れだっただろう。日本人自身による初の海外向けの「公式」(official)旅行ガイドブックを刊行することで、日本の国力を世界に知らせ、国威を発揚することは、「世界の日本」ではなく、「日本の世界」への躍進を支援することに繋がる。「平和」だからこそ可能な観光について情報を自前で提供することは、日本の安定

⁴⁶ 朝日新聞は、日露戦後において日本の国際的地位の向上と経済力の拡大を背景に、イギリスのトーマス・クック社と提携して、第1回世界一周ツアー旅行「世界一周旅行」を企画して実施した[小林 2009]。日本人による世界一周は明治4年の岩倉使節団の外交の旅に次ぐものだが、民間人の参加を募集しパッケージツアーであった。旅費は2340円(現在の1170万円)、銀行家、繊維業、貴金属、株取引などで、アメリカからヨーロッパへ、そしてシベリア鉄道でアジアを横断した。同社は第2回世界一周旅行会を計画し、応募者の中から会員57名、特派員5名が選出され、横浜港からアメリカ、イギリス、フランス、イタリア、スイス、ドイツ、ロシアの各国を回遊し、7月18日 敦賀港へ帰着する103日間の旅行を行った。この間に明治42年にも、クック社協力のもと、3月18日から6月21日にかけて、ツアー客6、7名の世界一周旅行が行われ、1909年(明治42)には、渋沢栄一が団長となって50名を率いた「渡米実業団」が、1909年(明治42)8月19日より12月17日までアメリカを旅した。

⁴⁷ 『東洋の理想』1903をジョン・マレー書店(ロンドン)から、『日本の目覚め』1904をセンチュリー社(ニューヨーク)及びジョン・マレー社(ロンドン)から刊行している。それと同時に、当時の英文による日本関連の書籍の出版事情に関して、HTJとOGEAの出版・販売を行った会社に奇妙な一致が見られる。先述した岡倉天心の著書も、HTJの出版社と同じジョン・マレー社から出版されていた。マレー社は、東アジアに関する総合的な地理や歴史の情報を提供する権威ある出版社とされていたのである。日本での販売は、HTJの日本での販売を行い、後にOGEAの海外販売委託を行っていたケリー&ウォルシュ商会である。

を世界に誇示すると共に、ナショナリズムの興隆をもたらす効果が期待された。そのために、国家の威信をかけて、膨大な予算(当時の金額で約 20 万円)を OGEA の出版に投入して約 8 年の歳月をかけ完成させたのではないだろうか。

第一、第二の目的は、当時の様子を伝える資料や先行研究からも大いに説得力のあるものである。当時の記録では「旅行案内書」として OGEA は扱われているし、日露戦争勝利によって南満洲鉄道が設立され、シベリア鉄道との連携も可能になった。欧米から陸路で東アジアへの旅行客を求める日本にとって、欧米向けの旅行ガイドブックの製作は至上命題と考えられたのは想像に難くない。しかし、第三の目的こそが、第一、第二の目的に隠れた真の狙いであった。その狙いを読み解く大きなヒントとして、ベネディクト・アンダーソンの議論が非常に興味深い。

ベネディクト・アンダーソンは、著書『想像の共同体』増補版(1997 年)において、新興国家の「国民国家」形成には、19 世紀半ば以降の植民地国家のイデオロギーがその下敷きになっていると主張した。そして、植民地時代の制度や装置に注目した。特に、人口調査、地図、博物館の三つが大きな役割を果たしているとし、これらが一体となって、植民地国家がその支配下にある人間たちが何者であるかを性格付け、支配領域の地理、国家の系譜の正当性を根底的に形成したと考えている[アンダーソン 1997(1991):274-310]。鉄道院の OGEA の製作は、この議論を踏まえるとその位置付けが明確になる。アンダーソンによると、人口調査は、植民地時代の進行と共に、「人種」カテゴリーが次第に「宗教」カテゴリーよりも重要視され、分類の為の「アイデンティティ範疇」は「人種」が優位で他は「その他」として扱われるようになったという[アンダーソン 1997(1991):274-310]。次に、地図については、現地の主権を植民地国家が「相続する」という形で、19 世紀末に「歴史地図」が流行する。その結果、新しい製図法の言説(カルトグラフィック・ディスコース)により、特定の領域を持ち、国境で区切られた王国の政治伝記的物語(ナラティヴ)が歴史的重みを持つ[アンダーソン 1997(1991):274-310]。これによって、地図上で国境によって区切られた「国」の「歴史」が成立可能になる。「地図」が「国家」を生成するのである。博物館も、地図と類似した役割を持つ。植民地時代の博物館は、民族学や考古学の成果に基づいて、遺産や知識を蓄積することで被征服民となった人々の実態を明示し、独立国家として歩みを始めた時には、歴史的アイデンティティの中核を表象する展示が行われ、「政治的博物館化」が進むと述べる。博物館に展示される「国家」の歴史的遺産の陳列やキャプション付き説明による紹介は、旅行ガイドブックには欠かすことのできない情報源である。博物館は規模が大きくなれば、視覚

的にも感覚的にも国家のイメージを強化し定着させる。それは、19世紀～20世紀に流行した博覧会の論理とも類似している。OGEAは「国家」を単位とした旅行ガイドブックで、その威信がかけられることで、政治性を強く帯びることになった。

OGEAは重要な問いかけを我々に突き付けている。鉄道院によるOGEAの刊行は、単なる旅行ガイドブックのそれに止まらない。日本の鉄道院という国家の組織が威信をかけて、Officialと銘打って、高額の予算を投じて豪華な日本独自の「東アジア」についての旅行ガイドブックを英文で出したことの意義は何か、これこそが問われるべき問題なのである。もちろん、OGEAの企画立案から刊行までの全てに関与した鉄道院初代総裁の後藤新平という人物の圧倒的な影響も考慮しなければならない。

3 OGEA製作の政治的背景

OGEAが刊行された当時の世界情勢はまさしく帝国主義の時代であり、日本は日露戦争(1904-1905)の勝利で、ポーツマス条約を締結し、樺太(サハリン)の南半分と、東清鉄道の南満洲支線(長春～大連間)の敷設権などを譲り受け、韓国に対する権利が認められた。つまり、大陸進出の糸口をつかんだのである。日本は満州での割譲された鉄道施設とその付属地を中心に、1906(明治39)年、南満洲鉄道株式会社を設立した。これは半官半民の特殊会社で、初代総裁には台湾総督府元民政長官の後藤新平が就任した(在任期間1906.11.13～1908.7.14)。後藤は、台湾に次いで満州でも植民地経営に乗り出したことになる。1907(明治40)年には割譲された南樺太に樺太庁が設置され、更なる植民地へと向かう。当時、国内においては、政府は鉄道を重要な軍事輸送の手段と考えて、1906年から07年にかけて、五大私鉄⁴⁸をはじめとする日本の主要私鉄17社を国有化した。

特筆すべきは、OGEAの作成が開始された1908(明治41)年には、幾つかの重要な出来事が起きている点である。まず、ロシア・日本の連絡運輸会議が行われ、南満洲～北満州間、北満州及び沿海州と日本内地間、ロシア各鉄道と日本内地間の旅客及び手荷物輸送に関する協定が締結した。これによって、旅客・手荷物は、東清鉄道・満鉄・朝鮮鉄道・関釜連絡船・大阪商船・ロシア義勇艦隊により、ウラジオストック及び釜山経由でロシア各鉄道と日本内地間に直接運輸が可能になった。この会議の直後、第5回シベリア経由国際連絡会議(ブラッセル)に鉄道院、満鉄、大阪商船が参加し、以下の三連絡運輸協定を結んだ。

⁴⁸ 北海道炭礦鉄道、日本鉄道、関西鉄道、山陽鉄道、九州鉄道など。

①カナダ及びシベリア経由世界一周連絡

②欧州と日本朝鮮、支那露領間の連絡

③シベリア及びスイス経由周遊連絡

これによって、日本は、ヨーロッパからシベリア、そして南満州鉄道を經由して日本本土に至る交通路を確保することになった。そして、同年末、逓信省鉄道局と鉄道作業局、鉄道庁が統合され、内閣直属の鉄道院という組織に変わった。鉄道院は満鉄の監督権も取得した。日本国内の国有鉄道、つまり国鉄は東アジアやシベリアへと繋がり管理体制を確立したことになる。

その後、1910(明治 43)年には朝鮮を併合した⁴⁹。朝鮮半島は朝鮮総督府の監督下に置かれ、満鉄と国鉄との相互の連絡は緊密度を増した。その結果、1911(明治 44)年に日露の鉄道及び汽船による貨物直通運輸に関する協定が結ばれている。翌年には、ロンドン～北米／カナダ～日本経由、シベリア鉄道でサンクト・ペテルブルク／モスクワ行きの世界一周連絡網が開始された。旅行客の周遊連絡線の確保とは、物資や人材の流通確保につながる。日本の植民地国家としての第一歩が始まったと言える。この大転換の実質的な始まりは、様々な動きがあった 1908 年であった。日本本土だけでなく大陸や南洋諸島まで視野に入れた OGEA の作成作業が同じ年に始まったことは偶然ではない。旅行ガイドブックは単なる観光案内ではなく、帝国日本の野望の現れであったと考えていいだろう。

鉄道院の成立に先だって、後藤は帰国して鉄道院の初代総裁に就任し(在任期間 1908.7.14～1911.8.30)、ほぼ同時に OGEA の刊行に着手した。鶴見祐輔は後藤新平の評伝の中で、以下のように述べている。

伯の鉄道院総裁となるや、ただちにこの『英文東亜案内』編纂の事業に着手した。それは普通の案内記と異なる遠大なる計画であった。ドイツの『ベデカー案内記』に範を取ったけれども、その構想はベデカーより遥かに雄大であった。ベデカーが、実際旅行の便覧たる目的に終始して執筆せられたるに反し、該案内記は美術、哲学、文藝、茶の湯、庭園、演劇、能狂言のごとくにいたるまで、日本の特色を各方面から委細に説明して、文化的色彩を濃厚に盛り上げたものであった。／この事業のために、人を各地に派して、実地について材料を収集せしめ、まずに本文を持って執筆した後、最も懇切に英文に翻訳せしめ、英人二名の校閲を経て印刷した。着手したのは明治 42 年(1909)であったが、

⁴⁹ 1905(明治 38)年には朝鮮統監府が設置され、事実上の朝鮮半島の植民地化が始まった。

その第 5 巻の印刷を終わったのは、大正 6 年(1917)の 4 月で、前後 8 年の日数を消して完成したのである。[鶴見 2005b:237-238]

なお、OGEA の序文は、「1908 年から 1909 年の間に、朝鮮・満州・中国本土、インドシナ、さらに南洋諸島に専門家を派遣し、情報収集を行った。(中略)この本では、西ヨーロッパからシベリア鉄道を経由して東アジアまでのルートが示されている」[Imperial Japanese Government Railways 1913: PREFACE]としている⁵⁰。鉄道院は OGEA の製作の調査のために、1908(明治 41)年には具体的な作業に着手していた[中川 1979:236]。

後藤新平は、満鉄総裁の任にあった時に、ロシアの蔵相ココフツォフや東清鉄道副総裁ウェンツェルと交渉を重ね、南満洲鉄道と東清鉄道の連絡運輸の実現によって鉄道による欧亜連絡を達成するための口約束を交わし[鶴見 2005:588-598]、同時に OGEA の作成をほのめかすような約束も交わしている。鶴見佑輔によれば事情は以下のようなものである。

満鉄総裁として露都訪問の日、伯が蔵相ココフツォフに約したることの一は、完全なる東亜案内書を、英文をもって編纂出版し、もって東洋の事情を世界に紹介し、シベリア鉄道経由の旅客増加を援助すべし、ということであった。／しかしその目的は、単純に鉄道収益を増加しようという実利的なものではなかった。伯の真意は、これによって、日本文化と日本精神とを全世界に宣伝し、よってもって伯のいわゆる「世界の日本」より「日本の世界」への躍進に資せんとするにあった。[鶴見 2005b:237]

つまり、当時の外客誘致は、単に旅行者を増やして日本の知名度を上げるだけではなく、政治的意図が多分に含まれていた。同時に、日露戦争に勝利した「一流国」日本を対外的に認知させるという意識もあった。

日清戦争と日露戦争の勝利によって、日本は国際社会で一定の地位を確立したかに見えたが、欧米列強は日本の立場を容認せず、アジア唯一の先進国に対して警戒心を抱くようになった。こうした世界情勢の中で日本から世界への働きかけの一つとして OGEA が刊行されたのであろう。まとめれば、後藤は大陸横断鉄道の開通、海外旅行ブーム、ナショナリズムの高揚という三つの要因が絡み合う中で、欧米の旅行者への東アジアに関する情報提供を目

⁵⁰ ただし、本文には「明治 41(1906)年」と計算の合わない年号が書かれていた。しかし、他の資料との整合性を鑑み、これは西暦の方が 1908 年の誤植であると判断した。

的として、OGEA を企画し刊行したと言える。その意図は OGEA の副題である Trans-Continental Connections between Europe and Asia の文言に明確に現れている。

日本は日露戦争以後、東アジアで本格的な植民地活動に乗り出した。OGEA の刊行は帝国日本の持つ野望と結びついていたといえる。その前提にあったのは、後藤新平の指示で行われた徹底した調査であり、20 万円以上の巨額予算を組んで、専門家を現地に派遣して現地調査を実施して、膨大な資料を集めた。その結果、OGEA は英文による日本と極東地域のガイドとして長く権威を保ち、特に満州と中国に関する巻は、1960 年代になるまで、欧文の旅行ガイドブックは出版されず、重要な資料とされてきた[鶴見 2005b]。

4 ジャパン・ツーリスト・ビューローの設立

1912(明治 45)年 3 月 12 日、外国人観光客誘客促進を目的として任意団体「ジャパン・ツーリスト・ビューロー(Japan Tourist Bureau、略称：JTB)」が創立された。それは、「本会ハ外客ヲ我邦ニ誘致シ且是等外客ノ為メニ諸般の便宜ヲ図ルヲ以テ目的トス」るものであった。[日本交通公社 1965, 1985]その設立に際しては、まず、その前身で日本初の外客誘致斡旋機関[日本交通公社 1982:8]とされる喜賓会(The Welcome Society)について述べる必要がある。当時、外国人誘致のための組織であった喜賓会は、日露戦争後の経済界の不況と鉄道の国有化に伴い、資金繰りが悪化していた。喜賓会は会員による会費と寄付で運営されていたが、その寄付の多くを占めていた私鉄の多くが国鉄に吸収されたためである[日本交通公社 1985:10]。

そもそも、1893(明治 26)年 3 月、喜賓会発足の際に発表された綱領は以下の通りである[白幡 1985:113-138]。

- 一、旅館の営業者に向つて、設備改善の方法を勧告する事。
- 一、善良なる案内書を監督奨励する事。
- 一、勝地、旧蹟、公私建築物、学校、庭園、製造工場の観覧視察上の便宜を計る事。
- 一、来遊者を歓待し又我邦貴顕紳士に紹介の労を執る事。
- 一、完全なる案内書及案内地図を刊行する事。

喜賓会は、外客誘致というより、外国人旅行客に日本国内旅行の便宜を図るための善意の組織であったことが明白である。それは喜賓会の「案内書」に表れている。和綴じ風の冊子で鮮やかな色の紐で綴じてあり、紙は洋紙ではなく和紙で作られていた。カラー版画の表紙は模様が色とりどりに印刷され、写真は彩色を施したものもあり、手がかかっ

る。民芸品のような「案内書」は、外国人に対してエキゾティシズムを喚起させたと思われる。しかも、驚くべきことに、大半は贈答用で非売品であった。白幡洋三郎によると、喜賓会の作成した最初の英文地図は「来遊外国人に 50 銭で販売する他、ほとんどを在外日本公使館に配布し、他にはトーマス・クック社をはじめとする海外の旅行代理店や有力ホテルに『委託して頒布を依頼』した」[白幡 1985:131-132]のだという。

特に、喜賓会は当初、「完全なる旅行ガイドブックを作る」ことを綱領に上げていた。それにもかかわらず、第二章で言及したように、自らの作成した外国人向けの英文によるパンフレットや旅行ガイドブックには、堂々と海外のガイドブック、殊に HTJ の参照を推薦している⁵¹。つまり、当時は日本人によって書かれた信頼性の高い英文の旅行ガイドブックは存在しなかったことが露呈している。

HTJ は、当時の外国人による日本研究の集大成だった。そこに記述された日本の表象として特筆すべきものが、「オールド・ジャパン」である。この表象に含まれるものとして、明治以降の近代的な建築物や名所よりも、日本固有の神社仏閣、歴史遺産、美術品などの記述がある。こうしたまなざしは、多分にオリエンタリズム的な要素を含んだものであった。しかし、「オールド・ジャパン」に対する HTJ の評価は、日本側にとって肯定的な「古き良き日本」への欧米からの賞賛として受け入れられた。このイメージは、後の OGEA 作成の際も大いに意識されている。老川は以下のように指摘している。

『東亜英文旅行案内』(本章文では OGEA と略記)が世界に紹介しようとしているのは、日本の美しい自然景観と、絵画、漆器、陶器、青銅器などの美術品、皇室、武士道、愛国心、忠誠心など、欧米とは異質の慣習や思想であった。ベデカーの旅行ガイドブックは、実際の旅行の便覧となることを目的としていたのであるが、『東亜英文旅行案内』は美術、哲学、文芸、茶の湯、庭園、演劇、能、狂言などにいたるまで、日本の特色を各方面から委曲に説明して、文化的色彩を濃厚に盛り上げようとしていた。[老川 2008:16-17]

HTJ に内在していたオリエンタリズムの眼差しは、OGEA に受け継がれると共に意図的に採用されることで、更に深みと広がりを加え、欧米に対して逆照射を行うことになっ

⁵¹ その背景には、喜賓会が当初製作した外国人旅行ガイドブックを、HTJ 著者のチェンバレンとメイソンの抗議により出版取り下げになったという経緯があった。第二章参照。

た。旅行ガイドの主導権を日本側に奪還することが OGEA の意図の一つであり、オリエンタリズムを濃厚に受け継いだ古き良き日本という表象は観光客を誘う手段として有効に駆使された。そして、イメージを現実のものにする外国人の旅行誘致のための旅行会社が、新たに作られることになった。

『日本交通協会七十年史』によれば、JTB 発足の契機は二つあったという。第一は、1905(明治 38)年当時、日露戦争後のポーツマス講和会議が行われていた時、木下淑夫は留学先でその経緯を現地の新聞記事で読み、「現実には、英米人たちは、残念ながら日本の真の実情を理解しておらず、日本を文化程度の低い、アジアの一小国ぐらいしか考えていないのを見て、木下は残念に思った」ことが、彼の外客誘致論の基盤になった。帰国後、木下は直接の上司である鉄道庁総裁(当時)の平井晴二郎に進言し、それが「ジャパン・ツーリスト・ビューローの設立の動機となったのである」[日本交通公社 1985:10-11]。木下による海外の知見をもとにした外客誘致運動が JTB 設立の大きな要因となった。彼は 1900(明治 33)年のパリ万国鉄道会議に参加し、1904(明治 37)年にアメリカに自費留学、翌年からは官費留学の扱いでアメリカから西欧に渡るなど海外の知見を広めていた[中川 1979:234-235]。彼は 1907(明治 40)年の鉄道国有化に伴い、鉄道院旅客課の職員となった⁵²。

第二は、1910(明治 43)年、ニューヨークのジャパン・ソサエティ会頭のリンゼー・ラッセルが来日した際の言葉である。ラッセルは、「資源に乏しい日本の経済を反映させるためには、日本の恵まれた自然の景観を大いに海外に宣伝し、外客誘致によって外貨の獲得をはかるべきだ。それにはまず外客誘致の機関を設置するべきである」と関係方面に力説した。同年、スイスのベルンで開かれた第 8 回万国鉄道会議に出席した鉄道院の副総裁平井晴二郎は、帰国後にラッセルの言と木下の外客誘致論に共鳴し、「外客誘致の事業は、国鉄が中心となって協力に推進すべきだ」と結論付けた[日本交通公社 1982:12-13]。

木下は喜賓会の渋沢栄一と会見して、喜賓会の財政的な窮状を鑑み、国鉄で別途外客誘

⁵² 中川は、南満州鉄道総裁を経て第二次桂内閣における通信大臣の地位に後藤新平が就任したのは 1908(明治 41)年 12 月 5 日であるのに対して、既に木下は前年の 1907(明治 40)年 11 月 16 日以来旅客課長の地位に就いていたと指摘した。そして、OGEA の企画が実行に移されたのは翌年秋だとして、実質的な企画運営とその業績は木下にあるとしている。その後、鉄道院の総裁がめまぐるしく代わった後も一貫して計画が進行したのは「特定の総裁の思いつきにおわることなく、鉄道院の幹部の間で、ぜひともなしとげる必要のあるものと認識されたため、と考えられる」と結論づけており、OGEA の製作は後藤一人の功績ではないことを強調している[中川 1979:234-236]。

致機関を設立するのならば喜賓会が協力する旨を取り付け、平井が中心となって、日本郵船の林民雄、東洋汽船の白石元治郎、帝国ホテルの林愛作らの援助の下に、満鉄、大阪商船など、有志が国家的事業として各自出資して、喜賓会に代わる新しい外客誘致の組織を結成することになった。しかし、有力な資金援助が必要不可欠であったために時間を要し、平井は木下を帯同して、1912(明治 45)年 1 月に当時鉄道院総裁であった原敬を訪ねて説得を行っている。原は木下の説明を聞いて、年間予算の半額を鉄道会計で引き受ける旨を即決した。鉄道院は、その後の JTB の発起人の筆頭としても、そして結成時の筆頭としても、幹事として平井、木下らがその名を連ねることになった[日本交通公社 1982:15-18]。喜賓会の解散は 1914 年であった。

1924(大正 13)年には、日本旅行文化協会(後に日本旅行協会と改称)が設立されて、4 月に旅行専門誌『旅』を創刊した[赤井 2008]。そして、日本旅行文化協会は「汽車時間表 附汽船自動車発着表」として 1924(大正 14)年に日本初の時刻表を発刊した。赤井はこの時代の状況を「旅行の近代化」としてとらえ、日本旅行文化協会及び日本旅行協会の機関誌として刊行されていた雑誌『旅』の諸論考を、限定的ながらも市民的な公共圏として機能した雑誌の研究という観点で分析している。各地で自発的に組織され活動した旅行団体の方向性と国家機構としての鉄道省の方向性との共通性と差異、旅館の改善と団体旅行の改善という近代化課題について行われたこの雑誌での意見交換の内容は、帝国主義の時代にあって、観光と政治の関わりがいかに密接なものであったかを教えてくれる。

そして、ジャパン・ツーリスト・ビューローは 1934(昭和 9)年に日本旅行協会と合併する。時代の流れは戦争に向かっており、「平和」を前提とする観光を許容しなくなっていた。

5 おわりに 政治と観光、そして国民国家

以上、OGEA にまつわる鉄道院を中心とした外客誘致戦略を概観した。

OGEA 製作の背景における大きな要素は、大陸への足掛かりの最たるものである植民地と鉄道網だった。それは、外貨の獲得、輸出貿易拡大のチャンスを外客誘致で狙うことはもちろんのこと、着実に大陸へとその勢力を伸ばしつつある日本の植民地国家の「国民国家形成」の意図の反映であった。旅行者の動きは、長じて植民地国家的国民国家の影響力を反映する鏡という側面が、当時の日本にはあったのではないだろうか。国内情勢に目を転じてみると、戦争による政治的・経済的打撃は大きく情勢は必ずしも安定したものでなかったにもかかわ

らず、対外的にこれだけ積極的な姿勢を示していたということは、明らかに政治的な意図があったものと考えられる。

同時に、「公式(official)」という語を冠した、国家による旅行ガイドブックは当時他国ではほとんど見られないことも特筆に値するだろう。意図的にこの語を配した鉄道院は、今後日本が植民地国家として欧米列強に名を連ね、「国民国家形成」に並々ならぬ意欲を持っていたということだろう。OGEAは、アンダーソンの指摘する「国民国家形成」の三つの要素、人口調査、地図、博物館、その三つの要素に匹敵するものであると言える。日露戦争後の大正初期の外客誘致は、観光というレトリックを用いた、積極的な国民国家形成、植民地国家の確立を意図したものであったことが見えてくる。

OGEAに関する当時の英字新聞の書評が残されている。イギリスの *The Times*(1914 年 3 月 3 日)では、賞賛しつつも最終的な評価を差し控える慎重な姿勢が伺える。

それまでは日本本土については素晴らしいガイドブックが長い間存在していたが、欧州からの旅行者にとって中国や満州、朝鮮についての有用なものは存在していなかった。(中略)手ごろな形態で、かなり充実した旅行ガイドブックで、素晴らしい出来の写真が豊富に掲載されており、添付されている地図やプラン概要も詳細に値する。(中略)今後の巻も後藤男爵と同様のレベルを保てるのであれば、編集者たちは賞賛に値する。

[Times 1914]

この書評は本書第一巻が、日本についてのガイドブックではなく、中国・満州・朝鮮に関する初めての英文ガイドであることを評価しているのであり、内容よりも写真・地図・旅行計画といった形式を褒めている。ただし、これは全巻を見ての総合的評価ではない。したがって、第2巻以後の内容に関して、後藤新平の持つ金脈と人脈を活用して、真に役に立つガイドブックを作りたいことを期待しているとも読める。ちなみに、「中国」は第4巻で当時未刊行なので、やや筆が走ったのか、それとも満州の次は中国という日本の野望を見破ったのかは不明である。しかし、警戒心を交えていたと思われる。

全巻完結後の評価としては、英字新聞、*Japan Gazette*(1919 年 2 月 10 日)掲載の紹介記事があり、事実誤認もあるが、OGEA を、「あまりに日本の立場に立ち過ぎている」「外国事情との比較の視点が欠如している。日本のガチョウを白鳥の見地で見過ぎている」、「外国人にとってほとんど関心がないような事項を扱いすぎている」[Japan gazette 1919] と指

摘している。あまり好意的な紹介ではないが、日本人の独りよがり、比較の視点の乏しさ、引いて言えば、文化の違いを認める観点の希薄さの指摘と受け取ることができよう。

OGEA はそれまでの欧米人による英文の旅行ガイドブックに見られたオリエンタリズムを反転させ、ゲストに対するホストの優位性を提示した。あえて英語で *official* と名乗り、内容も日本人が原文を書くというオリジナリティへのこだわりは、自分たちこそが日本の「真正性」を熟知しているという自負の現れである。その背景には急速に近代化を進める中で勃興した観光産業と政治との複雑にからみあった関係性もある。本章が主張したいことは、アンダーソンが「国民国家」の成立にあたって重視した人口調査、地図、博物館の要素が、OGEA にも同様に表れているということである。旅行ガイドブックは、「国」を単位として、あるいは「地域」を単位として成立し、「領域性」を基盤としたある程度の国としての政治的・経済的な成熟を前提として出現する。「メイド・イン・ジャパン」の自負を持った英文の旅行ガイドである OGEA は、急速に東アジアの植民地化を進める日本が、「平和」を前提とする観光に積極的に乗り出すことで、帝国主義や「戦争」をソフトに覆い隠す試みであった。もちろん、出版にあたってはパトロンの存在が不可欠であり、後藤新平という卓越した帝国のイデオログの後ろ盾があったことがこの大事業を完成に導いたのであり、政治と観光の結合が顕著に見られる。OGEA は観光という新たな産業のもとで、急速に近代化を進める日本の「国民国家」の生成の一端を顕著に示す表象のテキストと見ることができるのである。

第四章 公式案内の展開

第四章では、大正初期から昭和初期までに出版されたアメリカのヒュートン・ミフリン社の *Terry's Guide to Japanese Empire*(以下、TGJE)と鉄道院出版の *An Official Guide to Eastern Asia*(以下、OGEA)、鉄道省国際観光局出版の *An Official Guide to Japan*(以下、OGJ)を検討する。その際、TGJE に描写された「芸者」表象を中心に、外国からまなごしを再び向けられた日本がそのまなごしをどのように捉えていくかを明らかにする。同時に、「芸者」表象をめぐる他の外国人向けの当時の資料を追うことにより、まなごしの重層化を描き出すことを目的とする。

1 はじめに

大正～昭和初期の外国人向けの旅行ガイドブックに、芸者が紹介されている事実がある。

曰く、「ゲイシャとは、お座敷に上がって踊りや楽器を演奏して芸事を披露したり客と遊んだりして宴席を盛り上げる女性の職業であり」、日本各地で見られるという。そして、「東京または東京周辺ではゲイシャと呼ぶが、大阪や京都周辺ではゲイコと呼ぶ」[Terry 1914: clxi]。また、このようにも書かれている。

宴会は、芸者なしで不完全であると考えられている。また、ボート・パーティー(屋形船か)などに伴うため、単純な昼食を快活にするために、彼女たちはしばしば呼ばれる。

[Terry 1914: clxi]

これらの記述は、1910～1930 年代にアメリカを中心に出版された日本旅行ガイドブックの TGJE(写真 10)に書かれたものである。芸者は、現在でも日本のイメージとして外国人に定着しており、観光庁のホームページでも芸者が手を合わせている写真が使われている⁵³[観光庁 2015]。その影響力は国内外に及んでいると考えられる。

⁵³ 観光庁ホームページ「政策について」上部参照。「政策について」の文字の地の写真に、芸者か舞妓と思しき若い女性が神社で手を合わせている写真が使われている [観光庁 2015b]。

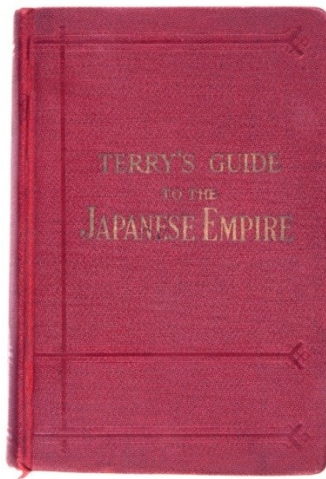


写真 10 [Terry 1933] (横浜開港資料館所蔵)

本章では、1910～1930 年代に出版されたアメリカ人による日本旅行ガイドブックの TGJE 全 5 版と、同時代に日本で出版された「公式」旅行ガイドブックである OGEA (1913-1917)と OGJ(1933)、外客誘致をする日本側が製作した日本旅行案内の小冊子を比較する。そして、突如旅行ガイドブックに登場したゲイシャの項目と吉原の項目を中心に、日本による公式の旅行ガイドブックでの扱われ方との違いを通して、日本の表象として「ゲイシャ」が外国人による日本表象の形成に強い印象を与え、かつ日本側に利用されていく根拠と理由を検討する。

2 興味の対象としての「ゲイシャ」

TGJE での芸者の項目は、全部で 3 ページ書かれている。前の項目は「新聞」で、あとの項目は「乞食(物乞い)」「泥棒」と続く。書かれている順番に全く関連性はない。TGJE では、芸者の由来が白拍子から丁寧に記述されているだけではなく、現代にも通じる芸者と花魁・女郎との間違いを指摘する文章も掲載されている点は特筆に値するだろう。それに対して、「公式」と付く OGEA、OGJ ではわずか 1～2 行しか芸者は登場していないのである。このことは、何を意味するのだろうか。

外国人による芸者のイメージについての先行研究は、上田卓爾の論文「海外における『ゲイシャ』のイメージについて」が詳しい。上田は、外国人による日本の代表的イメージである「ゲイシャ」に着目し、その図式が成立したのはいつ、何によるのかを海外の文献や先行研究などから明らかにしている[上田 2013:9-19]。

上田によると、19 世紀後半以降における欧米における芸者イメージが最初に形成されたのは、1896 年 4 月に初演されたオペレッタ「The Geisha」のヒットによる。そこでの芸者イメージに加え、それから八年後に初演されたプッチーニのオペラ「蝶々夫人」の大ヒットが「日本＝芸者」のイメージを決定づけたが、そのイメージは決して日本政府が輸出したものではなく、「最初に『ゲイシャ』が世界で認知されたのはまずオペレッタ『The Geisha』であることを認識しておく必要がある」[上田 2013:11]という。そして、日本政府が万国博覧会で芸者を多数送り込んで日本のイメージ形成に貢献したとする先行研究を、日本や現地の担当官が芸者の渡航や活動を許可しなかった事実や現地メディアの事実誤認を挙げて否定している⁵⁴[上田 2013:14-16]。

山本佐恵の『戦時下の万博と「日本」の表象』においても、芸者の存在について指摘がされている。1930 年代後半の対外文化宣伝のための映画製作において、「ゲイシャ」が厄介な存在であった事実が明らかになっているのである。

また、日本の女性に対して欧米人が連想する「ゲイシャ」という強固なイメージも、日本の近代性をアピールする上で極めて厄介なものであった。「富士山、桜、芸者」といった、従来から欧米人に人気のある風物のうち、富士山と桜に関しては『四季の日本』『日本三週間の旅』『日本瞥見』といった観光映画の中にふんだんに採り入れられた。しかし、同じように外国人に人気があり日本独特のものであっても、やはり芸者のイメージは避けられた。(中略)実際、欧米人向けの映画の中—とりわけ、欧米人が撮影した日本の風物商会の映像—に映し出される芸者の姿は、欧米のニュース映画館や欧米から帰る船の中でそれらを目にする日本人には、恥ずべきものとしてしばしば映っていたのである。[山本 2012:122-123]

⁵⁴ 上田は、第二回のパリ大会(1867 年)に登場した三人の女性は「政府館コンパニオン」としているが、芸者の絵姿が展示されていたことから三人は芸者であった可能性は低い。1900 年のパリ大会にも二人の女性が登場しているが、政府は終始その渡航に難色を示していたことが明らかになっている。また、1901 年のアメリカ全州博覧会でも二人の芸者に対して旅券を発行していない。同様に、1904 年のセントルイス万博においても、34 名の芸者に対して旅券を発行したものの、途中で帰国命令が出されている。また、政府館で客にお茶を出す女性(ティガール)を現地紙が「ゲイシャ」と誤報したことについて、日本政府側が抗議をしたという事実もある[上田 2013:14-15]。万国博覧会と芸者は無関係ではないものの、日本政府側が芸者の存在についてナーバスになっていたことが分かる一例だと言える。

芸者に対して、以上のようなあまり芳しくない印象を持つ国内の事情とは逆に、外国人による芸者の興味は非常に強いものであったようだ。芸者については、幕末の開港当初から 1930 年代までに来日した外国人の多くが、旅行記などに芸者について書いている[横浜開港資料館 1996][ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935]。また、外国人たちも日本人と同様に芸者を上げたり座敷遊びをしていたりということが行われていたことも分かっている[横浜開港資料館 1996][ハーン 1926(1894)]。引き続き TGJE では、芸者の酒宴での不可欠振りが描写されている。「ある権威」によれば、芸者の「芸」だけではなく、存在自体が酒宴のなかで重要な位置を占めており、時には月に数百円も稼ぐ芸者もいるという[Terry 1914:clxi]。しかし、その「ある権威」が具体的に何なのかは全く記述されていない。

そして、興味深いのは、芸者の記述の半分近くを占めている注記の部分である。本文によると、フォントを小さくして約 2 ページに渡り「ラフカディオ・ハーンの *Glimpses of Unfamiliar Life in Japan* 『知られぬ日本の面影』の第二巻 525 ページより引用」と書いてある。ハーンは宴席で(恐らく初めて)見た芸者のもてなしを、驚嘆の目で描写している。芸者のする仕草や話し方、立ち居振る舞いから披露する芸や遊びの中身まで、実に事細かに説明しているのである[Terry 1914:clxii]。その中の文章を、引用してみよう。

最初非常に静かな宴会が、段々と賑やかな騒ぎになっていく。(中略)して、三味線は「金毘羅、舟、舟」の急調を奏しはじめる。その音楽につれて、彼女は軽快俊敏に 8 の字の形に走る。それから、酒徳利と杯を持ったまま、一人の若い客も同じ 8 の字型に走る。もし両人が先の上で出逢えば、衝突の失策を犯した方が、一杯の酒を飲まねばならぬ。音楽はますます早くなって、走るものもますます早く走る。それは彼らは調子に合わせねばならぬからだ。して、芸者が勝ちを占める。室の他の方面では、客と芸者が拳をやっている。[ハーン 1926(1894)]⁵⁵

このように、「ゲイシャ」の項目には、非常に詳細に宴席での芸者の様子が描写されている

⁵⁵ 翻訳文は落合貞三郎、大谷正信、田部隆次訳、1926 年、『知られぬ日本の面影』小泉八雲全集 3 第一書房、「第二十二章 舞妓について」。原書の初版は、TGJE と同様ヒュートン・ミフリン社から出版されている点もまた興味深い事実である。『知られぬ日本の面影』は初版からベストセラーになった事実がハーンの手紙から判明しているため、同社のベストセラーである『知られる日本の面影』のイメージを TGJE 制作の際に大いに意識した可能性は高いが、推測の域を出ない。

のである。この事実は、日本旅行に來た外国人観光客が、いかに芸者に対して興味を抱いていたかを示す証左となるだろう。こうした芸者に関する詳細な記述は、他の旅行ガイドブック資料では見られない。

それに対して、日本側の製作した旅行ガイドブックに芸者がどのように登場していたのだろうか。OGEA では、江戸中期の奢侈な文化の隆盛時、その文化の現在の後継者としての芸者の存在について言及されている[Imperial Japanese Government Railways 1914a:110]。他に、京都の祇園町についての描写は、注目すべき点である。

ここでは有名なレストランや茶屋が軒を並べ、芸者たちが歌を歌い三味線の音楽を奏でる音が夜更けまで響いている。[[Imperial Japanese Government Railways 1914a:242]

ここでは、京都の華やかな夜の描写の中に芸者が登場している。ここでの「芸者」は、イタリック表記で書かれている。「ゲイシャ」という単語が特別なものであったことが分かる証左だろう。日本の風情をかき立てる装置として、芸者が利用されているのである。

同様に、OGJ にも、京都の祇園の歌舞練場について、次のような描写がある。

祇園町の脇にある花見小路には、歌舞練場がある。ここは芸者ガールの練習場であり、四月には外国人には桜踊りとして知られる都をどりが行われるのである。[The Japanese Government Railways 1933:342]

舞妓は芸妓の妹分としての年若い芸者であるが、「芸者ガール」と表記しているのが印象的である。ここではイタリック表記ではない。それにしても、「公式」旅行ガイドブックでは膨大なページ数の中でこれしか芸者の表記がされていないということは、非常に興味深い事実である。あくまでも日本の「公式」の存在として、芸者はほとんど認められていなかったのである。

3 資料としての旅行ガイドブックの書誌学的情報

3-1 先行研究とある書評から

それでは、芸者について記載のあったこれら登場した旅行ガイドブックは、どのような

ものなのだろうか。本章で使用する資料についての先行研究としては、中川浩一が著書『旅の文化誌』(1979 年)において、旅行ガイドブック三点全てを扱っている。特に、中川は TGJE を大きく取り上げ、TGJE の作者である T・フィリップ・テリーについての略歴を紹介している。中川によると、『ベデカ案内』Beadeker に範をとったものであるが、それは「正確かつ詳細な市街地図を配することであった」。しかし、「この点に関しては、まことにいただきかねる存在であった」[中川 1979:232]。特に、記載されている地図が不正確であり、「本文の内容は、外国人の執筆という点では、よくも詳しくここまで調べたというべきだろうが、日本人の目から見れば、決して十分とはいえなかった」[中川 1979:233]。また、OGEA については、TGJE を「はるかにしのぐものであった」と絶賛し、「我が国有鉄道(当時)がその 100 年をこえる歴史の中で実施した文化事業では、一等地を抜く存在」としている[中川 1979:234]。それに対して、OGJ は「内容的に見れば改悪である」と酷評している[中川 1979:234]。

次に、横浜開港資料館は、『世界漫遊家たちのニッポン』(1996 年)において、1919 年の Japan Gazette 紙の書評「Guide-Books, Guide-Books」での内容を踏まえて、OGEA と TGJE 双方の欠点について言及している。特に、TGJE の精度が低いとしている。

最後に、赤井正二は論文「旅行ガイドブックの中の『見るに値するもの』」(2008 年)の中で、OGEA と TGJE の記載内容を比較している。そこでは特に「見せたいもの」に注目し、OGEA にはそれが存在せず、「見る価値のあるもの」にすり替わっていると指摘する。そのために、OGEA は旅行ガイドブックとしての客観性や批評性が失われたと批判的に見ている[赤井 2008]。

これらを踏まえ、本章では、記載内容を分析することには先行研究と変わらないものの、その正確性や精度を問わないものとする。また、TGJE の内容を「見たいもの=芸者、吉原」と位置づけ、それに対して OGEA や OGJ がどのように描写しているのかを「見せたいもの」「見せたくないもの」か否かで判断する。

さて、ここに、一つの書評がある。1919 年 2 月 10 日付の Japan Gazette 紙の書評「Guide-Books, Guide-Books」である。そこには、1919 年当時出版されていた過去のものも含む外国人向け旅行ガイドブック三種類についての書評が掲載されている。一つは、1881 年から出版を始め 1913 年に終了したイギリスのジョン・マレー社出版の HTJ である。二つ目は、日本の鉄道院が製作した OGEA 全五巻(1913~1917 年)である。三つめは、アメリカの Houghton Mifflin 社出版の TGJE(当時は 1914 年版)である。

書評の内容はどれも辛口である。

先頃出版された鉄道院の OGEA は、旅行者やそれ以外の人たちからもかつての「マレー(HTJ:引用者)」が洗練されたものであると言えるが、いかんせん日本の立場に立ちすぎている。(中略)他国との比較に欠けるし、外国人には対して興味のないことばかり書いてある。ガチョウを白鳥のごとく描写している。[Japan Gazette 1919]

特に、最近出版された三つめの TGJE に関しては、引用を多用し、厳しいコメントを寄せている。

三つめの「テリーの日本帝国 : A Guidebook for Travelers(TGJE)」はイギリス王立地理学会フェローの T・フィリップ・テリーというアメリカ人の制作したものであり、現在最も読まれているガイドブックである。(中略)しかし、これが許されるのであれば、この膨大な情報は好奇心による誇張表現の悪癖の実例であり、おそらく日本と日本人が地球上のどの人種より賞賛を受けやすいと認められなければならない。[Japan Gazette 1919]

また、HTJ との比較においても、TGJE を酷評している。

「マレー(HTJ)」ですら、過剰なほめ言葉で「美しい、崇高な…」などと舞い上がっているが、これはもっとレトリックな表現に溺れていると言える。(中略)テリー氏にとっての日本は美しすぎる国であり、居住者から見ればもはや夢の国に酔っているようにとれる状態である。[Japan Gazette 1919]

ここまで酷評される TGJE とは、どのような旅行ガイドブックなのだろうか。

3-2 TGJE と著者のテリーについて

TGJE は、アメリカのヒュートン・ミフリン Houghton Mifflin 社から出版された。TGJE は、1919 年当時「現在最も読まれているガイドブック」[Japan Gazette 1919]である。その事実は、1933 年まで 5 版に渡って出版された事実からも何うことが出来るだろう。

著者のテリーについては、中川が要領よく略歴をまとめている。T・フィリップ・テリーは 1864 年生まれで、「1885 年にメキシコに渡り、以後、メキシコ在住の新聞通信員として生活する。彼が日本旅行案内を編集するのは、その後の既刊に、いく度かの日本への旅行を行った体験にもとづくものと判断される」[中川 1979:230]。実際のところ、1895 年から何度も日本を訪れている。その後、日露戦争の特派員として派遣され、1912 年以降はアメリカに居住したがその後も日本に滞在していたようだ[Who's Who 1932~1933:2259]。特に、「1911 年の日本への旅は、旅行案内を編集するための資料収集という目的を持っていたと思われる」[中川 1979:230-231]。また、「T・P・テリーが旅行案内執筆のための材料を集めに来日した時期は、鉄道院が外国人旅行客の誘致をねらって、積極的な活動を開始した時期と一致しているから、日本国内での取材には、多大の便宜を供与されたようである」[中川 1979:230-231]。このことについては、日本交通公社五十年史に大正二年度の記録として次のように書かれている。

個人斡旋で特記すべきは案内記作者として世界的に有名な米人テリー氏の来訪であった。同氏はすでに独力で最も実用的な英文日本案内記を編纂されていたが、同氏の著書を通じて更に広く正しい日本を世界に知らしめるため同氏に対して種々資料を提供した。[日本交通公社 1962:54]

大正二年度ということは 1913 年であるが、1913 年の滞在はこれ以外に記録は残っていない⁵⁶。しかし、日本交通公社の記録を信頼するならば、情報提供は TGJE の初版の完成後に行われた可能性が高い。この情報提供がどの程度 1914 年の初版に反映されたかは不明であるが、この後 TGJE は 1920、1926、1928、1933 年と版を重ねていくのであるから、いくらかは貢献したものと思われる。

テリーは、1890 年には *Terry's Pocket Interpreter(Spanish-English)* を、1909 年には *Terry's Guide to Mexico*、1914 年からは TGJE を、1920 年には *Terry's Short Cut to Spanish*、1926 年には *Terry's Guide to Cuba* を出版した。数多くの旅行ガイドブックと会話集を製作したと言えるだろう[Who's Who 1932-1933:2259]。

⁵⁶ *Who's Who in America* によると、テリーは 1895 年、1911 年、1919 年、28 年、31 年に日本を訪れた記録が残っている。しかし、日本交通公社五十年史に書かれたように大正二年(1913 年)に日本を訪れた記録は残っていない[Who's Who 1932-1933:2259]。

3-3 TGJEが「見たいもの」

このような経緯で誕生したTGJEにはどのようなものを「見たいもの」として描写しているのだろうか。まず、序文から引用してみよう。

「大日本」は、他に類を見ない不変の魅力を持つ国であるにもかかわらず、無数の奇妙な習慣や独特の面影の残るヴェールに覆われていて、すぐに理解することができない。

[Terry 1914:PREFACE]⁵⁷

既に、HTJで9版にもわたって日本の情報が更新されてきても、まだ「ヴェールに覆われてい」と表現している。ここから、日本を神秘的なイメージで見ていることが分かる。次に、日本に対する表現で初めて登場する単語が印象的な文章を見てみよう。

ありのままを、誤解を避けて常に正しく理解しようとするには、あまりに頻繁に日本がエキゾチックであると見受けられるために、目にするそのままのものを描写するには非常に困難が伴う。[Terry 1914:PREFACE]

ここで、「エキゾチック」という単語が使われているのは注目に値する。従来の外国人向け旅行ガイドブックでは、そのように描写することは見られなかった。日本を「エキゾチック」と表現する視点は、今後の日本のイメージの変化を見ていく上で大きな分岐点であると言える。

それに対して、本文の中で、従来の日本の表象として使われてきた表現も健在である。

懐かしい、優雅で興味深い古き日本(Old Japan)の中心で少なくとも1000年間ほとんど不変の帝国の都市である京都や、歴史的な奈良の巨大な仏像やユニークな博物館は、眠気を誘うが、強い魅力を持っている。[Terry 1914:lv-lxv]

「Old Japan」という表現は、HTJの序文で頻繁に使われていたものである。明治以前の近代化・西洋化していない風景に対するノスタルジーと肯定的な評価は、次の文章から

⁵⁷ 本章で使用する文章はすべての版で同じ内容であったため、初版に統一して記載する。

も外国人たちによって共有され固定化されていたことが読み取ることができる。

私は真の日本—西欧化しない昔のまゝの日本を求めて田舎へ旅をした。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:543]⁵⁸。

また、TGJE の出版の狙いは、以下のようであった。

我々の狙いは、2つの高価なものよりもむしろ1つの便利かつ小さいヴォリュームで、日本とその人々について、だが、それと同じくらい面白いその情報を簡潔さと正確さと互換性を持つようにするために、冷酷さと退屈を避けることによって实际的で、役に立つ、公平な情報を提示することであった。[Terry 1914: PREFACE]

この「2つの高価なもの」とは、TGJE の出版以前に出ていた HTJ と OGEA であると推測される。しかし、実際には TGJE は総ページ数 1080 ページで価格は 10 円であった。直前に出版された OGEA が 5 円～7 円で販売されていた事実と照らし合わせてみても、あまり現実的な描写でない。

また、本文である各地名所案内の前の序論の部分も、注目に値する。序論の中の項目が、ほとんど脈絡なく雑多に構成されているのである。例えば、序論のIVは憲法、国旗、国歌、人々(職業や階層等)、新聞、芸者、乞食(物乞い)、泥棒、Vは柔術、相撲、ハラキリ(切腹)、入れ墨が掲載されている。これらの項目の相関関係はほとんどないと言って良い。こうした、興味の赴くままに記載されたかのようなカテゴライズは、1933年版まで全く変化なく続いていく。この中に芸者やハラキリが一つの項目として入っているのは非常に興味深い事実である。以上のように、TGJE は、興味の赴くまま脈絡なく、古くエキゾチックな日本を見ることを求めていることが分かる。本章では、この点に着目して、そこに書かれて

⁵⁸ 『外人の見た日本の横顔』は、国際観光局創立五周年を記念して出版された[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:「はしがき」]。その中で、ジャパン・ツーリスト・ビューローが斡旋してきた外国人の中でも有名人や識者の日本観のうち「興味あるものは出来るだけ雑誌『ツーリスト』へ訳載し」、「その中、今回は過去十年間に於けるものより六十一篇を選び、ここに採録した」[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:「はしがき」]。ここには、1920年～1930年間の欧米人による日本旅行の記録と日本観について要領よくまとめられている。翻訳の上数多くの原稿から選ばれているため、編集側の恣意的な意図がなくもないが、当時の外国人旅行客の中での貴重な生の声として重要な資料であることは間違いない。本章では、この中で芸者や吉原の記述について焦点をあてて注目してみる。

いる内容と意図、他の資料での扱いとの違いを検討する。

3-4 OGEA が「見せたいもの」

鉄道院が製作した *An Official Guide to Eastern Asia: Trans-Continental Connections between Europe and Asia* は、1913(大正 2)年 10 月に第 1 巻満洲・朝鮮、1914(同 3 年)7 月に第 2 巻・第 3 巻日本、1915(同 4 年)4 月に第 4 巻支那、1917(同 6 年)4 月に第 5 巻東印度が刊行されている⁵⁹。

東アジア用のこの公式ガイドブックの主要な目標は、ヨーロッパまたはアメリカの旅行者が旅行上で遭遇する興味の項目について、より徹底的に楽しみ評価することを可能にするような情報を供給することである。[Imperial Japanese Government Railways 1913:PREFACE]

この文章にもあるように、OGEA は欧米の外国人向けに作成されたことが明らかになっている。そして、観光だけではなく、経済面でも情報提供ができるように作成されたことも分かる。

東アジア、満州、日本本土、中国本土、更に、インド、そして南洋諸島の地域が自然と人間性の局面、古代の伝統の蓄積およびその風変りな芸術と共に、普通の観光客のための魅力的な魅力を持っているだけではなく、また、仕事または投資のためにビジネスマンおよび資本家まで多くの新しい路線を開く訪問客にとってもまた、この本が貿易と産業で供給する情報に役立つことが望まれる。[Imperial Japanese Government Railways 1913:PREFACE]

⁵⁹ 詳細は第三章参照。また、『日本交通公社五十年史』には、大正 4 年(1915 年)に、「図書の委託販売と案内記の発売」として、次のように書かれている。

最初に扱った図書は鉄道院発行の「東亜交通案内」であった。(中略)鉄道院が過去八年の歳月と非常な努力を払って編集に努めた当時極東旅行に関する最高の権威ある案内記で、本、支部、案内所での販売はもちろん、広く東洋、欧米各国でも販売することとし、この海外での販売を横浜のケリーウォルシ商会に委託した。(中略)なお「東亜交通案内」初年度の売上成績は 738 部で、うち 600 部は前記ケリーウォルシ商会に委託したものであった。[日本交通公社 1962:60]

この「ケリーウォルシ商会」というのは、かつて HTJ の販売を行っていた会社である。

その背景には、日露戦争終結後の 1908 年に、交渉の結果シベリア鉄道から中国大陆の満洲を經由して、日本本土へと鉄道網を結びつけることに成功していることが挙げられる。これによって、旅客をヨーロッパからアジアへ鉄道によって移動させることが可能になった。また、第 1 巻の満洲・朝鮮編では、「地名の表記は、旧来の呼称ではなく日本語での新しい呼称を採用した」とある [Imperial Japanese Government Railways 1913:PREFACE]。ここでは、日露戦争に勝利し中国大陆への足掛かりを得た日本が自らの勢力拡大を世界、特に欧米社会に向けて標榜しようとする意図が垣間見られる。

OGEA の制作は、当時国有化間もない鉄道院の初代総裁であった後藤新平の指揮する一大プロジェクトであった。後藤は大陸横断鉄道の開通、海外旅行ブーム、ナショナリズムの高揚という三つの要因が絡み合う中で、欧米の旅行者への東アジアに関する情報提供を目的として、OGEA を企画し刊行したと言える⁶⁰。OGEA は主観的な描写ではなく、客観的な描写であることも大きな特徴の一つである。そのため、いわゆる「見せたいもの」があまり表に出てこず、非常に読み取りが難しい。

3-4 OGJ が「見せたいもの」

OGEA に続いて製作された公式案内は、*An Official Guide to Japan* といい、Imperial Japanese Government Railways(鉄道省)が 1933 年に出版した。中川浩一は OGEA よりも「内容的に見れば改悪であ」 [中川 1979:238] としている。製作が鉄道省となったのは、1920 年に鉄道院が鉄道省へと変わったことが挙げられる。しかし、それ以上に大きな理由は、その後 1930 年にジャパン・ツーリスト・ビューローの行ってきた外客誘致と海外宣伝業務を勅令により「外客誘致に関する施設の統一、連絡及促進を図るための官設中央機関」として鉄道省に設置された国際観光局が引き継いだためである⁶¹ [日本交通公社

⁶⁰ 詳細は第三章参照。

⁶¹ 1920 年には、鉄道院は鉄道省へ改組した。1930 年には、先述したように、ジャパン・ツーリスト・ビューローの行ってきた外客誘致と海外宣伝業務を引き継ぐ形で鉄道省に国際観光局が設立された。翌 1931 年には、財団法人国際観光協会が設立されている。「中央行政機関としての国際観光局が誕生し、海外宣伝の実施機関として国際観光協会が設置され、宣伝資金は政府及び受益者負担の意味から民間の関係業者—鉄道、汽船、ホテル、土産品商社等—が醸出することにな」 [日本交通公社 1962:180] った。実際には、「国際観光局は、役所の既刊であるため民間からの寄附金を集めることができないので、別途に民間組織として国際観光協会が作られたが、実際には国際観光局と、国際観光協会は表裏一体のもので、観光局長が協会の常務理事で国際観光局員は辞令を用いずして協会の職員とな

1962:130]。

OGJ は、序文に「(OGEA の)二巻、三巻から抜粋している」とあるように、日本本土と樺太、台湾を扱っている[Imperial Japanese Government Railways 1933:PREFACE]。構成も、序論として日本の基本的な情報として日本の習慣、歴史、教育、宗教、文学、工芸品、演劇、音楽などをまとめている。この形式は、OGEA と同様である。これによって、旅行者 tourists が現在の日本文明の概要を理解するのに便利だとしているが、実際の旅行においてここまでの日本の情報が必要だとは思えないのが正直なところである⁶²。

また、序文で製作の目的を「日本の良さを知ることのできる情報を旅行者 travellers に提供するため」と同時に、「年々世界中の多くの旅行者 tourists を魅了させる attract 日本のあるゆる名所」の情報を提供するためだとしている。ここで注目すべきは、「魅了する attract」という単語の存在である。OGJ は、この「魅了する attract」「魅力的な attractive」という単語が頻繁に用いられているのである。

季節の魅力 attraction——旅行者には、日本は非常に独自のものであり、どの月どの季節もそれぞれの魅力がある。(中略)しかし一般的には、訪れるのに一番いい時期は春と秋であり、その中でも最も旅行に適しているのは九月の後半と十月、十一月である。

[Imperial Japanese Government Railways 1933:ix]

そして、OGEA と決定的に異なるのは、本文から日本を積極的に宣伝しようとする作者側の意図が明確だという点である。OGEA では、膨大で広範囲の情報を紹介する際に非常に客観的で作者の意図が見えてこない文章であったのが特徴的であった。OGJ では、紹介する側である自らの日本を絶賛することによって、読者の興味を掻き立てているのである。

っていた」。そして、「国際観光局が設立されるに及んで、これまでビューローが実施してきた外客誘致と海外宣伝の事業は、国際観光局に譲り、外客の斡旋自体は従来通りビューローで、続けられたが、その後はさらに邦人旅行者の斡旋にも力を注ぐことが出来るようになった」[日本交通公社 1982:48-49]。こうして、ジャパン・ツーリスト・ビューローは、当初の外客誘致活動からは次第に距離を置くようになったのである。尚、国際観光協会の設立に伴い、日本の外客誘致のための国情文化宣伝のうち対米に特化して活動していた対米宣伝共同広告委員会は、その業務を譲る形で解散した[日本交通公社 1962:173]。

⁶² 山本によると、こうした、観光と直接関係のない項目を「観光」の名目で紹介しているのには、戦前期の日本政府側のプロパガンダ的な意図があった。特に、「教育」では子どもを積極的に登場させることで「国家の将来的な繁栄を暗示することができるからではないか」[山本 2012:121]としている。

日本は世界との素晴らしい通信施設が非常に充実しているだけでなく、東西からの旅行者も、旅行先の滞在が素晴らしいものであることが分かるだろう。[Imperial Japanese Government Railways 1933:ii]

富士山は日本本土では最も高く、裾野から緩やかなカーブを描いた標高 12467 フィートの山である。(中略)富士山は最も高く評価されている。日本の歴史のうち初期の段階から、詩人や芸術家が富士山をテーマに作品を製作している。(中略)富士山の素晴らしいスカートの広がり、注目に値する。[Imperial Japanese Government Railways 1933:91-92]

こうした、自分の観光資源を積極的に高く評価しそれを紹介するという姿勢と「attractive」という比喩は、この後の「公式案内」の文章の特徴の一つである。

4 「見たいもの」と「見せたいもの」から垣間見られる日本の表象

「公式案内」と銘打ちながらも文章の特徴が対照的な OGEA と OGJ であるが、さすがに「公式案内」という共通項があるために、それらが示したい日本像は非常に似通っている。それは、大日本帝国である日本の近代化と、「古き良き日本」の二点である。この矛盾した日本のイメージは、かつて二章で検討した、HTJ の形式を意識・模倣した日本初の外客誘致組織である喜賓会の制作した旅行ガイドブックに反映された「古き良き日本」と近代的施設の描写から連綿と続いているものである。

特に、OGEA はその広大な地理的範囲のため、「東アジアへ勢力を広げつつある大日本帝国」が前面に押し出されていた。それは範囲が大幅に狭まった OGJ でも同様である。

東京、大日本帝国の首都は、本州の東側に位置し、関東地方に長く流れる隅田川のほとりに位置している。(中略)東京は鉄道によって国のあらゆる地域と接続しているため、旅行者には非常に便利である。[Imperial Japanese Government Railways 1933:15]

また、「Old Japan」では、京都にそのイメージを抱かせている。これは後の時代も同様である。

京都、千年の間にしえの日本の首都であり文明の中心であったこの都市は、外国の旅行客にとって最も重要な訪れる価値のある場所である。(中略)京都は、旧世界の空気が残っている。路面電車が走り、鉄道の駅があり、他にも物質的な発達がそこかしこに見られる多忙な世界と距離を置いているように、(京都の旧世界の空気は)「古き良き日本 Old Japan」の精神が揺らめいている。[Imperial Japanese Government Railways 1933:318]

この矛盾したイメージは、戦前の日本の公式ガイドブックが継続的に行ってきたものである。特に、後者のイメージは外国人の作成した旅行ガイドブックでも強く見られるものであった。TGJE の場合はそれに「エキゾチック」が追加され、OGJ では「魅力的 attractive」が追加される。こうしたイメージに対して、それがたとえ日本側が眉をひそめるようなものであったとしても、芸者の存在は外国人にとってその期待に応えるものであった。

4-2 古き良き日本の担い手としてのゲイシャ

もう一つ、興味深い描写がある。1913年の設立間もないジャパン・ツーリスト・ビューローが最初に手掛けた外国人向け旅行ガイドブック、*JAPAN*(写真 11)である。この作成経緯については、中川が詳細に報告している[中川 1979]。*JAPAN*は、当時鉄道院事務官としての立場からジャパン・ツーリスト・ビューローに関係し、幹事を務めた生野團六という人物であった。中川によると、彼は、「外国人を対象とする日本紹介書は、海外に配るものと、日本に来た外客に配るものとを最初からはっきり区別すべきだと主張し」た。そして、「外国人に日本への旅行を思いたたせることを最大のねらいとし、興味をひきたたせると同時に、旅行に必要な旅費、交通手段、所要時間などを収載する方針を立てたのである」[中川 1979:221]。この点は、非常に重要な視点である。なぜかという、そこに記述されていた内容や情報が、前者と後者でははっきりと異なっていたからである。



写真 11 [Japan Tourist Bureau 1913] (横浜開港資料館所蔵)

また、「部数は一萬、大半は日本への航路を持つ汽船会社、各国の著名な鉄道企業、世界的な旅行代理店としてのトーマス・クック父子商会 Thomas Cook & Son、万国寝台車会社 Wagons Lits Cie.をはじめ、新聞社・雑誌社、外交団体、日本に関係を有する各協会などへ寄贈された。さらに二か月後の大正三年一月、小改訂を施したうえ、二万部を増刷している」[中川 1979:221-222]。*JAPAN*は、ほぼ同時期に出版された *OGEA* と同様、「当時の日本帝国とその勢力圏が、東アジアにまで及んでいた事態」のため、「その収録する範囲を日本内地に限定せず、朝鮮、中国、台湾についても、日本への旅行経路という観点からその概要を紹介した」⁶³ [中川 1979:222]。こうした経緯で誕生した *JAPAN*において、京都の紹介の部分で、「Geisha Dances」と題する項目が存在する(写真 12)。そこには、次のように書かれている。

いつでも、特別なパフォーマンスが提供される。ゴージャスで美しい桜踊りは祇園の歌舞練場にて毎年四月一日から三十日まで行われている。桜踊りと似た鴨川踊りは、先斗町で五月一日から二十日まで行われる。[Japan Tourist Bureau 1913:99]

⁶³ 他にも、樺太も含まれている。



写真 12 [Japan Tourist Bureau 1913:99] (横浜開港資料館所蔵)

そして、芸者の踊りが写真つきで紹介されている。ちなみにキャプションには、「芸者の踊りはいつも明るく色彩豊かである。写真上は東京の東踊り、写真真中は犬山の犬山音頭、写真下は京都の鴨川踊りである」とある[Japan Tourist Bureau 1913:99]。どれも華やかな芸者の踊りの様子が写されているが、キャプションがない限りどれも同じものに見えると言い換えてしまっても良いものであることも確かである。しかし、それを敢えて掲載しているということは、芸者に対して何らかの意図があったがためであるということもできる。

それはつまり、芸者を京都ほか日本の各地を代表する風景として、上記の鉄道院同様、書き手であるジャパン・ツーリスト・ビューローが認識していたということである。上記のような背景で書かれた *JAPAN* は、OGEA と同様、ある程度日本の風景や名物として掲載されていた。つまり、芸者の存在が日本の公式情報として了解されていたのである。ここでの芸者は、京都という古都における華やかで伝統的な日本文化の担い手としての存在であり、先程の TGJE での解説にあるような個人的な宴席での存在とは一線を画する点は特筆に値する。この後、*JAPAN* は *Pocket Guide to Japan* として版を重ね、類似した外見と内容で製作が続けられた⁶⁴。その際、内容は「公式案内」と同様に旅行には直接関係

⁶⁴ Issued by the Japanese Government Railways, Japan Tourist Bureau, Japan Hotel Association, *Pocket Guide to Japan*, Japanese Government Railways, 1926. Board of Tourist Industry, *Pocket Guide to Japan: with special reference to Japanese custom, history, industry, education, art, accomplishments, amusements, etc.*,

のない産業や教育などにも言及したものであり、日本の印象に対して政治的な意図が見え隠れしていた⁶⁵。

ただ、重要なのは、伝統的な日本文化の担い手としての芸者という描かれ方は、「公式案内」では行われずにあくまでも「外国人に日本への旅行を思いたたせることを最大のねらいとし、興味をひきたたせる」ための小冊子で行われていたという事実である[中川 1979:221]。それは、欧米の外国人たちによる日本イメージをかなり強く意識して作られたものであった。もちろん、正確な情報を掲載しようとしていたのだろうが、あらゆる情報を網羅し正しい情報を提示しようとする「公式案内」とは大きく異なり、宣伝の要素が強かった。その冊子の制作の意図の違いが、芸者の記載の違いを生んだと考えられるのである。

4-3 吉原の描写

これまで芸者についての描写を追ってきたが、それと類似したもので注目すべきものがある。それは、東京の吉原についての描写である。吉原は日本最大の遊郭であり、そこには女郎や花魁だけではなく、芸者も多く存在していた。ここでは、吉原についての描写に注目し、そこに描かれている街の風景や花魁や芸者たちの様子から、東京観光の名所として吉原が成立する理由を探っていく。

斯う云ふ話は上流の社会では話せないのだが、ヨシハラは東京で最も有名な場所である。數世紀に亙る歴史を有し、五千名からの女が監禁されているのだ。(中略)昔は廓の女は木の格子の中に顔を並べて座つてゐたと云ふ、今日ではネオン・ライトで照された硝子ケースの中に彼女たちの写真が並んでゐる。側に頭を削つた渋い色のキモノの男が立つてゐる。／細君は入らうと主張してやまない。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:746]

Japanese Govt. Railways, 1939.

Japan Travel Bureau, *Japan : the pocket guide : with special reference to Japanese customs, history, industry, education, art, accomplishments, amusements, etc.*

Japan Travel Bureau, 1946. 尚、1946年からは無地の表紙になり地味な装丁に変わっている。その後も小冊子は作成され続けている。

⁶⁵ こうした観光と直接関係のないプロパガンダの要素は、「公式案内」だけでなくむしろ宣伝用の小冊子やパンフレットに多く見られるものであった。

この文章は、ジャパン・ツーリスト・ビューローの『外人の見た日本の横顔』の中の一
文である。外国人の日本旅行の印象記を集めたものだが、これには、大きな特徴が三
点ある。一つは、「上流の社会では話せないのだが、ヨシハラは東京でもっとも有名である」点、
もう一つは、「五千名からの女が監禁されている」点、三点目はなんと筆者の「細君」が「入
らうと主張してやまない」という点である[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:746]。
一つ目に関しては、吉原は大っぴらにその存在を話題にできないがすでに外国人たちの中
でも有名であったという衝撃の事実が明らかになっている。そして、二点目でその根拠の
一つとしてたくさんの「女が監禁されている」という一見不道徳で後ろ暗い印象が付きま
とっている。そして、それこそ女性が眉をひそめそうな場所に、筆者の細君が入ろうと主
張しているという事実は、外国人たちにとっての吉原の印象が日本人のそれと全く異なっ
ていたことが予想されるのである。

芸者と花魁・女郎との混同は、ブーアスティンも「(日本でのアメリカ人観光客は)芸者
は風変りな日本の売春婦であると信じたがる」と指摘しているように、現代でも外国人に
誤解されがちである[ブーアスティン 1964(1962)]。

芸者はあらゆる誘惑的な芸術の情婦だが、誘惑は必ずしも彼女の仕事ではない。また
芸者は女性であることを忘れない。彼女は客の世話をするが、客と間違いを犯すこと
はない。[Terry 1914:clxi]

外見上では、非常に親しそうであるが、日本の宴席では客と芸者の間には、一種の厳
重な礼儀が、いつも守られている。いかほど客の顔が酒で赤らんできても、彼が女を
愛撫しようとするのを見受けることはない。女は単に人間の花として、宴席に表れた
ので、眺めるためであって、決して触れるためでないという事を彼は忘れない。日本
における漫遊の外客が、度々芸妓や給仕女に対して無遠慮な馴れ馴れしさに陥るのは、
假令(けりょう)微笑を以て耐え忍ばれていても、実際は頗る嫌悪されているので、又
これを傍観する日本人からは、非常に俗悪下劣の対象と見做されている。[ハー
ン 1926(1894)]

こうした誤解については、芸者が旅行ガイドブックの一項目として登場した時点で、その
間違いを正す記述がされていたのである。これは、こののちの芸者と遊女が混乱して理解

されていた事実と照らし合せてみると、発信している情報と受け手の了解している情報が異なるという興味深い事例の一つである。既に、1910年代でそのことを注記する文章があったのは特筆に値する点である。

芸者や吉原についての描写の中では、彼女たち＝「憐れな女性たち」の図式が旅行者の中でも共有されていたことがわかる文章が散見された。これは、TGJE の文章の中で示されていたものと同様である。しかし、同時に、芸者もまた同様の印象を持たれていたという現実もあったようだ。

しかし一番喜ばれたものは、有名な料亭における芸者つきの宴会であつた。一般旅行者のあひだには、日本人の生活における、芸者の身分に関して悲しむべき誤解が介在してゐるやうだ。日本の芸者と云ふものは、あの怪奇に満ちた吉原のうちに、つねに絶ゆることなき光のうちに包まれてゐるであらうとは、旅行者の想像するところである。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:300-301]

また一方、芸者の存在は奇怪なものである。彼女たちを想ふと、直ちに娼婦の蠢いてゐる暗の世界を連想するやうであるが、誤れるの甚だしいものである。彼女たちは正々堂々と、一般社会のうちに生活してゐるのだ。彼女の仕事といふのは、ウェートレス、芸人、ナイト・クラブの女将をつきまぜたやうなものなのである。彼女はほんの子供の時代から、はげしい訓練を受けるので、いかなるトーダンスの踊り子でも、これらの小さな、血の通つてゐる人形ほどのひどい修業は積まないことと思ふ。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:301]

芸者と吉原の関係が密接であつたことと同時に、遊女と混同されて憐れなイメージが付与されてしまっていることがよく分かる。現代でも誤解されがちなこの芸者と遊女の違いは、その違いについての注意が 1910 年代には旅行ガイドブックに言及されていたにもかかわらず、既に 1930 年代の時点で誤って伝わっていたのである。

さて、芸者とよく混同される遊女のいる吉原については、どのように書かれているだろうか。吉原については、これまでの資料では、OGEA では江戸文化の繁栄の際、「吉原が賑わいを見せた」とのみ言及されていた[Imperial Japanese Government Railways 1914a:110]。それに対して、TGJE では吉原について全 6 ページに渡り言及しており、そ

のうち丸 2 ページはフォントを小さくして詳細な情報(正誤は不明)を掲載しているのである。

次の文章は、吉原についての描写の冒頭である。

吉原：売春婦の区間、つまり口語でナカは、封建時代の非常に有名な名残とすべての時代から受け継がれる(ちなみに人類を悩ませる最もすさまじい災いの広がり防止するため)最も有力で優雅な社会学的悪の分離によって管理する、政府の非常に文化的な努力の、異常に面白い例として知られている。[Terry 1914:221-227]

吉原が囲われた街であったことを、「売春婦の区間」として「人類を悩ませるもっともすさまじい災いの広がり防止のため」の「異常に面白い例」であったと描写している点は興味深い。その時点で、読者のあまり上品ではない興味を掻き立てたであろうということは容易に想像がつく。吉原は、街として物理的に独立した存在であったがために旅行者の興味を引いたのかもしれない。

夜になると、通りは電燈がつき、あらゆる人々の波に押し寄せられる。外国人、都会人、田舎者、子どもを背負っている人など、西洋世界では見る事のない風景が広がる。(中略)そして、あらゆる職業の人々が押し寄せ、それをかき分けて進むのだ。[Terry 1914:221-227]

ここで見られる吉原の中の様子は、老若男女が楽しむ賑やかな場としてのものである。ここには、遊郭という道徳的な後ろめたさは存在せず、繁華街の一種として華やかに描写されているのである。

そして、「芸者」という単語は吉原の描写の中に登場はするものの、その扱いは低い。

これらのセイレーン(妖婦。遊女のことか)の確かなセンスは、長い間非常に吉原的であると賛美されたすばらしい紫の衣装で、豊かに大きな手足を伸ばしている赤いロブスター(海老のことか)の刺繍が施されたサテンを着ることである！彼女らのいとこ分である芸者(p. clxi)によって支持される特別なスタイルを模倣するために、他の人は質素な紋章のある服を着る。麝香は、大好きな香水である。通常隠されている周到的な肉

体美を見せるようなことは、めったにない。[Terry 1914:227]

吉原の描写の中で描かれるのは、あくまでも豪華で美しい花魁の姿である。ただ、暗に比較対象として芸者が用いられるのは興味深い。ただ、「花魁」「遊女」という単語は全 6 ページの中ではほとんど登場せず、あくまで「娼婦 prostitute」が主流である。そのため、芸者と混同してしまう可能性が否定できないとも言える。

しかし、それよりも、花魁に付き従う格下の遊女たちの服装が芸者の模倣のように描かれているのが特筆すべき点である。この事実が、遊女たちと芸者たちを混同してしまった大きな一因であると考えられるのである。

また、他に描かれているのは、「娼婦」たちが置かれている哀れな状況である。他にも、出典の不明な全国の遊郭の娼婦たちの統計も書かれている。ただ、華やかで賑やかな情景が中心に描かれているため、その対照という位置づけが強い。

女性による金めっきの悲惨な生活は「痛みの世界」と呼ばれる。また、各々はどこかの裕福な人あるいは恋人によって回復されることを望んで生きると言われている。

[Terry 1914:226]

こうした描写は、一見「娼婦」の世界に対して道徳的な思いやりを持っているかのようであるが、実際はそこにある退廃的な世界や華やかで賑やかな風景に対する演出のような効果をもたらしていると言える。所詮旅行ガイドブックに書かれている時点で、既に旅行者にとって興味本位のまなざしの対象になっていると言い換えることができるからである。

ジャパン・ツーリスト・ビューローの『外人による日本の横顔』では、次のように書かれている。

夜の逍遥は今日では往時の壮観はないが有名な吉原に赴くことができる。花のごとき
数百の家が並行した小街に沿って続いてゐるが最早昔の区街の面影はない。其処も亦
1923 年の火災で全く破壊され何百人の憐れな女が生きながら焼かれて消え失せたの
である。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:10]

歴史的事実はどうであれ、衝撃的かつ哀れな印象が付与された吉原は、一見立ち入るのを

はばかられるような表向きの雰囲気があったとしても、すでに外国人旅行者には有名で魅力的な観光地として印象付けられていたことが分かる。

4-4 日本旅行で無視できないゲイシャの存在

さて、ここで、TGJE に紙幅を割いて記述されていた芸者が、「公式案内」ではなぜほとんど書かれていなかったのか。それは、芸者は日本の公式の情報として認められておらず、海外からの要求によって登場した存在だったからである。

まず、上田が指摘したように、欧米の外国人による日本イメージがオペレッタ『The Geisha』やオペラ『蝶々夫人』の影響が強いという事実を裏付ける記述がある。

(中略)一人の日本人は私に囁いた「ブツチニの作は(蝶々夫人のこと)最早我国に於て演ぜられない只一のオペラである」と。／何故かと私は尋ねた。／何故と云へば彼の筋書は日本人から見ると虚妄に満されてゐる、我々の風俗習慣に関しまた我々の生活のもっとも簡単な事柄にすら非常な誤謬があるので、これが上演される毎に場内は止めどなき嘲笑に揺がされ劇的動作を害すること少くない。貴方が日本の習慣を御研究になつて欧州に御帰りになるときマダム・バタフライをもう一度ご覧になれば直になぜ此憐れな物語が我々にそんなに喜劇に見えるかが御わかりになるでせう。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:2]

「蝶々夫人」が既に日本イメージとして外国人にある程度定着していたことが分かる文章である。そして、日本人の側もそれを理解した上で現実とは間違っていると指摘・意識していた事実が分かる。

『外人による日本の横顔』では、芸者についての記述は、上田が既に 61 編中 6 篇が言及していたと指摘、うち 5 編を抜粋しているが[上田 2013:16-17]、他に吉原についての記述は 3 編ある。決して多い数ではないが、それでも無視できない数であることは確かである。

心の幻を打ちくだく事は悲しい事だ。音に名高い日本のゲイシャ・ガールを僕は実地に見た。然し美しいとは思わなかつた。(中略)芸者とは人をエンターテインするを職業として居る女、云ひかへればプロフェッショナル・チャーマーとでも言へる存在で

ある。座敷へ入つて来るとお客の側に座る。が決して一所に長く止まつて居ない。客の間を縫ひまはり作り笑ひをしたり話したりする。／僕の基準ではゲイシャ・ガールを美しいとは思はない。長い馬の様な顔、小さなオチヨボ口、可成り厚塗りのおしろいには好感が持てない。日本には日本の美がある。田舎の少女の美しい滑らかな皮膚、真直な姿勢、澄んだ瞳はアメリカの美人投票では芸者に勝ること何十倍かである。
[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:767-768]

三味線の音、跳びはねるコケテイツシュな米の粉で化粧した芸者ガール。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:57]

私は今まで、こんなに沢山なゲイシャ娘を見た事がない。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:67]

ゲイシャ・ガールと云ふ職業はだんだんすたれて来た—古い慣習—キーゝ声の歌—真白な長い瓜実顔…は明日の日本に何等の魅力も有せず、今は此等の美しい Texas Guinness が夜の東京を風靡するようになった。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:745]

芸者の存在が日本旅行にとって大きな位置を占めていたこと、予想とは印象が異なりあまり魅力的ではなかったことが分かる文章である。その分、日本旅行の前には芸者の印象がそれだけ強かったことが裏付けられた文章でもある。

5 おわりに 「見たいもの」と「見せたいもの」の狭間で揺れるゲイシャ

上田は、『ゲイシャ』は19世紀末のオペレッタ『The Geisha』がいわば勝手に作り上げた日本のイメージである。いずれも西欧で認識されたイメージであるのに、あたかも日本政府が輸出したイメージのように考えるものが後を絶たないが、それは戦前の観光政策を誹謗するものである」と非難している[上田 2013:11]。しかし、同時に、誤解を招くような記述をしていたのも事実であった。芸者は、「公式案内」には確かにほとんど登場していないが、日本を紹介する小冊子には、芸者の存在が写真付きや見出し付きで登場している。このことについて、どのように考えればいいのか。

TGJE は、「エキゾチック」な日本を求めている。情報の正確性は一見保たれているかのよう著名人の著書を引用している部分もあるが、多くは出典が判明せず、都合の良い部分を抜粋している印象が否定できない。章立ての中のカテゴリ分けの仕方も、整理されておらず脈絡がない。興味のあるもの、見てみたいものが雑多に書かれているのである。それは読者である外国人旅行者からの要求をある程度反映したものであったと考えられる。それに対して、「公式案内」である OGEA は、一見主観が見られず客観的な視点で書かれている印象を受ける。それだけ、名所などの記述内容に対して評価を行っている描写が少ないのである。そして、OGJ では attractive という単語を多用して、記述内容を積極的に推薦しようとしている。

旅行ガイドブックという側面からでは、情報の把握をどこが中心に行ってきたかという点に着目すると、次のように言うことが出来るだろう。すでに、HTJ や TGJE のような外国人の制作した旅行ガイドブックがある程度売れている事実がある。そして、様々な外的要因から、外国人旅行者の斡旋よりも外国人旅行者の獲得に専念するようになっていった。そのため、日本の外客誘致する側が製作する旅行ガイドブックやパンフレットは、日本に来る前の段階である、対外的な日本のイメージを提示して訪れる気持ちや興味を掻き立てるといった「宣伝」の意味が強くなっていった。それは、イメージの作り手と受け手という双方がどちらともなく相補的に作り上げていったものであったとすることができるのである。

そして、「公式案内」として発信する情報を一元化することによって、旅行ガイドブックの体裁をとりながら、対外的な日本の「公式の」「正確な」情報の集合体が誕生したのである。その他の配布物や販売物は、日本のイメージを掻き立てるための演出物として、外客誘致の中では副次的なものへと位置付けられていった。

ここで考えられるのは、情報の飽和である。既に出版が終了した HTJ では、明治の中期ですでに最低限の専門的な日本の基礎知識は網羅できていた。そのため、新たな情報というものは既に抑えられていてしまっており、日本を「発見する」という作業は既に行われ尽くされてしまったのである。そこで、今度は、基礎知識は最低条件のままでありながらも、更に刺激的で魅力的な(attractive)情報を求めるという流れに行ったと思われる。それが「エキゾチック」で「魅力的 attractive」な日本イメージへと変貌を遂げて行ったのではないか。芸者の記述は、そうした中、格好の具体例と言えるだろう。

しかし、ここで留意すべきは、芸者が公式の旅行ガイドブックに掲載されていたという

事実はあるにしても、全体としてイメージ戦略という形では積極的に用いられていなかったという点である。芸者の記述は確かに存在し、芸者の踊りが観光名物として紹介されていたにしても、芸者の記述は全体の中で圧倒的に少なく、「公式案内」の中での位置づけは著しく低いと言わざるを得ない。

むしろ、肯定的に紹介されているのは「公式」ではない小冊子の中であり、それは「外国人に日本への旅行を思いたたせることを最大のねらいとし、興味をひきたたせる」ための装置の一つとしてであった。先述の小冊子 *JAPAN* の製作過程で明らかになったように、「外国人を対象とする日本紹介書は、海外に配るものと、日本に来た外客に配るものとを最初からはっきり区別すべきだと」[中川 1979:221] したという。芸者が記述されていた小冊子は前者にあたるものであり、芸者は旅行の目的ではなく興味を引き立たせるための単なる演出だったのである。しかし、その差異は外国人に混同され、かつての「The Geisha」や「蝶々夫人」の強いイメージと結びつき、「ゲイシャ」が日本の代表的な表象として旅行の際に強い興味の対象になってしまったと考えられる。

そして、芸者の存在は欧米人旅行者にとって奇異で驚くべき存在であったため、「エキゾチック」で「魅力的」な旅行の要素として定着していったのである。

只、僅かに異なつてゐるもの、それは人間が着物を着てゐただけだ。何処の港だつて之と全くおなじだ。之は真の日本ぢやない。我々が、真の日本に到着するには、之等、近代文明の鋼鉄の殻を破らなきやならない。尤も、この殻つて奴こそは全く有難くない代物だ。少くとも、繁盛を誇る産業国、U・S・A をあとに「珍奇」を求めて遙々海を越えてやつて来た我ら米国人にとっては...。／私は茲で「東洋」と云ふものに染色された日本及び日本人は何処でも、所謂その持つ「魅惑」を失いつつあることを初めて知つた。[ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1935:595-597]

日本の「魅力」は、「珍奇」であり西洋化されていない「昔のまま」であることが、「エキゾチック」であった。そして外国人旅行者にとってそれを体現化したものが、芸者の存在だったのである。

第五章 公式案内の自己表象

第五章では、昭和中期から平成初期までに出版された『公式案内』を検討し、そこで一貫して用いられてきた観光の平和的イメージと日本の自己表象の変遷を明らかにする。具体的には、戦前からの天皇と皇居をめぐる記述を検討することによって、重層化してきたまなざしの最終形態を示すとともに、平和のイデオロギーを観光に用い自己表象に利用してきた歴史を明らかにすることを目的とする。

1 はじめに

『日本公式案内』と題された英文の旅行ガイドブックが、戦前から 1990 年代まで出版され続けていた事実がある。本章では、序章で言及したように、1941(昭和 16)年から 1991(平成 2)年までの間に出版された鉄道省国際観光局、運輸省観光局、国際観光振興会の出版した外国人向け『日本公式案内』(以下、『公式案内』)を読み解くものとする。

『公式案内』には、現在我々が想定するような旅行ガイドブックの内容から大きく逸脱した記述が多く行われていた。戦前の 1941 年、鉄道省国際観光局出版の *Japan : The Official Guide* では、日本の歴史の始まりについて以下のような文章で書かれている。

大日本帝国は神からの勅令によって確立したが、それは連続した同一の系統による天皇中心によるものであった。天皇は天と地が続く限り永遠に君臨すべき存在である。

[Board of Tourist Industry, Japanese Government railways 1941:66]

ここで言う「連続した同一の系統による天皇中心によるもの」とは、いわゆる万世一系のことを指す。そして、天皇の存在を「天と地が続く限り永遠に君臨すべき」ものであるとして、その存在を神格化していることが分かる。

それに対して、戦後の天皇についての記述では、論調ががらりと変化する。戦後最初に出版された 1952 年版運輸省観光局出版の *Japan : the Official Guide* では、次のように天皇の存在について記述されている。

日本の政治体制の本質を理解するには、それにおける天皇の位置づけについての知識が重要である。彼の地位は日本の占領後著しい苦難を体験した。第二次世界大戦の終結まで、日本の天皇は神聖かつ不可侵の存在であり、彼の行動は批判や批評の範囲を

超えたものであった。(中略)天皇制はまた、それ自身いかなる科学的分析は許されていなかった。それは、ある種のタブーであり、タブーが国の創世神話を土台としていたのである。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:88, 1958:88]

この記述は、1958年版でも同様に確認できるものである。この文章には特筆すべき点が二点ある。第一は、旅行ガイドブックにおいて読者に対して「日本の政治体制の本質を理解する」ことが前提となっている上に、天皇制の理解をも求めている点である。第二は、戦前の天皇制について「ある種のタブー」と断言し、その「タブーが国の創世神話を土台としていた」とまで否定的に記述している点である。そもそも、旅行を行う際に、その国の簡単な概略の理解は必要であっても、政治体制の本質まで理解する必要がどこにあるのだろうか。

本章で扱う『公式案内』に関する先行研究としては、中川浩一が著書『旅の文化誌』の中で、戦前期の『公式案内』からの系譜を述べている。その中で、1930年代～60年代ごろまでのものについて「息切れが続いている」とその完成度に辛辣な評価を下している[中川 1979:238-239]。

また、ダニエル・J・ブーアスティンは、著書『幻影の時代』の中で、次のように書いている。

私には、日本交通公社発行の『ジャパニーズ・オフィシャル・ガイド』(改訂版、1957年)が、現代の旅行案内書の特長をはっきりさせるのにこの上なく役立った。しかし、この本は、それ以外の目的にはほとんどなんの役にも立たなかった。これは旅行案内書の戯画であり、旅行案内書の公式に機械的に従って案内書を編集すると、取るに足らぬことばかりがいっぱいになり、最も肝心なことが落ちてしまうということを示している。[ブーアスティン 1966(1962):300]

ブーアスティンの「現代観光の戯画」の事例は、「取るに足らぬことでいっぱいになり、肝心なことが抜け落ちてしまう」と指摘しているように、「真の文化」の喪失を嘆くものである。つまり、「真の文化」よりもそれらしいもの、「その文化風のもの」を観光客が求めるとしている。つまり、分厚い『公式案内』の記述内容も、結局は現代観光の「戯画化」の

反映に過ぎないとブーアスティンは主張しており、『公式案内』がその具体例として使われているのである。

しかし、これらの先行研究の議論は、『公式案内』を現代社会における観光、すなわち大衆観光における旅行ガイドブックの影響という観点からのみ考察したものであり、その「公式の」旅行ガイドブックの特質について注意を払っていないと指摘することができる。これは日本の国の公認を受けたものであり、単純に外国人が自分たちの旅行のためだけに留意して作成したものとはその製作意図も目的も手段も大きく異なるのである。それは端的に言えば、『公式案内』が政治性を持ったテキストであるということに注目しなければならないということである。

国家の「公式」旅行ガイドブックのもつ政治性については、既に第二章で扱った。第二章では、大正初期の 1913 年から 1917 年に出版された『東日本公式案内』*An Official Guide to Eastern Asia*(以下 OGEA)全 5 巻を事例に、国家の「公式」という名を冠した旅行ガイドブックのもつ政治性について議論した。OGEA は、観光という新たな産業の下で、急速に近代化を進める日本の「国民国家」生成の一端を顕著に表す表象のテキストとして読み解くことができる。

こうした議論を踏まえた上で、先の『公式案内』における天皇に関する記述に再び立ち返ると、そこに一つの仮説が浮かび上がる。それは、国家の「公式」旅行ガイドブックにおいて、日本の国家元首あるいは象徴としての天皇に、イメージ形成を担う役割を負わせたのではないかというものである。先の引用は、戦前は万世一系である天皇の存在を神格化し、大日本帝国の存在と存続の根拠として位置づけていたにもかかわらず、戦後は一転してそれを自己反省的に否定的に記述している点が興味深い。そこには天皇を用いて日本のイメージを操作しようとする、作り手の側の意図が透けて見えるのである。また、その居所である皇居に対しても、何らかの政治的なメッセージを埋め込んできたことが考えられる。皇居は、今日では外国人観光客に人気の観光名所であるにも関わらず、戦前は観光客には閉ざされた存在であった。詳細は後述するが、皇居が観光客に開かれるようになるのは、1968(昭和 43)年からのことである。皇居は、1966 年版以外の全ての版において、東京案内の冒頭に掲載されている。そして、そのうち、1991 年版以外、東京が名所案内のうち冒頭に掲載されている。つまり、皇居は日本の名所案内のうち一番に掲載されている観光名所と言える。先程の仮定を適用するのならば、このように皇居が外国人観光客にとっての「観光名所」として位置づけられることについても、そこには政治的な意図が働い

ていると推察できる。

ここにある政治的な意図とは、いかなるものであったのか。本章では、第二次世界大戦直前期の1941年から最終版の出版された1991年までのものを約50年間の間に発行された『公式案内』を検討することによって、その背後にある政治的な意図を読み解くことを目的とする。

本章では第二章の議論を受けて、『公式案内』を国家の表象を形成する一端を担うテキストとして措定する。そして「平和」を前提としている観光を、なんらかの政治的意図のもとで積極的に利用するというロジックが、『公式案内』でどのように展開されていくのかを追っていく。先述した観光の持つ平和的イメージというものは、OGEAに限らない。というのも本章で使用する1941年から1991年の『公式案内』では、「平和」という単語が必ずと言っていいほど登場するのである。その際、多くが現在から未来への展望として使用されている。1941年に出版された『公式案内』では、太平洋戦争直前であると同時に日中戦争の真ただ中であり、決して政情が安定していると言えない状況下にあった。しかし、そうした中でも「平和」という単語は使用されているのである[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:85]。こうした「平和」に基づく観光のロジックが、戦後どのように用いられ、その内実がいかに変化していくのかを歴史的に追っていくことが、本章の基本的な分析視角である。

本章が分析対象とするのは、『公式案内』における天皇と皇居に関する記述である。先にも触れたように、天皇とは、戦前は国家元首として、戦後は日本の象徴として、その存在は日本という国の表象の一端を担いうる存在であったと考えられる。皇居とはそうした天皇の住まう場所であると同時に、外国人観光客にとっての代表的な「観光名所」である。こうした天皇と皇居をめぐる記述のなかで、作り手はいかなる形で「平和」に基づく観光のロジックを利用してきたのか。そこにある論理を読み説くことで、記述の背景にある政治的な意図が見えてくると考える。また、どちらも『公式案内』において一貫して取り上げられている項目であり、その記述の変遷を通時的に追うことが可能であるという点も、分析対象として適合的である。

『公式案内』の分析にあたっては、OGEAとは異なり、その製作の際に強力なパトロンが不在であったことに留意せねばならない。本章で扱う『公式案内』は1941年から1991年と出版年に非常に幅がある。当然、製作も1941年版では鉄道省国際観光局、1952年版と1952年版では運輸省観光局、1966年版、1975年版、1991年版では特殊法人国際観光

振興会と異なる組織が行っている。その背後には、かつての後藤新平の場合のような強力なパトロンが存在したわけではない。しかし、このパトロンの不在と製作者の推移は、それによってテキストがいかなる影響をもたらしたのかという点に留意する必要がある。特定の人物の意志が反映されないことによってテキストはそれ自体に匿名性を持つようになり、連続して追うことによって、不特定多数の人間の指向性が透けて見えるのである。それと同時に、一貫して日本の「公式」の名を冠した旅行ガイドブックを継続して製作しているという事実も忘れてはならない。本章ではそれを踏まえ、『公式案内』が歴史的に一貫性を持ったテキストとして考察を加えるものとする。

本章は、これまで観光史の研究ではほとんど看過されてきた『公式案内』の検討を行うことによって研究史の空白の穴埋めを行うとともに、旅行ガイドブックを何らかの意図を持って製作された権力作用を持ちうる情報媒体であるという視点から、政治的テキストとして読む必要性を明らかにすることによって、観光研究に新たな視点を加えるものである。

2 本章で扱う資料

2-1 1941年版

Japan : The Official Guide は、1941年3月に鉄道省国際観光局から出版されている。序文には、「1933年の *An Official Guide to Japan* の改訂版に朝鮮を加えたものである」とある[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:PREFACE]。1933年版の序文も掲載されている。1933年版は、1914～1917年に出版された *An Official Guide to Eastern Asia* の二巻、三巻の日本本土編からの抜粋とあるので、底本はそれだと考えられる。

必要な旅行の情報のほかに、伝説、習慣や伝統、歴史の説明、そして名所や風物といった説明も加えたことで、教養ある旅行者がより十分にこの国の理解と正しい認識を得られるようにした。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:PREFACE]

ここから、*Japan, The Official Guide* は「教養ある旅行者」向けに作成されたことが分かる。つまり、英語を解する(欧米を想定した)富裕層、知識人向けに作成されたということである。

『公式案内』は前後の版も継続して同一の形式を取っている。大きく二つに分かれており、前半は General Information、後半は各地の名所案内である。そして、驚くべきことに、基本的な構成は後の 1952 年版から 1958 年版もほぼ同じと言って良い。内容は措くとして、第二次世界大戦という大きな節目を跨いでも目次に変化がない点は重要である。構成を変えていないという事実は、戦前から一つの定型が完成していたと言い換えることができる。

2-2 1952 年版、1958 年版

1952 年版から 1958 年版の *Japan : The Official Guide*(写真 13, 写真 14)は、目次 (General Information)が 1961 年時点まで 1941 年版のものとまったく同じである。

1952 年から 1963 年まで、運輸省観光局はほぼ毎年、『公式案内』を出版している。この際、必ず 1952 年版の序文を掲載しているため、連続性を持ったシリーズであると言えることができる⁶⁶。戦後最初に出版された 1952(昭和 27)年は、敗戦国日本がサンフランシスコ平和条約で主権を回復した年でもある。戦後初の『公式案内』の出版が 1952 年というのは、偶然の一致とは考えにくい。

また、1963 年、ウィーンで開催された「旅行国際コンテスト」において、『公式案内』が 1000 余点の中から入賞している。これは国際的にその質が評価されていたことの証左となるだろう。[日本交通公社 1982:378-379]

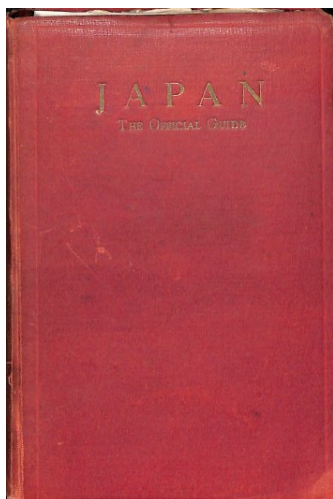


写真 13 [Tourist Industry Division, Ministry of Transportation1958](筆者所蔵)

⁶⁶ 1952 年、1953 年、1954 年、1955 年、1957 年、1958 年、1959 年、1961 年、1962 年、1963 年に出版されている。

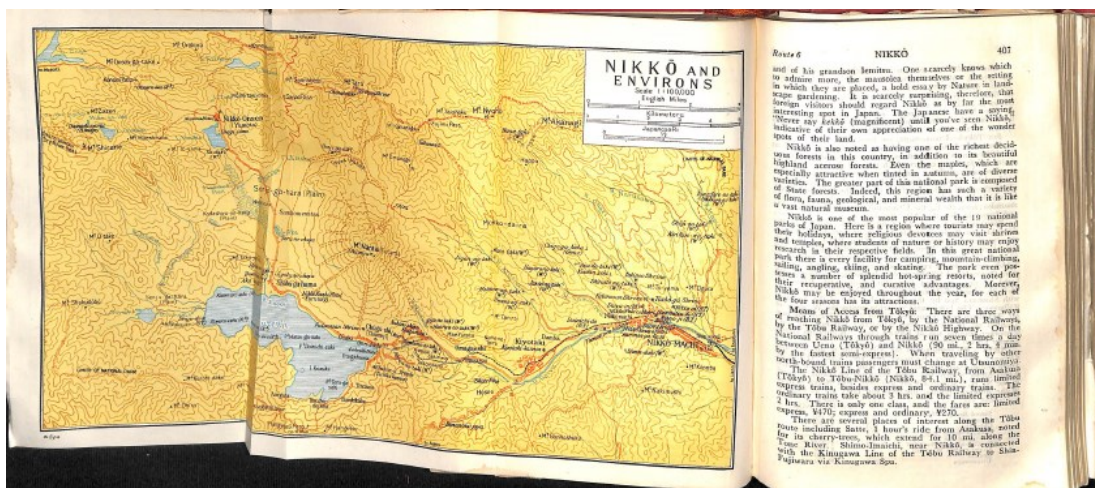


写真 14 [Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1958:407] (筆者所蔵)

2-3 1966 年版

1964 年版から 75 年版までは *The New Official Guide : Japan* と名前を変え、製作も日本国際振興会に変更になった。ここで表題が変わったことは、『公式案内』の歴史の中で大きな転換点である。それは、1964(昭和 39)年に特殊法人国際観光振興会が発足したためであると考えられる。出版はジャパン・トラベル・ビューローである。この年の『公式ガイド』は前半部の日本概略の部分のみが出版されている。1964 年版の序文には、「(改訂の理由)東京オリンピックの開催に合わせた」とあるように、出版には東京オリンピックの開催が影響している[Japan National Tourist Organization 1964:PREFACE]。しかし、本文の内容は従来からのスポーツの項目が引き続いて掲載されている程度で、内容に関してはオリンピックの直接の影響は感じられない⁶⁷。内容もほぼ変化がないと言って良い。その後、1966 年、1967 年と『公式案内』が出版されるが、ここから一気に出版が断続的になる。

2-4 1975 年版

1967 年の次に出版が確認されるのは 1975 年である(写真 15)。この版から、序文に「正当な情報(authentic information)」という言葉が登場する[Japan National Tourist

⁶⁷ 同年 1964(昭和 39)年は、観光基本法が施行された年でもある。東京オリンピックの開催年に、観光基本法の施行と国際観光振興会の発足、そして『公式案内』の改訂・出版が重なっているのは、偶然の一致とは考えにくい。

Organization 1975:1]。

この巻は、編集に際して全面的に政府の助成を受けたものであり、日本を訪れる人々に有益で興味深いと考えられる、最も新しく正当な情報を掲載している。[Japan National Tourist Organization 1975:1, 1991:1]

よって、私はこの新しい巻が日本についてのガイドブックとして一流に位置すると自信を持って言うことが出来ると感じている。[Japan National Tourist Organization 1975:1]

こうした表現が『公式案内』に使われている事実は、製作者の自信の表れだけでなく『公式案内』の権威づけと捉えることができるのである。

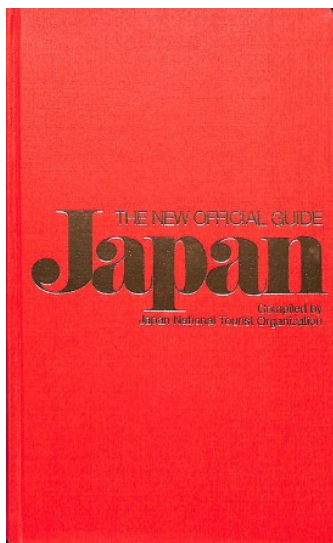


写真 15 [Japan National Tourist Organization 1975](筆者所蔵)

1972(昭和 47)年には沖縄が返還され、沖縄県は本土復帰を果たした。沖縄は約 34 年ぶりに日本の『公式案内』に掲載されたのである⁶⁸。そして、沖縄の紹介ページに、沖縄海洋博覧会の地図と案内が掲載されているのである[Japan National Tourist Organization 1975:846-848]。1975(昭和 50)年に沖縄海洋博覧会が開催されており、この年の『公式案

⁶⁸ しかし、この版のみ九州の項目の中に入っている。

内』の出版は海洋博の開催と一致する。

2-5 1991年版

最後に『公式案内』が出版されるのは1991年である(写真16)。目次の構成が大幅に変更されているが、書いてある内容は過去のものとはほぼ変化はない。1991年版は出版と一致する大きな行事や出来事は見つからないが、共に1989(昭和64・平成元)年の東西冷戦終結と昭和天皇の崩御による平成天皇の即位と元号の変化が背景にあったのではないかという仮説が浮かぶ⁶⁹。

最後の『公式案内』は、1991年で出版が途絶えている。その装丁は、これまで一貫して継続されてきた赤地に金文字のものから一転して、緑に銀文字のものに変化しているのも特徴的だと言える。

3 天皇の存在とそれをめぐる歴史記述

3-1 天皇の存在

それでは、『公式案内』での天皇についての記述はどのように変化したのだろうか。戦後からは、大きく分けて三つの変化が見られる。それは構成における変化である。「Political Administration」(1952～58年版)、「Government and the People」(1966年～1975年版)、「Social System」の下部項目(1991年版)に天皇制について記述が行われるようになった。以下は、その三つの流れの中で天皇制について記述された項目である。傍線の部分に、天皇制について記述が行われている。

●1952年～1958年版

IV. Government and the People

The Emperor

The new Constitution and the Status of the Emperor

The Political System under the New Constitution

(1) The National Diet

(2) The Cabinet

(3) The Courts

⁶⁹ 特に、後者については3-2参照。

(4) The People

(5) Local Self-Government

●1966 年版

VIII. Government and the People

The New Constitution and the Emperor

The Present Imperial Family

Political and Juridical Systems under the New Constitution

The National Diet

Political Parties

The Court System

Local Autonomy

Self-Defense Forces

International Relationship

●1975 年版

VIII. Government and the People

The New Constitution and the Emperor

The Imperial Family

Political and Juridical Systems under the New Constitution

Cabinet

The Court System

Local Autonomy

The People

Self-Defense Forces

International Relationship

●1991 年版

VII. Social System

Emperor and Imperial Family

Political and Juridical Systems

House of Representatives and House of Councilors (Legislative Body)

Electoral Process, Number of Members, Term in Office

Political Parties

Cabinet (Executive Body)

The Court System (Judicial Body)

Local Autonomy

International Relationship

Relationship With United Nations

Relationship With U. S.

Relationship With Europe

Relationship With Asia

Self-Defense Forces

People

基本的な構成としては、1952 年版から 1958 年版までは同一の表記が継続して行われている。1952 年版から 1958 年までは自己反省的側面が強く、1966 年版から皇族のプロフィールが掲載されるようになる。そして、1966 年版では内容が自己反省的な要素が削除される。1975 年版では、1966 年版に加筆、修正を加えた形の表記が行われ、1991 年版では、1975 年版に若干の加筆、修正を加えた形の表記が行われている。

1952 年～1958 年版では、現在の天皇制の説明だというのに、過去の日本の創世神話について紙幅を割いて説明している。その後、「天皇(The Emperor)」という節は、次の文章で締めくくられている。

明治憲法が 1889 年に作成されたとき、この神話(天皇を神格化した)は憲法の中心と特徴づけられ、天皇は太陽女神の天照大神の定めによって日本の絶対的な支配者として見做された。したがって、国会は西洋の憲法の形式で設立されたが、その権力は制限されていた。加えて、天皇の権威と権力は実は官僚と軍閥のメンバーの手にあったので、結果として人民を戦争の渦の中に巻き込み、最終的には敗戦を強いることになったのである。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:89,

1958:89]

ここでは過去の天皇制について自己反省的であるだけでなく、自己批判的であることが特徴である。これらの文章は、国際世論に対して配慮していると言い換えることもできるだろう。こうした表記は、運輸省観光局製作の間は、変化せず継続して掲載されていたと考えられる。

次に、「The new Constitution and the Status of the Emperor(新憲法と天皇の地位)」では、その後も一貫して書かれる事実が明示されている。

1946年11月3日、新しい憲法が作成され、日本の政治構造は根本から変化した。新しい憲法は日本の政治を民主化することを目的とし、ポツダム宣言の受諾にのっとったものであった。そして、憲法上の天皇の法的な地位は根本的に変化した。彼の地位は日本の統治者から、政府の権威や権力を所有しない象徴になったのである。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:89, 1958:89]

かつて、「この神話(天皇を神格化した)は憲法の中心と特徴づけられ、天皇は太陽女神の天照大神の定めによって日本の絶対的な支配者として見做された」事実から一転して、天皇はあらゆる権力や権威を放棄した象徴としての地位に就くことになったのである[[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:89, 1958:89]。その記述は、次の「新憲法のもとでの政治制度(The Political System under the New Constitution)」でも反復して行われている。

[新しい憲法は主権在民であることが基本精神である。新しい憲法のもとでは]天皇はもはや象徴に過ぎず、国家の政治的な権力は三つに分かれている—立法、行政、司法である。([]部分[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:89, 1958:89])[The Japan National Tourist Organization 1991:126]

同様の記述は、1966年版、1975年版にも書かれている。

天皇は、かつて人民に対して絶対的な権力を行使してきたが今は国の象徴であり、主

権は人民にあるということを理解する必要がある。それこそが、真の日本の民主主義である。新しい憲法の第4条には、天皇はもはや政治に関する権力を保有しないのである。彼はもはや儀式や祭典しか行わない。たとえば国会で選任された総理大臣の任命や内閣で選任された最高裁判所の主要な裁判官の任命などである。[Japan National Tourist Organization 1966:124, 1975:161]

この象徴天皇と主権在民、三権分立の記述は初期にとどまらず 1991 年版まで継続して行われている。このことから、上記の要素は戦後日本において重要で強調すべきものであったことが分かる。そして、時を経るにつれて、天皇の記述はそれまでの自己反省的な要素から人間的な存在としての要素が強くなっていく。

天皇裕仁は 1901 年 4 月 29 日生まれ、1926 年に天皇に即位し、その後第二次世界大戦後には新しい憲法で明記されたように「日本と日本の人民の総体の象徴」となった。(中略)1971 年 9 月 29 日から 18 日間、天皇と皇后はデンマーク、ベルギー、フランス、イギリス、オランダ、スイス、西ドイツを訪問し、アラスカでアメリカのニクソン大統領夫妻と会談した。これは天皇にとって即位中初めての外訪として、記録すべき事柄である。また、天皇は生物学に造詣が深く、特に海洋生物学と植物学が専門でこれらの分野に多くの著作を残している。[Japan National Tourist Organization 1975:161]

この時点では相変わらず新憲法による象徴天皇の記述が残っているが、簡単なプロフィール形式になっている点は特筆に値するだろう。この後、『公式案内』では皇族のプロフィールが記述されるようになる。その中で、天皇の外訪が特記されているが、この点は天皇の「平和」外交的な側面を強調していると考えられる。それは、かつての絶対権力者、神聖な存在から、親しみやすい人間としてのイメージと同時に、戦後日本の目指す「平和」主義の旗頭としてのイメージであった⁷⁰。そしてその要素は、1991 年版では特に強調されるようになる。

⁷⁰ また、外訪先が、当時冷戦状態の中、欧米の資本主義陣営が中心であったことも注目すべき事柄だろう。日本国憲法により天皇の政治的干渉は不可能になったが、天皇が日本国の「平和」主義を海外に示すためにその役割を担わされていたと読み取ることも可能である。

皇太子明仁は1989年の1月7日の昭和天皇の崩御により第125代の天皇になった。
／天皇は1933年の12月23日に誕生した。四名の姉に次いで、待ち望んだ皇太子の誕生に国中が祝福した。皇太子は第二次世界大戦終結後の1946年に学習院中等科(貴族学校)に入学した。その際、E. G. ヴァイニング夫人がアメリカから来日し、皇太子の英語の家庭教師となった。夫人は四年間を皇太子と過ごし、英語と同じように民主主義を彼に教授した。[Japan National Tourist Organization 1991:126]

ここでは、皇太子の幼少時代に民主主義を教育されていることがわざわざ明記されている。これは、先述の天皇外訪による「平和」的側面と同様、民主主義も同じように重要な「平和」イメージとして考えられていたことが分かる。そして、皇太子が皇室ではなくいわゆる「平民」と結婚したことも、新しい時代の始まりのイメージとして記述されているのである。

皇太子明仁は、1959年4月10日に正田美智子女史と結婚した。正田美智子女史は史上初めて平民から皇族へ嫁ぎ、二人のロマンスは人々の人気をさらった。[Japan National Tourist Organization 1991:126]

以上、戦前から戦後、現代にかけての天皇の記述の変化について検討した。今までの議論を整理すると、以下のようになる。

1941年版の天皇の記述では、天皇は大日本帝国の始祖として神武天皇からの万世一系の神聖性が強調されている。そして、その歴史記述は科学的、歴史的根拠ではなく神話の根拠に基づくものであった。

それに対して、戦後の天皇の記述では、日本国憲法の制定によって著しく変化した政治体系を、天皇を中心に説明している。天皇は国の象徴に過ぎず、一切の権力を持たない。かつて天皇が一手に握っていた権力や権威は放棄され、主権在民、三権分立が新しい日本の原則となった。そして、時代が進むにつれて、天皇を中心とした皇族のプロフィールの記述が増えていき、天皇の政治的要素よりも人間的な親しみやすい要素を記述するようになった。それとともに、皇族の外訪や慈善事業を掲載することによって、「平和」的側面、民主主義的側面を強調し、天皇や皇族の存在意義を強めようとしている意図が読み取るこ

とができる。それと同時に、「平和主義」を強くアピールすることで、第二次世界大戦で落ちた日本のイメージ向上を図っていると読み取ることができる⁷¹。

そして、こうした天皇・皇室像のイメージの変化は、松下圭一(1959)の「大衆天皇制論」と類似していると考えることができる。松下の「大衆天皇制論」は、1959(昭和34)年4月の皇太子結婚に伴う皇太子妃ブームを事例に、戦後の天皇や皇室への人々の認識の変化を分析したものである[松下 1959a, 1959b]。右田裕規は、同時代の類似する戦後天皇制論と松下の「大衆天皇制論」との区別される特徴を、以下の二点にあるとしている[右田 2006:5]。

- ① 戦後民衆による天皇制支持の論理を、(マスメディアの皇室報道を媒介に再生産される) 天皇家にたいする世俗的な関心・憧憬という部分に求めた点。
- ② この新しい天皇制支持の論理の拡大を、戦後支配層による政策転換にのみ還元してゆくのではなく、大衆社会状況の出現という、巨視的な社会変動との関連において、洞察を加えていった点。

そして、松下は、以下のように大衆天皇制の成立を説明している。

「恋」の「平民」皇太子妃ブームは、まさに新憲法を前提としてのみブームとなりえたのである。それは新憲法ブームという方がふさわしくはなかろうか。／今度の皇太子妃決定によって、客観的にみちびきだされる帰結は、新憲法下の天皇制—いわば「大衆天皇制」の成熟である。[松下 1959a:31]

また、「日本における天皇制の条件は、敗戦による天皇神格の否定と新憲法の成立、並びに旧天皇制の権力・思想機構によって抑圧されていた大衆社会状況の急激な露呈である」とし、「しかもそのとき、大衆天皇制は、『さしあたっては』新憲法のシンボルとなってよみがえってきている」と説明した[松下 1959a:37](傍点は本文による)。そして、「大衆天皇制のもとでは、君主は『脱政治化』しながら『政治的美』に転化するとき、最もすぐれてそ

⁷¹ 1966年から、『公式案内』には皇族のプロフィールが書かれ、皇族の親しみやすい人間像と行っている慈善事業などが紹介されるようになった。1966年版では、当時の皇太子明仁の結婚だけでなく天皇の名代としても含め多数の外国訪問を行っている事実を、1975年版では、皇后が日本赤十字社の名誉総裁に就任している事実などが掲載されている。一方、皇太子の趣味がスポーツであり、テニスや乗馬など多岐に渡るといった人間的な側面も強調されている[Japan National Tourist Organization 1966:161, 1975:124-125]。

の政治的効果をあらわすのである」[松下 1959a:44]。「したがって天皇は、政治的軍事的性格を喪失して、文化的かつ家庭的性格をもつようになる。科学者と、皇室の家庭的団らんが天皇のイメージとなる」[松下 1959a:45]のである。そして、「日本の皇室は、むしろ新憲法において安定するとみなさなければならない。しかし、それゆえまた皇室は、新憲法にその運命をむすびつけられている、とも言え」[松下 1959a:46]るのである。

そして、この視点は、『公式案内』においても無縁ではない。天皇は、かつての畏怖と崇拜の対象から、親しみやすい敬愛の対象、そして「平和」主義の体现者へと変化したのである。そういった表象が、『公式案内』という公的な情報媒体によって対外的に宣伝されていたという歴史的経緯をここでは読み取ることができるのである。

3-2 歴史記述

こうした天皇の記述の一方で、それに関連した日本の歴史の記述は『公式案内』でどのように変化したのだろうか。驚くべきことに、歴史記述は古代史の冒頭と末尾の近現代史以外、1941年から1991年までほとんど変化していない。日本の歴史についての記述は、『公式案内』の中でおおむね同一のものが戦前から現在まで共有されてきていたという事実が伺える。

そのうち、歴史の始まりの変化のある箇所は、『公式案内』ではすべての版の中で III. History の下部項目「帝国の創建と初期の外国との交流(Founding of the Empire and Early Foreign Intercourse (600 B.C.—600 A.D.))」の冒頭に書かれている。

まず、1941年版のものには、どのように書かれているだろうか。冒頭は以下のように書かれている。

大日本帝国は紀元前 660 年に神武天皇によって創建され、それは彼が日本中部、大和地方(現在の奈良県)に自身の皇位を確立したところに遡る。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:66]

大日本帝国の成立を、神武天皇という『古事記』、『日本書紀』に登場する神話上の天皇と時代に求めている事実は非常に興味深い。そして、「大日本帝国は神からの勅令によって確立した」という認識と「連続した同一の系統による天皇による」考え方は、万世一系である天皇の存在を大日本帝国の成立の根拠として位置づけている[Board of Tourist Industry,

Japanese Government Railways 1941:66]。

天皇は、畝傍山に登り橿原神宮で荘厳な即位式を行った。その記念すべき年(紀元前 660 年)は日本の国家的歴史の始まりの年であり、神武天皇の即位の日である 2 月 11 日は紀元節という国民の祝日として祝われている。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:66]

これらの引用から明らかになるのは、日本の歴史の始まりが神武天皇から始まる考古学的根拠を無視したものであるということ、天皇の存在が神聖で長い歴史と正当性をもつものとして描かれているということである。これは、『古事記』、『日本書紀』による日本創世神話がそのまま大日本帝国のアイデンティティと重なっていると言い換えることができる。先述した、天皇制と創世神話との密接なつながりがここでも明らかになっている。こうした歴史記述は、皇国史観という。1941 年版の出版された前年の 1940(昭和 15)年には、紀元 2600 年記念行事が国を挙げて行われていた点も、何らかの関連があると考えられる。

こうした記述が戦後どのように変化していくのだろうか。戦後の『公式案内』すべてに書かれている日本史の始まりは以下の通りである。

日本列島に最初に人類が居住を始めたのは、石器時代後期、新石器時代であると信じられている。人類が石器時代初期に世界のこの地域に住んでいたと示す考古学的発見は存在しない。遙か昔に使用されていた土器には二つの様式がある。それは縄文様式と弥生様式である。(中略)この(縄文様式の)様式の土器は数千年間使用されていたことが明らかになっている。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:58, 1958:68] [Japan National Tourist Organization 1966:83, 1975:119, 1991:84]

驚くべきことに、記述内容が 1952 年に改まってから 1991 年までほとんど変化していない。日本の歴史の始まりが新石器時代に変化し、歴史の始まりが数千年前に遡っていると同時に、考古学的な歴史記述が行われている。戦後、歴史記述に大きな転換が行われ、その後はその転換が継続し共有されていた事実が分かる。これについて、過去の皇国史観について強い自己批判的な見解を示す文章がある。

この神話(日本創世神話)は、長い間、歴史家の立場から史実か否かの深い検討がされてこなかったのである。実際のところ、日本は約 2000 年前に創建されたと言われている。しかし、先述のような創世神話に対する信仰を繰り返し教え込まれた結果、人々の忠誠心は天皇への崇拜の念へと強められ、その結果皇室を要として国家の強い統一化が行われたのであった。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:88-89, 1958:88-89]

つまり、皇国史観に基づく天皇崇拜は、当時の強い政治的圧力によって科学的な歴史検討ができなかった点に由来している。そして、それが戦後、大きな反省と批判を引き起こし、歴史記述の再検討を生んだと考えることができるのである。

次に、近現代史の内容を検討する。近現代では、天皇についての記述と共に、現代の政情を色濃く反映した記述が見られる。1941 年版では、戦前の外交政策の正当化と近代化のアピールが印象的である。冒頭は以下の文章で始まっている。

政府の政策の方針の一般的な方針を定める上で、明治天皇は、明治元(1868)年の三月、天地の神々に対する敬意を払って最も重要な五つの主義を実行すると誓約した。それは一般的に五箇条の御誓文と呼ばれている。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:83]

これはいわゆる五箇条の御誓文を天皇による天地の神々への誓約として記述しているが、肝心の内容については書かれていない。ここで印象に残るのは、明治政府の主体があくまで天皇であるという認識である。その認識は、以下の国会の始まりについての記述でも同様である。

天皇自身は、国家審議のための集会の開始に対する国民の熱望によく気付いていたので、明治 14 年(1881 年)にある布告を出し、明治 23(1890)年に最初の国会を召集することを約束した。その結果、その年に初めての国会が召集された。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:83]

ここで見られるのは、日本という新しい国家の主体がそのまま天皇と結びついているという事実である。そして、天皇は民意を反映して政府の設立を命じたという独自のヒエラルキーが垣間見られる。

明治時代の初期の数十年間、国家は政策、経済および科学の分野での西洋国々からの新しい知識および技術を得るのに忙殺された。そしてその頃、多くの人々が独特な国家の気風と要求を持って海外の知識を吸収した。そして、本来の知識に独自の創造的な系譜を持って調査を続行した。医学や医術での華々しい発見や、軍事・軍需部門の躍進、その他の分野での大きな成功を成し遂げた。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:84-85]

ここでの引用文の主語は明示されていないが、強いて言えば「日本」、「日本という国家」に集約されるだろう。そして、その延長線上には、明治天皇が存在していると言える。そして、日清・日露戦争の勝利を経て、日本の東アジアでの勢力が強まっていく様子が詳細に、誇らしげに記述されていく。そして、1910年の韓国併合をもって明治時代を締めくくっている[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:84]。ここから、日本の近代化と植民地国家形成が当時の重要な目標であった事実が分かる。

大正から昭和時代になると、まずは第一次世界大戦の勝利により日本が世界の有力国に位置した事実が描かれるが、漠然としていて具体例が挙げられていない。

大正天皇の御世の下、日本の国力は非常に強大にそして広範囲にわたった。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:85]

こうした論調は、昭和に入ってからでも健在である。

(昭和)天皇がその位を得てから、世界における日本の地位は以前よりもますます高まっていった。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:86]

植民地を拡大することによって国際的な日本の立場が上昇していくことが、日本の目指す一つの到達点として捉えられていたことが分かる。しかし、1930(昭和 5)年のロンドン海

軍縮会議で日本海軍の軍縮が決定してからは、少しずつ情勢が不穏になっていく。その翌年の 1931(昭和 6)年、満州国の建国によって、軍国主義的要素は決定的になる。

一方、極東の情勢は、重要な変化を被った。そして翌年(1931 年)の秋に、あの有名な満州事変が起こり、その結果 1932 年に満州国という新しい国家が建国されたのである。したがって、これらの出来事の間、日本は極東の恒久平和を確保するように努めたが、国際連盟が東アジアの実際の状況に対して情報不足の状態で日本自身方針と相容れなかったことが分かったので、日本はついに国際的な公平の原則の遂行のため国際連盟の脱退を余儀なくされた。その出来事は昭和 8 年(1933 年)に起こった。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:85]

その後の国際連盟脱退や日中戦争の記述において、文章が常に「極東の恒久平和」を標榜しているのは特筆すべき事柄である。これは、かつて日本が目指し到達したと考えられていた植民地国家の拡大と国際的地位の向上に矛盾する現実に対するものであったと考えられる。そして、実際のところ、これだけの政情不安の中、日本に旅行をしようとする外国人がいるとは考えにくい。「東洋の平和」や「国際的な公平の原則の遂行のため」という建前を用いながら、読者を説得しているか外交政策を正当化する自己弁護のような印象を受ける。また、日中戦争という深刻な外交問題を、日本の正当性によってのみ押し進めている強引さと軍国主義的な要素も見られるのである。

常に日本の中国に対する政策は、古い隣人に対する真の友情を求め、中国との親密な関係によって東洋の安定を保護するという望みによるものであった。日本の真意を評価することができない中国の国民党政権は反日感情を増幅、拡大させていき、抗日運動をけしかけていった。そして昭和 12 年(1937 年)に、中国軍が合意の存続に違反したことによって日本軍との戦闘が始まった。そして、支那事変が起こったのである。日本人は今も、間違った主義や蒋介石政権の拡大を根絶する為、日夜奮闘している。そして、新たな政府(満州国)の健全な成長と発展の支援により、日本が正しい共通の理解をもって東洋の平和を強めるため、そして世界の全ての国の幸福と繁栄に貢献するために働くことができるのである。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:85]

以上のことから、1941 年版は天皇を中心に据えた日本政府の軍国主義的イデオロギーの要素が強い記述がされていると言える。また、こうした『公式案内』が「平和」主義を訴える記述は、戦時中という不安定な状況下だからこそ尚更必要であったと言い換えることもできる。

では、こうした戦前の主観的で軍国主義的な歴史記述は、戦後どのように変化したのだろうか。戦後最初に出版された 1952 年、1958 年版では、大正天皇の即位から第一次世界大戦終結までを、次のように記述している。

1912 年 7 月、明治天皇が死去し大正天皇が即位した。新しい天皇の統治の下、日本の影響はますます拡大していった。第一次世界大戦が 1914 年に勃発したとき、日本はイギリスとの同盟により連合軍側へ付いた。(中略)戦勝国として日本の国際的地位は急激に上昇した。日本は当時、世界の「五強」と呼ばれ、海軍の軍勢力も第三位になっていた。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:87, 1958:87][Japan National Tourist Organization 1966:100, 1975:136, 1991:101]

1941 年版で三パラグラフほど割かれていた第一次世界大戦の勝利と軍勢力の向上について、一パラグラフで説明している。記述が非常に簡潔になったことが伺える。それと同時に、当時日本が目標としていた植民地国家の拡大による日本の国際的地位向上が、既にその価値を失い歴史的事象に過ぎなくなったと言い換えることができる。

次に、1941 年版では長く丁寧に説明していた現代史について、どのように書かれているだろうか。

ジュネーヴ会議に先立って、日本は中国と衝突した。1932 年日本は満洲の独立を援助し、それによってアジアへの影響力を増していった。1937 年には日中の利権争いが明確化し、武装勢力との軍事抗争に発展した。これは日本の一部分による一方的な行動であった。当然、それはアメリカやイギリスを挑発することになり、ついに太平洋戦争を引き起こした。この戦争は日本の壊滅的な敗北によって終わり、国土は酷い窮状となった。日本を戦争へ導いた軍部や、政治、財政の指導者は皆その地位が下がった。多くの人々が、依然として残る封建制度を弾劾した。新たな日本は、今や民主主義へ

の道を歩み始めている。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:88, 1958:88]

これもまた、一ページ近く記述されていた 1930 年代の情勢が非常に簡潔に書かれている。そして、1941 年版であれほど「東アジアの平和」を標榜していた日中戦争が「一部分による一方的なものだった」と批判的に記述されているのは特筆すべき点だろう。そして、太平洋戦争の終結により国土が荒廃した様子も赤裸々に記述しており、そこには以前のような軍国主義的な要素は見当たらない。そして、文末を「新しい日本」、「民主主義」という単語で締めくくっているのも印象的である。先述のように、1952 年はサンフランシスコ平和条約調印によって連合国軍の進駐が終わり、新たな民主主義国家としての「日本国」としての歴史が始まるという希望が描かれている。民主主義が当時最新かつ正義の大義名分を持つものとして認識されていた事実が分かる。『公式案内』が、紀元 2600 年からサンフランシスコ平和条約の間に「平和」の内容を変質させたにもかかわらず「平和」を強調するのは、観光が「平和」を前提として成り立つためである。戦前と戦後における『公式案内』は、常に政治的情勢を意識して書かれていた。

そして、簡潔な記述は、1966 年版でも同様である。

(日中戦争は)アメリカとイギリスの対立を引き起こし、ついに太平洋戦争に至った。この戦争は日本の敗戦によって終わった。これに続いて、日本の領土に連合国軍の占領をもたらした。そして、日本を民主主義国家へと一新する大規模な変革が始まった。人々は皆依然として残る軍事主義を弾劾した。[Japan National Tourist Organization 1966:100, 1975:136, 1991:101]

激動とも言える 1930 年代～1940 年代の日本を取り巻く情勢を、わずか三行で描写している。かつて紙幅を割いて「説明」をしていた事柄は既に過去のものであり誤りであったとして切り捨て、新しい方向性に向かおうとしている姿勢が感じられる。

[日本の民主化に着手した中で最も偉大だったことは、憲法の改定であった。／新しい憲法が作成されたとき、天皇裕仁はその神話的神性を廃止し、人間としての個性を(国民に：引用者)表した。五年に渡る占領統治の後、連合国軍最高司令官によって日本は

1952 年独立し、1956 年には国際連合への加盟が承認された。]こうして、新しい日本は、今や民主主義と平和的繁栄の道を歩み始めている。[Japan National Tourist Organization,1966:100]([]部分[Japan National Tourist Organization 1975:136, 1991:101])

そして、現在の日本のあり方として「民主主義」と「平和的繁栄」が掲げられるようになったのである。ここで見られるのは、1941 年版と全く異なる意味の「平和」である。民主主義と併記されることによって、連合国軍の進駐、特にアメリカの影響を大きく受けたことが分かる。

1975 年版以降は、高度経済成長による日本社会の変化とともに、国際社会への復帰、沖縄返還、各国との国交正常化が描かれている。特に各国との国交正常化は、国際社会における日本が正当な地位を得ているものとして重要な要素だったことが伺える。

1971 年、日本はアメリカ合衆国が琉球諸島に提供してきた戦後の協力支配の終了の合意と、現在の沖縄県の祖国返還に署名した。[Japan National Tourist Organization 1975:136, 1991:101-102]

先述のように 1975 年版では、34 年ぶりに沖縄県が『公式案内』に掲載されたことは注目すべき事柄である。沖縄県の返還によって日本の国土が増え、地図が変更になったためである。また、高度経済成長により、日本が国際的な地位を得るようになった事実が書かれている。

1960 年代の始め、日本は、飛躍的な新しい設備に対する技術革新と投資による、いわゆる高度経済成長政策に乗り出した。その結果、日本はすぐに 1964 年には IMF(国際通貨基金)の 8 条国加盟による貿易や為替の管理の終了によって、日本は OECD(経済協力開発機構)に加盟と前進したのであった。[Japan National Tourist Organization 1975:136, 1991:102]

これは、復興から高度経済成長を経て、日本が国際的な地位を得たという一つの到達点に達したと読み取ることができる。それは、かつて敗戦により地に落ちた日本の国際的評判

が、大きく向上したことの証左となるからである。その上で、やはり、こちらでも「世界平和」と「民主主義」が併記され未来への展望として描かれている。

世界の影響力のある国の一つとなり、日本は今や刻々と変化する世界情勢の中でその注意を世界平和や民主主義を遂行する為の方策を見つけるという課題に注意を向けている。[Japan National Tourist Organization 1975:137, 1991:103]

1991 年版では、戦後日本の変化として、機械化や個人化が社会問題になっている事実や消費社会が量から質へ変化したといった内容が加わっている。そして、以下の文章で「歴史」の項目が締めくくられている。

1989 年 1 月、昭和天皇が 63 年の在位ののち死去し、新しい時代に突入した。それは平成である。[Japan National Tourist Organization 1991:103]

ここから、平成天皇の即位による新しい時代の始まりが 1991 年版の出版と重なっていると推測することができる。日本の元号が変わり、歴史の大きな節目と捉えることができるためである。これ以降、『公式案内』は出版が途切れている。

4 皇居の記述の変遷

皇居は、日本語では戦前は「宮城」、戦後の 1948 年から「皇居」と呼称が変わったが、英語では戦前から現代まで一貫して“Imperial Palace”と表記されている⁷²[宮内庁 2015]。そして、1966 年版を除く全ての『公式案内』において、東京の名所案内で最初に記載されているのが特徴的である。東京の最初の名所として皇居が一貫して採用されている事実は、非常に興味深い。それだけ、日本の首都である東京の第一印象として位置づけられるものであると言えるからである。しかし、その記載された内容は、時代を経るごとに大きく含意を変えていった。

まず、1941 年版では、東京案内は横浜の次に書かれており、皇居はその冒頭に掲載され

⁷² 宮内庁のホームページには、「明治元年に皇居となり、明治 21 年以来、宮城と称されていましたが、昭和 23 年、宮城の名称が廃止されて、皇居と呼ばれるようになりました」[宮内庁 2015]と説明がされている。本章では、引用文の翻訳では英語のニュアンスを尊重し、“Imperial Palace”の訳は一貫して「皇居」と表記する。

ている。そして、次のような文章が書かれている。

皇居の構内は、決して観光客に開かれることはないが、内側の囲い地と外側の庭園で構成されている。そして内側の囲い地は許可のない人間による侵入から非常に注意深く警備されている。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:251]

一般の人々は、ところどころ宮殿の屋根が見える地点である門の前の最初の橋の終わりまでならば近づくことが許されている。[Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways 1941:252]

この記述は、その前に出版された 1914 年版 *An Official Guide to Eastern Asia* 第三巻、1933 年版 *An Official Guide to Japan* にも書かれている[Imperial Japanese Government Railways 1914:51-52][The Japanese Government Railways 1933:25]。このような記述から、皇居は東京案内の冒頭に登場していながら、実際は訪れることが難しい、アクセス困難な名所だと言うことができる。説明の文章も、皇居のうち立ち入れる範囲内の外側の門の紹介にとどまり、その内側は一般の人々に隠されたものとなっていた。内側へのアクセスの困難と「厳重な警備」は、単に隠されているよりも、より重要かつ神聖な印象を与える。事実、皇居の主である天皇の存在は、当時大日本帝国の要であると同時に神聖不可侵であった。厳重に閉ざされ観光客を拒む皇居は、主の天皇と同じく神聖で不可侵の存在だったのである。

次に、戦後最初の 1952 年版とその後継続して出版された 1958 年版では、相変わらず内側の囲い地に関しては許可のない人間の立ち入りを厳重に禁じている文章が記されている[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:284, 1958:284]。しかし、それと同時に、史上初の出来事が記されるようになった。

一般の人々は年に二回、天皇を祝賀するために宮殿を訪れることが許されている。それは元旦と天皇誕生日の 4 月 29 日である。他の日は、門の前の最初の橋の終わりまでならば宮殿に近づくことができる。[Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:284, 1958:284]

これは、1948(昭和 23)年から開始された、新年と天皇誕生日の年 2 回の一般参賀のことである。ここで初めて、一般市民が皇居の中に立ち入ることが許されるようになった。また、先の戦争で多くの建築物が焼失した事実も書かれている [Tourist Industry Division, Ministry of Transportation 1952:284, 1958:284]。基本的に内側が閉ざされている事実は変わりはないが、一般参賀の開催によって皇居が外、つまり一般の人々に開かれ始めたことが分かる。これは、従来の天皇像から大きく変化し、人々の天皇へのアクセスが一部可能になったとも言い換えることができるだろう。

そして、1966 年版では、皇居が初めて東京案内の冒頭ではなくなり、10 番目に記述された⁷³。この後の版で、皇居は再び東京案内の冒頭に戻るが、日本の象徴となった天皇の居所である皇居の重要性が下がったことの反映と取ることもできる。

その後、1975 年版では、再び皇居は東京案内の冒頭に戻る。そして、1968(昭和 43)年から東御苑が平日の日中に公開されるようになった [Japan National Tourist Organization 1975:332]。とうとう、皇居の一部が、常に外側、つまり一般の人々に開かれるようになったのである。東御苑の公開は、同じく 1968(昭和 43)年の皇居の改修が反映していると思われるが、年を経るにつれて皇居へのアクセスが容易になりつつある点は特筆に値する [Japan National Tourist Organization 1975:331]。また、外側の門について、前皇太子の成婚の際に使われた事実などが記載されるようになり、次第に親しみやすい印象が強まっていることも分かる。

最後の 1991 年版では、皇居は相変わらず東京案内の中で冒頭に書かれているものの、全体の構成が大きく異なったことの反映として、日本の名所案内が北海道、東北地方に次いで東京案内へとその順番がずれこんだことが特徴的である。もはや、東京は日本の首都だからという特別視は消滅したと言える。そして、それまでの紹介に変わり、歴史的な由来や情報の記述が増える。そして、年 2 回の一般参賀の際に使用される具体的な宮殿名が記載され、そこで「天皇・皇后夫妻と皇族を見ることができる」と説明されるようになった [Japan National Tourist Organization 1991:374]。

一般の人々は、東御苑のみ中に立ち入ることが許されている。しかし、1 月 2 日の新

⁷³ 1966 年版での一番目は丸の内である。名所としては東京駅が一番に書かれていた [Japan National Tourist Organization 1966:311]。

年参賀と天皇誕生日の12月23日には、天皇皇后夫妻や皇族を見ることができる長和殿まで行くことが許される。[Japan National Tourist Organization 1991:374]

注目すべきは、「天皇皇后夫妻や皇族(Imperial Couple and their Family)」を「見ることができる(can be seen)」という記述である[Japan National Tourist Organization 1991:374]。ここで記述される天皇や皇族は、もはや敬う対象ではなく、「見る」対象なのである。奇しくも、松下が前皇太子(現天皇)の成婚の際の皇室ブームで指摘した「拝みに行くのではなく、『ミ』に行くのである」という状態が、皇居に対してまで適用されたことが分かる[松下 1959a:33]。そして、極め付きは、皇居の入り口にある二重橋の眺めを、「日本国内外から愛されている」とし、その眺望を賛辞した次の文章の出現だろう[Japan National Tourist Organization 1991:374]。

石垣に囲まれた堀を三宅坂から見たこの一帯の眺めは、イギリスの詩人エドモンド・ブランデンによって世界で最も美しい場所の一つだと賞賛された。[Japan National Tourist Organization 1991:374]

エドモンド・ブランデン(Edmund Branden)は、19世紀末に誕生し20世紀に活躍したイングランドの詩人であり、第一次世界大戦後、1920年代に日本の東京帝国大学で教鞭を執っていた人物である。ここで、そのブランデンによる賞賛の文章が登場しているのは、非常に興味深い。第一に、皇居という場所が、既にかつての神聖性を失い、その価値を外国の知識人からのまなざしで補強している点が挙げられる。第二に、皇居の価値が既に政治性を失い、いち「観光名所」と位置付けられた点が挙げられる。かつて、厳重に警備され常に閉ざされていた状態から、外側の庭園がほぼ毎日開かれるようになり年二回皇族へもアクセス可能になった皇居は、神聖視し崇拝する対象から単なる興味かつ見世物的な消費の対象、つまり観光地へと変化した。そして、その際の評価を国外の、しかもヨーロッパの知識人による賞賛に求めるという点が、それを如実に物語っている。まさに、ここで消費する対象としての「観光名所」である皇居が誕生したと言って良いだろう。それは、前述したブーアスティンの「現代観光の戯画化」とも捉えることができる。

日本でのアメリカ人観光客は、日本のものよりは、「日本風」のものを捜し求める。[ブ

ーアスティン 1966(1962):117](傍点は本文による)

「日本のものより」「『日本風』のものを捜し求める」ことについて、ブーアスティンは、このように説明する。

観光客は戯画化されたものを捜し求めるし、旅行代理店も外国の観光案内機関もすぐにそれを与えてくれる。観光客が正真正銘の外国文化(しばしば理解しがたい)を愛好することは稀れである。観光客は、自分の偏狭な期待を満足させたがる。[ブーアスティン 1966(1962):117]

「日本のもの」とは「正真正銘の外国文化(しばしば理解しがたい)」であり、『日本風(本文ルビ)』のものと「戯画化されたもの」を指す。皇居は、常に公開され外国人の賞賛を受けることによって、かつての神聖性を喪失し「日本のもの」という「正真正銘の外国文化」ではなく、「日本風のもの」へと変質していったと言い換えることができる。この点に限って言えば、これはブーアスティンの「戯画化」が的を射ていると言える。

こうして、戦前から現代にかけて、東京案内で重要な位置を占め続けていた皇居は、時を経るにつれてその含意する価値を大きく変容させていったのである。

5 おわりに 「公式案内」による平和のイデオロギー

以上、天皇をめぐる記述を追うと同時に皇居の記述の変遷を、1941年から1991年までの英文『日本公式案内』から検討した。まず、戦前の1941年版の『公式案内』では、皇居は一般市民には閉ざされていたにもかかわらず、東京案内のうち最初に記載されていた。それは、当時の皇国史観が反映された歴史記述からも明らかであるように、大日本帝国の要としての天皇の住まう場所として神聖視されていたからとも言える。ここでは、出版の前年の1940(昭和15)年に紀元2600年を迎えたことが影響しているとも考えられる。また、満州国建国による国際連盟脱退や日中戦争といった当時の不安定な政情に対して、「アジアの平和」、「世界の繁栄」を標榜していた事実も忘れてはならない事柄である。その中で、「平和」と称して公式旅行案内を製作していた事実は、観光のもつ「平和」の印象を利用して植民地拡大を正当化するというきわめて政治的な意図が働いていると言い換えることができる。

次に、戦後の 1952 年版から、1948(昭和 23)年に開始された一般参賀の記述が登場する。皇居は新年と天皇誕生日の年二回、一般市民に開かれるようになったのである。ここでは、サンフランシスコ平和条約調印により日本が GHQ(連合国軍総司令部)の占領から独立した年と同じせいか、「民主主義」が新しいキーワードとして浮かび上がってくる。1946 年(昭和 21)の新憲法制定により、天皇は全ての権利を放棄し日本の人民の象徴となった。そして、かつての皇国史観や軍国主義に対して、痛烈な自己批判を行うようになる。それは 1958 年版でも全く同様である。その姿は諸外国からのまなざしを意識したものであると同時に、かつてのイメージを払拭するためのアピールであったと言い換えることが可能であった。

その後、製作が 1964(昭和 39)年から運輸省観光局から特殊法人国際観光振興会へと変わった。1966 年版では、引き続き民主主義と象徴天皇制の記述や皇居の年二回の一般参賀についての記述は残されているものの、天皇を始め皇族のプロフィールを記載するようになった事実は特筆すべき事柄である。それとともに、それまで特徴的であった自己批判的な記述はなりを潜める。その代わり、「世界平和」を民主主義と併記するようになったのである。これは、天皇が親しみのある個性を持った人間としてだけではなく、「平和」主義の実践者として描かれるようになったということを示している。1964(昭和 39)年の東京オリンピックを経て、国際社会での注目を集めた日本が、それまでの過去と決別して民主主義に基づく世界平和を目指していくという構図が、天皇を中心に読み取れるのである。

そして、1975 年版は、1966 年版の世界平和と民主主義を結びつける記述の傾向を更に強調するものとなっていった。その背後には、高度経済成長による経済発展と日本の国際的な地位の向上がある。それと同時に見逃してならないのが、1972(昭和 47)年の沖縄県の返還であった。ここから、『公式案内』は「正当な情報」として自負心を表明するようになる。そして、1968 年から、皇居は年二回の一般参賀の他に、東御苑を平日の日中に公開するようになった。再び、皇居の記述が東京案内の最初に戻ったことも注目すべき事柄である。天皇は、国際社会に対して日本の「平和」主義の実践者としての表象を担わされ、その住まいである皇居は、次第に一般市民へ開かれつつあった。

最後の 1991 年版では、1989(昭和 64、平成元)年に昭和天皇が崩御し新天皇が即位した事実を受けて、新天皇がより親しみやすく、前天皇以上に民主主義の実践者であることを強調した記述へと変化する。そして、皇居の記述もまた、従来の実事に加えて歴史的事柄も描かれ、「皇族を見ることができる」条件の記述も出現する。極め付きは、イングランドの詩人による皇居の眺めに対する賛辞の引用の出現である。これによって、皇居はかつて

の神聖で閉ざされた空間から、一般市民に開かれた場所、そして観光名所へと変貌した。それと共に、天皇もかつての神話的な権力者から日本の象徴、そして親しみやすい、民主主義に基づく「平和」主義の実践者として、そのイメージを変化させていった。

国家のイメージ形成を担う旅行ガイドブックにおいて、天皇は重要な存在であったと言える。また、皇居は、それと共に日本の首都を代表する単なる観光名所ではなく、天皇のイメージ形成に寄与すると同時に、イメージを具現化して提示する場であった。この一連の流れは、親しみやすさを増幅させることによって大衆天皇制を対外的に拡張していく営みであり、天皇の脱政治化と商品化が図られていく過程でもあった。それは、皮肉にもきわめて政治的な意図が働いた結果でもあったと言える。ここには、製作者が移り変わっていく中で、その意図や思惑が交錯する中で作り上げられた、戦後日本における民主主義を前提とした「平和」が達成されていくという図式が読み取れる。

民主主義を標榜することによって国際「平和」に貢献しているというロジックは、日本が国際的地位向上を目指していることの裏返しでもあった。そのために天皇という存在が利用されたのである。天皇は、『公式案内』の中で、国家元帥から国民の象徴、そして親しみやすい民主主義の申し子としてその姿を巧みに変化させていった。同時に、そうした天皇の居所である皇居が、神聖で閉ざされた場所から消費の対象である観光地へと変貌していったのは至極当然の結果であったと言える。それは日本国の目指す「平和」の含意の変化の歴史でもある。そして、それは未来においても同様に、「平和」は巧みにその意味を変化させながら観光の文脈の中で生き続けるだろう。

終章

1 本研究の要約

第一章の「最初期の外国人向け旅行ガイドブック」では、最初期の幕末期から明治中期までの外国人向け旅行ガイドブックを検討し、「旅行ガイドブック」の再定義を行った。日本に対して最初にまなざしが向けられた状態は、一体どのようなものだったのだろうか。19世紀後半に欧米で一世を風靡したイギリスのジョン・マレー社は、後に日本版の旅行ガイドブックを出版することになるが、第一章ではそれ以前の外国人による日本旅行の状況を整理した。最初は商用や宣教、教育のために短期滞在ないし居住する外国人のために、まず日本に到達するまでの船舶情報を充実させ、開港地や外国人の立ち入りを許可された土地を単独に扱った非常に範囲の狭いものが製作された。次に、その都市内の外国人たちにとって安全かつ最低限の生活レベルを保証できるか否かの情報が掲載された。最後には、日本が世界一周旅行の寄港地に組み入れられ始めた頃に、ある程度の範囲を持った国内旅行ルートが確立した。これにより、旅行者の動線が点から線へと変化していく過程が読み取れる。世界一周旅行用に薄くて小さなサイズと簡潔な内容、横浜から東海道を大阪、京都へ、そして神戸で出港というルートが確立した。ここで明らかになったのは、旅行地としての日本の成立だけではなく、いわゆる19世紀後半の「旅行の大衆化」とマス・ツーリズムの成立は、外国人の日本旅行の始まりとは重ならないという点である。むしろ、中流階級に爆発的に普及した安価な大人数での団体旅行であるマス・ツーリズムに逆らう形で知識人、上流階級、商人たちといった人々が日本を旅行していた。つまり、初期の旅行ガイドブックの存在は、彼らの世界、欧米の富裕層や知識人の文化圏に初めてその存在を認知されることを意味していたのである。

第二章では、「探検紀行から旅行ガイドブックへ」と題し、明治中期の1881年から大正初期の1913年まで出版されたイギリスのジョン・マレー社の *A Handbook for Travellers in Japan* (以下、HTJ) 全九版を検討し、そこでまとめられた日本像を明らかにした。これは、欧米からのまなざしを向けられた結果、日本が最初にどのように表象されたのかを示している。ジョン・マレー社は、1836年に詳細かつ広範囲で専門的知識に基づく旅行ガイドブックを製作しベストセラーとなった。日本版であるHTJを執筆したのは、初版、第二版は外交官のアーネスト・サトウとホーズ、第三版から第九版の最終版は、チェンバレンとメイソンの二人であった。サトウとチェンバレンは、共に外国人による日本研究である日本学の始祖であり重要人物として現代でも評価の高い人物である。彼らはHTJの執

筆の際に、先だって日本国内を旅したイザベラ・バードと交流し、情報交換を行っている。バードに代表される、外国人による日本国内旅行の記録は探検紀行と定義づけることができる。バードの執筆した『日本奥地紀行』は、HTJの制作に大きく影響を与えている。それに加え、サトウやチェンバレンの行った日本学の蓄積もまた、大きな影響を与えている。探検紀行は、外国人たちによる日本学の蓄積を経て、HTJという旅行ガイドブックへと変化したのである。それによって、大きな情報の変化があった。まず、欧米の文化圏にとって未知の存在であった日本を発見した外国人たちが自らの言葉で記述したという点である。これが探検紀行の誕生である。次に、それらの蓄積と調査、分析が加わることによって、日本学が形成された。そして、その探検紀行と日本学を旅行ガイドブックという書籍に一冊に集約させたのである。しかし、留意すべきは、HTJを執筆したサトウやチェンバレンは典型的なオリエンタリストであり、探検紀行も日本学も極めてオリエンタリズム的な視点に立脚したものであったという点である。HTJのキーワードとして浮かび上がってくる「オールド・ジャパン」は、オリエンタリストたちにとっての理想郷である開国、維新の間もない若き日本の姿への懐かしさであった。しかし、旅行ガイドブックとして日本の情報が集約されることによって、欧米の文化圏に体系的に日本が把握されることになった功績は大きい。それと共にHTJを模倣、剽窃、引用する類書が横行したが、その中に外国人旅行客を歓迎する喜賓会も入っていたことは重要な点である。オリエンタリズムの対象であったはずの日本が、外客誘致にHTJを利用するようになったのである。つまり、「オールド・ジャパン」への懐かしさを日本の原風景への賞賛として読み換えが行われた。これが現代につながる観光をめぐる日本表象の始まりである。HTJという旅行ガイドブックの誕生は、探検紀行からの欧米からのオリエンタリズム的なまなざしを巧みに肯定的に読み換えた大きな転換点であると言える。

それだけの影響力を持ったHTJも、ジョン・マレー社の旅行ガイドブック部門の売却により1913年の第九版の出版を最後にその姿を消した。それと入れ替わりに登場したが、日本初の「公式案内」である『東アジア公式案内』*An Official Guide to Eastern Asia*全五巻(以下 OGEA)と、アメリカで出版された『テリーの日本帝国案内』*Terry's Guide to Japanese Empire*(以下 TGJE)である。第三章では、「公式案内の誕生」と題し、特に OGEAに注目し、その成立背景を追った。欧米に発見され、知的側面から評価された日本が、今度は自らの旅行ガイドブックを欧米向けに作成したことは、まさにまなざしの逆転と利用と言えるものであった。そこで重要な背景となるのが、日露戦争の勝利によって得た大陸

の足掛かりの最たるものである植民地と鉄道網だった。それらは外貨の獲得や外客誘致はもちろん、着実に大陸へ勢力を伸ばしつつある日本の植民地国家の国民国家形成の意図の反映であった。同時に、「公式案内」の名を冠した旅行ガイドブックが当時他に類を見ないこともまた、当時の制作者である鉄道院の並々ならぬ対外政策に対する意気込みが伝わってくる。また、OGEA はそれまでの欧米による旅行ガイドブックに見られたオリエンタリズム的なまなざしを反転させ、ゲストに対するホストの優位性を示した。同時に、かつて受けていたまなざしを今度は植民地や周辺地域に向けるようになった。旅行ガイドブックは「国」としての真正性を自負し、それを欧米中心の国際社会に示す鏡として政治的に利用されるようになったのである。そうした一連の動きには鉄道院初代総裁の後藤新平という強力なイデオログの存在が貢献していることも重要な点であり、観光という新たな産業と政治との結合が顕著な表象のテクストと見ることができる。欧米から向けられ、知的側面から評価されたまなざしは、今度は受け手である日本によって逆用され、当時の野心的なイデオロギーに利用されていったのである。

第四章では、1914 年から 1933 年まで出版が確認できるアメリカのヒュートン・ミフリン社の TGJE と 1933 年に出版された鉄道省国際観光局の *An Official Guide to Japan* を事例に、更なるまなざしと「公式案内の展開」を追った。特に、TGJE に見られた芸者と吉原の記述を日本側のものと照らし合わせていくことによって、新たなまなざしの交錯と変容が見られた。既に、HTJ によって日本の基本的な情報は発見され評価されつくされていた。そこで、更に魅力的でエキゾチックな要素を求めて、外国人たちのまなざしは芸者と吉原という格好の対象を発見したのである。ここで留意すべきは、芸者の存在が、「公式案内」には掲載されなかったことと対照的に、日本へのイメージをかきたてるための外客誘致パンフレットに伝統的な日本文化の担い手として掲載されるようになっていった点である。芸者の存在を「公式案内」には掲載せずに、日本に興味を持ってもらうための外客誘致パンフレットでは積極的に利用するという日本側の巧みなまなざしの操作が垣間見られるのである。ここでは、かつての知的側面から発見され評価された日本が展開した自己表象が、今度は異なる側面からのまなざしに対して巧みに操作しつつそれを受容して展開していく日本の意図的なまなざしの逆用を指摘できる。それはまなざしのせめぎ合いの結果の変容であると同時に、「公式案内」を用いた表象の逆用とも言えるものであった。

第五章では、1941 年から 1991 年まで出版された「公式案内」を検討することによって、「公式案内の自己表象」に着目した。そして、まなざしの重層化によって日本の表象が変

容していった上で、日本が自己を表象する際に用いたまなざしの再生産について検討した。その際、天皇と皇居をめぐる記述に焦点を当て、戦前から現代に至るまでの記述が閉ざされた神聖性を帯びたものから次第に人間的で開放的に変化していくことを明らかにした。特に、天皇は戦後民主主義的な平和の代弁者としての役割を担わされ、戦前から一貫して主張してきた平和の意味の変化に柔軟に対応してきたことが明らかになった。皇居も、単なる日本の首都を代表する観光名所としてだけではなく、天皇のイメージ形成に寄与すると同時に、イメージを具現化して提示する場となったのである。同時に、最終的に皇族を「見る」ことのできる観光名所としての意味づけが、外国人による賞賛によって行われている点も重要である。日本の象徴の居所である皇居が、今度は欧米の外国人の承認によって価値づけられたと言うことは、かつての日本の「発見」の際に用いられたロジックの反復と捉えることができるからである。そして、皇居がかつての神聖で閉ざされた場所から消費の対象である観光名所へと変貌していったのは、天皇像の変貌と重なっている。それは同時に、日本国の目指す平和の含意の変化の歴史であり、常に欧米を始めとする諸外国からのまなざしを意識したものであった。度重なるまなざしの交錯の結果、日本の表象は観光を通して平和の文脈の中で政治的に利用されるようになったのである。

2 考察

2-1 まなざしと表象の力学

以上、第一章から第五章までの研究を振り返り、幕末期から1990年代初頭までの観光における日本の表象を追った。そこで明らかになったのは、欧米に発見され評価されたことによって誕生した観光をめぐる日本の表象が、欧米と日本双方のまなざしの交錯によって重層的に変化していく過程である。そして、その過程は探検紀行から旅行ガイドブックへと転化され、対外的に利用されるようになったという政治的な背景をも含んだものであった。その結果、「公式案内」という公的かつきわめて政治的な要素を含む旅行ガイドブックが誕生したのである。言い換えると、日本が外国人向けに作った旅行ガイドブックである「公式案内」は、自己表象を公的に権威づけることによって自らがまなざしの主体となり、欧米を中心とした国際社会からのまなざしを操作しようとする日本の意図の結果であった。

日本の表象は探検紀行から旅行ガイドブックに集約されたが、それはそもそも欧米からのまなざしによって形成された。旅行ガイドブックは、探検紀行や日本学に始まる知の集

合体であると同時に、欧米からの主観的なまなざしによる集合体でもあったのである。日本は旅行ガイドブックで自らを表象しその媒体の公式化を図ったが、それは欧米によるまなざしを受容した結果だった。すなわち、欧米からのまなざしを受容も「公式案内」の制作も、まなざしの主体である欧米の承認や賞賛を受けたと日本が解釈して初めて成立するものだったとも言い換えることができる。その承認や賞賛は実体を持つものでなくとも構わない。実際、本当に欧米文化圏が「オールド・ジャパン」を承認し賞賛したかどうかは不明であり、そこにはオリエンタリズム的なまなざしが存在しているだけである。重要な点は、日本が欧米からの承認や賞賛なくしては欧米からのまなざしに対する受容と自己表象はありえなかったという事実である。

しかし、同時に、欧米から受けたまなざしを受けた日本の表象をポジティブに読み換えて利用しようとする彼らの動きは興味深いものである。こうした動きは、観光を政治的に活用し「観光」案内を編んできた近代以降の日本の意図的な思惑も同時に読み取ることができる。日本が発信したい「近代国民国家」や「平和への貢献」は、必ずしも欧米のまなざしに対応しているものではなかった。そこには、権力性よりも表象を介したまなざしの応酬が見られるのである。まなざしの応酬は、当時の欧米中心の国際社会において対等の立場に立つことを意味する。それは観光という文脈だからこそ可能なものであった。欧米からのまなざしに対して、受容するだけではなくそれを読み換えて逆に発信していくという能動的な動きは、「公式案内」の存在が他に類を見ないものであることから非常に珍しい事例である。つまり、近代国民国家としては欧米に大きく立ち遅れた形で始まった大日本帝国は、当時容赦なく向けられるまなざしに対して、観光という文脈で対抗しようとしたのだと捉えることができる。欧米から向けられるまなざしが旅行ガイドブックという媒体で結実したことに対し、日本は「公式案内」を編むことによって自らの表象を操作しようとしたのである。

日本の表象は、欧米と日本との間で発生したまなざしをやり取りした結果、様々に変容し再生産されていった。日本の表象は探検紀行に初めてその姿を現し、それが旅行ガイドブックへとまとめられたことによって形作られ、更に新たな要素が付け加えられて「公式案内」の上で変化を遂げた。更に、そこに対しても欧米からの容赦ないまなざしを加えられ、日本はまなざしに対応した形で更に表象を読み換え変化させていったのである。それは平和と平等を前提とする観光の文脈の中で行われた、極めて政治的な営みであった。日本の表象を「公式案内」で操作することによって対外的イメージを近代国民国家日本とし

て印象付けようとする動きは、一方的にまなざしを向けてくる欧米に対して牽制し主導権を握ろうとする動きにも読み取れる。その動きは、当時の欧米中心の国際社会における日本の立場を決定づけるためにどうしても必要なことでもあった。当時の誕生間もない大日本帝国にとって、「公式案内」の製作はきわめて自然の結果であったと言えるだろう。逆に言えば、非西洋圏に位置する一近代国民国家が、欧米を中心とする国際社会の中で地位を確保しようとするためには、そうした手段しか残されていなかったのかもしれない。

そして、本研究で明らかになった、観光をめぐる表象の力学とも言える関係も重要な視点である。日本は欧米から向けられるまなざしをきっかけに自己の表象に対して自覚的になり、「公式案内」を編んで積極的に自らをアピールするようになった。そして、そのアピールに対し欧米は更に異なるまなざしを向け、日本もそれに対応した自己表象を行った。その一連の流れを総括すると、観光をめぐる日本の表象は「古き良き日本」と「近代国民国家日本」、そして「民主主義国家日本」の三点であり、常に「国際平和」の名の下で表象されてきたと言える。これら三点の表象は、欧米のみ、日本のみの単独では成立せず、双方のまなざしの交錯と反応があったからこそのものである。そして、観光をめぐる表象の力学によって生み出されたものであった。そこには、驚異的から始まり、自負と共に脅威的、警戒的、優越的要素、そして友好的要素が多分に含まれているのである。

まず、欧米を中心とした外国人によってまなざされ発見された日本は、当初の旅行記に端を発する探検紀行から日本学を経て、旅行ガイドブックにまとめられた。ここで表象されたのが「オールド・ジャパン」への懐かしさである。これは驚異のまなざしが基になったと言っていいだろう。同時に、「オールド・ジャパン」は欧米の知的側面から表象されたものである。まなざしを受けた日本は、それを積極的に読み換えて対外的なイメージとして自らを表象する際に利用するようになった。これが欧米による承認と賞賛としての「古き良き日本」への読み換えと同時に驚異のまなざしの受容と宣伝である。そして、日本はそれには飽き足らず、自らを積極的に新たに表象して対外的に宣伝するようになる。それが「公式案内」の誕生であり、その際に用いられた表象が「近代国民国家日本」であった。これはまなざしに対する自負と優越の要素とすることができる。つまり、「近代国民国家日本」という表象は、「公式案内」という媒体を使って自らの表象を操作しようとする日本の意図が如実に反映した結果である。そこには、「オールド・ジャパン」の積極的な読み換えである「古き良き日本」だけでは欧米を中心とした国際社会の中で生き残ることができないという日本の切実な状況が背後に隠れていた。そのため、「古き良き日本」と同時に、正

反対の意味を持つ「近代国民国家日本」が並立して表象されることになったのである。この二つの表象は、欧米からの更なるまなざしやそれに対する苦肉の策を経てなお、依然として根強く残っていた。むしろ、そうしたまなざしの交錯があったからこそ、観光をめぐる日本の表象の柱として根強く継続していたのかもしれない。そして、「公式案内」は「古き良き日本」と「近代国民国家日本」を両輪としながら、次第に「国際平和」を名目にその正当性を宣伝するようになった。それがまなざしの友好的な要素である。これは戦時中であっても、戦後になっても一貫して用いられたロジックであることは重要な点である。戦時中は特に、まなざしの友好的な要素の陰には、欧米を中心とした国際社会の日本に対する脅威、警戒のまなざしが隠れていることも忘れてはならない。そして、戦後には「近代国民国家日本」が生まれ変わり「民主主義国家日本」へとその表象が変わっても、同様に「古き良き日本」は常に対をなす形で「国際平和」を建前に表象されたのである。

ここで留意すべきは、表象に伴う政治性は可視化されやすいが、観光の問題となった途端に平和的側面が強調され見えなくなってしまうという点である。まさにその平和的側面こそが政治性によるものである。特に、まなざしの交錯を経た表象の場合は、平和的側面を建前にした上で生成された、極めて政治性を帯びたものである事実は重要である。そして、優劣や支配 - 被支配関係とは異なる、まなざしの応酬を映す鏡となったのが観光をめぐる表象の力学だったのである。

2-2 「古き良き日本」の呪縛

先述したように、観光をめぐる日本の表象に関しては歴史的に「古き良き日本」と「近代国民国家日本」、「民主主義国家日本」の三点が常に「国際平和」の名の下に表象されてきた。その中でも、「古き良き日本」は、三つの表象の中で冒頭から現代まで一貫して使われている。その理由を、まなざしのせめぎ合いと併せて考えてみよう。

まず、欧米から最初にまなざしを受けた日本は、探検紀行に驚嘆という形で表象され、旅行ガイドブックに「オールド・ジャパン」への懐かしさという形で一冊にまとめられた。これこそが日本の表象の原点である。しかし、ここで誕生した「オールド・ジャパン」という表象は、喜賓会によって剽窃、引用されることによって、日本の原風景を肯定的に評価する「古き良き日本」への賞賛として受容された。「古き良き日本」の文脈は、従来のオリエンタリズム的な要素を濃厚に残しつつ、外国人からの承認と賞賛に読み換えられることによって、この後何度も登場することになる。これは、欧米の知的枠組みの中に日本を

位置づけ評価したものという形で日本側に把握されたことにより、国家の表象として非常に政治的に利用しやすいものとなったことも忘れてはならない。そこで、「古き良き日本」を外客誘致や外交手段として政府が利用するという事案が発生した。

ここで重要なのは、オリエンタリズムの濃厚な「オールド・ジャパン」が、「古き『良き』日本」という日本にとって非常に耳触りの良い日本の表象として受け入れられたという点である。「古き良き日本」のロジックの利用は結果的に欧米からのオリエンタリズム的まなざしの再生産へとつながっていったのだが、自己表象を行っている日本側からすれば、むしろ東アジアにおけるオリエンタリズムの主体へと変化した際よりどころと捉えていたのである。それは間違いではないのだが、欧米によるオリエンタリズム的まなざしを欧米による承認と賞賛として受容していた点に関して日本側が自覚的であったか否かという点に関しては留保せざるを得ないだろう。

そうした中で、今度はまなざしを向けられそれを受け入れていた日本側が、自らまなざしを読み換えまなざしを向けていた欧米に発信していくという動きが出てきた。「公式案内」の誕生である。ここから、欧米と日本とのまなざしのせめぎ合いが始まる。「公式案内」は、欧米に承認、賞賛されたとする「古き良き日本」の文化や歴史を重んじつつ、新たに獲得した植民地や周辺地域の情報を網羅するという形で大日本帝国の近代国民国家形成を高らかに宣伝した。それに対する欧米の反応は、網羅したことに対してある程度の評価は下すものの最終的な評価の判断は保留するという、当惑と取れるものであった。また、欧米からの容赦ないまなざしに対して「公式案内」という形で応酬した日本であったが、今度は欧米から新たな形でまなざしを受けるようになった。しかも、芸者と吉原という、日本にとってあまり大々的に宣伝したくないような部分に注目が集まってしまったのである。しかし、日本は「公式案内」にはそれらを敢えて載せず、日本のイメージをかきたてるための装置である外客誘致パンフレットにおいて芸者を「古き良き日本の担い手」と巧みに読み換えることによって、新たな対外宣伝の材料へと組み替えていったのである。ここでも、「古き良き日本」の要素が再び顔を出している。

そして、「公式案内」は次第に軍国主義的要素が強まりながらも、「国際平和」を謳う形で対外宣伝を続けていく。その姿勢は敗戦後から現代までも一貫しており、平和の含意の巧みな読み換えが読み取れた。そして最終的には、かつての国家元首であり現在の日本国の象徴である天皇の居所である皇居が、かつての神聖で閉ざされた場所から一般に開かれた観光名所へと変貌したことが明らかになった。同時に、皇居が最終的には欧米の外国人

によってその価値が付加されるという現象が起きた。ここでも、三度「古き良き日本」への賞賛の要素が外国人の評価によって強められたのである。

「古き良き日本」への賞賛の要素が観光をめぐる日本の表象の歴史の中で何度も繰り返し登場することは、以下のように分析できる。第一に、あるイメージを極めてポジティブに読み換える動きである。まず、先述の HTJ という旅行ガイドブックにおける極めてオリエンタリズム的な「オールド・ジャパン」への懐かしさを「古き良き日本」への賞賛に読み換えた点がある。特に、恣意的かどうかは不明であるが、オリエンタリズムに満ちたまなざしを欧米からの賞賛という極めてポジティブな文脈として受容したことが、現代に繋がる日本の表象の原点となった。次に、芸者表象について日本側が行った「古き良き日本文化の担い手」という読み換えも当てはまる。ここでは、「公式案内」には登場させず「日本に興味を持ってもらうためのパンフレット」に掲載するという、欧米から思ってもみない部分へとまなざしを向けられたことに対する苦肉の策が読み取れる。

第二に、対象の持つ意味を脱政治化させる動きである。これは、現代の皇居の表象が最終的には観光客に開かれた観光地へと変化した際に、イギリスの詩人による風景への賛辞を掲載したことである。かつての皇居は「宮城」と呼ばれ国家元首の住まう閉ざされた神聖な場所だった。それを、その付加価値を外国人の賛辞によって補填するという動きは、かつての皇居のもつ政治的な要素を薄れさせる効果をもたらす。同時に、現代における観光地としての付加価値をもたらす効果も生んだ。

序章で触れたように、「古き良き日本」の要素は、現代においても根強く外客誘致の際に用いられている。現代においては、「クールジャパン」と「古き良き日本」は対外宣伝における双璧をなしているといってもいいだろう。特に、現代の外客誘致における「古き良き日本」は、本研究の考察から明らかになったことを踏まえると以下のように理解することができる。それは国際平和、異文化交流の名の下で行われる経済政策や外交政策をソフトに覆い隠しポジティブに読み換えると同時に、脱政治化を目指すものである。

しかし、「古き良き日本」の表象を持ち出すことが、政策を覆い隠していることによって極めて高い政治性を帯びてしまうという結果をもたらす。外客誘致政策の出発点は、日本の国益のためや国際社会において優位に立つためであり、極めて自己中心的であると同時に積極的なものである。それに「古き良き日本」という美しいヴェールをかけることによって、あたかも相手の方にこそ利益があるかのように問題をすり替えることができるのである。つまり、「古き良き日本」は、自己表象を行う日本側にとって極めて便利で都合の良

い切り札と言える。そして国際社会で地位を確立、向上するために、日本が自らにとっての拠り所としたのが「古き良き日本」であった。同時に、「古き良き日本」はこれまで覆い隠してきた西洋中心主義や植民地主義といったイデオロギーを内包するものであった。つまり、「古き良き日本」を政策的に用いるということは、そうした政策もまたイデオロギーの残滓を引きずるものなのである。政策の作り手がこのような点に自覚的かどうかは、現時点で論証できるものではない。しかし、現状の表象の用いられ方を見る限り、無自覚である印象が否めない。そして無自覚に利用することが、イデオロギーの再生産に加担することになるのである。その便利さの恩恵を過去何度も受けてきた日本は、まさに「古き良き日本」の呪縛に足を取られているとすることができるだろう。そして、「古き良き日本」の呪縛は、その歴史と仕組みを正確に把握して自覚的にならない限り、今後も続くと思われる。

他方で、観光をめぐる日本の表象がすべてイデオロギーの再生産に加担しているわけではない。外客誘致の文脈において使われる「古き良き日本」の表象というものがすべて日本の国家の思惑に回収されるわけではないのである。むしろ、そうした思惑に対してコントロールの及ばない現象というものもまた存在する。最初に「古き良き日本」の読み換えを行った芸者の表象の場合は、序章で述べたように現代においても外客誘致の文脈で使用されている。そもそも、芸者は「公式案内」に掲載されなかった。しかし、当初の国家の思惑を超えて、芸者の存在は実態として大きな市民権を得るようになった。そして、芸者の存在は日本文化の一部となったのである。国家による表象とは無関係に実態が独り歩きた結果、表象と現実が融合していった。そして、融合したことによって従来とは逆に国家側の承認が後付けされたのである。国家による承認の後付けについては、現在のアニメ産業や秋葉原の事例もまた同様である。海外からのまなざしに加え、アニメ人気や電化製品への注目という現象が実態を持つものとして市民権を得るようになった。その結果、アニメや電化製品は日本の観光の際の重要なコンテンツへと昇格し、秋葉原がアニメと電化製品の聖地として注目を浴びるようになったと言える。「クールジャパン」という名称で国家が政策を打つようになったのは、そうした現状に対して国益となる政策に利用できるという価値判断を行ったからに過ぎない。ある物事が観光をめぐる代表的な表象となる際には、必ずしも国家の承認を必要としないのである。

3 結語

ここで、観光のもつ政治的要素について改めて考えてみよう。まず、現代社会における観光の定義を振り返るためには、国連世界観光機関と日本の観光立国推進基本法において定義づけられたものが参考になる。まず、国連世界観光機関(UNWTO)は、1970 年秋に採択された UNWTO 憲章に基づき設立された、観光分野における世界最大の国際機関である。この憲章は、「国際間の理解、平和及び繁栄に寄与するため、並びに性、言語又は宗教による差別なく、すべての者のために人権及び基本的自由を普遍的に尊重し遵守することに寄与するため、観光を振興し発展させることを根本目的として」〔国連世界観光機関(UNWTO)アジア太平洋センター 2015〕る。

次に、2007(平成 19)年に成立した観光立国推進基本法では、「観光は、国際平和と国民生活の安定を象徴するものであって、その持続的な発展は、恒久の平和と国際社会の相互理解の増進を念願し、健康で文化的な生活を享受しようとする我らの理想とするところである」と定義づけられている⁷⁴。観光は、「国際平和」と「基本的人権の尊重」、「平等」が謳われているのである。それに対して本研究で明らかになったのは、観光が極めて政治性の高い営みの歴史であるということであった。このことは、現代の観光の捉え方に対して大きな疑問を投げかけていると言える。極めて個人的かつ平和の手段とされている観光は、実は政治的な背景を基に成り立っているからである。そして観光現象においては個々の事例で独立したものではなく、様々な政治的、社会的、経済的要素が絡んでおり、非常に横断的であることが特徴である。このことは観光の現象にとどまらず、現代の観光研究においても同様である。

観光を主要テーマに挙げて行われている研究は枚挙に暇がないが、現状では分野ごとの個別研究が主となっている。しかし、こうした現状を顧みて、各学術分野や専門を横断的かつ包括的に行おうとする試みが始まっている。特に、観光研究を一つの学問分野として理論的枠組みの整備を目指し、「観光学」の学術的発展と普及を目的として 2012 年に設立された観光学術学会の活動は格好の例として挙げることができる。観光学術学会では、様々な専門領域をカバーしつつ、「かつ分野を相互に横断する連携的・統合的研究の発展が望まれ」ている中、「現在成立しつつある観光学を基礎にしながら、様々な学問的領域の研究が強調される形で発展し、かつ相互に理解・翻訳可能な学問的用語が成立すること」を期待されている〔観光学術学会 2014〕。こうした観光学の成立と充実を目指す現状は、観光

⁷⁴ 観光立国推進基本法 前文より。

現象の複雑さと重要性の高まりが背景にあると言っていいだろう。

本研究の課題である観光の歴史社会学は、まさに様々な研究分野を横断するものであり、各個別研究や事例の報告にとどまらず、観光学へのインプリケーションを提示していると言える。第一章から第五章で提示したように、幕末から 1990 年代初頭の平成初期にかけて、外国人の日本旅行を取り巻く環境は大きく変化し、日本の表象も様々に変化してきた。それは外国人による日本学から始まり、政治学、文学、歴史学など多岐に渡る研究領域を横断するものであり、まさにそうした領域を包括する要となる領域として観光学があるのである。観光学は未だ発展途上の領域であり、現状では「観光研究」と称した方が通じる場合の方が多いが、本研究は歴史社会的側面を発掘することによって観光学により立体的な議論を提示し、観光学の充実に貢献できたと考えている。

また、観光の持つ消費的要素についても留意が必要である。この場合は、「観光＝マス・ツーリズム」が前提となっているのが大きな要因である。本研究では、「観光＝マス・ツーリズム」とは異なる構図の一つである、探検紀行という要素を中心に観光を捉え直す試みを行った。そして、現代の観光で指摘される消費活動とは大きく異なる営みが見られた。

「探検紀行」には日本という異文化を徹底的に調査し欧米の知的枠組みの中に当てはめ直した上で評価するという、ある程度の権力性がないわけではなかったが、極めて知的な活動が基盤になっていたのである。それは現代の異文化を理解するという観光の建前とは大きく異なるものである。現代の観光においては、マス・ツーリズムが前提となった消費活動が中心に置かれている。しかし、本研究で扱った外国人による日本旅行の文脈では、その出発点が大きく異なっていた。そして、時代を経るにつれて消費の対象へと変貌していく際に、繰り返し「古き良き日本」の要素が出現していたのである。観光の文脈が次第に消費に集約されていく過程についての検討は今後の研究の課題であるが、本研究では日本の表象を中心に、「観光＝マス・ツーリズム」とは異なる形の観光のあり方を提示できたかと思う。

また、本研究は、旅行ガイドブックを観光の現象を示す単なる情報源ではなく、観光をめぐる表象を読み解くためのテキストとして扱った。それは、従来の観光研究や観光学の中ではほとんど着目されていなかった側面である。本研究によって、旅行ガイドブックという資料の持つ観光学に留まらない学的な価値を再発見し、テキストとしての可能性を拡張することができたと考えている。同時に、観光をめぐる日本の表象が本研究で明らかになったもの以外は存在たりえたのかについて考察することも重要である。本研究で明らか

になった観光をめぐる日本の表象は、「探検紀行」、「旅行ガイドブック」の存在なくしてはありえないものであった。しかし、「公式案内」を経て現在の表象に至るまでには、様々な政治的、経済的、社会的要素が複雑に絡んだものであることは明らかである。これらの要素が一つでも欠けていたら、現在の形の表象はあり得たのだろうか。その答えは是かもしれないし、否であるかもしれない。そうした問いを常に続けていくことが現代への貢献につながるのではないだろうか。

特に、歴史社会学的研究の文脈においては、常に現代へのフィードバックが重要である。本研究は、観光の持つ極めて政治的な側面を歴史的に明らかにしたことによって「観光」の定義の再考を促し、観光をめぐる表象の問題についてメタレベルでの理論的枠組みを提示することができた。同時に、現代の観光政策における外客誘致の文脈においても、日本の表象のあり方についてこれまで無頓着に利用されてきたものについて過去の経緯だけでなく、現代に至る効力と限界を示した。本研究における問題提起によって、今後の外客誘致における日本の自己表象に対して再考を促す一助になったと考える。

表象の力学は、欧米と日本にとって意図せざる結果であったかもしれないが、ネガティブなものであるというわけではない。つまり、自己表象に対して、まなざしの交錯によって力学が働いた結果の生成物であるという自覚的な認識が重要である。自覚的な認識とは、何が正しい、間違っているという正誤を問うものでも決してないし、受け入れる、受け入れないという態度を問うものでもない。昔から当然あるといつの間にか信じてしまっていた自己表象の成立過程を知ることによって、自らの文化の表象に対して自覚的になることは、異なる表象に対しての理解の際にも重要なのではないだろうか。結果として従来と同じ表象を用いることになったとしても、自らの文化の表象について繰り返し再考を行うことが重要である。常に歴史との結節点や政治性を意識した上で異なる文化や対象に対峙することこそが、今後の観光政策や観光研究において忘れてはならないことだろう。

参照資料

Board of Tourist Industry, Japanese Government Railways

1941 *Japan : the Official Guide*, Japanese Government Railways.

Chamberlain, Basil Hall

1890 *Things Japanese, 1st ed.*, Kagan Paul, Trench, Truebner.

チェンバレン, バジル・ホール, メイソン, ウィリアム・ベンジャミン

1987 楠家重敏訳,『チェンバレンの明治旅行案内 東京・横浜編』,新人物往来社.(=1891,

A Handbook for Travellers in Japan, 3rd ed., John Murray.)

Chamberlain, Basil. Hall., Mason, William Benjamin

1894 *A Handbook for Travellers in Japan*, 4th ed., John Murray.

1898 *A Handbook for Travellers in Japan*, 5th ed., John Murray.

1901 *A Handbook for Travellers in Japan*, 6th ed., John Murray.

1903 *A Handbook for Travellers in Japan*, 7th ed., John Murray.

1907 *A Handbook for Travellers in Japan*, 8th ed., John Murray.

1913 *A Handbook for Travellers in Japan*, 9th ed., John Murray. (=reprinted in2000,

Collected works of Basil Hall Chamberlain, vol.8, Synapse.)

Dennys, N. B., et al.

1867 *The Treaty Ports of China and Japan: a Complete Guide to the Open Ports of Those Countries, together with Peking, Yedo, Hongkong and Macao*, Truebner.

(1977, in CMC Reprint Series No.67, reprinted by Chinese Materials Center, Inc.) (2010, in *The Emergence of The World Tour*, vol.2, edited by Hisako Ito, Edition Synapse.)

Griffis, William Eliot

1874a *The Yokohama Guide, by a Resident*, F. R. Wetmore.

1874b *The Tokyo Guide*, F. R. Wetmore.

Imperial Japanese Government Railways

1913 *An Official Guide to Eastern Asia : Trans-Continental Connections between Europe and Asia, Vol.1 Manchuria & Chosen*, Imperial Japanese Government Railways.

1914a *An Official Guide to Eastern Asia : Trans-Continental Connections between*

Europe and Asia, Vol.2 South-Western Japan, Imperial Japanese Government Railways.

1914b *An Official Guide to Eastern Asia : Trans-Continental Connections between Europe and Asia, Vol.3 North-Eastern Japan*, Imperial Japanese Government Railways.

1915 *An Official Guide to Eastern Asia : Trans-Continental Connections between Europe and Asia, Vol.4 China*, Imperial Japanese Government Railways.

1917 *An Official Guide to Eastern Asia : Trans-Continental Connections between Europe and Asia, Vol.5 East Indies including Philippine Islands, French Indo-China, Siam, Malay Peninsula and Dutch East Indies*, Imperial Japanese Government Railways.

(=reprinted in 2008, by Edition Synapse.)

Japan National Tourist Organization

1966 *The New Official Guide: Japan*, Japan Travel Bureau.

1975 *The New Official Guide: Japan*, Japan Travel Bureau.

1991 *The New Official Guide: Japan*, Japan Travel Bureau.

Japan Tourist Bureau

1913 *Japan*, Japan Tourist Bureau

ジャパン・ツーリスト・ビューロー

1935 『外人の見た日本の横顔』, ジャパン・ツーリスト・ビューロー.

The Japanese Government Railways

1933 *An Official Guide to Japan*, The Japanese Government Railways.

Keeling, W. E. L.

1880 *Tourists' guide to Yokohama, Tokio, Hakone, Fujiyama, Kamakura, Yokoska, Kanozan, Narita, Nikko, Kyoto, Osaka, etc., etc. : together with useful hints, glossary, money, distances, roads, festivals, etc., etc., 1st ed.*, Farsari.

Satow, Sir Ernest Mason

1875 *A Guide Book to Nikko*, "Japan Mail" Office. (In 1998-2001, reprinted by *Collected works of E.M. Satow, pt. 1. Major works., v. 4. A Guide book to Nikko ; A handbook for travellers in central and northern Japan* (with A.G.S. Hawes), Edition

Synapse.)

Satow, Sir Ernest Mason, and Hawes, A. G. S.

1881 *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*, Kelly.

サトウ, E. M., ホーズ, A. G. S.

1996 庄田元男訳, 『明治日本旅行案内』カルチャー編, ルート編, 平凡社. (=1884, *A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*, John Murray. =reprinted in 1998-2001, *Collected works of Ernest Mason Satow*, Synapse.)

Terry, T. Philip

1914 *Terry's Japanese Empire*, Houghton Mifflin.

1920 *Terry's Guide to Japanese Empire*, Houghton Mifflin.

1926 *Terry's Guide to Japanese Empire*, Houghton Mifflin.

1928 *Terry's Guide to Japanese Empire*, Houghton Mifflin.

1933 *Terry's Guide to Japanese Empire*, Houghton Mifflin.

Tourist Industry Division, Ministry of Transportation

1952 *Japan : the Official Guide*, Japan Tourist Bureau.

1958 *Japan : the Official Guide*, Japan Tourist Bureau.

The Welcome Society

1903 *The Fifth National Industrial Exhibition of 1903 and a Short Guide-Book of Japan*, Welcome Society.

1906 *A Guide-Book for Tourists in Japan*, 2nd ed., Welcome Society.

The Welcome Society

1903 *Short Guide-Book for Tourists in Japan* 1st.ed, The Welcome Society.

1907 *Short Guide-Book for Tourists in Japan* 2nd.ed., The Welcome Society.

1907 *Guide Book for Tourists in Japan* 1st ed., The Welcome Society.

1908 *Guide Book for Tourists in Japan* 2nd.ed., The Welcome Society.

1905-1910, *Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan*, 1st-8th.ed.

Yamamoto, Kakuma

1873 *The Guide to the Celebrated Places in Kyoto & the Surrounding Places*, Niwa.

The Welcome Society

1903 *The Fifth National Industrial Exhibition of 1903 and a Short Guide-Book of*

Japan, The Welcome Society.

1905 *A Short Guide-Book for Tourists in Japan*, The Welcome Society.

1905 *Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan*, 1st ed., The Welcome Society.

1906 *A Guide-Book for Tourists in Japan*, 1st ed., The Welcome Society.

1907 *A Guide-Book for Tourists in Japan*, 2nd ed., The Welcome Society.

1910 *Useful Notes and Itineraries for Travelling in Japan*, 8th ed., The Welcome Society.

主要参考文献

赤井正二

2008 「旅行の近代化と『指導機関』 大正・昭和初期の雑誌『旅』から」, 『立命館産業社会論集』(44), 第1号, pp.99-115.

2009 「旅行ガイドブックのなかの『見るに値するもの』 『公認東亜案内』日本篇と『テリーの日本帝国案内』の1914年」, 『立命館産業社会論集』(45)第1号, pp.151-170.

アンダーソン, ベネディクト

1997 『想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』白石さや, 白石隆訳, NTT出版.(=1991, *Imagined communities: reflections on the origin and spread of nationalism*. Verso.)

有山輝雄

2002 『海外観光旅行の誕生』, 吉川弘文館.

バード, イザベラ. L.

2012a 金坂清則訳注, 『完訳日本奥地紀行 1 横浜・日光・会津・越後』, 平凡社.

2012b 金坂清則訳注, 『完訳日本奥地紀行 2 新潟・山形・秋田・青森』, 平凡社.

2012c 金坂清則訳注, 『完訳日本奥地紀行 3 北海道・アイヌの世界』, 平凡社.

2013a 金坂清則訳注, 『完訳日本奥地紀行 4, 東京・関西・伊勢 日本の国政』, 平凡社.

(=1880 *Unbeaten tracks in Japan : an account of travels in the interior including visits to the aborigines of Yezo and the shrines of Nikkô and Isé*, vol.1, vol.2, John Murray.)

2013b 金坂清則訳注、『新訳日本奥地紀行』, 平凡社.(=1885, *Unbeaten tracks in Japan*, John Murray.)

ブーアスティン, ダニエル. J.

1964 『幻影(イメージ)の時代 マスコミが製造する事実』 星野郁美、後藤和彦訳、東京創元社.(=1962, *The image : or, what happened to the American dream*, Atheneum.)

ボワイエ, マルク

2006 『観光のラビリンス』 成沢広幸訳、法政大学出版局. (=1999, *Le tourisme de l'an 2000*, Presses universitaires de Lyon.)

ブレンドン, ピアーズ

1995 『トマス・クック物語』, 石井昭夫訳, 中央公論社.(=1991, *Thomas Cook: 150 Years of Popular Tourism*, Secker & Warburg.)

ブルーナー, エドワード

2007 『観光と文化 旅の民族誌』, 安村克己, 遠藤英樹, 堀野正人, 寺岡伸悟, 高岡文章, 鈴木涼太郎訳, 学文社.(=2005, *Culture on Tour*, University of Chicago Press.)

Buzard, James

1993 *The Beaten Track : European tourism, literature, and the ways to culture, 1800-1918*, Oxford University Press.

Cohen, Erik

2004 *Contemporary Tourism: Diversity and Changes*, Elsevier.

遠藤英樹

2004 「観光空間・知覚・メディアをめぐる新たな社会理論への転回」, 遠藤英樹, 堀野正人編『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.83-98.

2005a, 「『観光社会学』の対象と視点 リフレクシブな『観光社会学』へ」, 須藤廣, 遠藤英樹編, 『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』, 明石書店, pp.13-39.

2005b, 「観光という『イメージの織物』 奈良を事例とした考察」, 須藤廣, 遠藤英樹編, 『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』, 明石書店, pp.95-115.

2009 「メディアテキストとしての観光」, 神田孝治編『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版, pp.166-175.

遠藤英樹, 堀野正人編

- 2004 『観光のまなざしの転回 越境する観光学』, 春風社.
- 2010 『観光社会学のアクチュアリティ』, 晃洋書房.
- 遠藤英樹, 寺岡伸悟, 堀野正人編
- 2014 『観光メディア論』, ナカニシヤ出版
- 藤田弘夫
- 2006 「都市の歴史社会学と都市社会学の学問構造」『社会科学研究』第 57 巻第 3・4 号
合併号, pp.117-135.
- 古川隆久
- 1998 『皇紀・万博・オリンピック 皇室ブランドと経済発展』中央公論社.
- Gretton, J. R.
- 1992 “Introduction by John R. Gretton”, in Lister, W. B. C., 1993, *A Bibliography of Murray's Handbooks for Travellers and Biographies of Authers, Editors, Revisers and Principal Contributors*, Dereham Books, pp.i-xxv.
- 橋本和也
- 1999 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』, 世界思想社.
- 橋爪紳也
- 1990 『博覧会見物』, 学芸出版社.
- ハーン, ラフカディオ
- 1926 『知られぬ日本の面影』小泉八雲全集 3, 落合貞三郎, 大谷正信, 田部隆次訳, 第一
書房.(=1894, *Glimpses of unfamiliar Japan*, Houghton Mifflin.)
- 平川祐弘
- 1987 『破られた友情 ハーンとチェンバレンの日本理解』, 新潮社.
- 1996 『オリエンタルな夢 小泉八雲と霊の世界』, 筑摩書房.
- ホブズボウム, エリック・J, レンジャー, テレンス・O
- 1992 『創られた伝統』前川啓治他訳、紀伊国屋書店.(=1983, *The Invention of Tradition*,
Press of the University of Cambridge.)
- 堀野正人
- 2004 「地域と観光のまなざし 『まちづくり観光』論に欠ける視点」, 遠藤英樹, 堀野
正人編『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.113-129.
- 2010 「都市の観光空間の創出と解説 港横浜、東京ディズニーランドを事例に」, 遠藤

英樹, 堀野正人編, 『観光社会学のアクチュアリティ』, 晃洋書房, pp.60-80.

2014 「観光の記号とメディア 観光する私たちはそのとき何を見ているのか」, 遠藤英樹, 寺岡伸悟, 堀野正人編, 『観光メディア論』, ナカニシヤ出版, pp.3-18.

Hulme, P., Youngs, T.

2002 *The Cambridge Companion to Travel Writing*, Cambridge University Press.

池口小太郎

1968 『日本の万国博覧会』, 東洋経済新報社.

Ito, Hisako

2010 *The Emergence of The World Tour, vol.1-vol.5*, Edition Synapse.

伊藤真実子

2008a 『明治日本と万国博覧会』, 吉川弘文館.

2008b 「研究動向 博覧会研究の動向について 博覧会研究の現在とその意義」, 財団法人史学会, 『史学雑誌』 117(11), pp.1981-1989.

岩佐淳一

2001 「旅行とメディア 戦前期旅行ガイドブックのまなざし」, 『学習院女子大学紀要』, 3, pp.11-27.

JTB100 周年事業推進委員会

2012 『JTB グループ 100 年史』, ジェイティービー.

神田孝治

2004 「観光客のまなざしと近代リゾート」, 遠藤英樹, 堀野正人編, 『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.67-82.

2009 「戦前期の沖縄観光をめぐるイメージとアイデンティティ」, 神田孝治編, 『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版, pp.211-221.

2012 『観光空間の生産と地理的想像力』, ナカニシヤ出版

神田孝治編

2009a, 『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版.

2009b 『レジャーの空間 諸相とアプローチ』, ナカニシヤ出版.

金坂清則

2014 『イザベラ・バードと日本の旅』, 平凡社.

金子直樹

2009 「国内観光とガイドブックの変遷」, 神田孝治編, 『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版, pp.123-132.

川島智生

2004 「創出された『観光地』 軀の浦、二見ヶ浦にみる海景名所の近代」, 遠藤英樹, 堀野正人編 『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.43-65.

ケンリック, ダグラス・M

1994 『日本アジア協会 100 年史—日本における日本研究の誕生と発展—』池田雅夫訳, 市民文化研究センター編, 横浜市立大学経済研究所.(= 1978, *A Century of Western Studies of Japan*, Asiatic Society of Japan.)

小林 健

2009 『日本初の海外観光旅行—96 日間世界一周』, 春風社.

小池洋一, 足羽洋保編

1988 『観光学概論』, ミネルヴァ書房.

高媛

2002 「『二つの近代』の痕跡 1930 年代における『国際観光』の展開を中心に」, 吉見俊哉編, 『1930 年代のメディアと身体』, 青弓社, pp.127-164.

國雄行

2005 『博覧会の時代 明治政府の博覧会政策』, 岩田書院.

楠家重敏

1986 『ネズミはまだ生きている チェンバレンの伝記』, 雄松堂出版.

1987 「解説 外国人の日本研究における『日本旅行案内』の位置」, 『チェンバレンの明治旅行案内東京・横浜編』, 新人物往来社.

1997 『日本アジア協会の研究 ジャパノロジーことはじめ』, 近代文芸社.

Lister, W. B. C.

1993 *A Bibliography of Murray's Handbooks for Travellers and Biographies of Authers, Editors, Revisers and Principal Contributors*, Dereham Books.

マキアーネル, ディーン

2012 『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』, 安村克己, 須藤廣, 高橋雄一郎, 堀野正人, 遠藤英樹, 寺岡 伸悟訳, 学文社.(=1999, *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, University of California Press.)

丸山宏

- 1985 「近代ツーリズムの黎明 『内地旅行』をめぐって」, 吉田光邦編, 『十九世紀日本の情報と社会変動』, 京都大学人文科学研究所, pp.89-112.

松田京子

- 2003 『帝国の視線 博覧会と異文化表象』, 吉川弘文館.

松下圭一

- 1959a 「大衆天皇制論」, 『中央公論』 74(5), pp.30-47.
1959b 「続大衆天皇制論」, 『中央公論』 74(11), pp.114-126.

右田裕規

- 2006 「マスメディアの中の帝室 戦前期「大衆天皇制」の形成過程にかんする歴史社会学的考察」, 京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻博士論文.

ミルン, ダニエル

- 2013a 「19世紀末の観光ガイドブック『マレー』における日本の言説」, 『社会システム研究』, 京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会, (16), pp.135-152.
2013b 「英語の観光ガイドブックにおける日本の言説 1980年代のロンリー・プラネット」, 観光学術学会, 『観光学評論』, vol.1-1, pp.69-80.
2013c 「英語による日本のガイドブックに見る言説の変遷 2つの出版最盛期におけるマレーとロンリー・プラネット」, 『人間・環境学』, 京都大学大学院人間・環境学研究科, (22), pp.63-77.

森本泉

- 2009 「ネパールにおけるツーリズムの展開とツーリズム空間の形成」, 神田孝治編, 『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版, pp.89-99.

モートン, パトリシア・A

- 2002 『パリ植民地博覧会 オリエンタリズムの欲望と表象』, 長谷川章訳, 星雲社.(=2000, *Hybrid modernities, architecture and representation at the 1931 Colonial Exposition*, Massachusetts Institute of Technology.)

毛利嘉孝

- 2012 「表象」 大澤真幸, 吉見俊哉, 鷺田清一編集委員, 見田宗介編集顧問, 2012, 『現代社会学事典』, 弘文堂, pp.1072-1073.

中川浩一

- 1973 「"Baedeker"探索(1)～(3) 地図入り旅行案内書の系譜」, 『地図』 11(2) pp.8-14, 11(3) pp.21-28, 11(4) pp.1-8.
- 1975 「英文日本旅行案内書の系譜」, 『地図』 13(4) pp.8-14.
- 1979 『旅の文化誌 ガイドブックと時刻表と旅行者たち』, 伝統と現代社.
- 1985 『観光の文化史』, 筑摩書房.
- 1995 「『鉄道旅行案内書』の地図」, 『地図』 33(3) pp.15-26.

Nakagawa, Koishi

- 1998 Prewar Tourism Promotion by Japanese Government Railways, 東日本鉄道文化財団, *Japan Railway & Transport Review*, March 1998, pp.22-27.

中村宏

- 2006 「戦前における国際観光(外客誘致)政策 喜賓会、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、国際観光設置」, 『神戸学院法学』 36(2), pp.107-133.
- 2007 「戦時下における国際観光政策 満州事変、日中戦争、第二次大戦」, 『神戸学院法学』 36(3, 4), pp.165-202.

中谷哲弥

- 2004 「宗教体験と観光 聖地におけるまなざしの交錯」, 遠藤英樹, 堀野正人編『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.183-202.
- 2010 「フィルム・ツーリズムにおける『観光地イメージ』の構築と観光経験」, 遠藤英樹, 堀野正人編, 『観光社会学のアクチュアリティ』, 晃洋書房, pp.125-144.

中塚朋子

- 2014 「写真と語り 写真を撮るとき、見るとき、語るとき」, 遠藤英樹, 寺岡伸悟, 堀野正人編, 『観光メディア論』, ナカニシヤ出版, pp.139-158.

日本国有鉄道

- 1972 『日本国有鉄道百年史』 第五巻, 日本国有鉄道.

日本交通公社

- 1962 『五十年史』, 日本交通公社.

(財)日本交通公社社史編纂室

- 1982 『日本交通公社七十年史』, 日本交通公社.

西田正憲

2004 「自然観光における観光のまなざしの生成と発展」, 遠藤英樹, 堀野正人編『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.25-41.

西川克之

2012 「イザベラ・バード『日本奥地紀行』の観光社会学的分析の試み」, 北海道大学英語英米文学研究会, 『The Northern Review』(38), pp.27-39.

老川慶喜

2008a 「後藤新平の大陸政策と『東亜英文旅行案内』」, 『復刻版『東亜英文旅行案内』解題』, 鉄道院編纂, 『東亜英文旅行案内』復刻版, エディション・シナプス.

2008b 『近代日本の鉄道構想—近代日本の社会と交通—』 日本経済評論社.

岡本伸之

2007 「旅行案内書」『世界大百科事典 改訂新版』, 第 29 巻, 平凡社, pp.721-722.

2001 『観光学入門』, 夕斐閣アルマ.

大橋健一

2004 「観光のまなざしと現代チャイナタウンの再構築」, 遠藤英樹, 堀野正人編『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.99-112.

太田雄三

1990 『B・H・チェンバレン 日欧間の往復運動に生きた世界人』, リプロポート.

ラクストン, イアン

2003 『アーネスト・サトウの生涯 その日記と手紙より』, 長岡祥三・関口英男訳, 雄松堂出版.(=1998, *The Diaries and Letters of Sir Ernest Mason Satow (1843-1929). A Scholar-Diplomat in East Asia.*, The Edwin Mallen Press.)

サイード, エドワード・W

1993a, 1993b 『オリエンタリズム』上・下, 今沢紀子訳, 平凡社. (=1978, *Orientalism*, Georges Borchardt.)

坂野徹

2005 『帝国日本と人類学者 1884-1952 年』, 勁草書房.

坂野徹, 慎蒼健編

2010 『帝国の視角／死角 <昭和期>日本の知とメディア』, 青弓社.

サトウ, アーネスト・メイソン

1989-1991 『アーネスト・サトウ公使日記 I・II』, 長岡祥三・福永郁雄訳, 新人物往来

社(=1900, *The Diaries of Sir Ernest Mason Satow : British Minister in Tokyo (1895-1900)*, reprinted in 2003, first edition published as hardcover by Edition Synapse.)

里居真一, 羽生冬佳, 十代田朗, 津々見崇

2003 「明治中期に刊行された外国人向け英文観光ガイドブックの記述内容の特徴」, 『ランドスケープ研究 日本造園学会誌』 Vol.66, No.5(20030331) pp. 389-392

シベルブシュ, ウォルフガング

1982 『鉄道旅行の歴史 19世紀における時間と空間の工業化』, 加藤二郎訳, 法政大学出版局. (= 1977, *Geschichte der Eisenbahnreise : zur Industrialisierung von Raum und Zeit im 19. Jahrhundert*, Hanser Verlag.)

千住一

2004 『『観光』へのまなざし 日本統治下南洋諸島における内地観光団をめぐる』, 遠藤英樹, 堀野正人編『『観光のまなざし』の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.131-146.

芹澤知広

2004 「香港における観光のまなざし その歴史と現在に関するノート」, 遠藤英樹, 堀野正人編『『観光のまなざし』の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.203-218.

志賀善一良

2000 「喜賓会の設立メンバーに関する一考察」, 『桜美林国際学論集 Magis』 (5) pp.123-134.

椎名仙卓

2005 『日本博物館成立史 博覧会から博物館へ』, 雄山閣.

白幡洋三郎

1985 「異人と外客 外客誘致団体「喜賓会」の活動について」, 吉田光邦編『十九世紀日本の情報と社会変動』 京都大学人文科学研究所, pp.113-138.

1996 『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』, 中公新書.

白幡洋三郎編

2009 『旅と日本発見 移動と交通の文化形成力』, 国際日本文化研究センター共同研究報告書.

篠原徹編

2001 『近代日本の他者像と自画像』 柏書房.

庄田元男

1990 『山書研究 35 異人たちの日本アルプス』, 日本山書の会.

1996 「訳者解説」『明治日本旅行案内<下巻>ルート編Ⅱ』, 平凡社.

2008 「解説」『明治日本旅行案内 東京近郊編』, 平凡社, pp.347-365.

スミス, ヴァレーン・L

1991 『観光・リゾート開発の人類学 ホスト&ゲスト論でみる地域社会の対応』, 三村
浩史訳, 勁草書房.(=1989, *Hosts and guests: the anthropology of tourism*.)

園田英弘

1985 「『極東』の終焉 黒船前史」吉田光邦編『十九世紀日本の情報と社会変動』, 京都
大学人文科学研究所, pp.3-28.

十代田朗, 品川茂生, 稲葉克己

1997 「日本の国際観光政策に関する史的研究 開国(1859 年)から大阪万博(1970 年)ま
での展開過程」財団法人アジア太平洋観光交流センター, 『平成 9 年度学術研究
論文入選論文集』, 日本財団図書館.

曾山毅

2003 『植民地台湾と近代ツーリズム』, 青弓社.

Stoddart, Anna M.

1906 *The Life of Isabella Bird*, John Murray. (=reprinted in 2011, Cambridge
University Press.)

砂本文彦

2003 「1930 年代に欧米で発行された旅行ガイドブックに見る「国際リゾート地・ニッポ
ン」」, 『旅の文化研究所研究報告』No.12(2003/12), pp.1-13.

2008 『近代日本の国際リゾート 1930 年代の国際観光ホテルを中心に』, 青弓社.

須藤廣

2004 「越境する<観光> グローバル化とポスト・モダン化における観光」, 遠藤英樹,
堀野正人編, 『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.219-237.

2005a 「観光の近代と現代 観光というイデオロギーの生成と変容」, 須藤廣, 遠藤英樹
編, 『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』, pp.41-91.

2005b 「神戸の政治空間にひそむ『風景の政治学』」, 須藤廣, 遠藤英樹編, 『観光社会

学 ツーリズム研究の冒険的試み』, 明石書店, pp.149-170.

2005c 「田園観光と『ロマン主義的まなざし』 由布院地区調査から見た観光客と地元業者の『まなざし』」, 須藤廣, 遠藤英樹編, 『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』, 明石書店, pp.171-203.

2008 『観光化する社会 観光社会学の理論と応用』, ナカニシヤ出版.

2010 「再帰的社会における観光文化と観光の社会学的理論」, 遠藤英樹, 堀野正人編, 『観光社会学のアクチュアリティ』, 晃洋書房, pp.3-21.

2012 『ツーリズムとポストモダン社会 後期近代における観光の両義性』, 明石書店.

2014 「メディアとしての観光 観光化とリアリティ変容」, 遠藤英樹, 寺岡伸悟, 堀野正人編, 『観光メディア論』, ナカニシヤ出版, pp.227-256.

須藤廣, 遠藤英樹編

2005 『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』, 明石書店.

旅の文化研究所編

2011 『旅と観光の年表』, 河出書房新社.

多田治

2004 『沖縄イメージの誕生 青い海のカルチュラル・スタディーズ』, 東洋経済新報社.

橘セツ

2009 「19 世紀後半に日本を訪れた西欧人の旅行記」, 神田孝治編, 『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版, pp.154-165.

高畑美代子

2006 「イザベラ・バードの Unbeaten Tracks in Japan における『未踏』の二重の意味」
『弘前大学大学院地域社会研究科年報』 3 号, pp.3-33.

2010 「<研究ノート>イザベラ・バードの生前に出版された Unbeaten Tracks in Japan
の 4 種の版における違い 思考・行動の変化を反映した改訂」『弘前大学大学院地
域社会研究科年報』 7 号, pp.115-145.

田中まり

2004 「19 世紀末の西欧における日本観光と日本イメージの形成--マレー社の『日本旅行
案内』に紹介された京都」『金沢星稜大学論集』 Vol.38, No.2 (2004/12) (通号 98),
pp. 33-40.

2002 「「京都」における「日本文化」の発見：明治期外国人の京都観光と日本の伝統文

化イメージの形成をめぐって」『北陸学院短期大学紀要』 Vol.33(20020307), pp. 245-258.

帝國鉄道大觀編輯局

1927『帝國鉄道大觀』, 帝國鉄道大觀編輯局.

鉄道省

1921『日本鉄道史』, 鉄道省.

鶴見祐輔

2005a, 『<正伝>後藤新平 第四巻 満鉄時代』, 藤原書店.

2005b, 『<正伝>後藤新平 第五巻 鉄道院時代』, 藤原書店.

上田卓爾

2013 「海外における『ゲイシャ』のイメージについて」, 『大阪観光大学紀要』 第 13 号 pp.9-19.

アーリ, ジョン

1995『観光のまなざし 現代社会におけるレジャーと旅行』, 加太宏邦訳, 法政大学出版局.(=1990, *The Tourist Gaze, Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Sage Publications.)

2003『場所を消費する』, 武田篤志他訳, 法政大学出版局.(=1995, *Consuming places*, Routledge.)

2006『社会を超える社会学 移動・環境・シチズンシップ』, 吉原直樹監訳, 法政大学出版局.(=2000, *Sociology beyond Societies, Mobilities for the Twenty-first Century*, Routledge.)

2014『観光のまなざし 増補改訂版』, 加太宏邦訳, 法政大学出版局.(=2011, *The Tourist Gaze 3.0*, Sage Publications.)

Urry, John

2002 *The Tourist Gaze Second edition*, Sage Publications.

Vaughan, John E.

1974 *The English Guide Book c1780-1870*, David & Charles.

ヴェブレン, ソースタイン

1998『有閑階級の理論』, 高哲男訳, 筑摩書房.(=1899, *The Theory of Leisure Class*, Macmillan.)

Who's Who

1932-1933 *Who's Who in America*, vol.17, A. N. Marquis.

山口栄鉄

2010 『英人日本学者チェンバレンの研究 <欧文日本学>より観た評価』, 沖積堂.

山口誠

2010 『ニッポンの海外旅行 若者と観光メディアの 50 年史』, 岩波書店.

2012 「ガイドブック その変遷と可能性」安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編,
『よくわかる観光社会学』, ミネルヴァ書房, pp.144-145

山口さやか, 山口誠

2009 『「地球の歩き方」の歩き方』, 新潮社.

山路勝彦

2008 『近代日本の植民地博覧会』, 風響社.

山本桂

2014 「戦前期の日本観光地の表象と対米観光政策 エレリー・セジウィックの旅行記事
から」, 観光学術学会, 『観光学評論』 vol.2, No.1, pp.55-66.

山本光正

2010 「旅行案内書の成立と展開」, 山本光正編, 『国立歴史民俗博物館研究報告 第
155 集(2010, 3) 旅 江戸の旅から鉄道旅行へ』, 国立歴史民俗博物館, pp.109-135.

山本光雄

1970 『日本博覧会史』, 理想社.

山本佐恵

2012 『戦時下の万博と「日本」の表象』, 森話社.

山中忠雄編

1937 『回顧録』, ジャパン・ツーリスト・ビューロー.

山下英一

1995 「明治期英書の日本 外国人の国内旅行」, 『国際関係学部紀要』, 中部大学,
vol.15(19951020) pp.183-198.

安村克己, 遠藤英樹, 寺岡伸悟編

2006 『観光社会文化論講義』, くんぷる.

安村克己

2004 「観光の理論的探究をめぐる観光まなざし論の意義と限界」, 遠藤英樹, 堀野正人編『「観光のまなざし」の転回 越境する観光学』, 春風社, pp.7-24.

2010 「観光社会学における実践の可能性 持続可能な観光とまちづくりの研究を事例として」, 遠藤英樹, 堀野正人編, 『観光社会学のアクチュアリティ』, 晃洋書房, pp.102-122.

横浜開港資料館編

1996『世界漫遊家たちのニッポン 日記と旅行記とガイドブック』, 横浜開港資料館.

横山智

2014 「ラオスにおけるバックパッカー地区の形成」, 神田孝治編, 『観光の空間 視点とアプローチ』, ナカニシヤ出版, pp.78-88.

吉田光邦

1985 『改訂版 万国博覧会 技術文明史的に』, NTT 出版.

吉田光邦編

1985 『十九世紀日本の情報と社会変動』, 京都大学人文科学研究所.

1986 『万国博覧会の研究』, 思文閣出版.

吉見俊哉

1992 『博覧会の政治学』, 中央公論社.

新聞記事

“Review”, *Japan Weekly Mail*, 1881, Apr 2.

“Handbook for Central & Northern Japan by Mr Satow and Haws”, *The Japan Punch*, 1881, March.

“Guide-Books, and Guide-Books.” *The Japan Gazette*, 1919, Feb.2.

インターネットホームページ

Baedeker

2015 Verlag und Redaktion

<http://www.baedeker.com/verlag-und-redaktion/> (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

観光庁

2014a 「平成 26 年度ビジット・ジャパン事業について」

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kokusai/vjc.html> (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

2014b 「訪日観光に関する海外市場向けキャッチフレーズ・ロゴ」

http://www.mlit.go.jp/kankocho/about/jed_logo.html (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

2015a 「トップページ」

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/> (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

2015b 「政策について」

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/index.html> (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

観光学会

2014 「会長の挨拶」

<http://jsts.sc/info/greeting/> (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

経済産業省商務情報政策局 生活文化創造産業課

2015 「クールジャパン政策について」

http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/150210CJseisakunituiteFebruary.pdf (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

国連世界観光機関(UNWTO)アジア太平洋センター

2015 「国連世界観光機関(UNWTO)について」

<http://www.unwto-ap.org/purpose.html> (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

宮内庁

2015 「皇居」

<http://www.kunaicho.go.jp/about/shisetsu/kokyo/kokyo.html> (最終閲覧 2015 年 3 月 10 日)

農林水産省

2013 「『和食』紹介リーフレット」

http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/ich/pdf/leaflet_jjpg.pdf (2015 年 3 月 10 日最終閲覧)

企画展示

横浜開港資料館

2014-2015 「近代日本学のパイオニア チェンバレンとアーネスト・サトウ」